松山市文化財調査報告書 151

樽味四反地遺跡

－19次・20次調査－

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

2011

松山市教育委員会

財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

樽味四反地遺跡

－ 19 次・20 次調査 －

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

2011

松山市教育委員会

財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

序　　言

樽味四反地遺跡は松山平野の中心部を南西に流れる石手川中流域左岸に位置し、これまでに行われた数多くの発掘調査により縄文時代から中世にかけての集落の様相が徐々に明らかになってきました。この中で注目されているのは、平成8年以降次々に発見され、西日本有数の規模を誇る弥生時代後期末から古墳時代初頭の３棟の大型建物址です。しかし、大型建物址については隔絶した規模を有し、特筆すべき遺構でありながら、その範囲や性格を決定する周辺データが得られていませんでした。

今回報告する樽味四反地遺跡19次・20次調査は、重要遺跡確認調査として、大型建物址を中心とする遺跡の範囲確定とその前後の時期の集落の分布状況の確認を目指して平成19年度及び20年度に実施したものです。調査の結果、幸いにして３棟の大型建物址が存続した時期にもっとも近い竪穴建物址を検出することができました。これまで大型建物址の近隣地から同時期の集落関連遺構が見つからないことから、一定範囲の緩衝地帯があったのではないかと考えられていましたが、今回の成果は３棟の大型建物の周辺環境を考える上で貴重な手がかりとなるものです。

本書が、松山市民をはじめ、多くの方々に樽味地区の重要遺跡を知っていただく機会となり、埋蔵文化財の保護・普及と調査研究のための資料として、ご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査および報告書刊行にご協力いただきました地権者並びに周辺にお住まいの方々、関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成23年3月25日

松山市教育長　山 内　泰

例　　言

1. 本書は松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団（当時）が国庫補助事業として、平成19・20年度に実施した愛媛県松山市樽味地区における埋蔵文化財の発掘調査報告書である。なお、本報告書は平成22年度の国庫補助事業として刊行したものである。
2. 本文中では遺構名を略号化し、竪穴建物・竪穴住居：ＳＢ、掘立柱建物：掘立、溝：ＳＤ、土坑：ＳＫ、柱穴・小穴：ＳＰ、性格不明遺構：ＳＸで記述した。
3. 本書で使用した標高数値はすべて海抜標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北である。
4. 基本土層や遺構埋土の色調は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1998）に準拠した。
5. 屋外調査での写真は調査担当者と大西朋子が、遺物写真と図版作成は大西が担当した。
6. 遺構の実測は小笠原善治、武正良浩、遺物の復元及び実測・製図は宮内慎一、小笠原、武正の指示のもとに、山邊進也、金子育代、中村紫、本多智絵、木下奈緒美、多知川富美子、髙尾久子、猪野美喜子、仙波千秋がおこなった。
7. 挿図の縮尺は縮分値をスケール下に記した。遺物実測図は原則として、弥生土器は1/4、土師器、須恵器、陶磁器は1/3、石器、金属製品は1/2とした。
8. 調査では下條信行（愛媛大学名誉教授）、田﨑博之（愛媛大学）の諸先生方にご指導、ご教示を頂いた。記して感謝申し上げます。
9. 屋外調査における国土座標測量は、以下の2社に業務を委託した（株式会社エクセル調査設計、有限会社四国測量設計）。
10. 本書の執筆は小笠原、武正が分担し、編集は小笠原が担当し、金子、本多、木下の協力を得た。浄書は小笠原、武正の指示のもと、金子、本多、木下が担当した。
11. 本書に掲載した記録類や遺物は、松山市立埋蔵文化財センターにおいて保管されている。

目　　次

第Ⅰ章　はじめに……〔武正〕……1

第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査･整理の経緯 …… 1
第３節　整理･刊行組織 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境……〔武正〕……2

第１節　立　地 …… 2
第２節　環　境 …… 2

第Ⅲ章　樽味四反地遺跡19次調査……〔小笠原〕……7

第１節　調査に至る経緯 …… 7
第２節　調査の経過 …… 8
第３節　層　位 …… 10
第４節　遺構と遺物 …… 15
第５節　小　結 …… 59

第Ⅳ章　樽味四反地遺跡20次調査……〔武正〕……71

第１節　調査の経緯 …… 71
第２節　層　位 …… 72
第３節　１区の遺構と遺物 …… 76
第４節　２区の遺構と遺物 …… 86
第５節　小　結 …… 117

第Ⅴ章　調査の成果と課題……〔小笠原〕〔武正〕……129

挿図目次

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

第 1 図　松山平野の地形概要図 …… 3
第 2 図　石手川中流域の主要遺跡分布図 …… 4

第Ⅲ章　樽味四反地遺跡 19 次調査

第 3 図　調査地位置図 …… 7
第 4 図　遺構区割り図 …… 8
第 5 図　遺構配置図 …… 9
第 6 図　北壁土層図 …… 11
第 7 図　東壁土層図 …… 12
第 8 図　西壁土層図 …… 13
第 9 図　南壁土層図 …… 14
第 10 図　掘立 4 測量図 …… 15
第 11 図　掘立 4 出土遺物実測図 …… 16
第 12 図　掘立 5 測量図 …… 16
第 13 図　掘立 6 測量図 …… 17
第 14 図　SB6 測量図 …… 18
第 15 図　SB6 出土遺物実測図（1） …… 19
第 16 図　SB6 出土遺物実測図（2） …… 20
第 17 図　SK4 測量図 …… 21
第 18 図　SK4 出土遺物実測図（1） …… 21
第 19 図　SK4 出土遺物実測図（2） …… 22
第 20 図　SK5 測量図 …… 23
第 21 図　SK5 出土遺物実測図（1） …… 24
第 22 図　SK5 出土遺物実測図（2） …… 25
第 23 図　SK5 出土遺物実測図（3） …… 26
第 24 図　SK6 測量図・出土遺物実測図 …… 27
第 25 図　SK10 測量図 …… 27
第 26 図　SD1 測量図 …… 28
第 27 図　SD2 測量図・出土遺物実測図 …… 29
第 28 図　SX2 測量図 …… 30
第 29 図　掘立 1 出土遺物実測図 …… 30
第 30 図　掘立 1 測量図 …… 31
第 31 図　掘立 2 測量図 …… 32
第 32 図　掘立 3 測量図・出土遺物実測図 …… 33
第 33 図　掘立 7 測量図 …… 34
第 34 図　SB1 測量図 …… 35
第 35 図　SB1 出土遺物実測図 …… 36
第 36 図　SB2 測量図 …… 37
第 37 図　SB2 出土遺物実測図 …… 38
第 38 図　SB3 測量図 …… 38
第 39 図　SB4・SK11 測量図 …… 39
第 40 図　SB4 出土遺物実測図 …… 40
第 41 図　SB5 測量図・出土遺物実測図 …… 41
第 42 図　SK1 測量図・出土遺物実測図 …… 42
第 43 図　SK2 測量図・出土遺物実測図 …… 43
第 44 図　SK7・SK8 測量図 …… 43
第 45 図　SK11 出土遺物実測図 …… 44
第 46 図　SX1 測量図 …… 45
第 47 図　焼土 2 出土遺物実測図 …… 45
第 48 図　柱穴 337 測量図・出土遺物実測図 …… 45
第 49 図　SK9 測量図 …… 47
第 50 図　焼土 1 出土遺物実測図 …… 47
第 51 図　SK3 測量図・出土遺物実測図 …… 47
第 52 図　SK12 測量図・出土遺物実測図 …… 48
第 53 図　地鎮遺構測量図・出土遺物実測図 …… 49
第 54 図　第Ⅳ層出土遺物実測図（1） …… 51
第 55 図　第Ⅳ層出土遺物実測図（2） …… 52
第 56 図　第Ⅲ層出土遺物実測図 …… 53
第 57 図　第Ⅱ層出土遺物実測図（1） …… 54
第 58 図　第Ⅱ層出土遺物実測図（2） …… 55
第 59 図　トレンチ・地点不明出土遺物実測図 …… 56
第 60 図　SB 群出土遺物実測図 …… 57
第 61 図　SP 出土遺物実測図 …… 58
第 62 図　調査区南東部竪穴住居重複推定復元図 …… 60

第Ⅳ章　樽味四反地遺跡 20 次調査

第 63 図　調査地測量図 …… 71
第 64 図　1 区遺構配置図 …… 73
第 65 図　1 区調査区西壁土層図 …… 74
第 66 図　1 区調査区東壁土層図 …… 75
第 67 図　1 区調査区北壁・南壁土層図 …… 76
第 68 図　1 区 SK1 測量図・出土遺物実測図 …… 77
第 69 図　1 区 SK2 測量図 …… 77
第 70 図　1 区 SK3 測量図・出土遺物実測図 …… 78
第 71 図　1 区 SK4 測量図・出土遺物実測図 …… 79
第 72 図　1 区 SK6 測量図・出土遺物実測図 …… 80
第 73 図　1 区 SK7 測量図・出土遺物実測図 …… 80
第 74 図　1 区 SP 出土遺物実測図 …… 82
第 75 図　1 区 SX4 出土遺物実測図 …… 83
第 76 図　1 区Ⅲ層出土遺物実測図 …… 84
第 77 図　1 区グリッド出土遺物実測図 …… 85
第 78 図　1 区出土地不明遺物実測図 …… 85
第 79 図　2 区遺構配置図（第一遺構検出面） …… 86
第 80 図　2 区遺構配置図（第二遺構検出面） …… 87
第 81 図　2 区調査区北壁・南壁土層図 …… 88
第 82 図　2 区調査区東壁土層図 …… 89
第 83 図　SB1 測量図 …… 90
第 84 図　SB1 カマド測量図 …… 91
第 85 図　SB1 出土遺物実測図 …… 91
第 86 図　SB2 測量図 …… 92
第 87 図　2 区 SK9 測量図 …… 93
第 88 図　SB2 上層出土遺物実測図（1） …… 95
第 89 図　SB2 上層出土遺物実測図（2） …… 96
第 90 図　SB2 上層出土遺物実測図（3） …… 97
第 91 図　SB2 上層出土遺物実測図（4） …… 98
第 92 図　SB2 中層出土遺物実測図（5） …… 99
第 93 図　SB2 下層出土遺物実測図（6） …… 100
第 94 図　SB2 下層出土遺物実測図（7） …… 101
第 95 図　SB2 層不明出土遺物実測図（8） …… 102
第 96 図　SB3 測量図・出土遺物実測図 …… 103
第 97 図　SB4 測量図・出土遺物実測図 …… 104
第 98 図　掘立 1 測量図・出土遺物実測図 …… 106
第 99 図　2 区 SK1 測量図・出土遺物実測図 …… 107
第 100 図　2 区 SK2 測量図・出土遺物実測図 …… 108
第 101 図　2 区 SK3 測量図・出土遺物実測図 …… 108
第 102 図　2 区 SK5 測量図・出土遺物実測図 …… 110
第 103 図　2 区 SK6 測量図・出土遺物実測図 …… 110
第 104 図　2 区 SK8 測量図・出土遺物実測図 …… 111
第 105 図　2 区 SP 出土遺物実測図 …… 112
第 106 図　2 区石組遺構出土遺物実測図 …… 113
第 107 図　2 区Ⅳ層出土遺物実測図 …… 113
第 108 図　2 区Ⅲ層出土遺物実測図（1） …… 114
第 109 図　2 区Ⅲ・Ⅱ層出土遺物実測図（2） …… 115
第 110 図　2 区グリッド出土遺物実測図 …… 116
第 111 図　2 区出土地不明遺物実測図 …… 116

表 目 次

第Ⅰ章　はじめに

表 1　調査地一覧 …… 1

第Ⅲ章　樽味四反地遺跡 19 次調査

表 2　竪穴式住居址一覧 …… 61
表 3　竪穴住居の炉・カマド一覧 …… 61
表 4　掘立柱建物址一覧 …… 61
表 5　溝一覧 …… 61
表 6　土坑一覧 …… 62
表 7　柱穴一覧 …… 62
表 8　性格不明遺構一覧 …… 62
表 9　掘立 4 出土遺物観察表（土製品） …… 62
表 10　SB6 出土遺物観察表（土製品） …… 62
表 11　SK4 出土遺物観察表（土製品） …… 63

表 12　SK5 出土遺物観察表（土製品）　・・・・・・・・・ 63
表 13　SK6 出土遺物観察表（土製品）　・・・・・・・・・ 64
表 14　SD2 出土遺物観察表（土製品）　・・・・・・・・・ 64
表 15　掘立 1 出土遺物観察表（土製品）　・・・・・・ 64
表 16　掘立 3 出土遺物観察表（土製品）　・・・・・・ 64
表 17　SB1 出土遺物観察表（土製品）　・・・・・・・・・ 64
表 18　SB1 出土遺物観察表（石製品）　・・・・・・・・・ 65
表 19　SB2 出土遺物観察表（土製品）　・・・・・・・・・ 65
表 20　SB4 出土遺物観察表（土製品）　・・・・・・・・・ 65
表 21　SB5 出土遺物観察表（土製品）　・・・・・・・・・ 65
表 22　SK1 出土遺物観察表（土製品）　・・・・・・・・・ 65
表 23　SK2 出土遺物観察表（土製品）　・・・・・・・・・ 65
表 24　SK11 出土遺物観察表（土製品）　・・・・・・・ 66
表 25　焼土 2 出土遺物観察表（土製品）・・・・・・・ 66
表 26　柱穴 337 出土遺物観察表（土製品）　・・・・ 66
表 27　焼土 1 出土遺物観察表（土製品）　・・・・・・ 66
表 28　SK3 出土遺物観察表（土製品）　・・・・・・・・・ 66
表 29　SK12 出土遺物観察表（土製品）　・・・・・・・ 66
表 30　地鎮遺構出土遺物観察表（土製品）　・・・・ 66
表 31　地鎮遺構出土遺物観察表（石製品）　・・・・ 67
表 32　第Ⅳ層出土遺物観察表（土製品）　・・・・・・ 67
表 33　第Ⅲ層出土遺物観察表（土製品）　・・・・・・ 68
表 34　第Ⅱ層出土遺物観察表（土製品）　・・・・・・ 68
表 35　第Ⅱ層出土遺物観察表（石製品）　・・・・・・ 69
表 36　トレンチ・地点不明出土遺物観察表（土製品）・・ 69
表 37　SB 群出土遺物観察表（土製品）　・・・・・・・ 69
表 38　SP 出土遺物観察表（土製品）　・・・・・・・・・・ 70
表 39　SP 出土遺物観察表（石製品）　・・・・・・・・・・ 70

第Ⅳ章　樽味四反地遺跡 20 次調査

表 40　1 区土坑一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 119
表 41　2 区土坑一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 119
表 42　竪穴式住居址一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・ 119
表 43　竪穴式住居址一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・ 119
表 44　掘立柱建物址一覧　・・・・・・・・・・・・・・・ 119
表 45　出土遺物観察表（土製品）　・・・・・・・・ 120
表 46　出土遺物観察表（石製品）　・・・・・・・・ 128
表 47　出土遺物観察表（金属製品）　・・・・・・ 128

写真図版目次

第Ⅲ章　樽味四反地遺跡 19 次調査

図版 1　1．掘立1全景(南より)
図版 2　1．遺構検出状況(北東より)
　　2．調査区南東部遺構掘り下げ状況（南より）
図版 3　1．SB1掘り下げ状況(北より)
　　2．SB6 掘り下げ状況（周壁溝、遺物出土状況）（北東より）
図版 4　1．SK5遺物出土状況(北西より)
　　2．SB4 カマド半截状況及び遺物出土状況（南より）
図版 5　1．SK12遺物出土状況(北より)
　　2．地鎮遺構遺物出土状況（東より）
図版 6　1．調査区全景（南東より）
　　2．現地説明会風景（北西より）
図版 7　1．出土遺物（SB1：56・59・61、SB2：62・63、焼土 1：87・88、焼土 2：82・83）
図版 8　1．出土遺物（SB6：2・4・5・17、SB 群：180、SD2：50、掘立 1：52・53、SK2：80、柱穴 337：86）
図版 9　1．出土遺物（SK12：90 ～ 94、SK4：18・21 ～ 24・30、SK5：31・33・35・38）

図版 10　1．SK5 出土遺物
図版 11　1．出土遺物（地鎮遺構：95 ～ 98・100 ～ 103、SP376：208、第Ⅳ層：107・113・115・116・124 ～ 126）
図版 12　1．出土遺物（第Ⅲ層：146、第Ⅱ層：162 ～ 164・168 ～ 170、トレンチ：173）

第Ⅳ章　樽味四反地遺跡 20 次調査
図版 13　1．調査前全景（北東より）
　　2．1・2 区遺構検出状況（北より）
図版 14　1．1 区完掘状況（南西より）
　　2．1 区 SK3 完掘状況（東より）
図版 15　1．2 区完掘状況（北より）
　　2．西壁土層（北西より）
図版 16　1．2 区 SB1・3、掘立 1 完掘状況（南東より）
　　2．2 区 SB1 鉄斧出土状況（北より）
図版 17　1．2 区 SB2 完掘状況（東より）
　　2．2 区 SB4 完掘状況（南東より）
図版 18　1．2 区 SK2 遺物出土状況（東より）
　　2．2 区 SP106 遺物出土状況（北西より）
図版 19　1．現地調査指導
　　2．現地説明会
　　3．調査地埋め戻し状況
図版 20　1．出土遺物（1 区 SK1：2、1 区 SK3：3・4、1 区Ⅲ層：50・55、2 区 SB1：65・68）
図版 21　1．2 区 SB2 出土遺物
図版 22　1．2 区 SB2 出土遺物
図版 23　1．2 区出土遺物（SB2：202・203、SK2：237 ～ 240、SK5：244・245）
図版 24　1．2 区出土遺物（SK8：253、掘立 1：234、SP57：262、SP140：263、SP142：260、SP106：264、
　　Ⅲ層：278・284、グリッド：309）

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

本書で報告する樽味四反地遺跡19次･20次調査地の近隣では、平成10年から18年にかけて、弥生時代後期末～古墳時代前期前半に帰属すると考えられている総柱構造の大型建物3棟が相次いで発見された。それ故、樽味地区は既に実施されている発掘調査事例を含めて松山における弥生時代から古墳時代への集落及び社会構造的移り変わりを考える上で重要な場所であるとの認識に至った。平成18年度に、松山市樽味地区は国より重要遺跡確認地域に指定された。この結果を受け、松山市教育委員会事務局文化財課（以下、文化財課）と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（当時。現在、財団法人松山市文化･スポーツ振興財団埋蔵文化財センター、以下、埋文センター）は委託契約を結び、樽味地区における重要遺跡確認調査を実施することになった。

平成18年度は樽味四反地遺跡14･16次調査が行われた。16次調査地は平成8年度に実施した同遺跡6次調査地（大型建物検出遺跡）の西側に隣接する。19年度は樽味四反地遺跡17～19次調査の3箇所、20年度は樽味四反地遺跡20次調査が実施された。

第２節　調査･整理の経緯

調査　樽味四反地遺跡19次調査は、平成19年11月から3ヶ月半、同20次調査は平成20年7月から3ヶ月実施した。発掘調査は埋文センターが主体となり、表土掘削に重機を用い、その後の遺物包含層掘り下げや遺構･遺物の検出･測量作業を人力で行った。なお、調査は国庫補助事業であり遺構保護のため遺構は半裁を基本としたため未掘部分がある。そのため、未掘部分については配置図や測量図では点描または「未掘」として表記している。また、調査にあたり国家座標第Ⅳ座標系に基づく4級基準点の設置業務を測量業者に委託した。発掘調査中には、下條信行先生（愛媛大学名誉教授）を中心とした委員会の方々による遺跡検討会を数回実施し、調査方法や遺構･遺物の分析等の指導を受けた。なお、調査終了段階には一般市民対象の現地説明会を開催し、啓蒙普及活動にも努めた。

整理　樽味四反地遺跡20次調査の翌年度にあたる平成21年度には、埋文センター内にて報告書作成に伴う整理作業を実施した。発掘調査同様、文化財課と埋文センターが整理作業に伴う委託契約を結び、平成21年4月から平成22年3月までの間に出土遺物の復元や実測、測量図の合成や作図等を行った。その後、平成22年度には、調査報告書刊行に伴う編集や校正作業を実施した。

表１　調査地一覧

遺跡名称	調査期間	調査面積	調査・報告
樽味四反地遺跡19次調査	**2007.11.16～2008.03.31**	**約290㎡**	**小笠原･大西**
樽味四反地遺跡20次調査	**2008.07.01～2008.10.31**	**約143㎡**	**武 正 ･大西**

第３節　整理･刊行組織

整理組織（平成21年4月1日時点）

松山市教育委員会

	教育長	土居　貴美
事務局	局　長	藤田　　仁
	企画官	青木　　茂
	企画官	古鎌　　靖
文化財課	課　長	家久　則雄
	主　幹	森　　正経
	副主幹	三好　博文

刊行組織　（平成22年4月1日時点）

刊行主体　　松山市教育委員会

	教育長	山内　　泰
事務局	局　長	藤田　　仁
	企画官	勝谷　雄三
	企画官	青木　　茂
文化財課	課　長	駒澤　正憲
	主　幹	森　　正経
	副主幹	三好　博文

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

第１節　立　地

樽味四反地遺跡19次・20次調査地が所在する松山平野は四国山地北西部に位置し、石手川や重信川などの大小河川で形成された複合扇状地性の平野である。調査地北側を流れる石手川は高縄山から西流し、やがて重信川と合流する。石手川が形成した扇状地は、松山市石手付近（標高50m）を扇頂とし南西方向に広がり、範囲は半径約4km、標高20mの地点までを含む。石手川扇状地は、山麓裾の松山市正円寺や畑寺にかけての古期扇状地面と、道後、中村に広がる新期扇状地面、さらに石手川南岸東側へ広がる洪積世に段丘化した低位段丘面に区分される。調査地は石手川南岸新期扇状地面に立地する。なお、石手川南岸新期扇状地面は、約23,000年前に姶良Tn火山灰が降下、堆積した時には既に段丘化していたものと推測されている。近年発掘調査が行われた樽味遺跡1次調査や樽味四反地遺跡1次調査において2次的な堆積状況の火山灰が検出されている。また、同じ扇状地面上の束本4次調査からも同様の火山灰が確認されている。一方で、洪積世の最終氷期、約2万年～1.8万年前には、石手川は道後城北地区を通り、松山市堀江地区へ流下していたものと推定されており、石手川南岸に位置する樽味地区は洪積世最末期から完新世の間、石手川北岸に比べ、安定した地形が形成されていたものと考えられている。

第２節　環　境

樽味四反地遺跡19次・20次調査地調査地が所在する松山市樽味地区では、道路建設工事や民間の開発等により近年、発掘調査が増加している。ここでは、樽味地区をはじめ、前述の新期扇状地面上に展開する遺跡を中心に遺跡の状況を概観する。

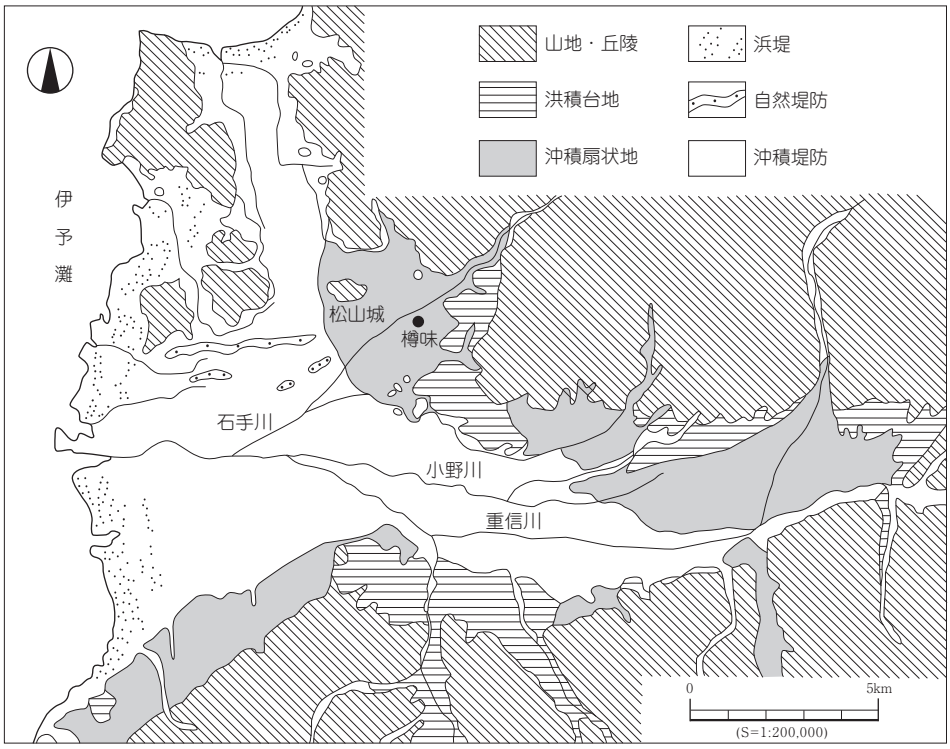
旧石器時代　当該期の遺構は確認されておらず、遺物は表面採集や後世の遺構への流入資料である。

経石山古墳からはスクレーパーや楔形石器、桑原西稲葉遺跡2次調査では角錐状石器、さらには樽味四反地遺跡6次調査や東本遺跡4次調査よりナイフ形石器が出土している。このほか、姶良Tn火山灰（AT火山灰）の確認された事例が、近年の発掘調査で報告されており、樽味遺跡1次調査や樽味四反地遺跡1次調査、枝松遺跡3次調査では2次的な堆積状況、東本遺跡4次調査では1次的堆積状況のテフラが確認されている。

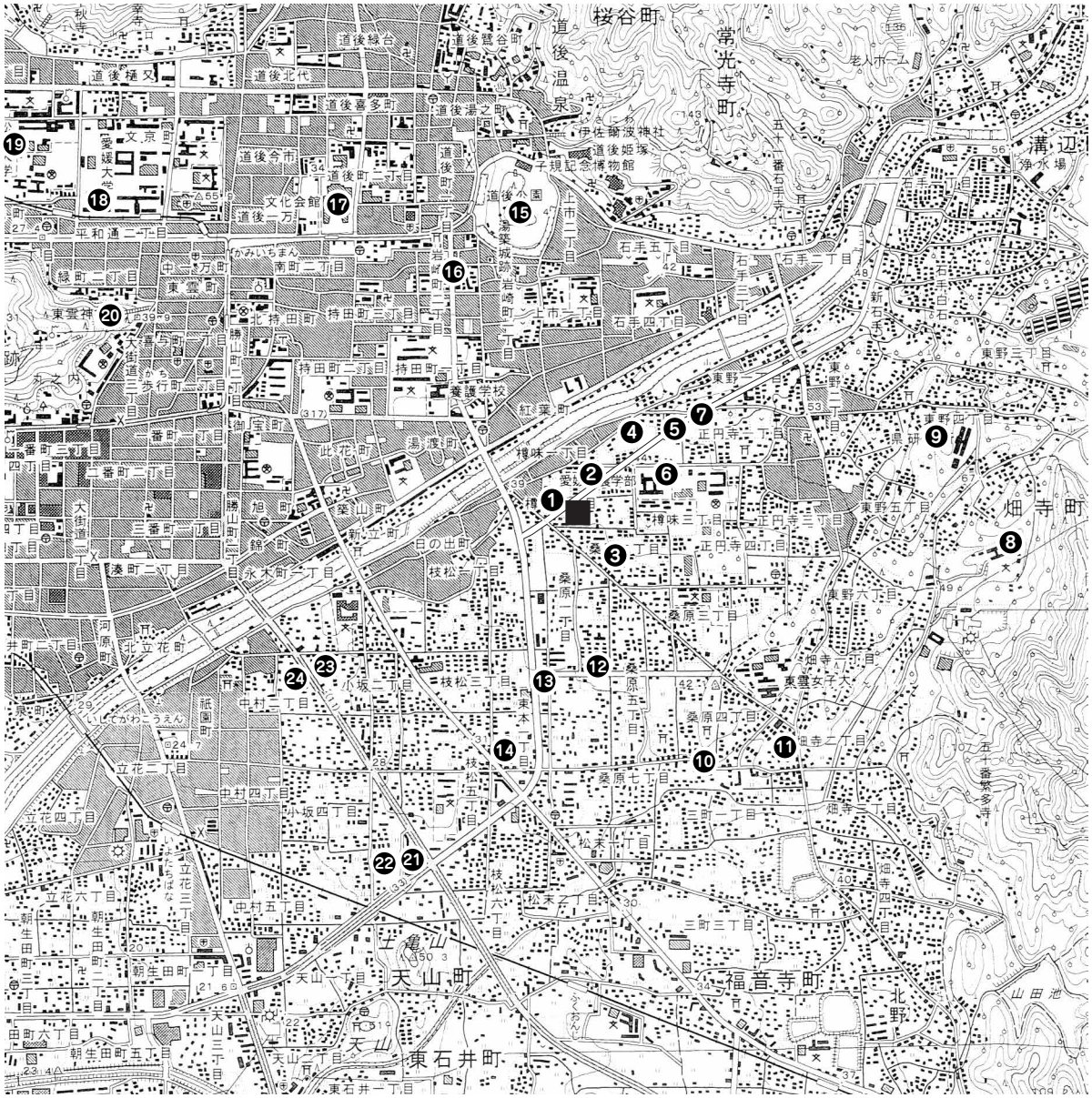
縄文時代　当該期の遺構は稀少であるが、近年の調査で縄文時代晩期とされる遺構が検出されている。松山市道「樽味溝辺線」関連の調査において、東野森ノ木遺跡2次・4次調査と樽味立添遺跡3次調査では晩期の土器を含む貯蔵穴が数基検出され、樽味地区における集落の出現期を考える上で貴重な事例となっている。このほか、東本遺跡4次調査では、今から約6,300年前に降下したとされる鬼界アカホヤ火山灰（K－Ah）が確認され、火山灰の下位層からは縄文時代早期の槍先形石器やスクレーパーが出土している。

弥生時代　弥生時代になると、対象となる遺跡数が増加する。前期では、樽味四反地遺跡5次調査において竪穴住居や土坑が検出され、さらに樽味立添遺跡3次調査や樽味四反地遺跡7次調査では前期末の溝が確認されている。中期では前半の資料はなく、後半の資料が大半を占める。樽味高木遺跡2次調査や樽味四反地遺跡5次調査では、円形及び方形竪穴住居が検出され、樽味高木遺跡3次調査からは土坑が検出されており、当該期の集落構造や住居構造を知る手がかりとなっている。

後期では、後葉から終末期における竪穴住居の検出事例が増加すると共に、他地域との交流が知れる貴重な資料が数多く確認されている。後期後葉では、樽味立添遺跡や樽味四反地遺跡、樽味高木遺跡のほか、扇状地南側に所在する桑原高井遺跡1次調査や東本遺跡2・4・5次調査、枝松遺跡3・5次調査において竪穴住居が多数確認されている。特に東本遺跡で検出した竪穴住居のうち、円形を呈する住居は、



第１図　松山平野の地形概要図



第２図　石手川中流域の主要遺跡分布図（S=1:25,000）

直径8mを超える大型住居で、住居内からは鉄鏃や鉄斧などの鉄製品が多く出土することから、鍛冶関連の遺構である可能性が示唆されている。

このほか、東本遺跡4次調査検出のＳＢ203号住居からは破鏡、包含層資料ではあるが樽味立添遺跡1次調査からは中国銭である『貨泉』、樽味高木遺跡3次調査では準構造船が描かれた絵画土器片などが出土しており、他地域との交流を知る貴重な考古資料が注目される。

古墳時代　古墳時代初頭では、3棟の大型建物が注目されている。平成10年度に調査された樽味四反地遺跡6次調査からは床面積約130㎡を測る総柱構造の床束式建物（1号）が発見された。その5年後の平成15年度に調査された同遺跡8次調査では最大規模を測る床面積160㎡前後（2号）、さらに2年後の平成17年度に調査が実施された同遺跡13次調査からは床面積100㎡前後を測る3号大型建物が検出されている。近隣域で次々と発見された3棟の建物は樽味地区において、当該期の首長層などに関係する特殊建物ではないかと考えられている。なお、前期の集落構造は樽味地区のみならず、松山平野において検出事例が少なく、集落様相は不明な点が多い。

中期から後期では、遺跡数が飛躍的に増大する。中期では樽味高木遺跡1次調査をはじめ、樽味四反地遺跡や樽味立添遺跡など多くの遺跡で竪穴住居や土坑が検出され、集落経営が盛んに営まれていたことが分かる。樽味四反地遺跡16次調査ではカマドが付設された竪穴住居5棟が検出され、カマドの形状や規模、構築方法等の好資料が得られている。樽味四反地遺跡17次調査からはカマドが造り付けられる小型長方形無柱建物が1棟検出されている。なお、樽味高木遺跡8・9・11次調査では竪穴住居内から渡来系遺物が数多く出土している。後期にも樽味四反地遺跡7・8次調査や樽味高木遺跡7・9次調査などから竪穴住居や溝が確認されていることから集落が継続的に営まれていたものと推測されている。また、丘陵部や古期扇状地面上には中期から後期の古墳が数多く存在する。丘陵上に立地する古墳は、中期後半の築造とされる畑寺竹ヶ谷古墳や東野お茶屋台古墳があり、古期扇状地面上には中期から後期の前方後円墳である経石山古墳や三島神社古墳が造営されている。

古代　樽味四反地遺跡14次調査では古墳時代から古代にかけての「Ｌ」字状に折れ曲がる溝が検出されている。形状から、地境或いは集落を区画するための溝の可能性がある。樽味四反地遺跡1･5次調査では自然流路が検出され、5次調査からは円面硯や奈良三彩の壺が出土している。また、東野森ノ木遺跡1次調査や樽味四反地遺跡8次調査では土坑が検出されるなど古代の集落関連遺構の検出例が増えている。

中　世　樽味遺跡1･2次調査では、14 ～ 16世紀の溝や掘立柱建物が検出されている。また、東野森ノ木遺跡1次調査からは溝や掘立柱建物、完形の白磁四耳壺が埋納された土坑等が検出され、樽味四反地遺跡8次調査では素掘りの井戸が検出されている。これらのことから、当該期の生活関連遺構が樽味遺跡1・2次調査地である現在の愛媛大学農学部構内付近を中心に広く分布しているものと考えられている。

【文献】

平井　幸弘　　1989　「樽味遺跡及び樽味遺跡をとりまく地形環境」『鷹子･樽味遺跡の調査』
愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅰ

重松　佳久　　1992　「石手川水系に於ける旧石器文化」『桑原地区の遺跡』
松山市文化財調査報告書第26集

宮本　一夫　1989　『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅰ
梅木　謙一　1992　「樽味四反地遺跡」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書第26集
髙尾　和長　1996　「東本遺跡4次調査」『東本遺跡4次調査・枝松遺跡4次調査』
松山市文化財調査報告書第54集
梅木　謙一　1992　「桑原西稲葉遺跡2次調査」松山市文化財調査報告書第26集
宮内　慎一　1994　「樽味高木遺跡3次調査」『桑原地区の遺跡Ⅱ』
松山市文化財調査報告書第46集
河野　史知　2007　「東野森ノ木遺跡1・2・3・4次調査」『東野森ノ木遺跡1・2・3・4次調査、
樽味立添遺跡3次調査、樽味高木遺跡7・8・9・11次調査、
樽味四反地遺跡7・8・9・11次調査、枝松遺跡6次調査』
松山市文化財調査報告書第117集
髙尾　和長　2007　「樽味立添遺跡3次調査」松山市文化財調査報告書第117集
河野　史知　1994　「樽味高木遺跡2次調査」松山市文化財調査報告書第46集
髙尾　和長　2002　『樽味四反地5次調査』松山市文化財調査報告書第87集
梅木　謙一　1996　「桑原高井遺跡1次調査」松山市文化財調査報告書第54集
梅木　謙一　1996　「東本遺跡2次調査」松山市文化財調査報告書第54集
河野　史知　2001　「東本5次調査」松山市埋蔵文化財調査年報12
相原　浩二　1995　「枝松遺跡5次調査」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ
宮内　慎一　1994　「樽味四反地遺跡4次調査」松山市文化財調査報告書第46集
橋本　雄一　2005　『樽味四反地遺跡Ⅱ-6次調査-』松山市文化財調査報告書第106集
加島　次郎　2007　「樽味四反地遺跡7・8次調査」松山市文化財調査報告書第117集
宮内　慎一　2009　「樽味四反地遺跡16次調査」松山市文化財調査報告書第133集
橋本　雄一　2010　「樽味四反地遺跡17次調査」松山市文化財調査報告書第139集
相原　秀仁　2006　「樽味四反地遺跡13次調査」松山市埋蔵文化財調査年報18
髙尾　和長　2007　「樽味高木遺跡7・8・11次調査」松山市文化財調査報告書第117集
加島　次郎　2007　「樽味高木遺跡9次調査」松山市文化財調査報告書第117集
水本　完児　2009　「樽味四反地遺跡14次調査」松山市文化財調査報告書第133集
田﨑　博之　1993　『樽味遺跡Ⅱ-樽味遺跡2次調査-』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ

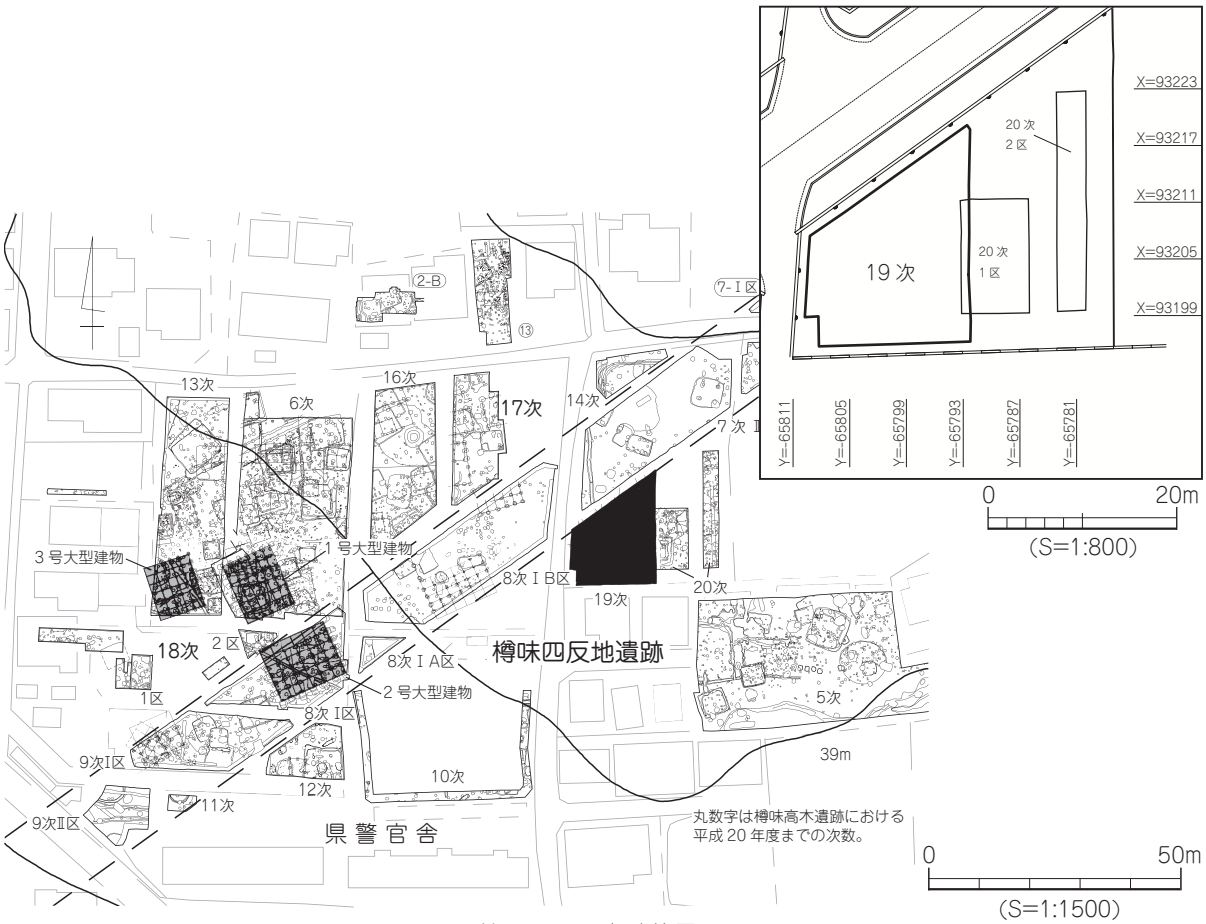
第Ⅲ章　樽味四反地遺跡19次調査

第１節　調査に至る経緯

この調査は国からの補助を受けて、平成15年より重要遺跡の保護のための範囲および遺跡の性格を確認する目的で継続実地されている「重要遺跡確認調査」であり、特に古墳時代前期前半の大型建物群が検出された樽味４丁目付近における関連遺構の存在の有無と、その範囲を把握する目的で計画されたものである。

調査は国庫補助事業として、平成19年度は３件の調査が行われ、このうち２件については2010年（平成22年）に「樽味四反地遺跡　－17次・18次－」として発掘調査報告書が既に刊行されている。本章で報告する樽味四反地遺跡19次調査は、平成19年４月・５月に先行して調査された同17次調査および18次調査に続いて行った発掘調査である。

今回の調査地は市道樽味溝辺線の開通後も水田として利用されてきた場所で、調査対象地の東半部を翌年度調査予定の同20次調査、西半部を同19次調査として平成19年11月より調査を行った。



第３図　調査地位置図

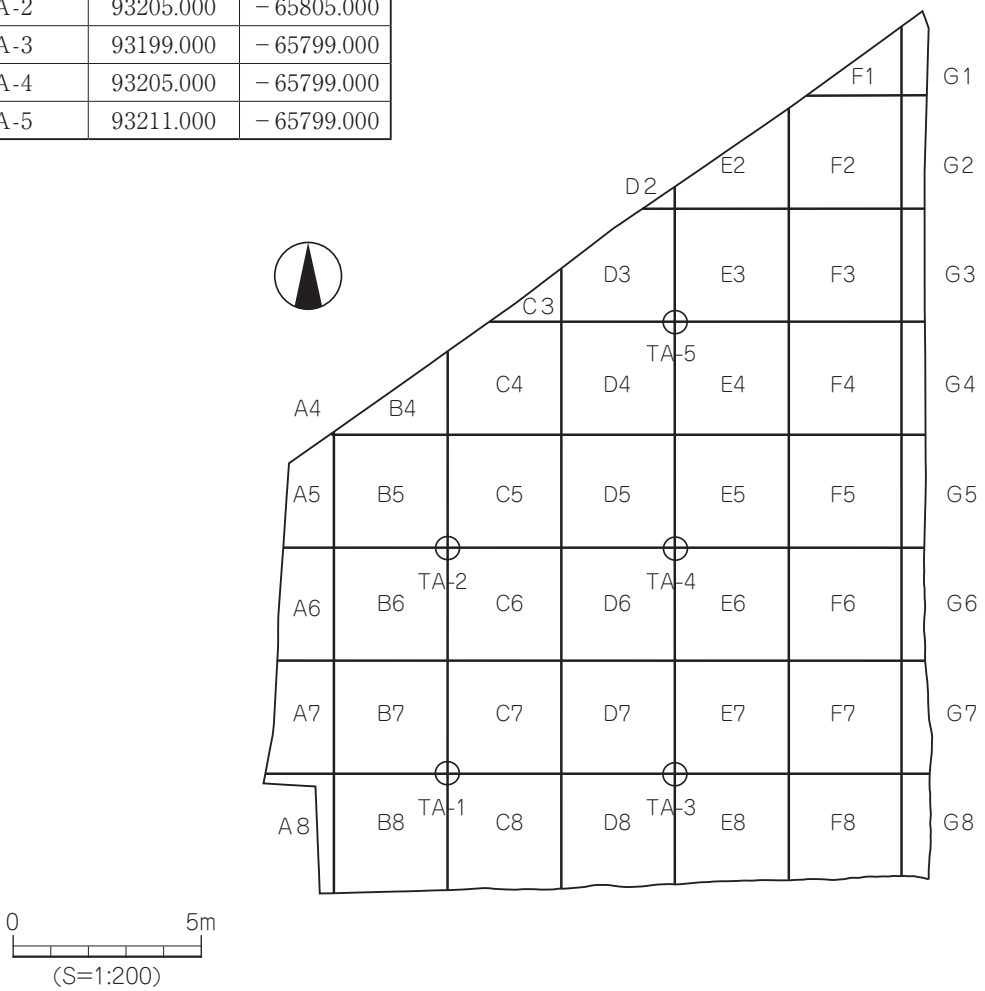
第２節　調査の経過

（１）調査区の設定

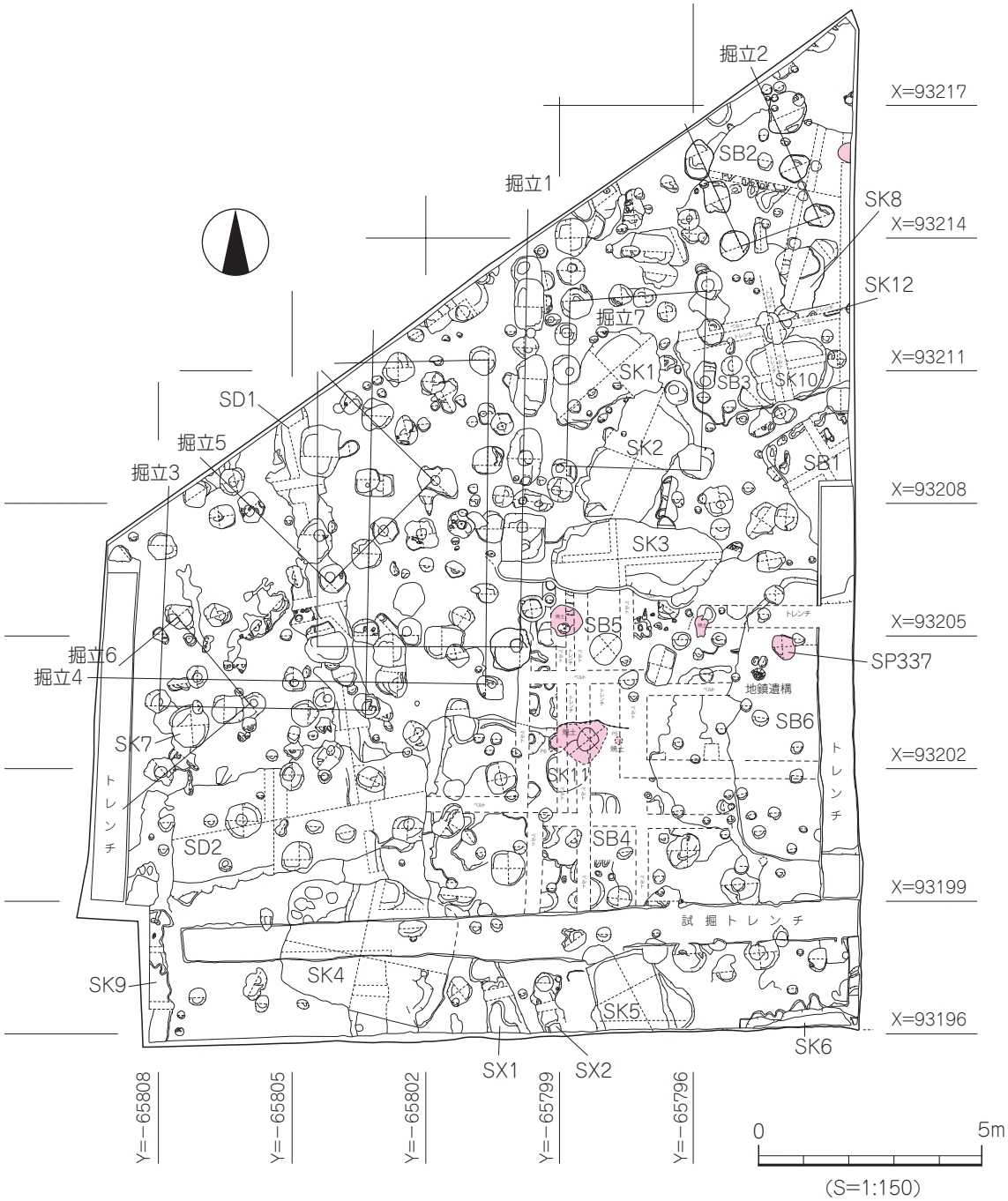
調査に当たっては、測量業者（株式会社エクセル調査設計）に国家座標軸測量業務を委託し、調査地内に３m四方のメッシュでグリッドを設置し、調査地の区割りを行った。グリッドの名称は西から東へＡ－Gとし、北から南へ１－８までを設定した。調査区内のグリッドはＡ４－Ａ８、Ｂ４－Ｂ８、Ｃ３－Ｃ８、Ｄ２－Ｄ８、Ｅ２－Ｅ８、Ｆ１－Ｆ８、Ｇ１－Ｇ８である。なお、国土座標の設置では世界測地系を採用している。

遺構の検出作業および包含層中からの出土遺物については、可能な限りこのグリッド名で取り上げを行った。

４級基準点名	Ｘ座標値	Ｙ座標値
ＴＡ-1	93199.000	－65805.000
ＴＡ-2	93205.000	－65805.000
ＴＡ-3	93199.000	－65799.000
ＴＡ-4	93205.000	－65799.000
ＴＡ-5	93211.000	－65799.000



第４図　遺構区割り図


掘立2
X=93217
SB2
掘立1
SK8
X=93214
SK12
掘立7
X=93211
SK1
SB3
SK10
SD1
掘立5
SK2
SB1
掘立3
X=93208
SK3
SB5
X=93205
掘立6
SP337
掘立4
地鎮遺構
SB6
SK7
X=93202
SK11
トレンチ
SD2
SB4
X=93199
試掘トレンチ
SK9
SK4
SK5
X=93196
SK6
SX1
SX2
Y=−65808
Y=−65805
Y=−65802
Y=−65799
Y=−65796
0
5m
(S=1:150)

第５図　遺構配置図

（２）調査組織

樽味四反地遺跡19次調査は、以下の体制で実施した。

調　査　地：松山市樽味四丁目219番3、220番1の各一部

調査期間：平成19年（2007）11月16日～平成20年（2008）３月31日

調査面積：708㎡のうち約290㎡

調査担当：(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター調査員　小笠原　善治

（３）調査の経過

今回の調査対象地は、松山市樽味四丁目219番3、220番1の各一部で現況は田圃である。対象地は面積708㎡であるが本調査はこの対象地西半部、約290㎡を発掘範囲として調査を行った。

平成19年11月16日～21日、調査地、仮設事務所設置場所の草刈り、安全対策等、調査の諸準備とともに、重機（バックホー、不整地走行車）により表土層及び包含層を掘削し、土層毎に遺物を取り上げる。11月22日には事務所整理および周辺の環境を整備した。またこの日で調査区内の掘削を終了し、各壁面の清掃および平面清掃を行う。11月28日、平面精査および遺構検出作業を開始する。12月４日、全体遺構検出が終了し、遺構の切り合い等の検討・確定を進める。12月13日には、遺構検出写真撮影の準備を行い、午後には遺構全体写真の撮影を行う。その後遺構全測図の作成開始。併行して掘立建物等の切り合い、および柱痕等の再確認を行う。12月17日、測量業者（株式会社エクセル調査設計）に国家座標軸測量業務を委託し、調査区内に第４級基準点５点を求め、６ｍ四方のグリッドを設定する。その後この基準５点を元にグリッド杭の設置作業を開始。12月20日、遺構全測図作成後、引き続き遺構の検討・精査を行い、遺構保存のため各遺構の一部、半截等の遺構掘り下げを開始した。同時に出土した遺物を取り上げた。１月７日、各遺構の平面・断面図作成を開始した。２月21日、下條信行先生（現愛媛大学名誉教授）、栗田正芳氏（文化財課）から現地調査指導を受ける。２月24日には南東部のＳＢ群付近の再精査に着手したが、プランの確定には難航する。３月８日、市民対象の現地説明会を開催し、市民約60名の参加をみた。３月13日、終了状況写真を撮影する。遺構は真砂土で保護した後、３月26日より重機を使用して包含層、表土の順に埋め戻し作業を行った。３月31日、埋め戻し作業を完了し、発掘調査を終了する。

第３節　層　位

（１）基本層位（第6～9図）

基本層位は、第Ⅰ層灰色土〔N5/0〕、灰色土〔7.5YR5/1〕に明褐色土〔7.5YR5/6〕混じり（耕作土・床土）、第Ⅱ層褐灰色土〔7.5YR5/1〕、灰褐色土〔7.5YR5/2〕、第Ⅲ層暗褐色土〔7.5YR3/4〕、第Ⅳ層黒褐色土〔2.5Y3/1〕、第Ⅴ層暗褐色土〔7.5YR3/4〕砂粒・礫含むである。

第Ⅰ層は近現代の水田開発に伴う耕作土および床土で厚さ15～22㎝を測る。調査区全域に広く分布する。

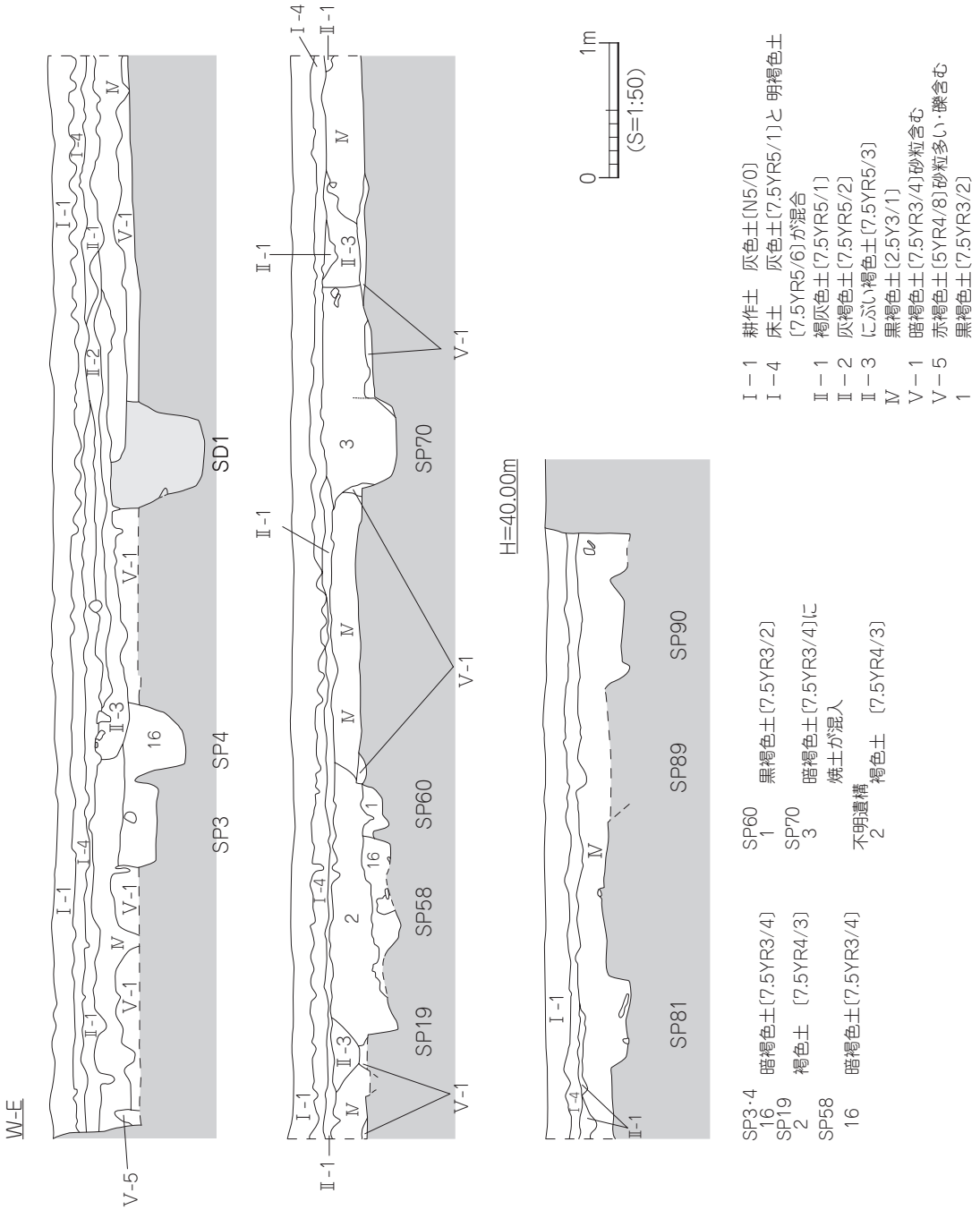
第Ⅱ層は褐灰色土〔7.5YR5/1〕、灰褐色土〔7.5YR5/2〕で、厚さ５～15㎝を測る。調査区全域に広く堆積するが南東部では攪乱によって消失し、北部から東部ではやや薄い。層中から出土する遺物には、土師

器、陶磁器などの小片が多く含まれることから中世までの包含層と考えられる。

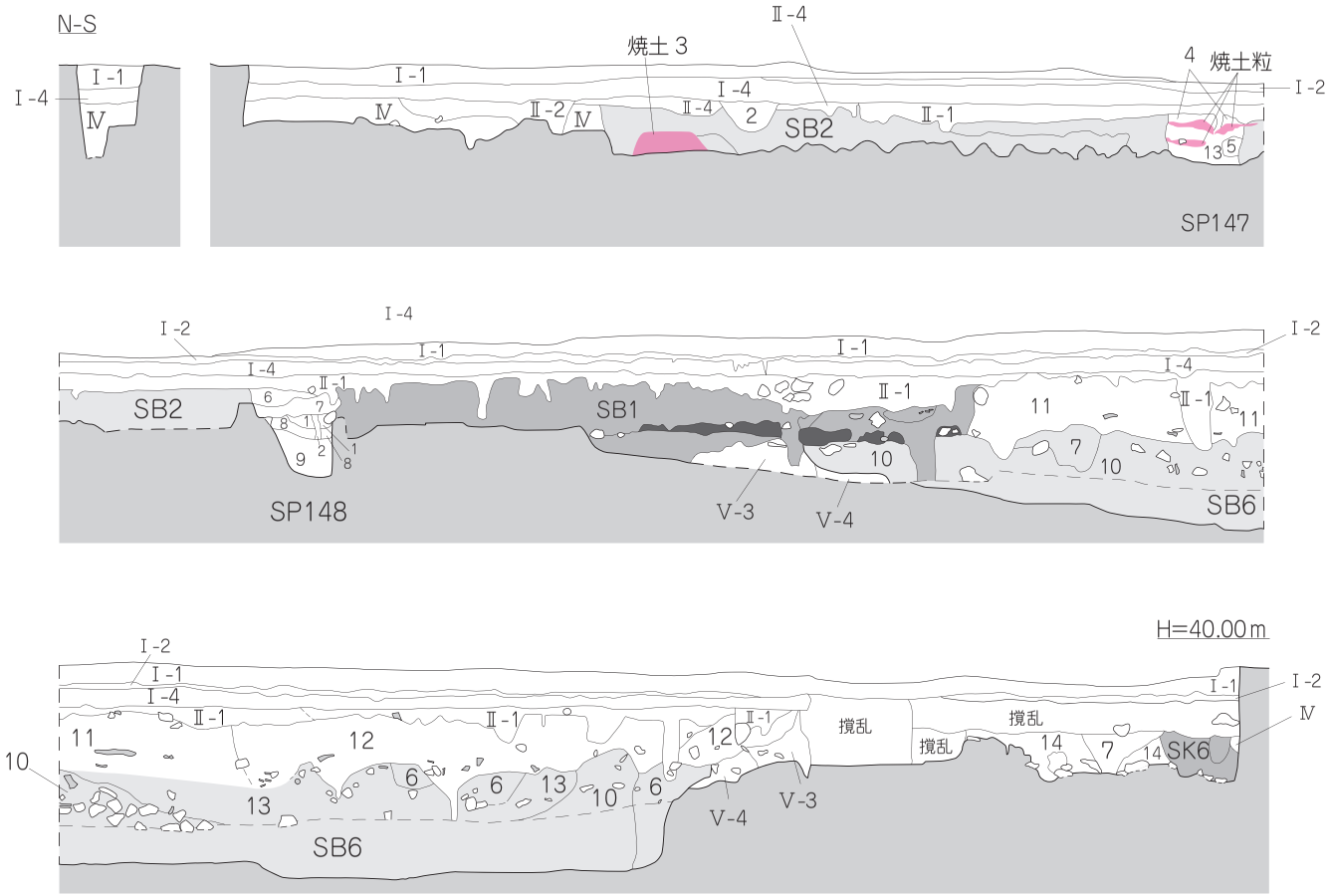
第Ⅲ層は暗褐色土〔7.5YR3/3〕～〔7.5YR3/4〕が堆積する包含層で、主に西部から南部に堆積し、厚さ20～40cmを測る。上層には疎らに褐色土の小塊が見られ、層中からは須恵器、土師器等が多量に出土していることから古墳時代から古代までの包含層と考えられる。

第Ⅳ層は黒褐色土〔2.5Y3/1〕の包含層で、厚さ12～29cmを測る。調査区全域に広く堆積する。層中からは主に弥生土器が出土することから弥生時代までの包含層と考えられる。

第Ⅴ層は暗褐色土〔7.5YR3/4〕砂粒・小礫を含む層で、本遺跡の基盤面相当層と考える。



第６図　北壁土層図



SB6
- 7　黒褐色土〔7.5YR3/2〕砂粒含む
- 10　黒褐色土〔10YR3/1〕砂粒・炭含む
- 11　暗褐色土〔7.5YR3/4〕砂粒多く含む
- 12　暗褐色土〔10YR3/4〕礫・砂粒多く含む

SP147
- 4　灰褐色土〔7.5YR4/2〕
- 5　黒褐色土〔7.5YR3/2〕に黄褐地山混入20%
- 13　暗褐色土〔7.5YR3/4〕に暗赤褐色土〔5YR3/4〕が 2～3mmの粒状に含まれる

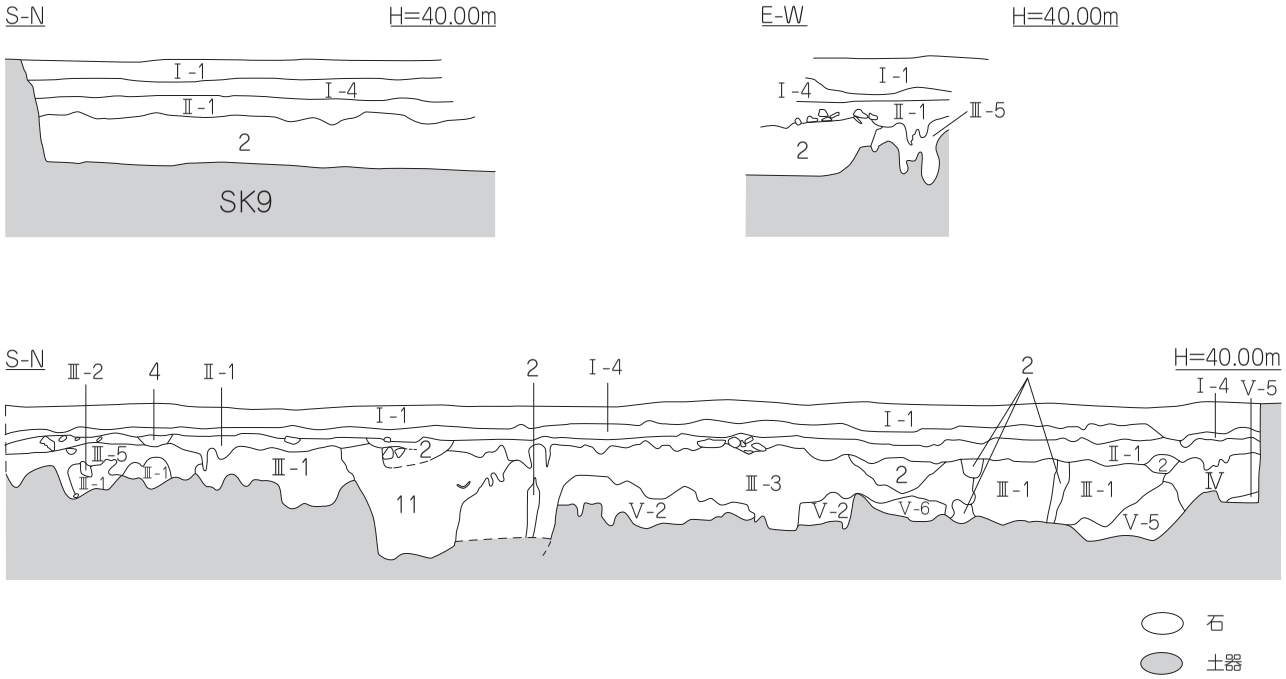
SP148
- 1　黒褐色土〔7.5YR3/2〕
- 2　褐色土　〔7.5YR4/3〕
- 6　褐灰色土〔7.5YR4/2〕に暗褐色土〔7.5YR3/3〕の混合土
- 7　黒褐色土〔7.5YR3/2〕砂粒含む
- 8　暗褐色土〔7.5YR3/3〕砂含まない
- 9　暗褐色土〔10YR3/3〕

不明遺構
- 2　褐色土　〔7.5YR4/3〕

Ⅰ－1　耕作土　灰色土〔N5/0〕
Ⅰ－2　褐灰色土〔7.5YR6/1〕
Ⅰ－4　床土　灰色土〔7.5YR5/1〕と 明褐色土〔7.5YR5/6〕が混合
Ⅱ－1　褐灰色土〔7.5YR5/1〕
Ⅱ－2　灰褐色土〔7.5YR5/2〕
Ⅱ－4　褐灰色土〔7.5YR5/1〕に焼土粒が混入

Ⅳ　黒褐色土〔2.5Y3/1〕
Ⅴ－3　暗褐色土〔10YR3/4〕砂粒含む
Ⅴ－4　褐色土　〔10YR4/4〕砂粒多く含む
14　黒褐色土〔10YR2/2〕
7　黒褐色土〔7.5YR3/2〕砂粒含む

第７図　東壁土層図



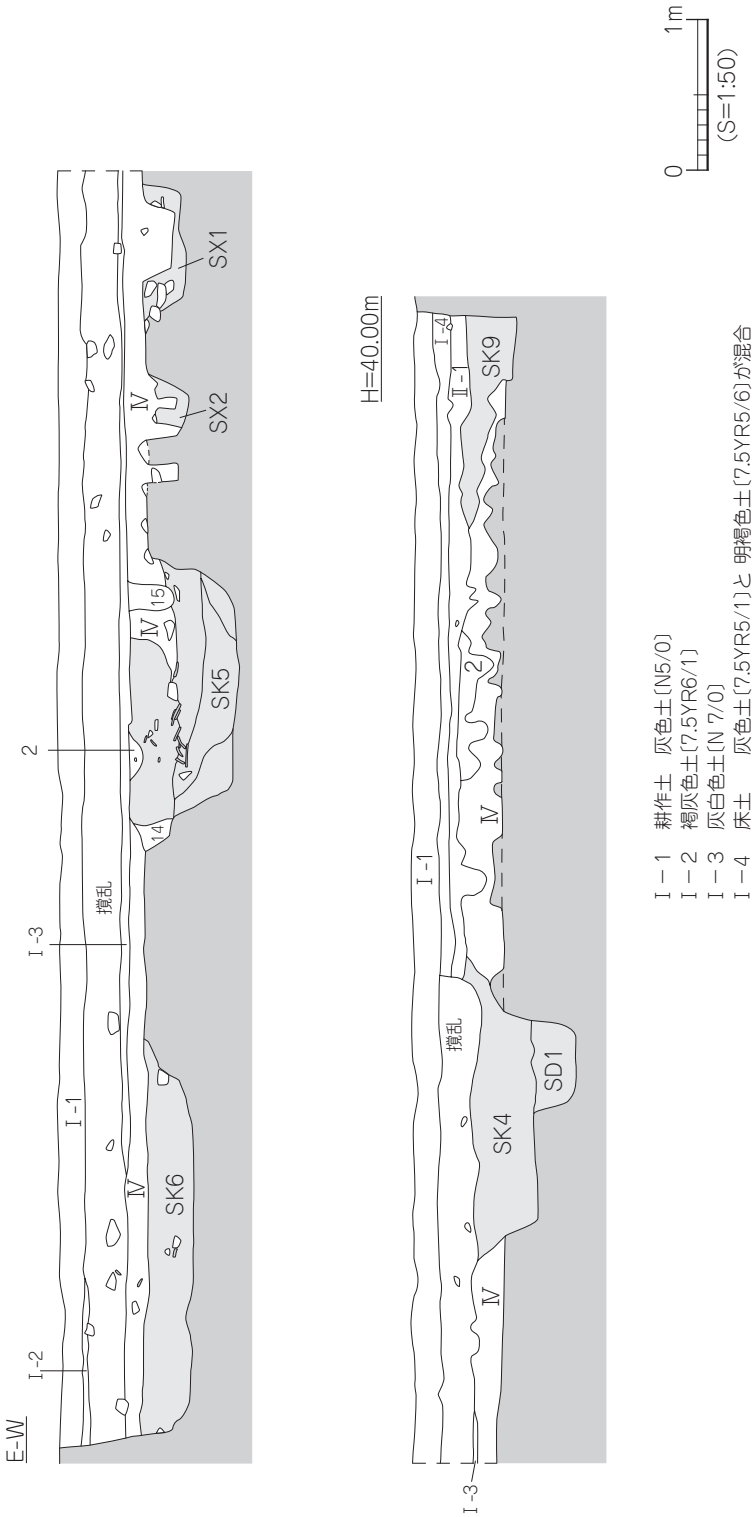
SK9
　2　褐色土〔7.5YR4/3〕
不明遺構
　2　褐色土〔7.5YR4/3〕
　11　暗褐色土〔7.5YR3/4〕砂粒多く含む

Ⅰ－1　耕作土　灰色土〔N5/0〕
Ⅰ－4　床土　灰色土〔7.5YR5/1〕と 明褐色土〔7.5YR5/6〕が混合
Ⅱ－1　褐灰色土〔7.5YR5/1〕
Ⅲ－1　暗褐色土〔7.5YR3/4〕
Ⅲ－2　黒褐色土〔7.5YR3/2〕
Ⅲ－3　暗褐色土〔7.5YR3/3〕2～3cmの礫含む
Ⅲ－5　暗褐色土〔10YR3/3〕

Ⅳ　黒褐色土〔2.5Y3/1〕
Ⅴ－2　暗褐色土〔10YR3/4〕礫・砂粒多く含む
Ⅴ－5　赤褐色土〔5YR4/8〕砂粒多い・礫含む
Ⅴ－6　褐色土〔7.5YR4/4〕砂粒・礫多く含む
2　褐色土〔7.5YR4/3〕
4　灰褐色土〔7.5YR4/2〕

0　1m
(S=1:50)

第８図　西壁土層図



Ⅰ－1　耕作土　灰色土〔N5/0〕
Ⅰ－2　褐灰色土〔7.5YR6/1〕
Ⅰ－3　灰白色土〔N 7/0〕
Ⅰ－4　床土　灰色土〔7.5YR5/1〕と 明褐色土〔7.5YR5/6〕が混合
Ⅱ－1　褐灰色土〔7.5YR5/1〕
Ⅳ　黒褐色土〔2.5Y3/1〕
14　黒褐色土(10YR2/2)
15　褐色土(10YR4/1)
2　褐色土　〔7.5YR4/3〕

第９図　南壁土層図

第４節　遺構と遺物

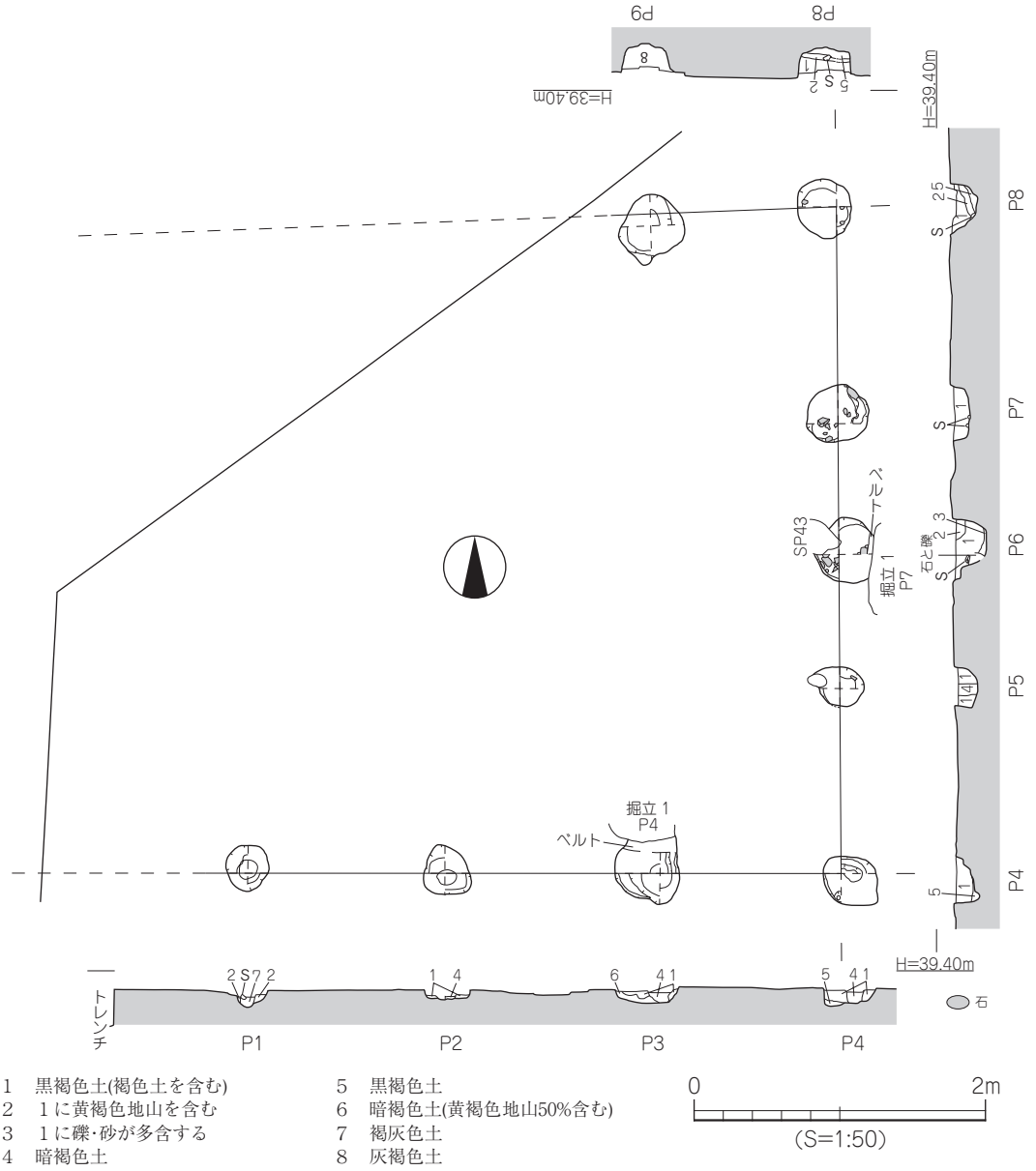
本調査で検出した遺構は、掘立柱建物（掘立）７棟、竪穴住居址（ＳＢ）６棟、溝（ＳＤ）２条、土抗（ＳＫ）12基、性格不明遺構（ＳＸ）２基である。遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、瓦、砥石、石鏃、磁器などが出土した。特にＳＫ５は、今回の調査目的と言える遺構を検出することができた。

（１）弥生時代

掘立柱建物跡（掘立）

掘立４（第10図）

調査区北西部に位置し、西部は調査区外に展開する、南北４間、東西４間以上の掘立柱建物である。



1　黒褐色土(褐色土を含む)
2　１に黄褐色地山を含む
3　１に礫･砂が多含する
4　暗褐色土
5　黒褐色土
6　暗褐色土(黄褐色地山50%含む)
7　褐灰色土
8　灰褐色土

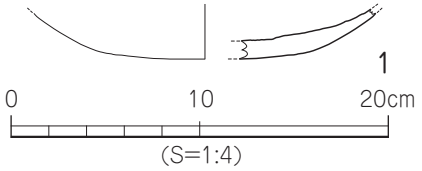
第10図　掘立4測量図

検出規模は、東西桁行6.50m以上、南北梁行7.20mである。梁行柱穴間がやや不均等で、柱穴Ｐ５～Ｐ７間がやや短い。柱穴の規模は直径50～70cmのほぼ円形を呈し、深さ約10～37cmを計る。これら柱穴の深さは後世の開発による削平のためか北部から南西部にかけて徐々に浅くなる傾向にある。遺物は柱穴Ｐ１～３からは遺物の出土はなかった。Ｐ３からは弥生土器片が出土している。Ｐ５下層からは１の弥生土器底部片が出土している。Ｐ６からは外面タタキが施された弥生時代後期の甕形土器片が出土している。Ｐ７からは弥生土器甕形土器底部片が出土している。Ｐ８からは弥生土器片が出土している。

出土遺物（第11図）

１は弥生土器の鉢形土器。平底で、外面に煤が付着している。

時　期　出土遺物から弥生時代中期後半から後期末と考えられる。

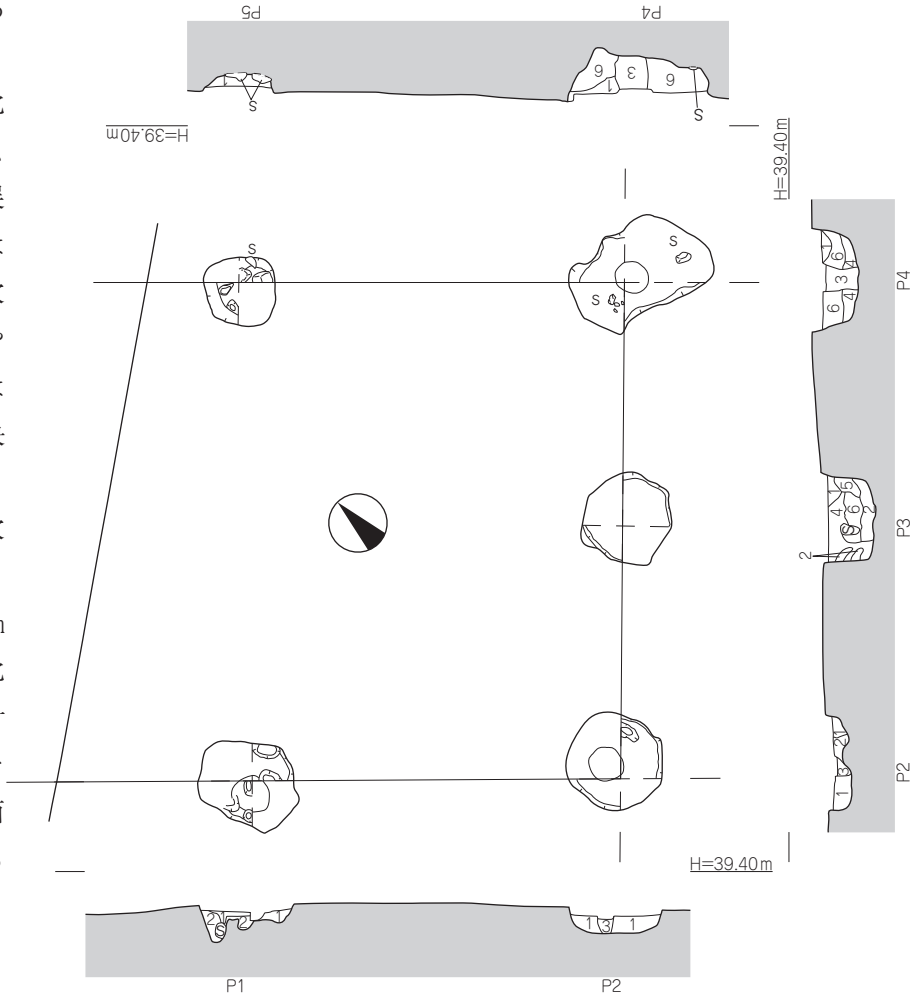


第11図　掘立4出土遺物実測図

掘立５（第12図）

調査区北西部に位置し、西部は調査区外に展開する北西１間以上、南東２間の建物である。検出規模は、北西－南東桁行2.60m以上、北東－南西梁行3.20mで、北西部は調査区外に展開する。柱穴の平面形はほぼ円形であるが、柱穴Ｐ４は東西方向にやや広くなっている。これはコーナー部の位置を決めるために掘られたものであろう。規模は柱穴Ｐ５が直径約45cmで、Ｐ１～３は直径56～64cmである。柱穴Ｐ４は南北径58cm、東西径87cmを計る。深さは10～35cmを計り、東部から南北－西部に向かって浅くなる傾向にある。

遺物は柱穴Ｐ１、Ｐ２からの出土はなかった。Ｐ３からは外面にタタキが施された弥生時代後期の甕形土器片が出土している。Ｐ４からは



1　暗褐色土(砂粒含む)
2　黄褐色土(暗褐色土10%含む)
3　黒褐色土
4　黒褐色土(褐色土ブロック状に含む)
5　褐色土
6　暗褐色土

0　2m
(S=1:50)

第12図　掘立5測量図

弥生土器片が出土している。Ｐ５からは弥生土器片が出土している。これら出土遺物は破片であり実測には耐えられず、実測図は掲載していない。

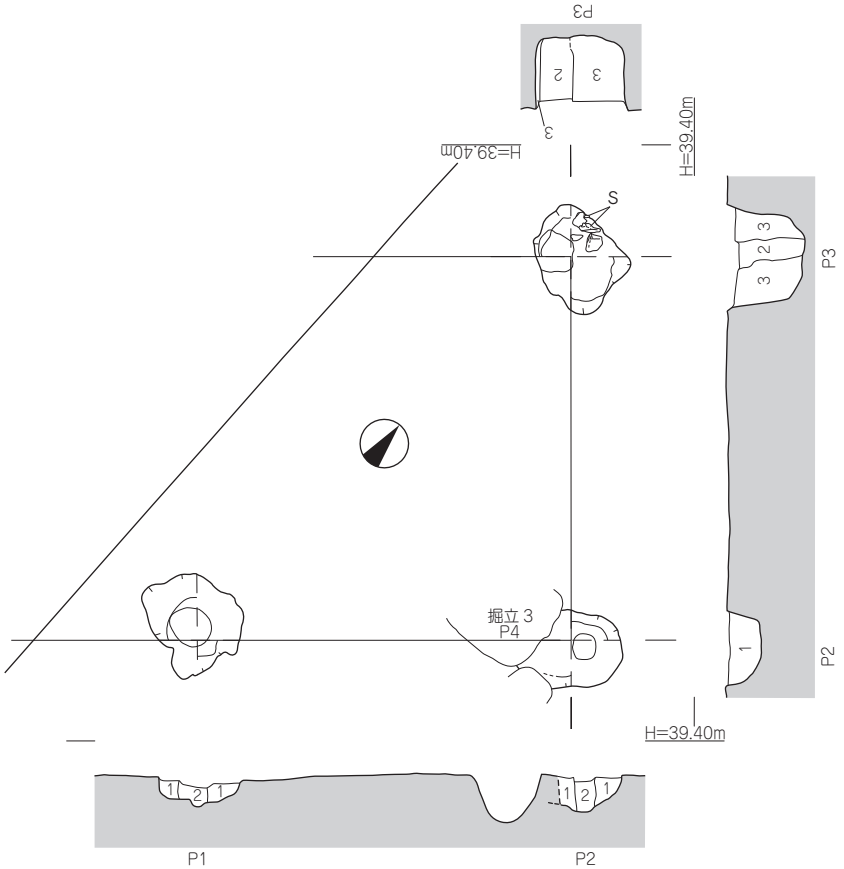
時　期　出土遺物から弥生時代中期後半から後期末と考えられる。

掘立６（第13図）

北東１間以上、東西１間以上の建物である。検出規模は北東－東西、北西－南東ともに約2.60m内外で、南西部は調査区外に展開する。柱穴の平面形はやや不定型な円形を呈し、規模は50～72cmで深さは20～50cmを計り、北部から南部にかけて徐々に浅くなる傾向がある。

遺物は柱穴Ｐ１より弥生土器片が出土している。柱痕内より外面タタキが施された土器片が出土している。Ｐ２からは遺物の出土はなかった。Ｐ３からは弥生土器片が出土している。これら出土遺物はごく小片であり、実測には耐えられず掲載していない。

時　期　出土遺物から弥生時代後期後半以降と考えられる。



1　暗褐色土(褐色土含む)
2　暗褐色土
3　暗褐色土(黄褐色地山ブロック状に含む)

0　2m
(S=1:50)

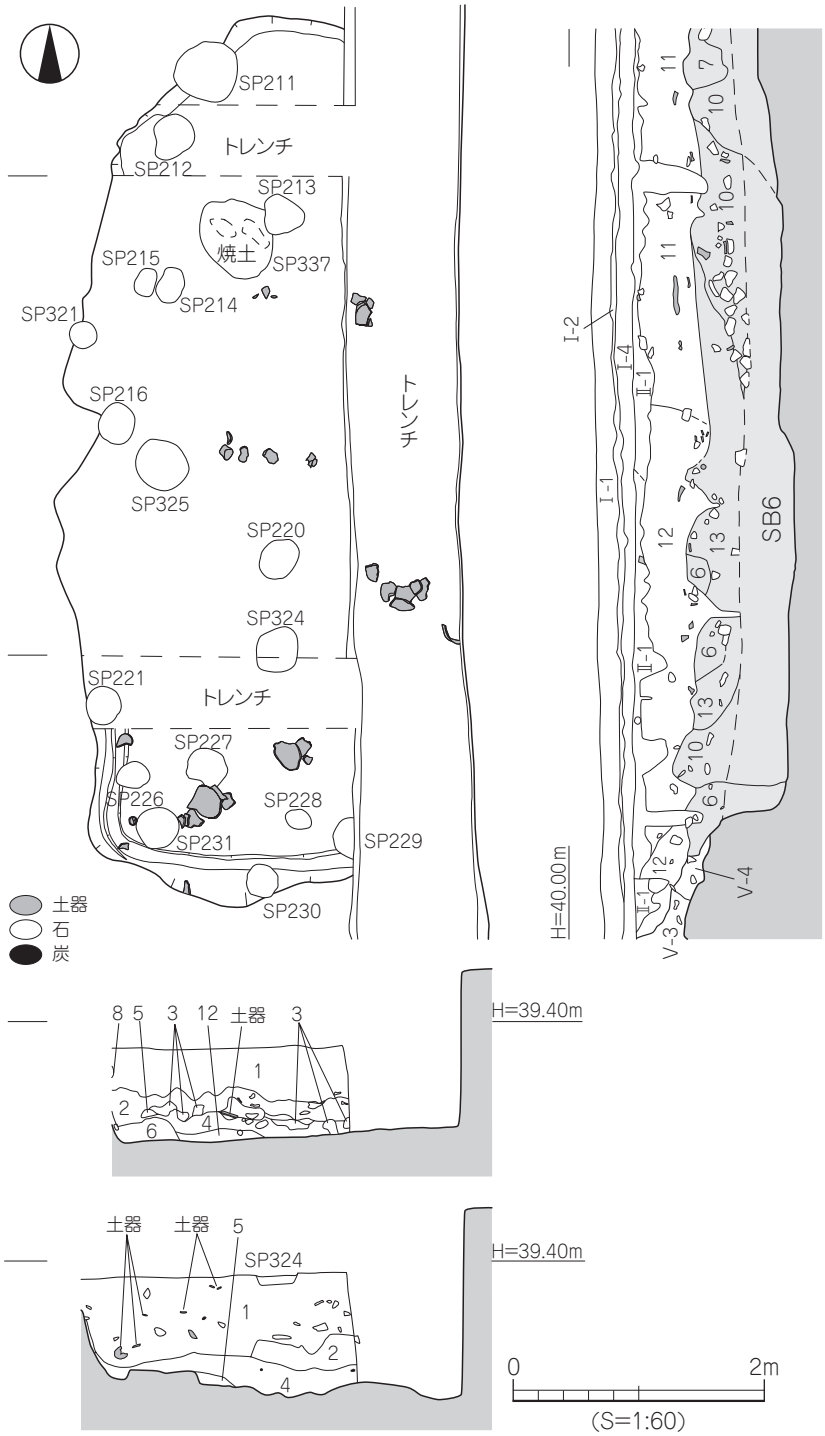
第13図　掘立6測量図

竪穴住居址（ＳＢ）

ＳＢ６（第14図、図版３・８）

調査区東部端中央にて検出した。調査では、当初SB １南付近一帯に暗褐色土の広がりがあり、精査を繰り返したが、遺構ラインが明確にならないため、東壁にトレンチを設定した。その結果、第Ⅱ層を掘り下げ後にＳＢ６西半部を検出した。

平面形は隅丸方形を呈し、南北長約6.3m、東西検出長約2.7mを計り東半部は調査区外に展開する。壁高は約46 ～70cmを計る。検出した住居址北東部はＳＢ１に切られている。遺構の断面状況は南北に二カ所を東西にトレンチを設定し、測量を行った。断面観察より遺構の立ち上がりは約50cm程度の緩やかなテラス状の段を持っている。施設内では幅約10 ～15cm、深さ５cm内外の周溝を持つ。遺構内埋土の堆積状況は水平な堆積ではなく、外周より遺構中央部にかけて流れ込むように堆積している。



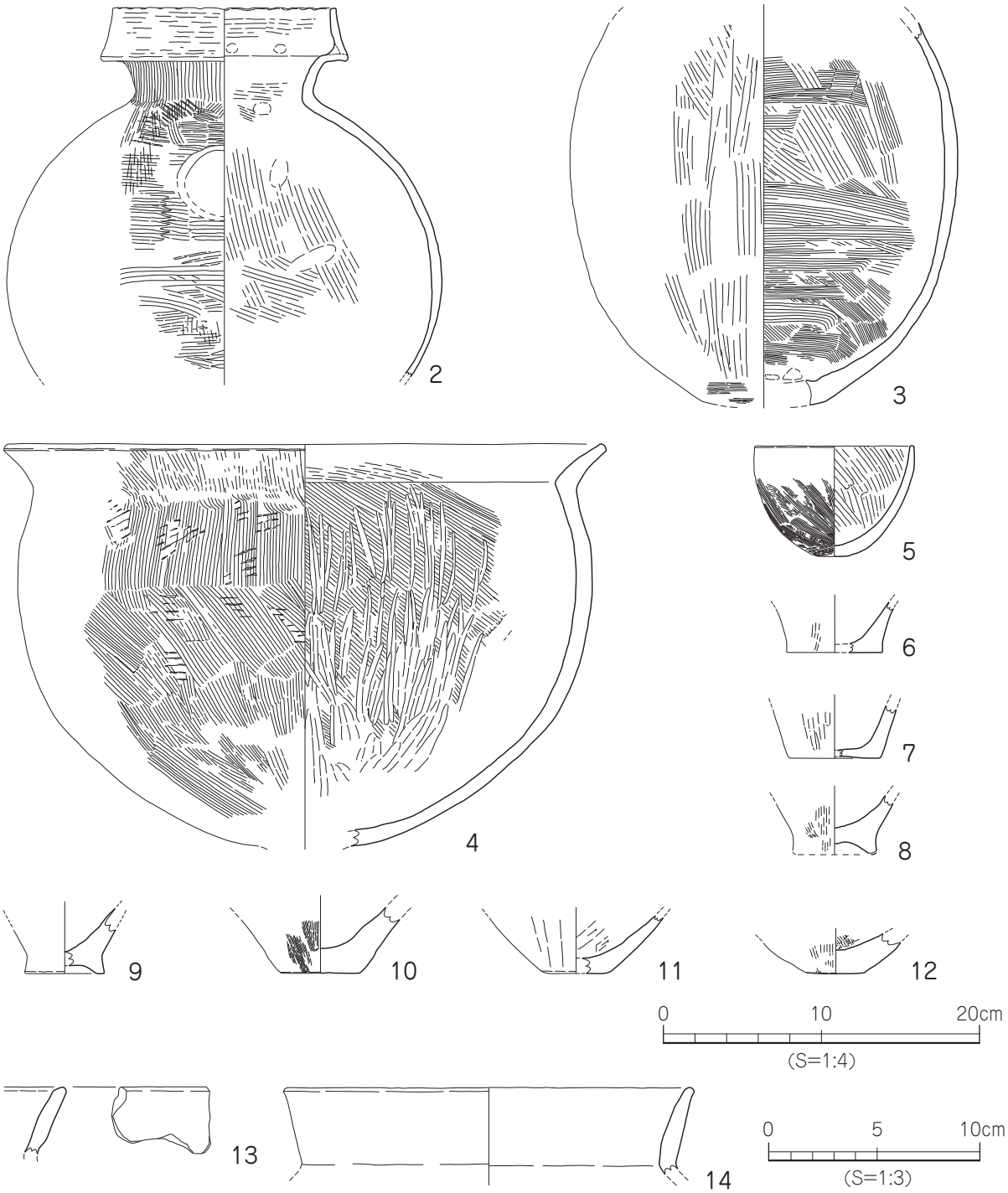
第14図　SB6測量図

出土遺物（第15･16図）

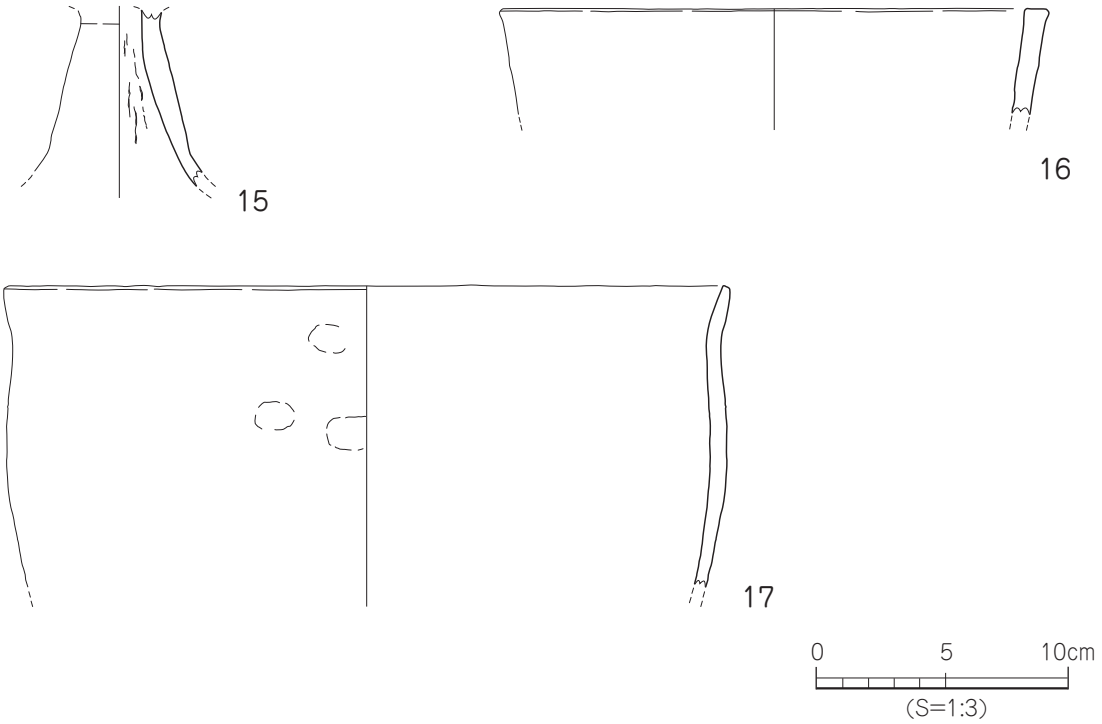
２～12は弥生土器。２は複合口縁壺で、口縁端部は内傾する。胴部外面には、ヨコ方向のタタキ調整、内面にはハ

Ⅰ－１　耕作土　灰色土〔N5/0〕
Ⅰ－２　褐灰色土〔7.5YR6/1〕
Ⅰ－４　床土　　灰色土〔7.5YR5/1〕と明褐色土〔7.5YR5/6〕混じり
Ⅱ－１　褐灰色土〔7.5YR5/1〕
Ⅴ－３　暗褐色土〔10YR3/4〕砂粒含む
Ⅴ－４　褐色土　〔10YR4/4〕砂粒多く含む
１　暗褐色土〔10YR3/4〕砂粒多く含む
２　暗褐色土〔10YR3/3〕砂粒･炭含む
３　褐色土　〔10YR4/6〕
４　暗褐色土〔10YR3/3〕砂粒２より少し
５　褐色土　〔10YR4/4〕
６　暗褐色土〔7.5YR3/4〕砂粒･礫含む
７　黒褐色土〔7.5YR3/2〕砂粒含む
８　褐色土　〔7.5YR4/3〕砂粒含む
10　黒褐色土〔10YR3/1〕砂粒･炭含む
11　暗褐色土〔7.5YR3/4〕砂粒多く含む
12　暗褐色土〔10YR3/4〕礫･砂粒多く含む
13　黒褐色土〔10YR3/4〕礫･砂粒含む

ケメ調整を施す。3は壺形土器の胴部片で、内外面共に粗いハケメ調整を施す。4・5は鉢形土器。4は推定口径37.4cmを測る大型品で、口縁部は外反し、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。胴部外面はタタキ調整後ハケメ、内面にはハケメ調整後にタテ方向のヘラミガキを加える。5は口縁部を一部欠損するものの、ほぼ完形品で、外面はハケメ調整、内面にはナナメ方向のヘラミガキを施す。6～9は甕形土器の底部で、6・7は平底、8・9は上げ底となる。10～12は壺形土器の底部で、平底となる。13～17は土師器。13・14は甕形土器で、13の口縁端部は内傾する面をもつ。15は高坏形土器の脚部で、脚部は「ハ」の字状に外反す



第15図　SB6出土遺物実測図(1)



第16図　SB6出土遺物実測図(2)

る。16･17は甑形土器で、16の口縁端部は平坦面をなし、17は「コ」字状に仕上げる。

時　期　出土遺物から弥生時代後期後葉と考えられる。

土抗(ＳＫ)

弥生時代の土抗は３基検出している。特にＳＫ５は弥生時代終末期の土器が一括して多数出土している。

ＳＫ４(第17図、図版９)

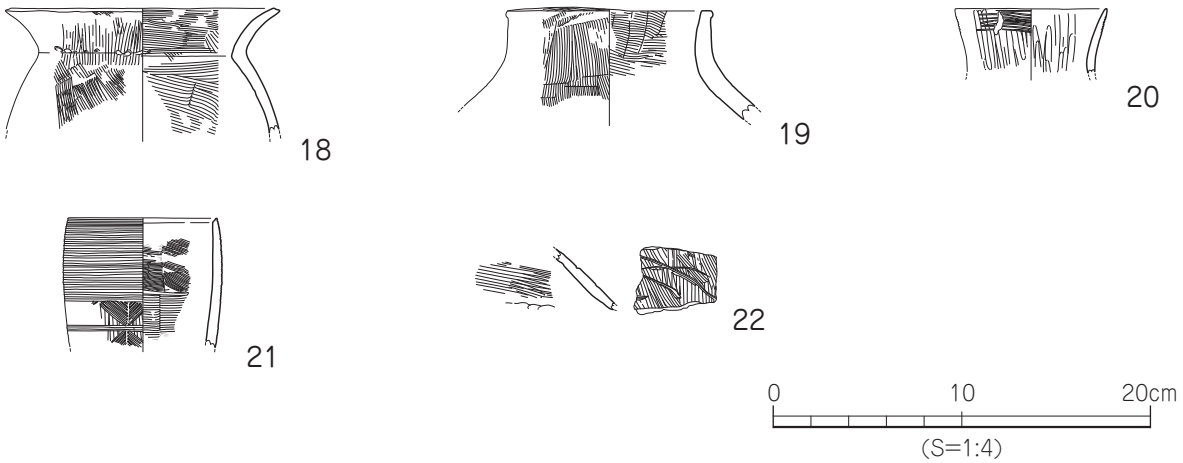
調査区南西部に位置する。遺構中央部分は本調査前の試掘調査によって消滅している。また、後述する弥生前期の溝ＳＤ１を切り込み、ＳＢ４に切られている。遺構の平面形はやや不定型な方形を呈し、規模は東西長軸3.80m、南北短軸は2.45 ～3.60m内外、断面形状は逆台形状を呈し、深さは22cmを計るやや浅い土抗である。遺物は弥生時代後期後葉～後期末の土器が出土している。

出土遺物(第18･19図)

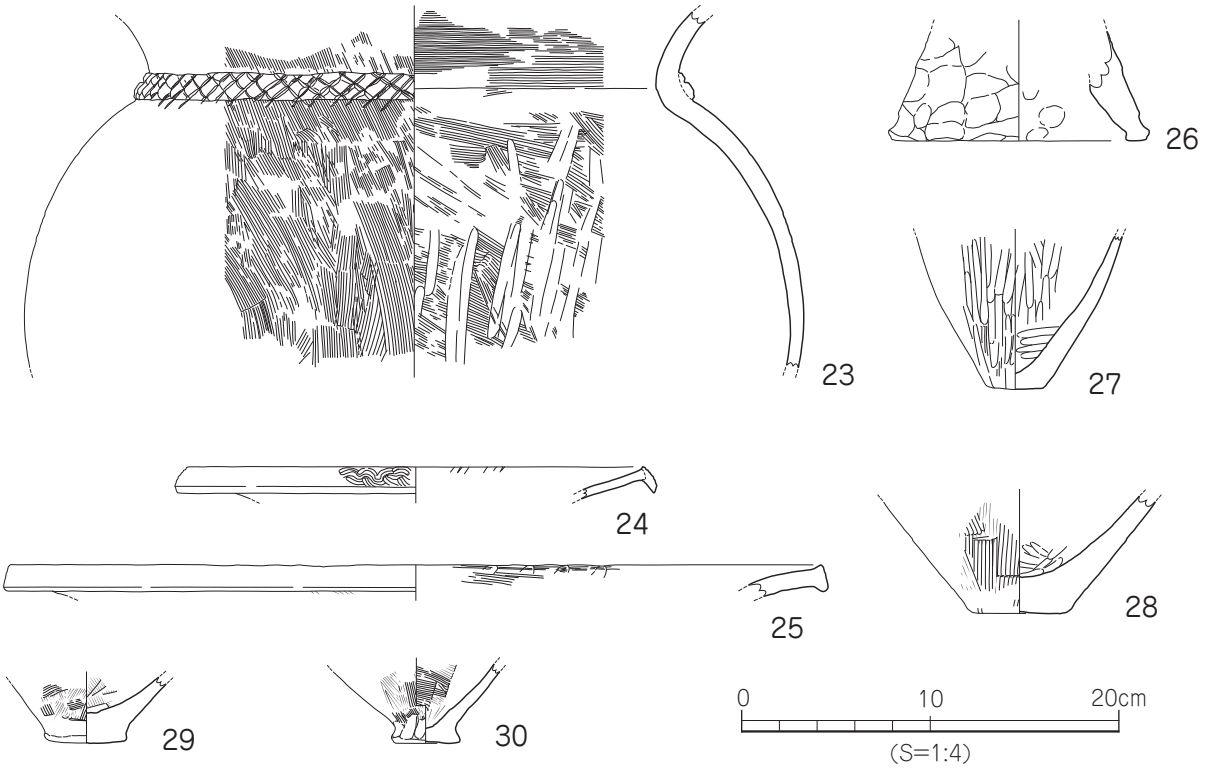
18は甕形土器で、口縁部は「く」の字状を呈し、内外面にはハケメ調整を施す。19 ･20は直口壺で、20は内外面共に丁寧なヘラミガキを施す。21は長頸壺で、櫛描き細沈線文と有軸羽状文を施す。22は肩部片で、ヘラ状工具による線刻を施す。23は鉢形土器で、頸部に凸帯を貼付け、凸帯上に斜格子目文を施す。大型品。24は高坏形土器の坏部片で、口縁端面に櫛描き波状文を施す。25は器台形土器の口縁部片で、口縁端部を上下方に拡張している。26は支脚形土器の脚部片で、外面には指頭痕を顕著に残す。27は甕形土器。28は壺形土器。29･30は鉢形土器の底部。27･28は平底で、27は内外面共にヘラミガキを施す。29･30は突出部をもつ底部片で、内面にはくもの巣状のハケメ調整を施す。弥生末。

時　期　出土遺物から弥生時代後期後半と考えられる。

第17図　SK4測量図



第18図　SK4出土遺物実測図（1）



第19図　SK4出土遺物実測図（２）

ＳＫ５（第20図、図版４・９・10）

調査区南部中央に位置する。遺構はＳＰ252に切られている。遺構北部端は本調査前の試掘調査トレンチによって遺構上場は削平されている。遺構の平面形はやや不定型な方形を呈し、南東部にやや隅丸三角形状の突出した広がり（拡張部分）が見られる。遺構の規模は、南北軸2.00m、東西軸1.60 ～2.10mを計り、深さは約0.60 ～0.65mである。遺構南東部の拡張部分は遺構上部から壁高約16㎝程度の段をなしている。

遺構の床面形状と南壁土層観察から、まず拡張部分を含む推定方形土抗が構築され、その後南北方向の方形土抗ＳＫ５が構築された、方形土抗の重なりである。この新旧土抗の切り合いは、調査時検出面には多くの礫が散在しており明確な切り合い関係は判断できなかった。南壁面土層観察からは古いＳＫを新しい遺構ＳＫ５が切るように重複することが確認できる。この古いＳＫは南西部の突出部分がこの遺構プランの隅角とすれば、一辺1.80m前後、深さ約16㎝の方形土抗と考えられる。遺物は時期を特定できるものは出土していない。また、ＳＫ５の規模は長軸1.53 ～2.00m、短軸1.60m、壁高は63㎝を計る。埋土は上層より暗褐色土(礫、砂粒多含する)、褐灰色土(礫多含する)、黒褐色土(砂粒含む)、黒褐色土(礫少含する)、褐色土、灰黄褐色土(砂・礫含む)である。遺物は、遺構内より弥生時代後期末の土器が一括で出土している。

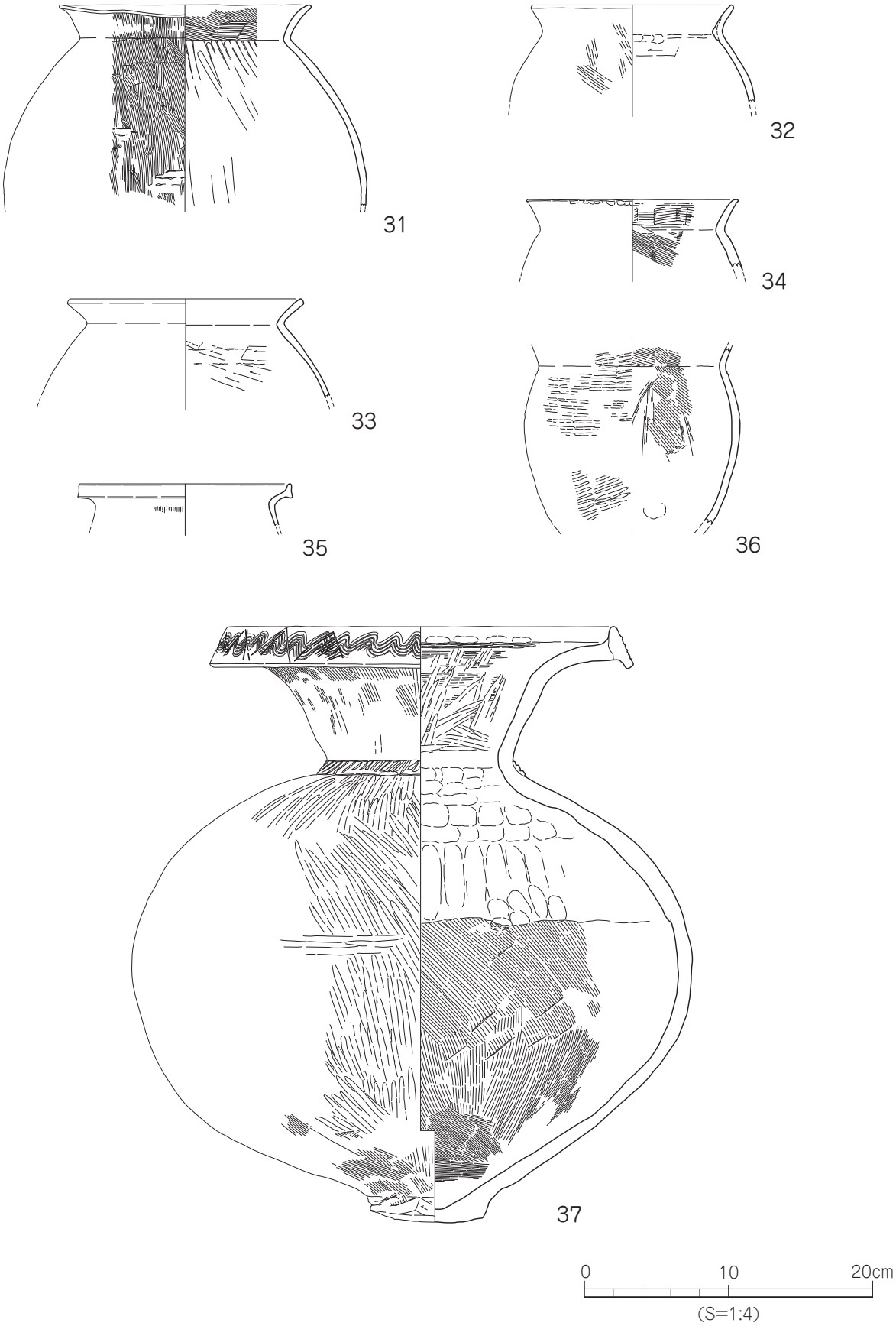
出土遺物（第21～23図）

31 ～36は甕形土器。31 ～34は「く」の字状口縁を呈し、31の胴部外面にはヨコ方向のタタキ調整後、タテ方向のハケメ調整を施す。33の内面には口頸部境界より下がった位置より、ヨコないしナナメ方向のヘラケズリ調整を施す。35は吉備系の二重口縁甕で、口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面は凹む。36は胴部片で、外面にタタキ調整を施す。37 ～46は壺形土器。37 ～39は広口壺で、37は口径26.8cm、

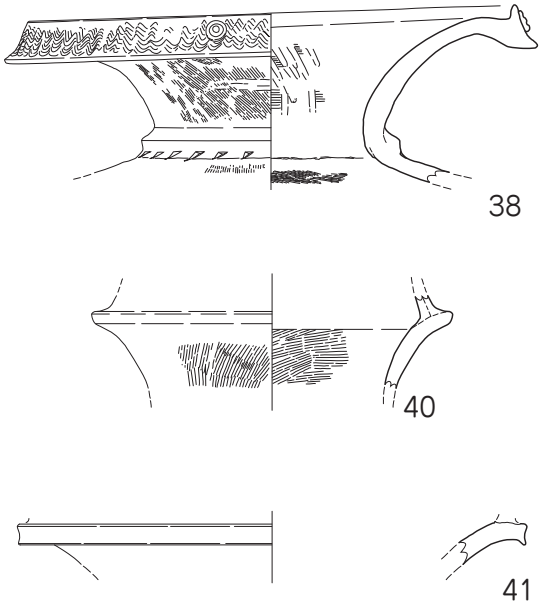
第20図　SK5測量図

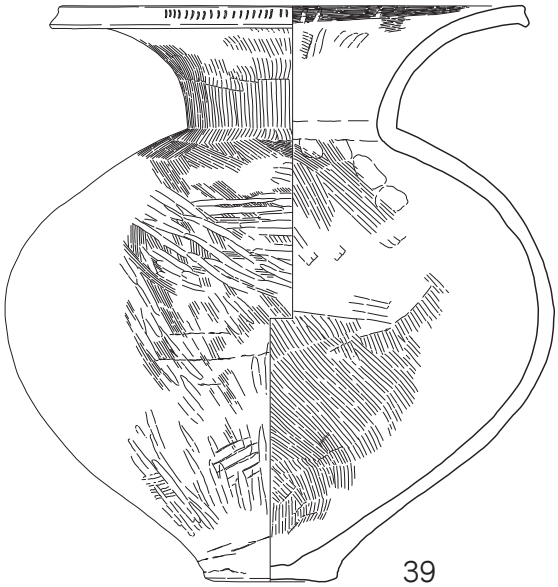
底径7.8cm、器高41.4cmを測る。口縁部は上下方に拡張し、口縁端面に櫛描き波状文と山形文を施す。底部は突出する平底を呈し、頸部には凸帯を貼付け、凸帯上に刻目を施す。胴部外面はタテないしヨコ方向のヘラミガキを施し、頸部内面にはハケメ調整後、ヘラミガキを加える。また、胴上半部内面には板状工具によるナデが顕著にみられ、胴下半部内面はハケメ調整を施す。38は口縁端部を上方に拡張し、端面に櫛描き波状文と円形浮文を施す。なお浮文内には、竹管文が施されている。39は口径24.2cm、底径6.9cm、器高30.6cmを測り、口縁端面には櫛状工具による刻目が施され、底部はやや突出する平底をなす。頸部外面はハケメ調整、胴部中位から底部にかけてはハケメ調整後、ヨコないしナナメ方向のヘラミガキを加える。40・41は複合口縁壺の口縁部片と考えられ、口縁拡張部は欠損している。42は底径9.4cm、残高50.7cmを測る大型品で、外面には、ハケメ調整後ヘラミガキ調整を施す。43は広口壺の胴～底部で、底部は突出する平底を呈する。胴部外面はハケメ調整後ヘラミガキ調整を施し、内面は37と同様に胴上半部は板状工具によるナデ、胴下半部はハケメ調整を施す。44～46は底部片で、小さな平底となる。47・48は鉢形土器。47の口縁部はわずかに外反し、口縁端部は丸く仕上げる。底部は丸みをもち、内外面には細かなハケメ調整を施す。48の外面には、タタキ調整後ハケメ及び部分的にヘラミガキを加える。

時　期　出土遺物から弥生時代終末と考えられる。

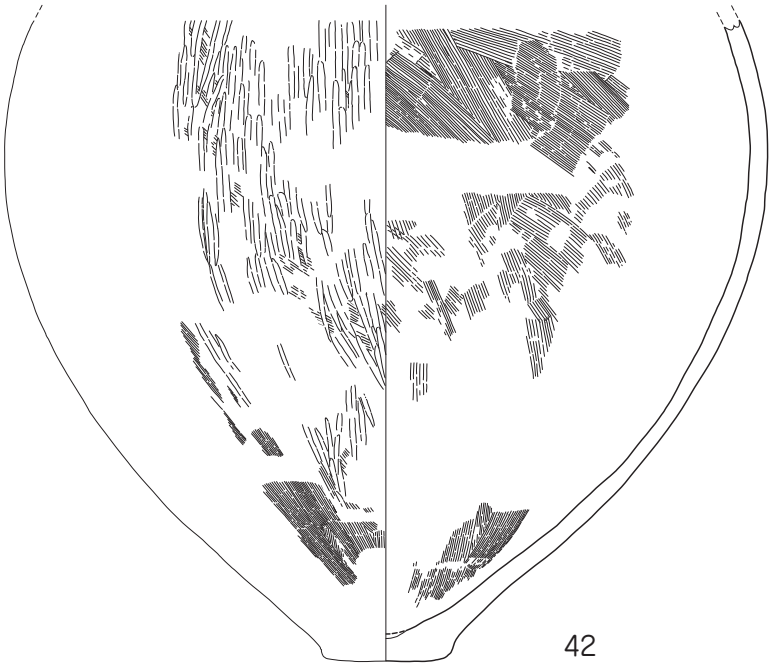


第21図　SK5出土遺物実測図(1)



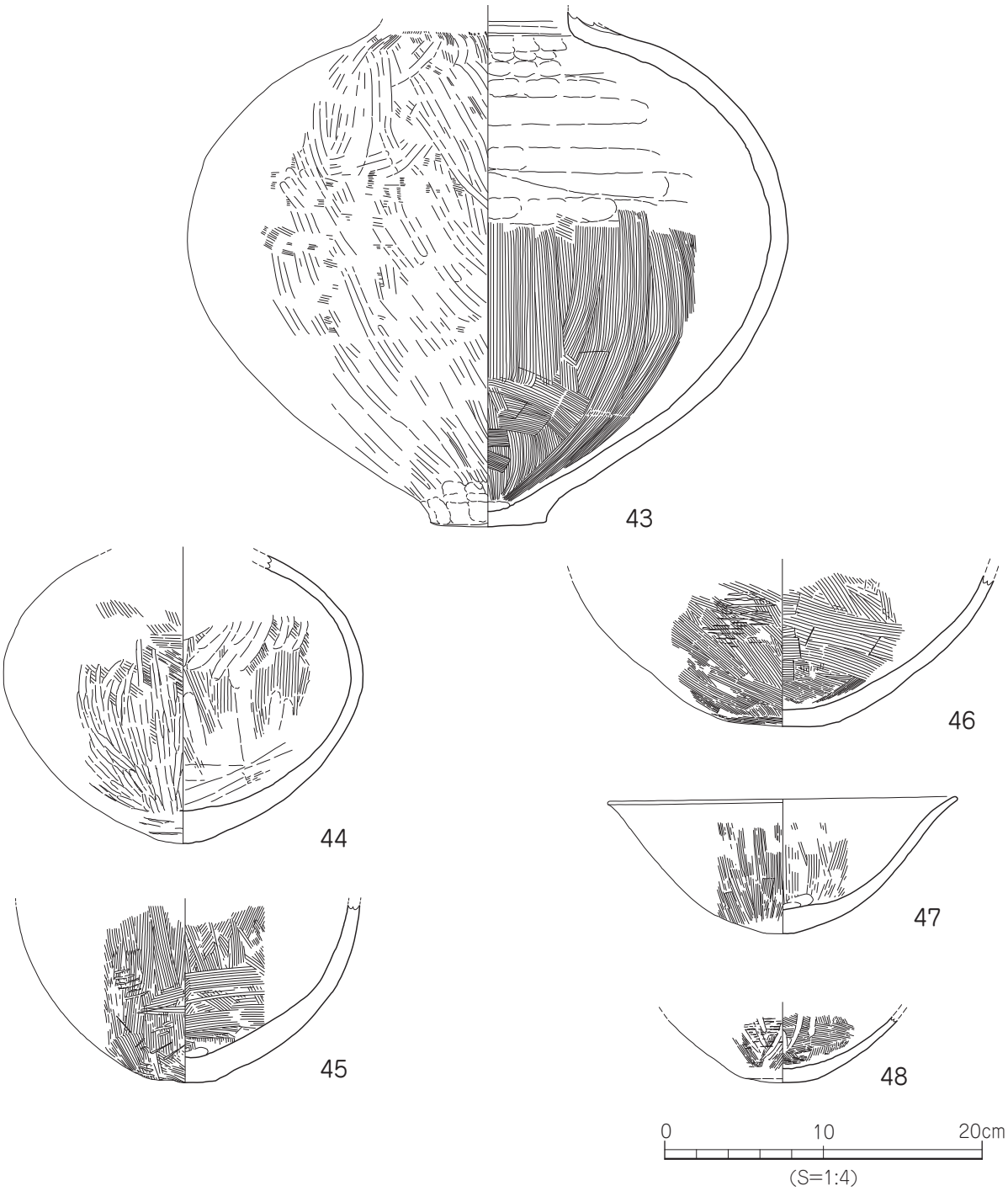


0　10　20cm
(S=1:4)



0　10　20cm
(S=1:6)

第22図　SK5出土遺物実測図(2)



第23図　SK5出土遺物実測図(3)

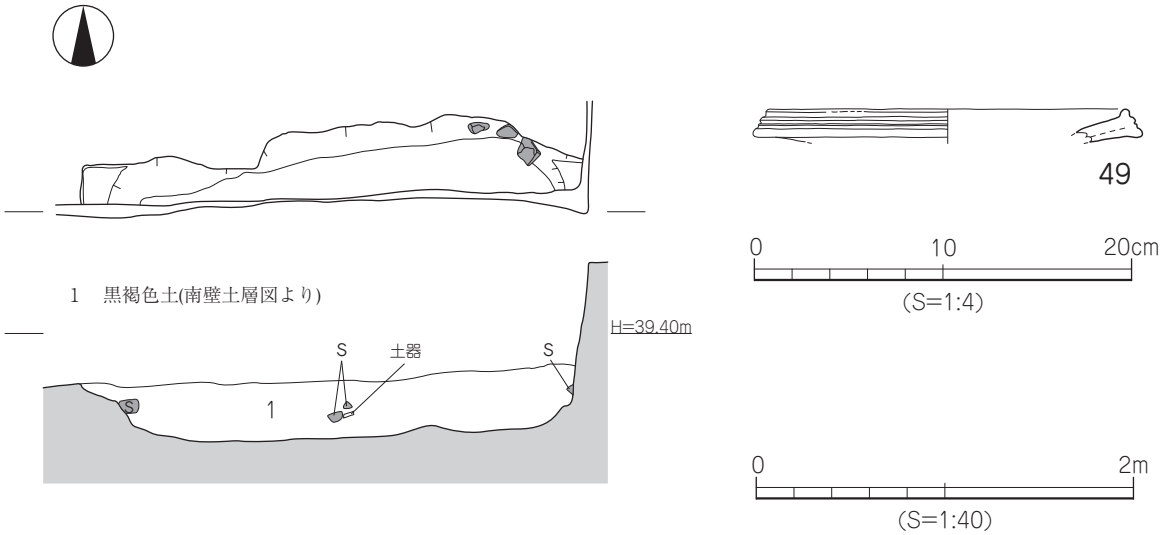
ＳＫ６(第24図)

調査区南東部隅に位置する。土抗の検出規模は東西2.70m以上、南北17 ～40cm、深さ45cmを計る方形土抗と推定され、南部は調査区外に展開する。床面はほぼ平坦で、埋土は黒褐色土である。遺物は弥生土器、須恵器坏身片、胴部片、土師器の小片が出土しているが実測可能なものは少ない。

出土遺物(第24図)

49は弥生土器の壺形土器。広口壺で、口縁端部は上方に拡張し、口縁端面に凹線文3条を施す。弥生中期後半。

時　期　出土遺物から弥生時代中期以降とする。

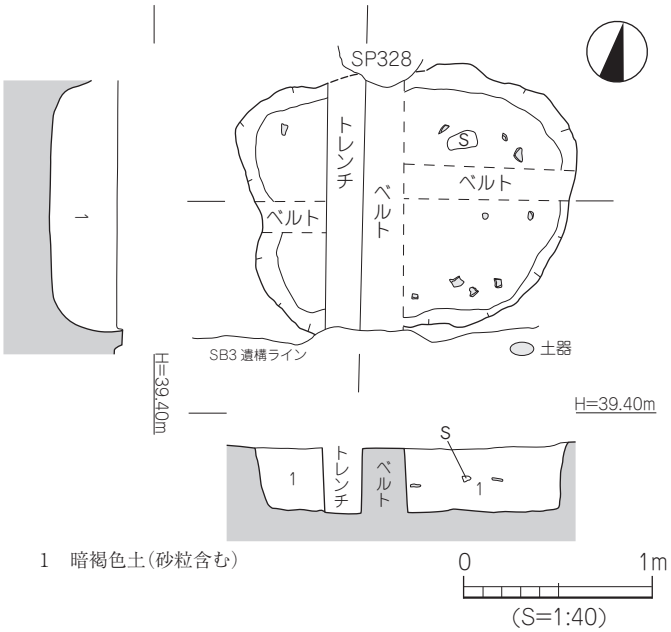


第24図　SK6測量図･出土遺物実測図

ＳＫ10(第25図)

調査区北東部に位置する。遺構はＳＢ３下層にて検出し、北端中央部はＳＰ328によって切られている。規模は東西長軸約1.80m、南北短軸約1.40mを計り、深さは33cmを測る。断面形状は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色土である。遺物は弥生時代後期の外面タタキ痕が見られる胴部片ほか多数の小片が出土している。これら出土遺物は小破片であり実測には耐えられず、実測図は掲載していない。

時　期　出土遺物から弥生時代後期と考えられる。



第25図　SK10測量図

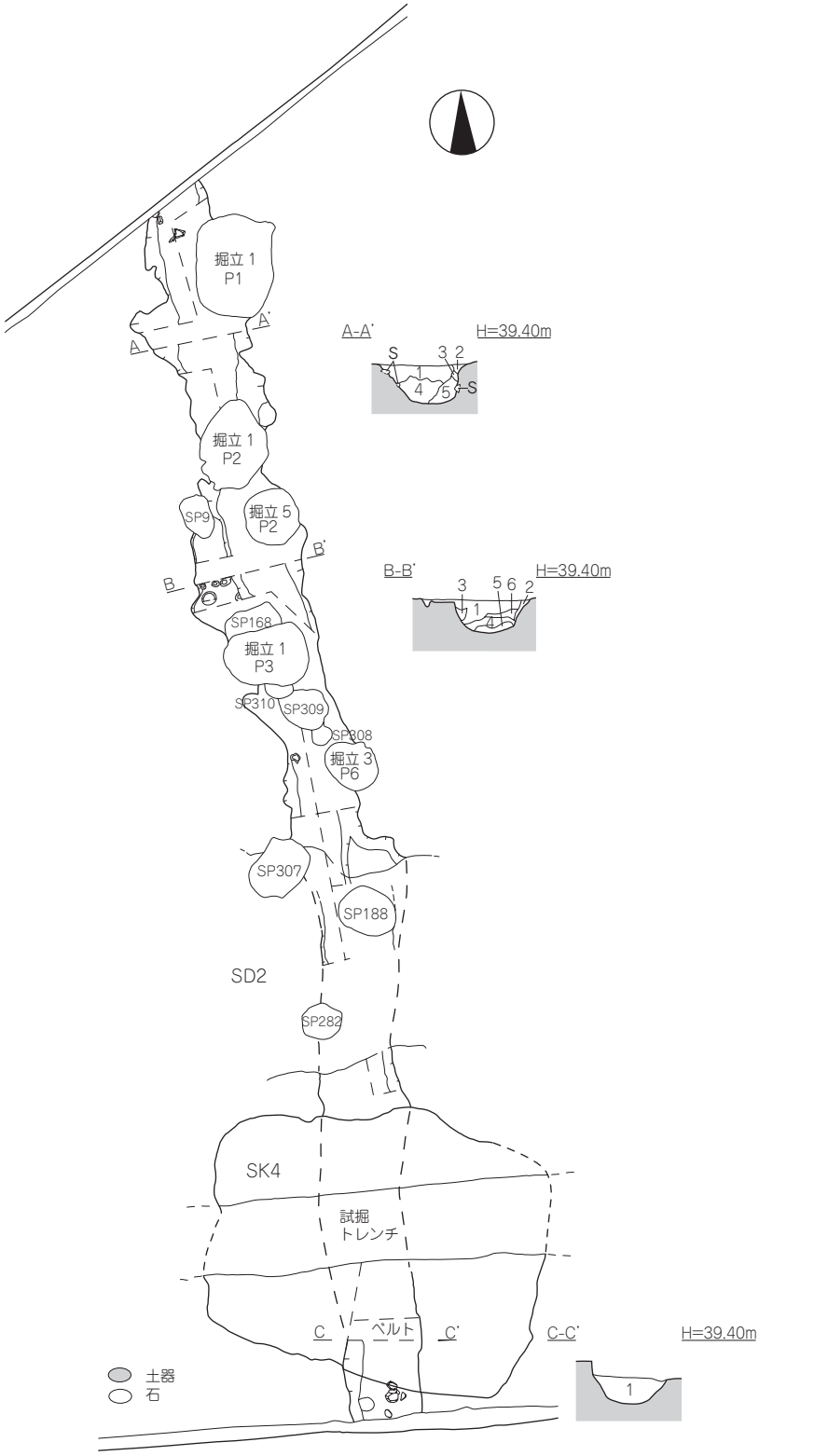
溝(ＳＤ)

本調査では、２条の弥生時代前期の溝を検出した。２本の溝は調査区南西部に位置し、ＳＤ１はほぼ南北方向、ＳＤ２はほぼ東西方向を走り、両者は切り合い関係にある溝である。

ＳＤ１(第26図)

ＳＤ１は調査区西部に位置し、南北方向に走り調査区外に延びる溝で、ＳＤ２によって切られ、南部ではＳＫ４に切られている。その他北部では掘立柱建物掘立１、掘立３、掘立５に切られている。またＳＤ１周辺を見てもＳＤ１に対して積極的な古い切り合い関係は見あたらず、周辺遺構では最古の遺構と考えられる。遺物は平底の土器底部片、甕形土器の口縁端部に刻み目を施すものや沈線三条もしくはそれ以上が施される頸部片や胴部小片など、弥生時代前期の土器が出土している。これら遺物は小片のため実測には耐えられないと判断したため、実測図は掲載していない。

時　期　出土遺物から弥生時代前期と考えられる。



1　黒褐色土
2　黒褐色土(黄褐色地山少混)
3　黄褐色土(地山ブロック)
4　暗褐色土(砂粒･礫少含する)
5　暗褐色土(砂粒含む)

0　4m
(S=1:80)

第26図　SD1測量図

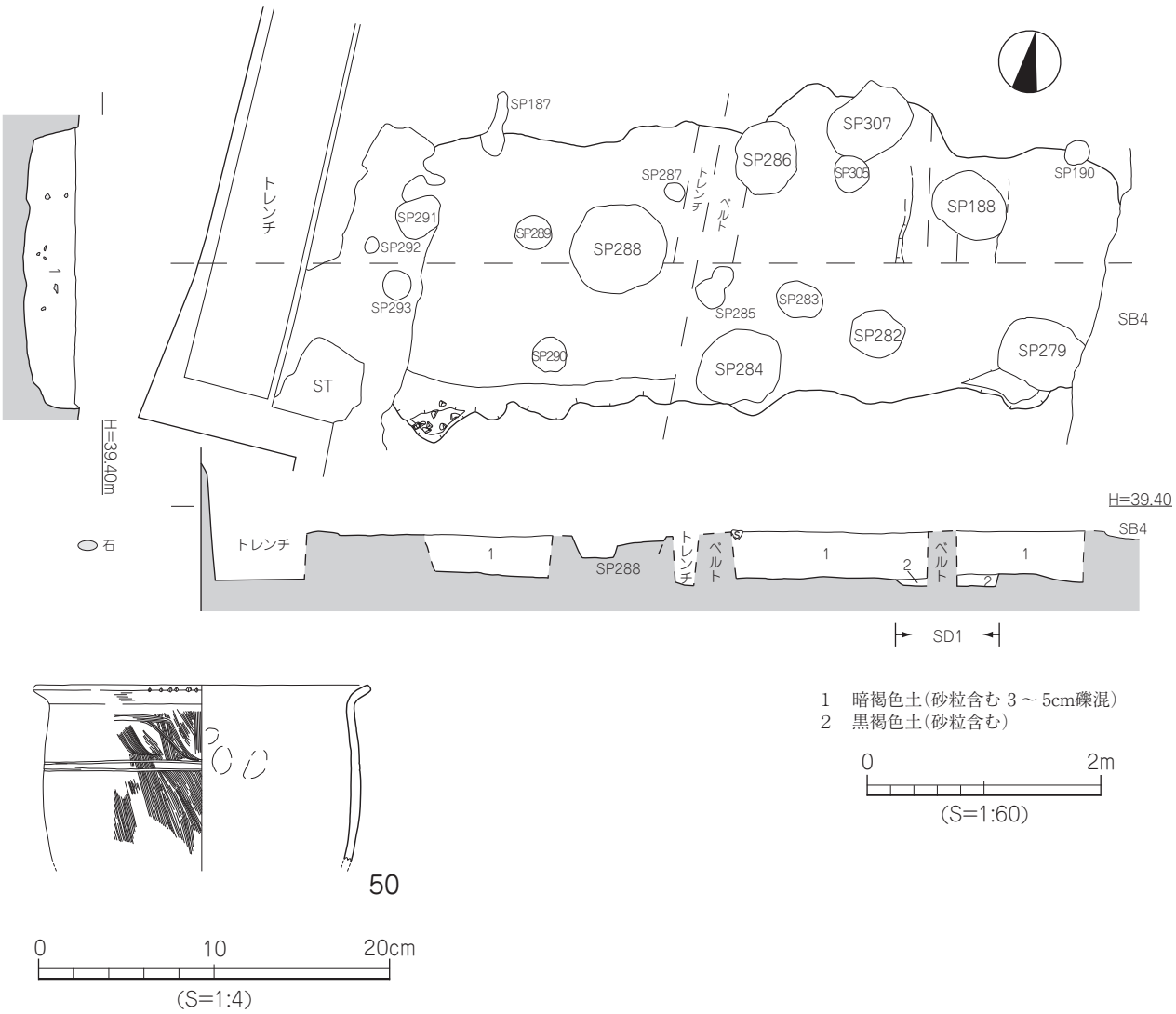
ＳＤ２（第27図、図版８）

ＳＤ２は、調査区南西部に位置し、ＳＤ１に対し直行するようにほぼ東西方向に走り、調査区外に延びる溝である。遺構はＳＢ４に切られ、ＳＤ１を切っており、東西および調査区外に延びるものと考えられる。また空間的には掘立６と重複すると考えられることから、両者が同時併存する可能性は低い。溝の規模は検出長約6.80m、検出幅2.00～2.60mを計り、深さ46cmを計る。断面形状は逆台形状を呈する。ＳＤ１と交差する部分ではＳＤ２内を東西に断ち割り、断面観察を行った。その結果ＳＤ１を切ることが層序的に確認できた。遺物は遺構内より、大半が弥生時代前期後半の土器が出土している。ただし、ごく少量ではあるが弥生時代後期以降の土器片も出土しているがこれらは上層遺構などからの流れ込みと考えられる。

出土遺物（第27図）

50は弥生時代前期の甕形土器である。如意形口縁で、胴部にヘラ描き沈線文2条、口縁端部に刻目を施す。弥生前期中葉以降。

時　期　出土遺物から弥生時代前期後半と考えられる。



第27図　SD2測量図・出土遺物実測図

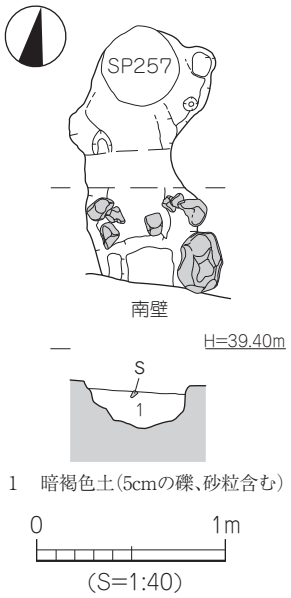
性格不明遺構（ＳＸ）

本調査では２基検出しているが、両遺構からは時期を特定できる遺物の出土はない。ただし、ＳＸ２は弥生時代の遺物が少量出土していることから、ここでは弥生時代の遺構として記載する。

ＳＸ２（第28図）

ＳＸ２は、調査区南部中央に位置する。平面形状はやや湾曲した長方形で、ＳＰ257によって切られる。規模は、南北方向長軸1.42m、短軸46～64cmを計り、やや南西方向に湾曲し、南半部は調査区外に展開する。断面形状は舟底形で、深さは24cmを計り、埋土は暗褐色土（5cmの礫、砂粒含む）である。埋土中からは10cm前後の小礫とともに弥生土器胴部小破片が数点出土しているが、詳細な時期を特定できるものはない。また、ＳＸ２を切るＳＰ257からも遺物の出土はなかった。

時　期　時期の特定できる遺物の出土はないが、遺構内からは弥生土器の胴部片が数点出土していることから、ここでは弥生時代としておく。



第 28 図　SX2 測量図

（２）古墳時代

掘立柱建物跡（掘立）

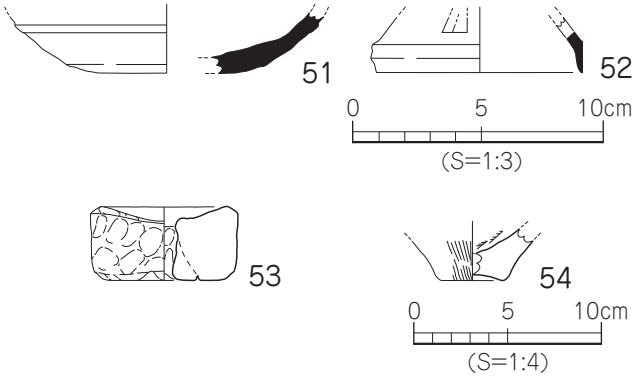
掘立１（第30図、図版１・８）

調査区中央北部に位置し、掘立３・４、ＳＢ５、ＳＤ１を切り、北部は調査区外に展開する。遺構の規模は南北桁行４間（8.80m）、東西梁行３間（5.50m）を計る正方位を向く南北棟の掘立柱建物である。遺構北部の展開は、北部に近接して調査された樽味四反地７次調査において、同規模の柱穴が検出されていないことから北部には延びず、北西部に展開するものと考えられる。柱穴の平面形は隅丸方形または不整円形を呈し、径約70～95cmのものや、やや隅丸長方形を呈する、径約100～140cmを超える布堀状の柱穴もいくつか見られる。各柱穴の深さは20～40cmを計り、北東部がやや浅い傾向にある。また、各柱穴の柱間は、東辺４間の内Ｐ６－Ｐ７間、およびＰ９－ＳＰ61間は約2.60m、その他は1.60～1.76mの間隔であり、東辺両端の柱間は中間の柱間より約１m程度広くとられ、西辺もほぼ同様な状況と考えられる。南辺の柱間は、各両端柱穴間（Ｐ３－Ｐ４　Ｐ５－Ｐ６）は約1.50m、中間（Ｐ4－Ｐ５）は1.30mを計り、南辺も両端を広くとられている。掘立１は掘立３を切ることより、掘立３より新しい段階のものである。また、掘立７との位置関係から同時併存はないと考える。

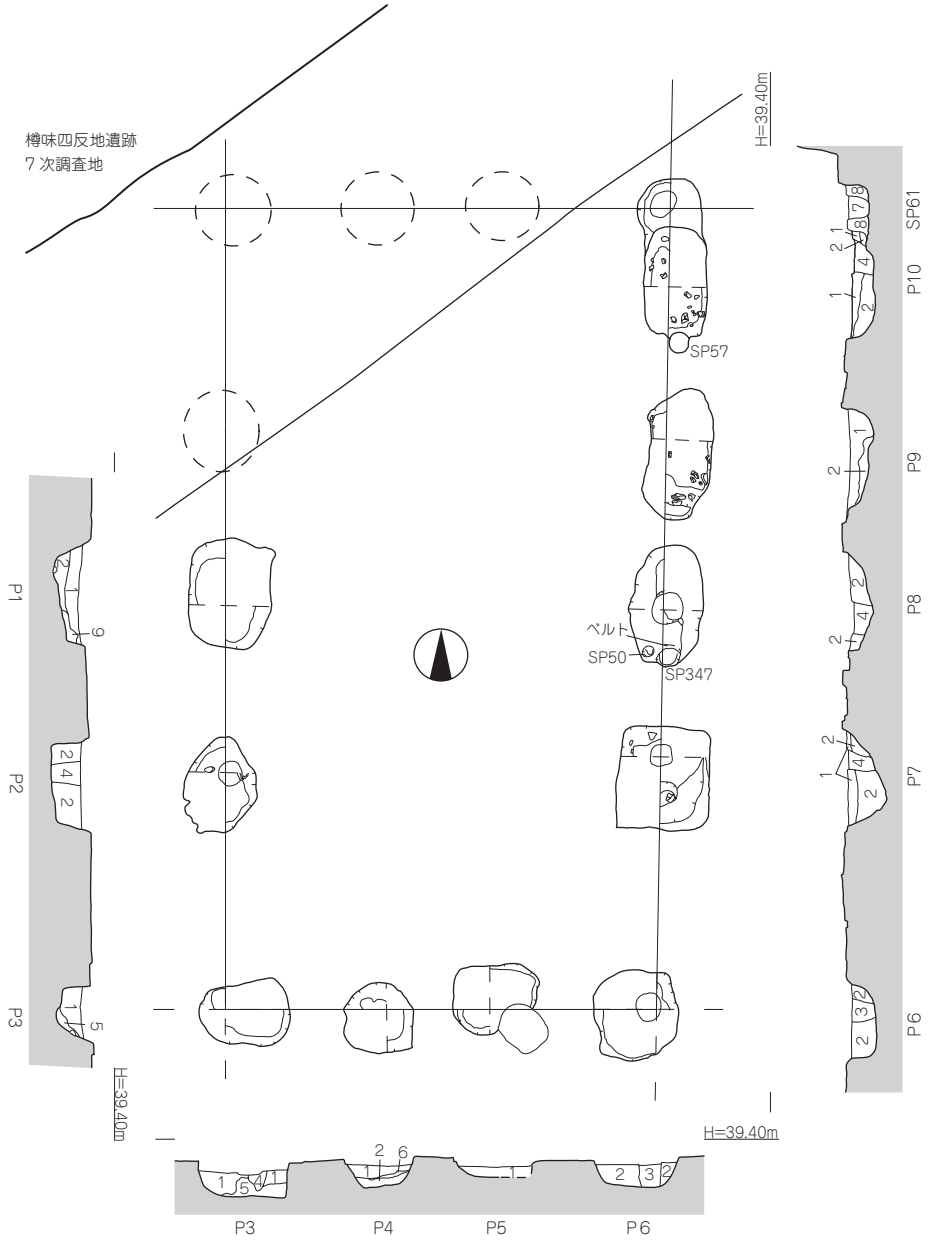
出土遺物（第29図）

51・52は須恵器。51は坏身片で、外面に回転ヘラケズリ調整を施す。52は高坏の脚部小片で、脚端部に凸線が巡り、柱部に透かしを看取する。53・54は弥生土器。53は支脚形土器で、受部上面は凹む。54は甕形土器の底部で、上げ底を呈する。

時　期　出土遺物から５世紀末～６世紀初である。



第 29 図　掘立１　出土遺物実測図



1　暗褐色土(砂粒含む)
2　暗褐色土
3　暗褐色土(焼土2～5mm程度の粒状に混入)
　2層に黄褐色地山が多含する
4　黒褐色土(砂粒少量含む)
5　暗褐色土(黄褐色地山ブロック状に少量含む)
6　褐色土(黄褐色地山と砂粒多含する)
7　暗褐色土(砂粒少量含む)
8　暗褐色土(7層より砂粒多い)
9　黒褐色土(礫・砂粒多い)

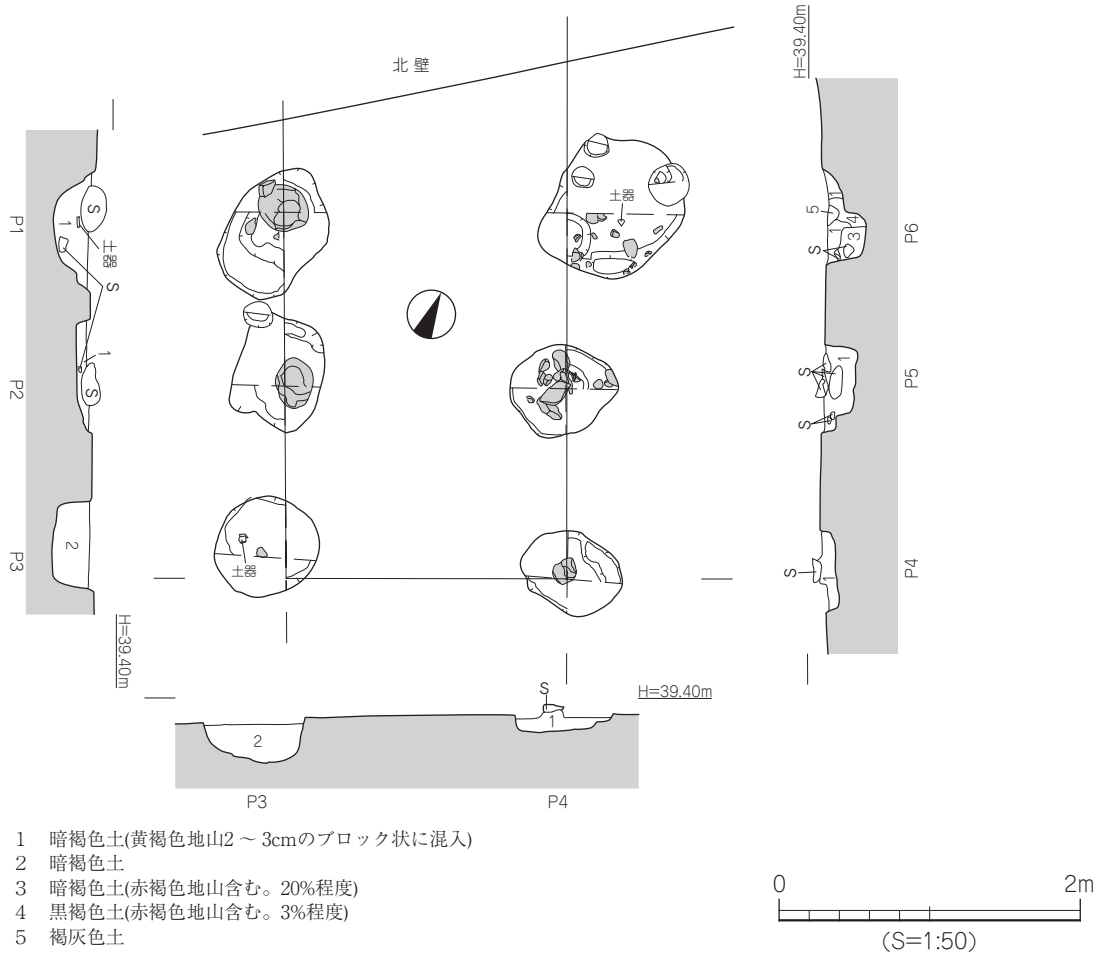
0　4m
(S=1:80)

第30図　掘立1測量図

掘立２（第31図）

調査区北東部に位置し、ＳＢ２を切り、北西部は調査区外に展開する。遺構の規模は北西－南東桁行２間以上（3.18m）、南西－北東梁行１間（2.70m）を計り、北西－南東方向を向く礎石を持つ掘立柱建物である。遺構北部は、北部に展開するものと考えられる。柱穴の平面形は一部円形であるが、ほとんどは不整な円形（円～楕円）を呈する。規模は、径58～96cm、深さ８～28cmを計る。Ｐ１、Ｐ２、Ｐ４、Ｐ５の柱穴内からは径17～35cmの礎石が検出された。東辺および西辺の柱穴間は均等にほぼ1.20m間隔をとり、南辺は約1.86mを計る。遺物は柱穴内から弥生土器、土師器、須恵器などの胴部小片が出土しているが実測に耐えるものがなく掲載していない。

時　期　遺構の切り合い、出土遺物および周辺の状況から６世紀後半以降と考えられる。



1　暗褐色土(黄褐色地山2～3cmのブロック状に混入)
2　暗褐色土
3　暗褐色土(赤褐色地山含む。20%程度)
4　黒褐色土(赤褐色地山含む。3%程度)
5　褐灰色土

第31図　掘立2測量図

掘立３（第32図）

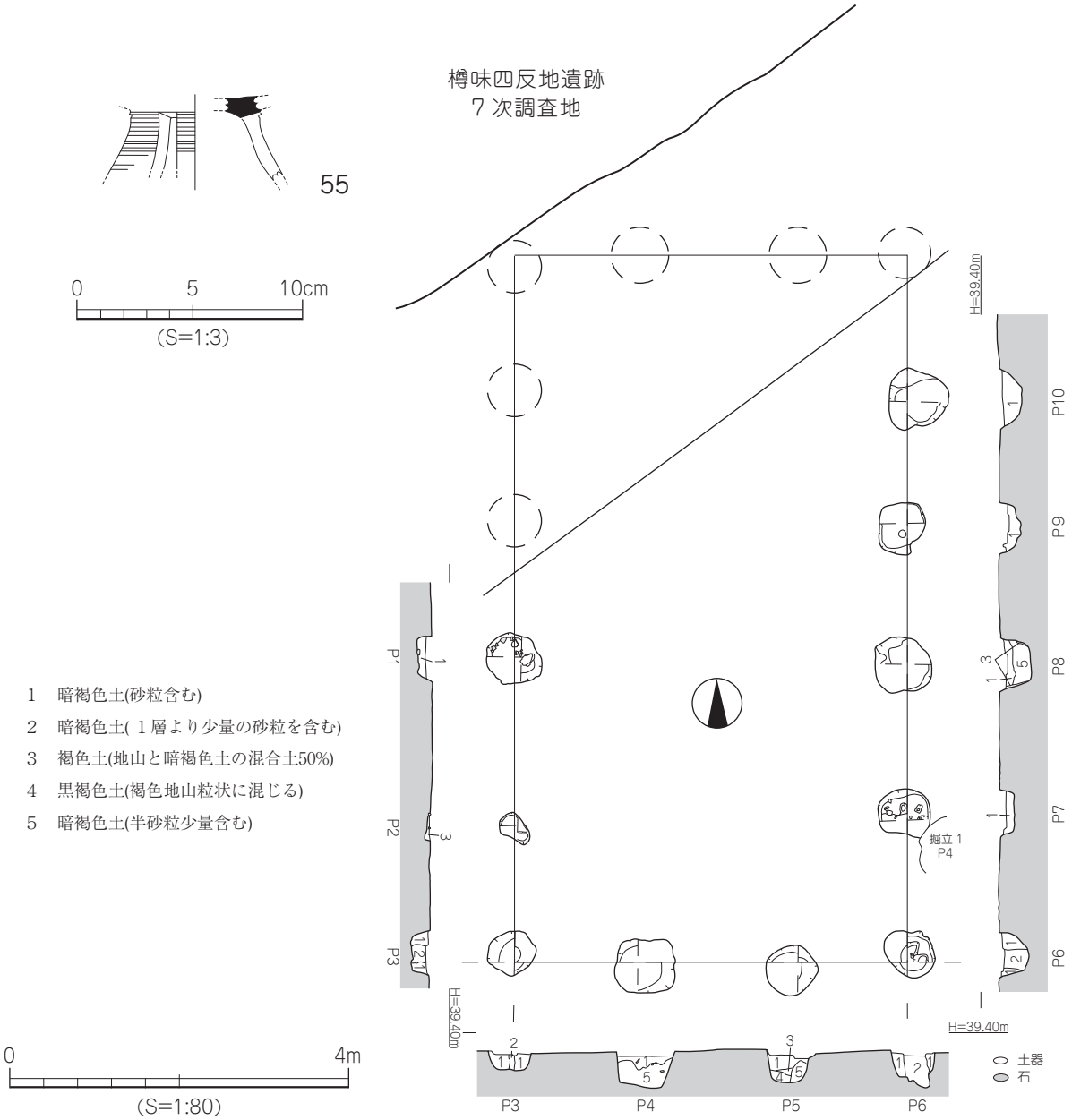
調査区北西部に位置し、掘立６、ＳＤ１を切り、掘立1に切られる。建物の北西部は調査区外に展開する。遺構の規模は南北桁行４間以上（7.22m）、東西梁行３間（5.28m）を計る正方位を向く南北棟の掘立柱建物である。遺構北部の展開は、北部に近接して調査された樽味四反地７次調査において、掘立3の展開が予想される柱穴が見られないことから、東辺北部は両調査地の中間で西部に展開するものと考えられ、３×５間の南北棟の建物が推定される。柱穴の平面形は一部円形を呈するが、ほぼ隅丸方形である。これはＰ２などにも見られるように強く削平を受け、柱穴底部の平面形状が現れた状態であり、

本来はすべて隅丸方形であったと考えられる。柱穴の規模は、径56～74cm、深さ15～43cmを計る。東辺の柱穴間は均等にほぼ1.65m前後の間隔をとる。南辺は柱穴両端間（Ｐ３－Ｐ４　Ｐ５－Ｐ６）は約1.35m、中間（Ｐ４－Ｐ５）は1.95mを計り、南辺は中間部が広くとられる。遺物は弥生土器、須恵器などの胴部小片が出土している。掘立１とは遺構の位置関係から同時併存はないが、かなり近い時期が設定できる。

出土遺物（第32図）

55は須恵器高坏で、脚柱部に三方向の長方形状透かしを穿ち、回転カキメ調整を施す。

時　期　遺構の切り合い、出土遺物から５世紀後半と考えられる。

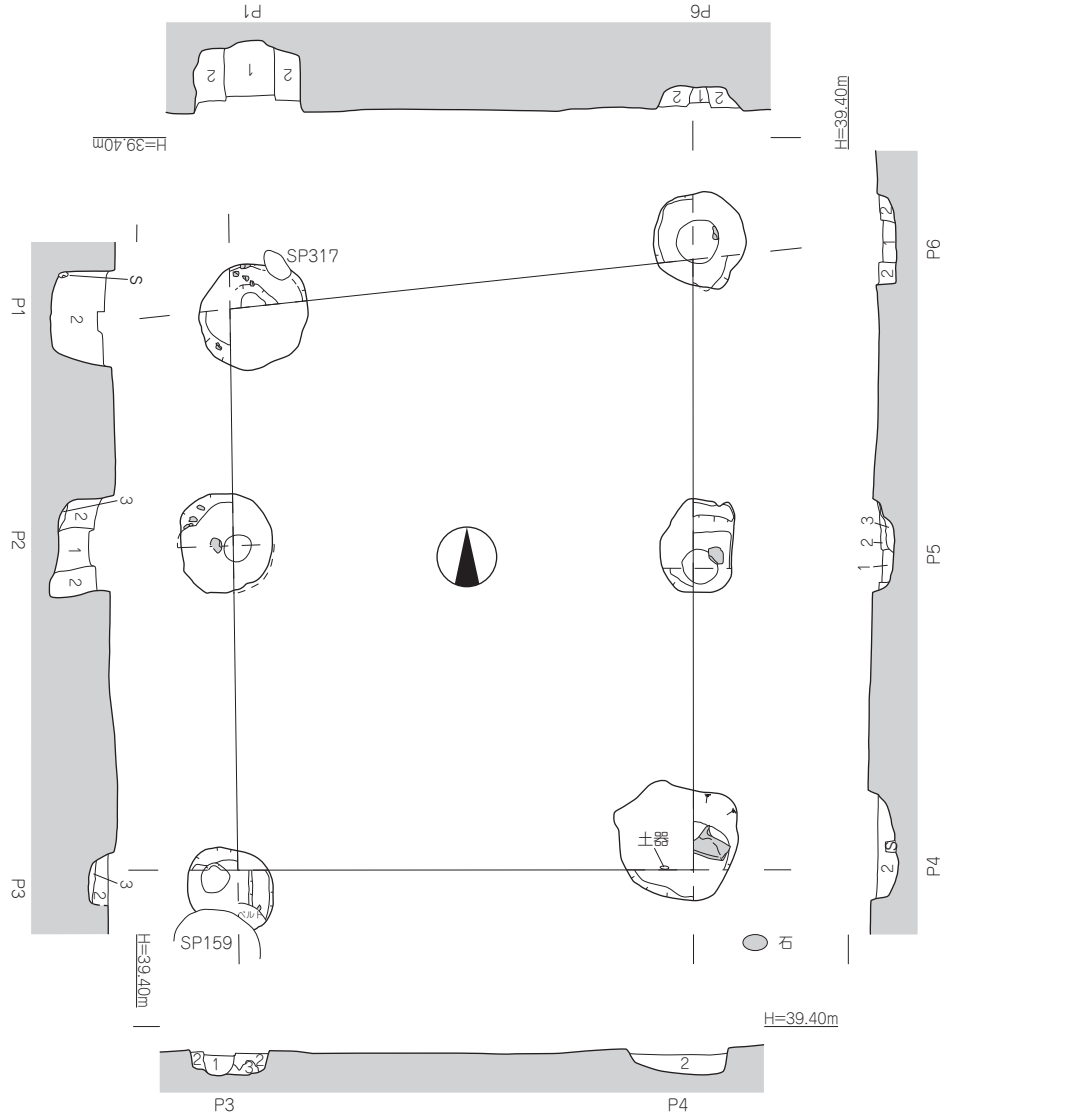


第32図　掘立3測量図･出土遺物実測図

掘立７（第33図）

調査区北東部、掘立1の東に隣接し、ＳＫ１、ＳＫ２、ＳＢ３を切り、ＳＰ159に切られる。規模は南北桁行２間（東辺4.67m・西辺4.30m）、東西梁行１間（3.62m）を計る、南北棟の掘立柱建物である。柱穴の平面形は円形～隅丸方形を呈する。規模は、径56～64cm、深さ13～48cmを計り、南－東にかけて浅い傾向にある。本掘立柱建物は掘立１、掘立２に近接していることから同時併存はない。遺物は柱穴内から弥生土器、須恵器などの胴部小片が出土しているが実測に耐えるものがなく掲載していない。またＳＰ159から遺物の出土はない。

時　期　遺構の切り合い、出土遺物から６世紀中頃以降と考えられる。



1　黒褐色土
2　黒褐色土(褐色土が混入)
3　黒褐色土(黄褐色地山ブロック状に含まれる)

0　2m
(S=1:50)

第33図　掘立7測量図

竪穴住居（ＳＢ）

調査区南東部は竪穴住居ほかの遺構が広範囲に重複しており、特に竪穴住居のプラン確定が困難であることが予想されたことから、慎重に遺構精査を行い遺構プラン検出に努めたが、結果的に検出できたのは２棟であった。

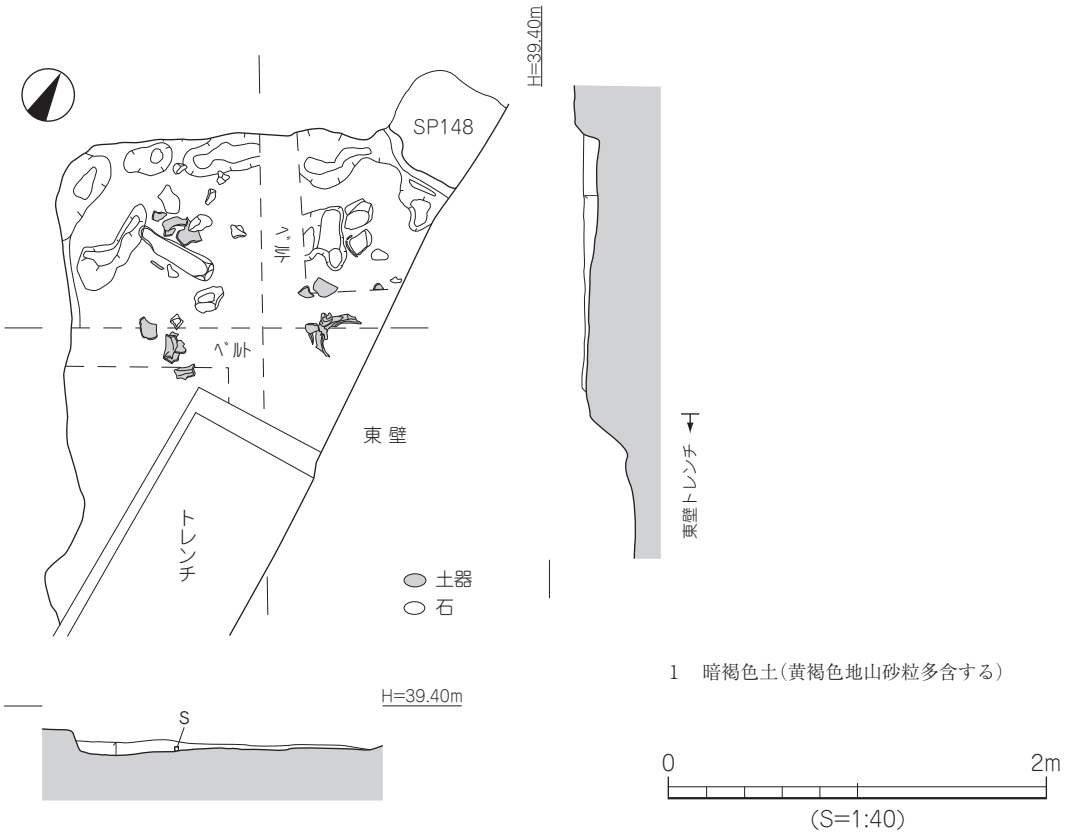
ＳＢ１（第34図、図版３・７）

調査区東部中央に位置し、第Ⅲ層下で検出した。遺構はＳＢ６を切り、ＳＰ148に切られる。竪穴住居のほぼ全容は東部調査区外（樽味四反地遺跡20次調査２区）に展開する。平面形態は方形を呈し、検出規模は南西－北東辺1.74m、北西－南東辺2.58mを計り、壁高は浅く12cm前後の残存である。内部施設は貼り床、周壁溝を検出した。周壁溝は壁体に沿って幅20cm程度の緩やかな浅い溝である。そのほか竪穴住居の主柱穴等は今回の調査では検出できなかったが、次年度に行われた「樽味四反地遺跡20次調査」の成果からは、この竪穴住居は長軸6.70m、短軸約５ｍの長方形を呈することなどが分かっている。住居からは古墳時代初めの小型の椀、甑、甕のほか、やや大型の使用痕が認められる砥石が出土している。

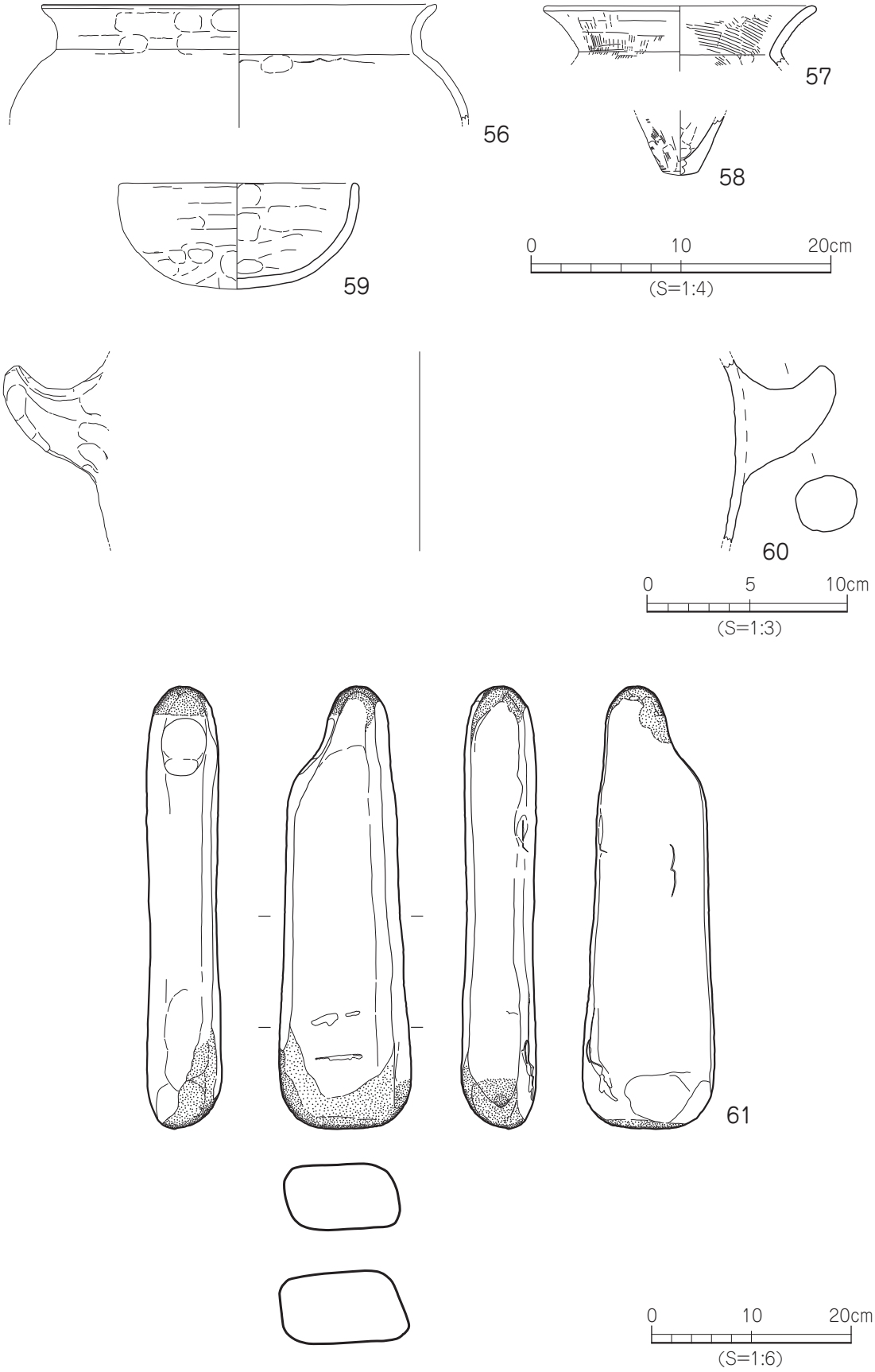
出土遺物（第35図）

56～58は弥生土器の甕形土器。56の口縁部は外反し、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。57は「く」字状口縁で、内外面にハケメ調整を施す。58は底部片で、やや尖底となる。59･60は５世紀後半土師器。59は椀形土器で、内外面に丁寧なヨコナデ調整を施す。60は甑形土器で、舌状の把手部をもつ。61は完形の砥石で、四面の砥面をもつ。砂岩製。

時　期　出土遺物から5世紀前半と考えられる。



第34図　SB1測量図



第35図　SB1出土遺物実測図

ＳＢ２（第36図、図版７）

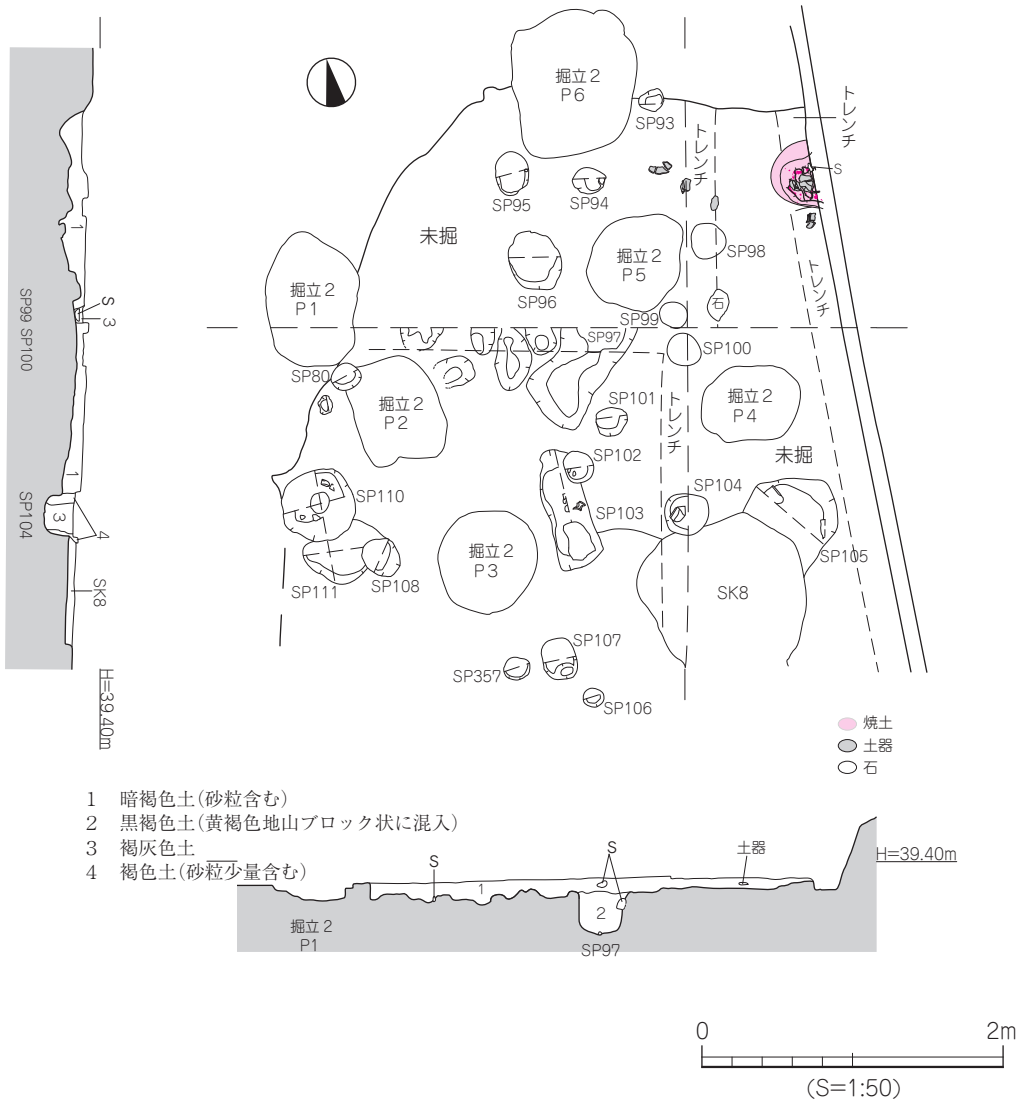
調査区北東部に位置し、掘立２に切られる。竪穴住居は南半部が強く削平され、北部のみの残存である。位置的にＳＢ３と重複すると想定されるが、調査時は遺構の遺存状態が悪く判断できなかった。

住居の平面形は北東－南西に向く方形で、東部は調査区外に展開する。検出規模は北辺2.65m以上、西辺3.90m以上を計り、残存する壁高は約15～20cmを計る。断面観察からは北部壁側に周溝状の凹みが認められ、中央部はやや高く盛り上がる。住居北東部壁にはカマドと思われる焼土が見られる。遺物は弥生土器、土師器、須恵器が出土している。カマドからは弥生土器、土師器が出土している。

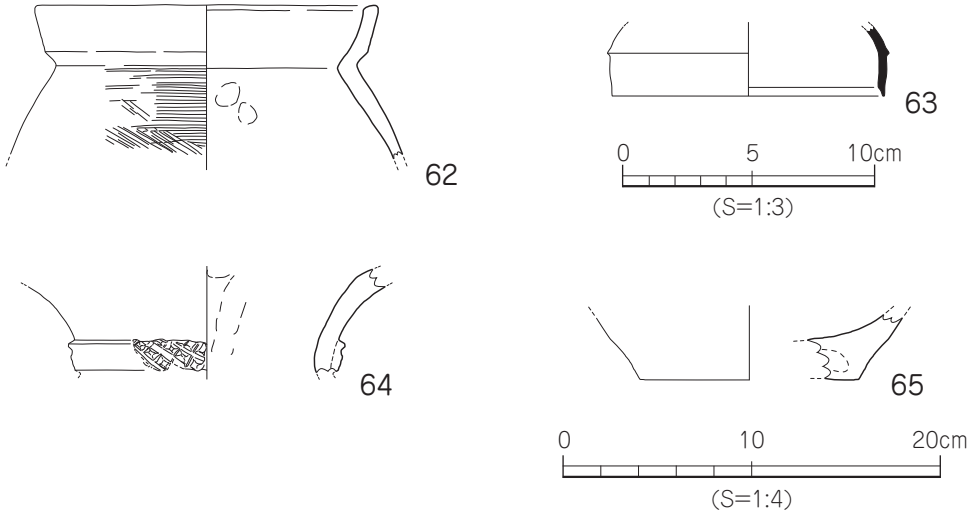
出土遺物（第37図）

62は土師器の甕形土器で、口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。胴部外面には、粗いハケメ調整を施す。63は須恵器の坏蓋片で、口縁端部は内傾する。64･65は弥生土器。64は広口壺の頸部片で、断面方形状の凸帯を貼り付け、凸帯上に斜格子目文を施す。65は底部片で、平底となる。

時　期　出土遺物から６世紀末～７世紀とする。



第36図　SB2測量図



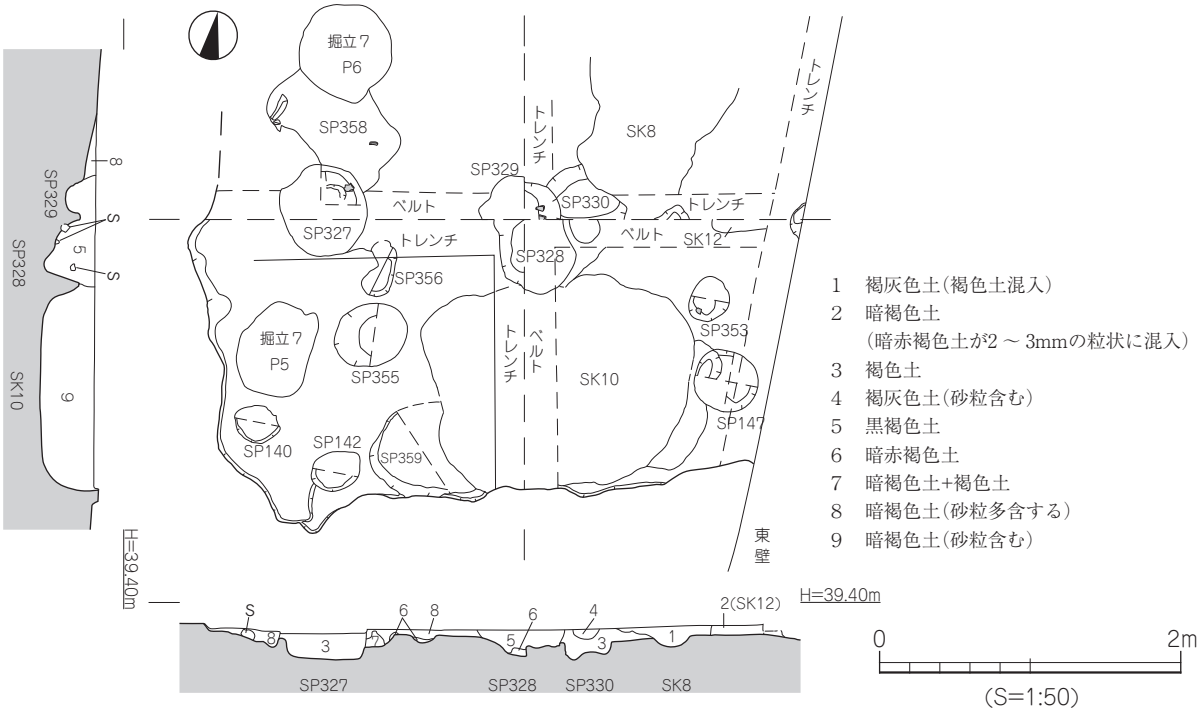
第37図　SB2出土遺物実測図

ＳＢ３（第38図）

調査区東部ＳＢ１北に位置し、掘立７、ＳＫ12に切られる。竪穴住居は北半部が強く削平され、ＳＢ２とは対照的に南部のみの残存である。位置的にＳＢ２と重複すると想定されるが、調査時は遺構の遺存状態が悪く判断できなかった。

住居の平面形はやや西振る南北方向の方形で、東部は調査区外に展開する。検出規模は南辺4.00m以上、西辺2.26m以上を計り、残存する壁高は約２～５㎝を計る。平面および断面観察では、すでに住居の大半は後世の削平により大きく失われており、周溝やカマド等の内部施設は検出できなかったが、住居南部において床面より土抗ＳＫ10を検出している。遺物の出土が少なくまた実測可能なものが見られず図化していない。

時　期　遺構の切り合い、出土遺物および周辺遺構の状況から弥生後期～６世紀初までとする。



第38図　SB3測量図

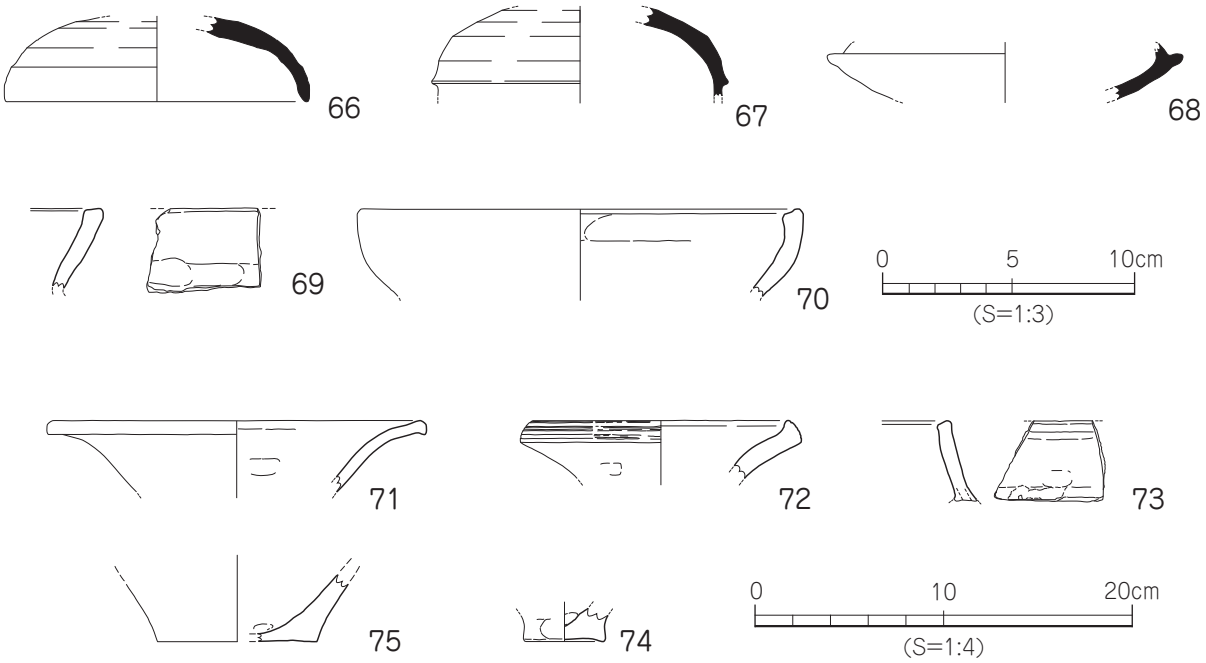
ＳＢ４（第39図、図版４）

調査区南部中央に位置し、第Ⅲ層下で検出した。遺構はＳＢ５、ＳＫ４、ＳＤ２を切る。竪穴住居の南部および東部は精査を繰り返したが、明確な遺構ラインは検出できず不明である。平面形態は方形を呈し、検出規模は西辺南北4.45m、北辺東西4.45mを計り、壁高は４～22cmの残存で、竪穴住居南西部の削平が特に著しい。竪穴住居の主柱穴等は検出できなかったが内部施設は周壁溝を検出した。周壁溝は北辺壁体に沿って幅20cm前後の緩やかな浅い溝である。また、床面からＳＫ11を検出しており、断面観察より竪穴住居に伴う可能性がある。遺物は弥生土器胴部片のほか須恵器胴部片、坏身片および７世紀代の土師器が出土している。

1　灰褐色土（砂・礫含む）
2　暗褐色土（褐色地山ブロック状に含む）
2－2　２に焼土粒混じり
3　褐色土（暗褐色土20％含む）
4　暗褐色土（褐色地山20％含む）
5　暗褐色土（砂・礫含む）（SK11埋土）
6　黒褐色土（砂粒含む）
7　黒褐色土（焼土粒状に含まれる5％程度）
8　暗褐色土（砂粒多い・礫含む）

0　2m
（S=1:50）

第39図　SB4・SK11測量図



第40図　SB4出土遺物実測図

出土遺物（第40図）

66 ～68は須恵器。66は天井部と口縁部を分ける稜は消失し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。67は断面三角形状の鈍い稜をもち、天井部1/2の範囲に回転ヘラケズリ調整を施す。68は坏身片で、たちあがりは欠損する。69 ・70は土師器の甕形土器。口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。71 ～75は弥生土器。71・72は広口壺で、72は口縁端面に凹線文4条を施す。73は複合口縁壺で、口縁端部は内傾する面をなす。74・75は甕形土器の底部片で、74はわずかに上げ底、75は平底となる。

時　期　出土遺物から７世紀前半と考えられる。

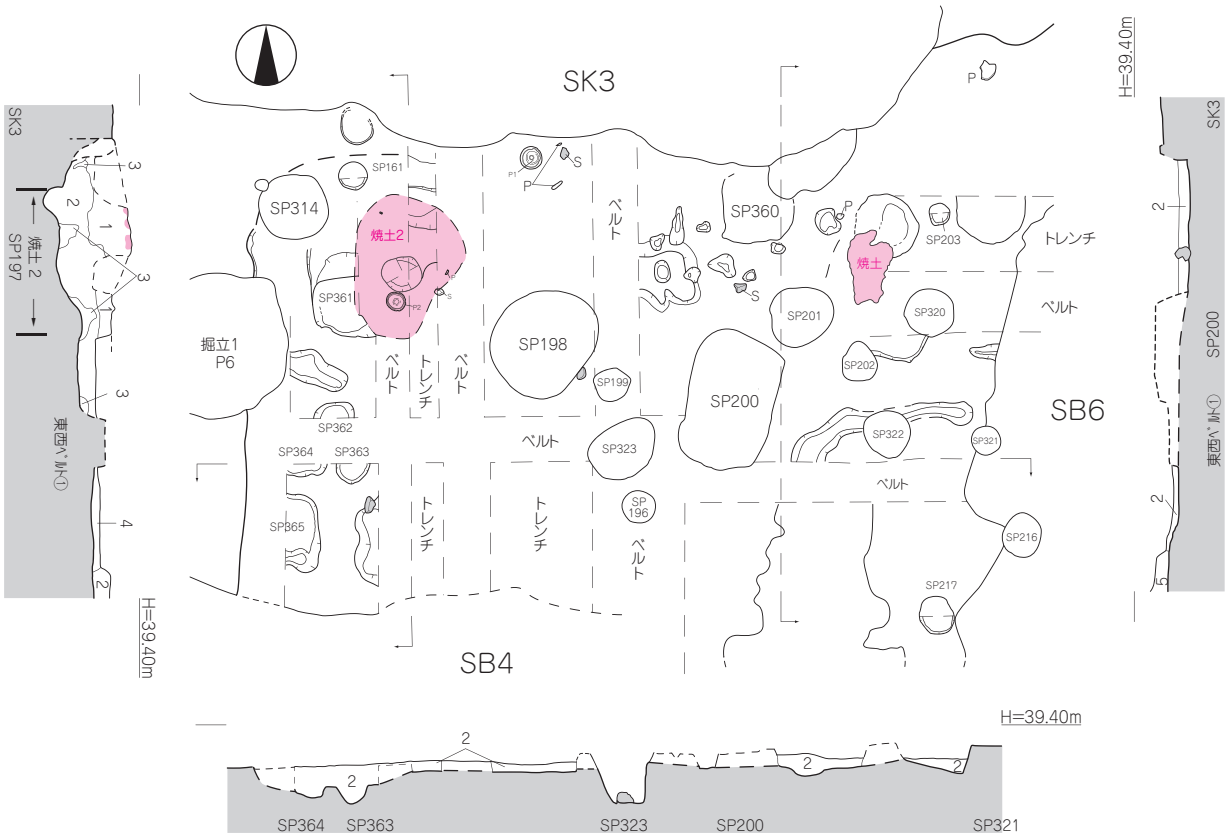
ＳＢ５（第41図）

調査区南部中央ＳＢ４の北に位置し、遺構は掘立１、ＳＢ４、ＳＫ３などと重複している。竪穴住居の北部の一部をＳＫ３により切られ、西部の一部は掘立１に切られる。また南部はＳＢ４に切られ消失している。竪穴住居の東部は精査を繰り返したが、明確な遺構ラインは検出できず不明である。このＳＢ５の精査時にはＳＢ６の平面プランは検出していない。ＳＢ５の平面形態は推定ではあるが西辺の検出状況から方形を呈するものと思われる。竪穴住居の検出規模は西辺南北2.76m以上、北辺東西は推定1.20m以上を計るが、大半は北辺をＳＫ３に、南辺をＳＢ４に切られ不明である。壁高は３～12cmを計り、ごく薄い残存である。竪穴住居の主柱穴等は検出できなかったが、内部施設は北西部の一部に北辺に沿って幅約28cm程度の浅い溝が見られる。遺物は弥生土器片のほか、須恵器胴部片、須恵器坏身片が出土している。

出土遺物（第41図）

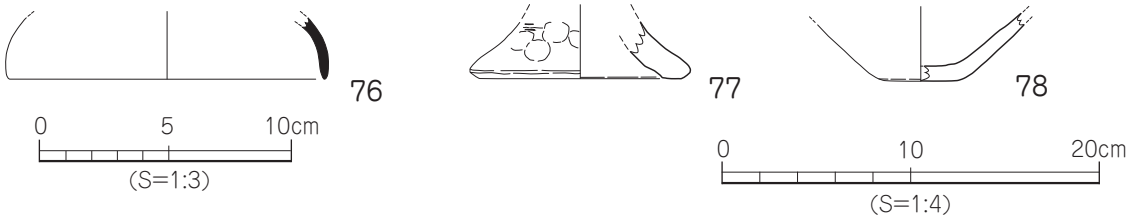
76は須恵器の坏蓋片で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。77 ・78は弥生土器。77は支脚形土器の脚部片で、外面には指頭痕が顕著に残る。78は鉢形土器の底部片で、平底となる。

時　期　出土遺物と掘立１との切り合い関係から、掘立１より古い段階のものである。



1　灰褐色土(砂・礫含む)
2　暗褐色土・褐色(地山ブロック状に含む)
3　褐色土　(暗褐色土20％含む)
4　暗褐色土(褐色地山20％含む)
5　暗褐色土(砂・礫含む)

0　2m
(S=1:50)



第41図　SB5測量図・出土遺物実測図

土抗（ＳＫ）

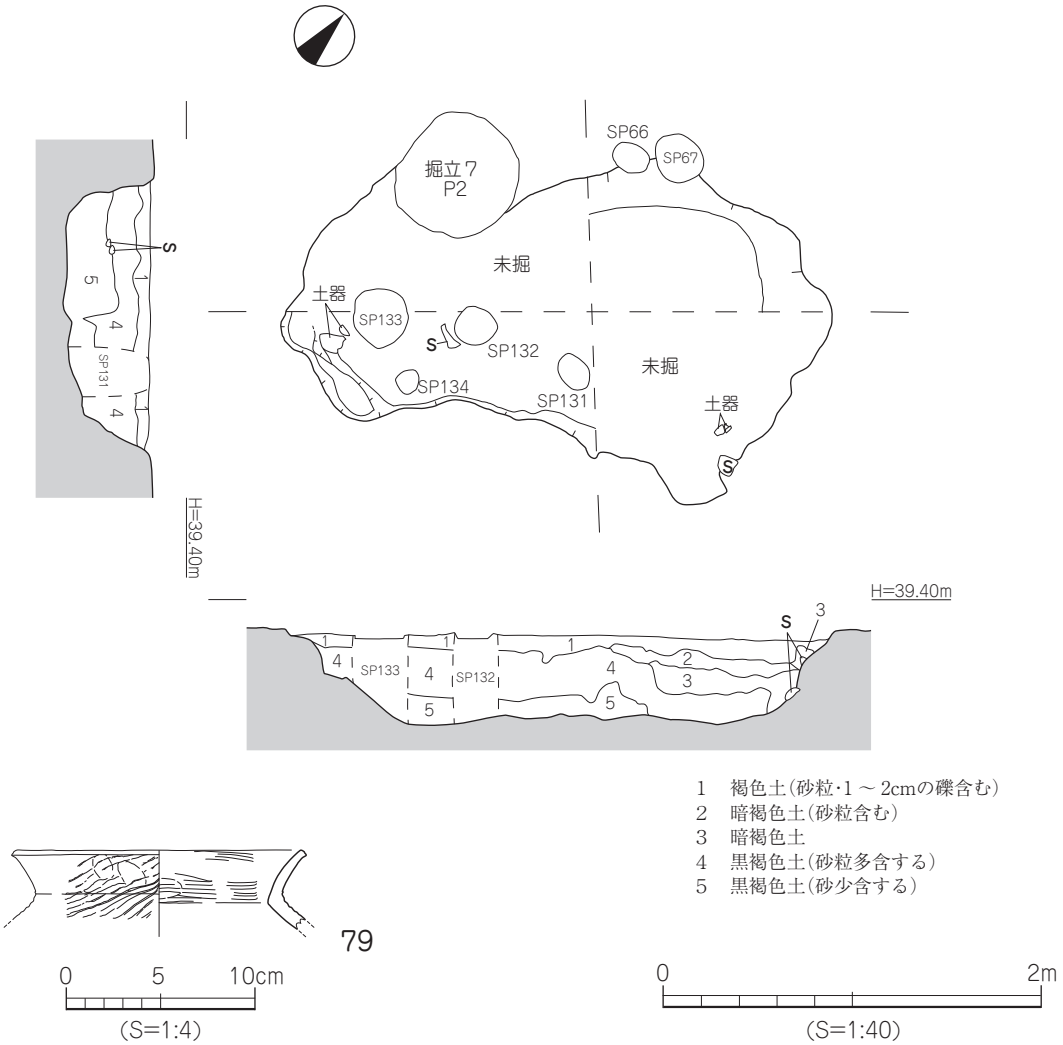
ＳＫ１（第42図）

調査区北部掘立１の東に近接して位置し、掘立７に切られＳＫ２を切る。平面形態は不定型な楕円形を呈し、検出規模は長軸2.90m、短軸1.06～1.60m、深さ48～50cmを計る。断面観察では床面は周囲が凹み、中央はやや高く比高差は約３cm程度ある。埋土は黒褐色土が主体で、遺構長軸である南西から北東方向に向かい層位がなだらかに低くなる。ＳＫ２と重複することからＳＫ２より新しい段階であるが時期的に近い遺構である。遺物は弥生土器、須恵器が出土しているが図化できるものは少ない。

出土遺物（第42図）

79は弥生土器の甕形土器。「く」の字状口縁で、口縁部から胴部外面にかけてナナメ方向のタタキ調整を施す。弥生末。

時　期　遺構の切り合い、出土遺物および周辺遺構の状況から６世紀中頃以降とする。



79

第42図　SK1測量図・出土遺物実測図

ＳＫ２(第43図、図版８)

調査区北部ＳＫ１の南に近接しＳＫ１、ＳＫ３、掘立７に切られる。平面形態は南北方向からやや東に軸を振る不定型な方形を呈し、検出規模は長軸推定約3.00m、短軸1.50 ～1.60m、深さ38cmを計る。断面は逆台形状で、床面は平坦である。遺物は弥生土器、須恵器胴部片、坏身片が出土しているが図化できるものは少ない。

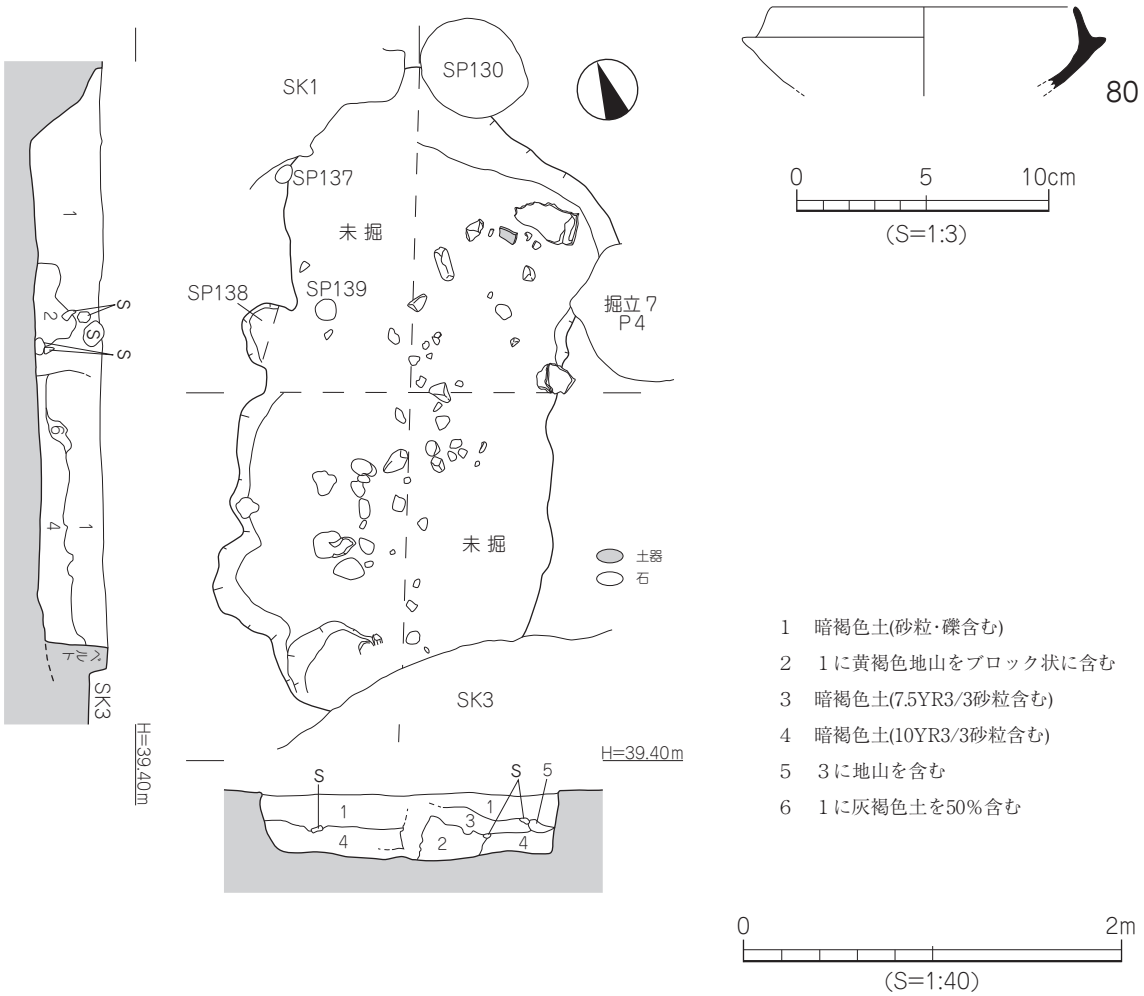
出土遺物(第43図)

80は須恵器の坏身片で、立ち上がり端部は尖り気味に丸く仕上げる。6世紀後半～末。

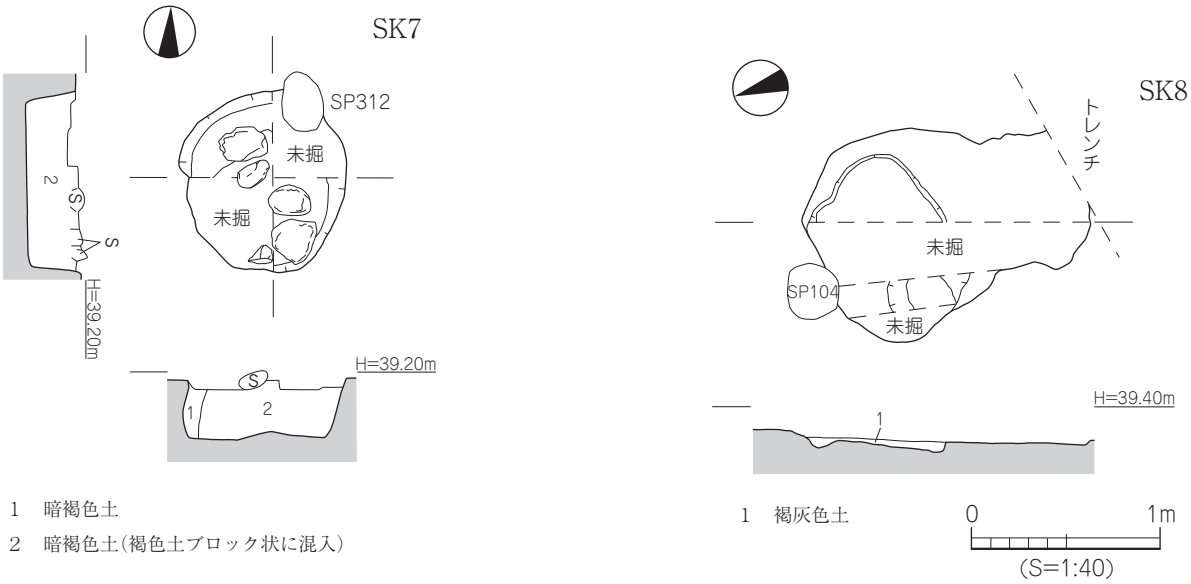
時　期　遺構の切り合い、出土遺物から6世紀中頃以降と考えられる。

ＳＫ７(第44図)

調査区西部掘立３南に近接し、ＳＤ２北に位置する。平面形態は円形を呈し、検出規模は径90×95cm、深さ32cmを計り、断面は逆台形状である。また埋土からは18 ～25cmの小礫を検出した。平面観察から柱痕等は見られず、埋土は暗褐色土が主体で、床面も平坦なことから、やや小振りではあるが土抗とした。遺物は遺構内から弥生土器胴部片、須恵器坏身体部片が出土しているが実測可能なものはなく図



第43図　SK2測量図・出土遺物実測図



第44図　SK7・SK8測量図

化していない。

時　期　時期決定に有効な遺物はないが、おおよそ７世紀代までの遺物が出土している事から、ここでは古墳時代後期とする。

ＳＫ８（第44図）

調査区北東部ＳＢ２とＳＢ３との間に位置する。平面形態は不定型な楕円形を呈し、検出規模は南北長軸1.43m、東西短軸0.70 ～1.10m、深さ２～５㎝を計り、断面は逆台形状である。ＳＫ８の遺構上場は恐らくＳＢ３により強く削平を受けているものと思われる。また遺構内からは遺物の出土はない。

時　期　時期決定に有効な遺物の出土はないが、遺構の切り合いからＳＢ２以前のものである。ここでは遺構の重複関係から古墳時代とした。

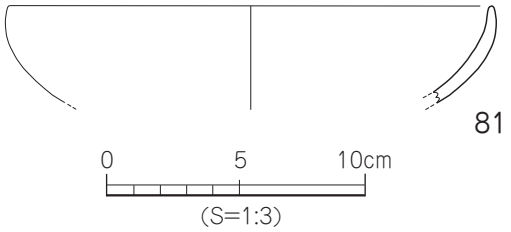
ＳＫ11（第39図）　SB４の挿図番号参照

ＳＢ４の床面を精査中に検出した。平面形態は不整形な楕円形を呈し、規模は東西0.70m、南北1.10m、深さは28㎝を計る。埋土は暗褐色土（砂・礫を含む）であり、上層では焼土粒が疎らに混入する。断面観察と埋土の状況からＳＢ４または焼土１の付属施設の可能性も考えられる。遺構から土師器片が出土している。

出土遺物（第45図）

81は土師器の椀で、体部は内湾し、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。

時　期　周辺遺構の状況と出土遺物から７世紀代とする。



第 45 図　SK11 出土遺物実測図

性格不明遺構（ＳＸ）

ＳＸ１（第46図）

調査区南部ＳＫ４東に位置し、北部は試掘トレンチにより削平され、南部はトレンチ外に展開する。平面形態はやや西に振る南北方向の不定型な長方形を呈する。検出規模は南北長軸1.62m、東西短軸54～90㎝、深さ約20㎝を計り、断面は舟底形である。遺構内からは弥生土器胴部片、須恵器坏身胴部片が出土している。また遺構内からは３～10㎝程度の小礫が多く見られた。

時　期　詳細な時期決定に有効な遺物の出土はなく不明だが、ここでは出土遺物から古墳時代とした。

焼土２（第41図、図版７）

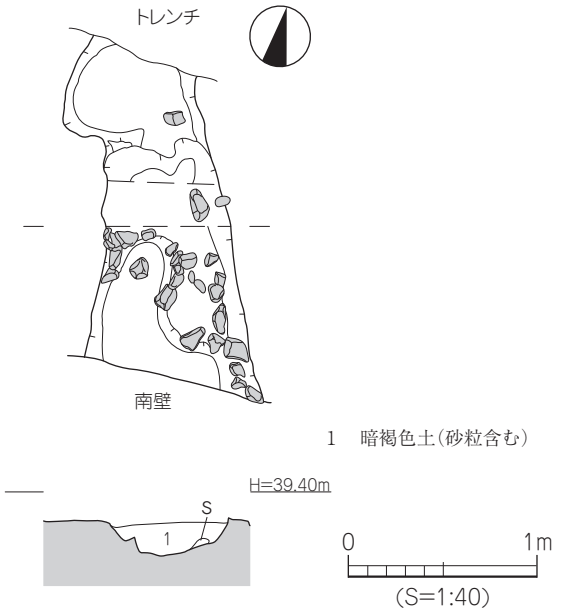
調査区中央ＳＢ５の北西隅に位置する。焼土検出時は周辺で検出したＳＢ５などは未検出で、層位的に上位である。焼土は、埋土が灰褐色土を主体とした焼土粒混じりが東西約74㎝、南北約92㎝程度に分布している。またカマドの壁体は灰褐色埋土中にわずかに見られた。断面観察より焼土の下部は竪穴住居址床面より約25㎝程度緩やかに落ち込む。遺物は弥生土器片のほか、焼土内と周辺より須恵器坏身が２点出土している。焼土検出時、同時に周辺を入念に精査したがこれに伴う住居のプランは確認できなかった。

出土遺物（第47図）

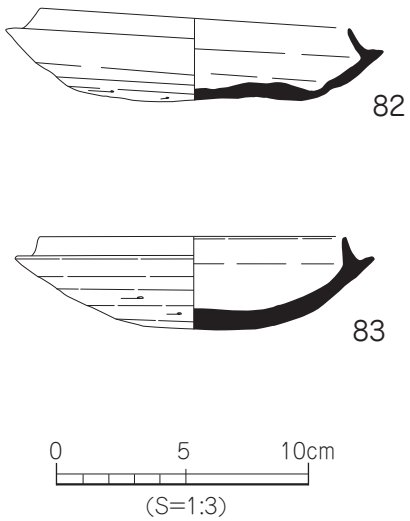
82・83は須恵器。立ち上がりを一部欠損するものの、ほぼ完形品で、立ち上がりは短く内傾し、立ち上

がり端部は尖り気味に仕上げる。底部外面1/2の範囲に、回転ヘラケズリ調整を施し、底部内面中央部はナデ調整を加える。なお、82の底部には、焼け歪みが見られる。

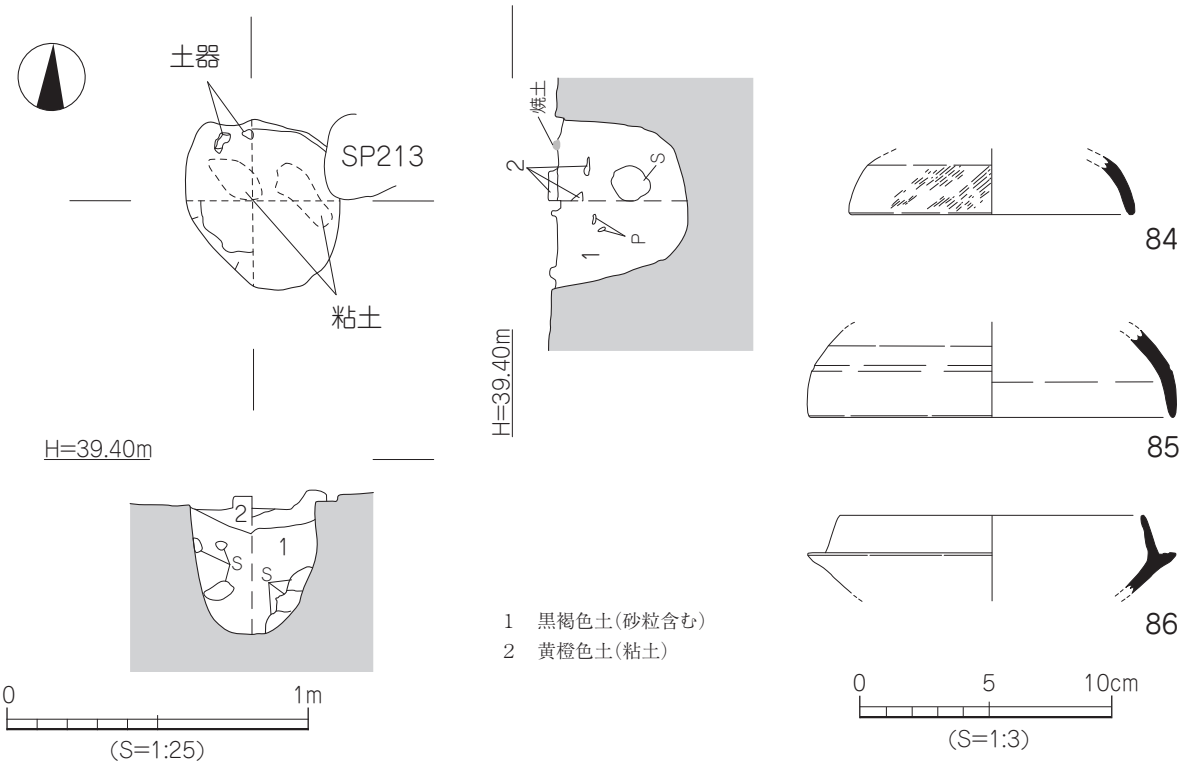
時　期　出土遺物から６世紀末～７世紀前半である。



第46図　SX1測量図



第47図　焼土2出土遺物実測図



第48図　柱穴337測量図･出土遺物実測図

柱穴337（第48図、図版８）

調査区東部中央ＳＢ６の北部に位置する。柱穴の規模は径50㎝前後の楕円形で、深さ45㎝を計る。埋土は黒褐色土（砂粒混じり）である。柱穴内からは黄燈色土の粘土塊と焼土粒および径５～10㎝程度の小礫が見られたが、柱痕等は検出できなかった。周辺の柱穴を伴った掘立柱建物を検討したが候補となる柱穴は得られなかった。遺物は柱穴内より、須恵器の坏蓋、坏身が出土している。

出土遺物（第48図）

84～86は須恵器。84・85は坏蓋片で、口縁端部は尖り気味となる。86は坏身片で、立ち上がり端部は尖り気味に丸く仕上げる。

時　期　遺構の切り合い、出土遺物から６世紀末～７世紀前半である。

（３）古代

古代の遺構は土抗１基（ＳＫ９）、焼土１基を確認した。

土抗（ＳＫ）

ＳＫ９（第49図）

調査区北南西部隅に位置し、遺構はⅢ層下で検出している。平面形態は不定型な長方形を呈し、検出規模は南北約3.00ｍ以上、東西27～56㎝以上、深さ約10㎝を計り、断面は逆台形状である。東半部および南半部は調査区外に展開する。遺構内から遺物の出土はない。

時　期　遺物の出土、遺構の切り合いもなく時期の比定はしがたいが、層序を参考に古代とした。

焼土１（第39図、図版７）

調査区中央ＳＢ４の北辺、焼土２から約3.00ｍ南に位置する。焼土検出時は周辺で検出したＳＢ４およびＳＢ５は未検出であり、層位的には上位の検出である。焼土は、埋土が灰褐色土を主体とした焼土粒混じりが東西約1.30ｍ、南北約92㎝程度に分布している。またカマドの壁体は灰褐色埋土中にわずかに見られた。遺物は弥生土器片のほか、周辺より須恵器坏蓋が２点出土している。焼土検出時、同時に周辺を入念に精査したがこれに伴う住居のプランは確認できなかった。

出土遺物（第50図）

87･88は須恵器。87は坏G、88は坏Bの蓋で、87は乳頭状、88は宝珠状のつまみが付く。88は完存品。

時　期　出土遺物から７世紀後半である。

（４）中世

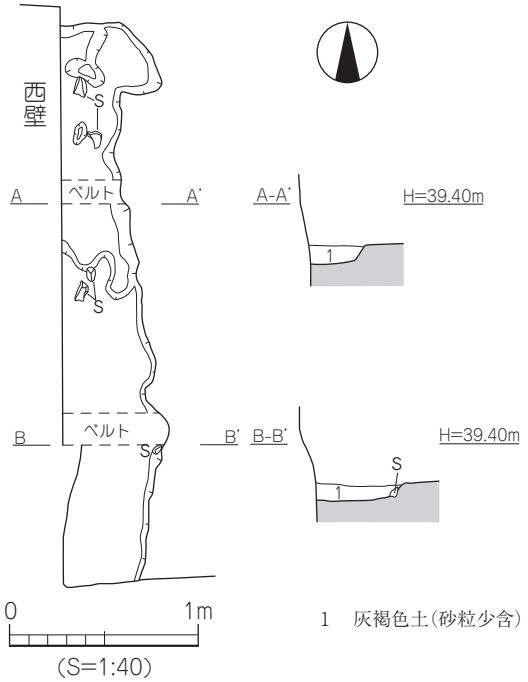
土抗（ＳＫ）

ＳＫ３（第51図）

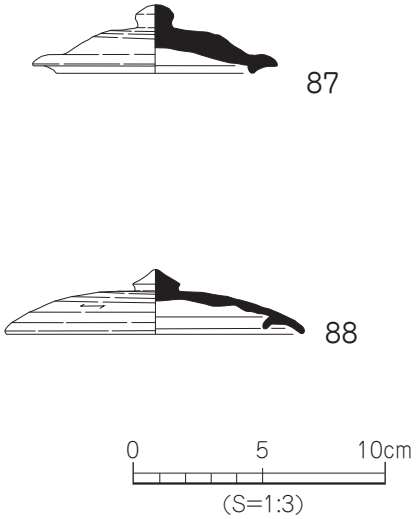
調査区中央部ＳＫ１・２南に位置し、ＳＫ２、ＳＢ５を切る。平面形態は不整形な楕円形を呈し、規模は東西長軸約3.86ｍ、南北短軸1.56ｍ、深さ３～23㎝を計り、断面は逆台形状である。土抗は西部より緩やかに傾斜し、東部床面は平坦で緩く立ち上がる。遺物は土師器片のほか回転糸切りの土師皿底部が出土している。

出土遺物（第51図）

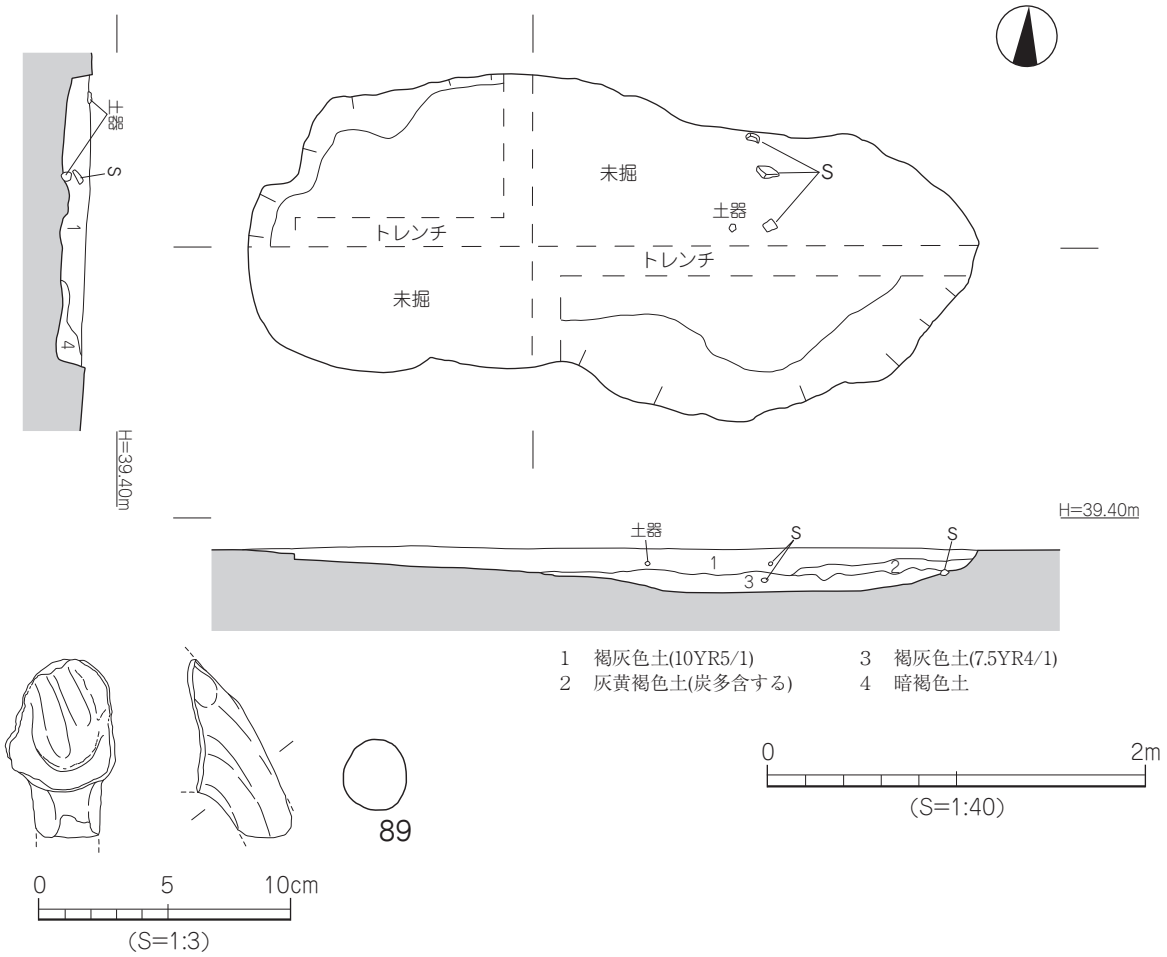
89は土師器三足付土釜の脚部で、断面円形を呈する。13世紀。



第49図　SK9測量図



第50図　焼土1出土遺物実測図



第51図　SK3測量図・出土遺物実測図

時　期　出土遺物から13世紀代と考えられる。

ＳＫ12（第52図、図版５・９）

調査区北東部ＳＫ８南東に位置し、ＳＢ３を切る。規模は東壁断面形状から径50 ～55cm、深さ32cmの方形と思われる。埋土は暗褐色土で上層には焼土粒が層をなして混入する。遺構内からはほぼ完形の土師器坏が東西方向に列をなして置かれる。坏は５枚で１枚は重ねられている。坏内から銭貨等の遺物は見られない。遺構の性格は不明だが祭祀に関わる遺構の可能性がある。

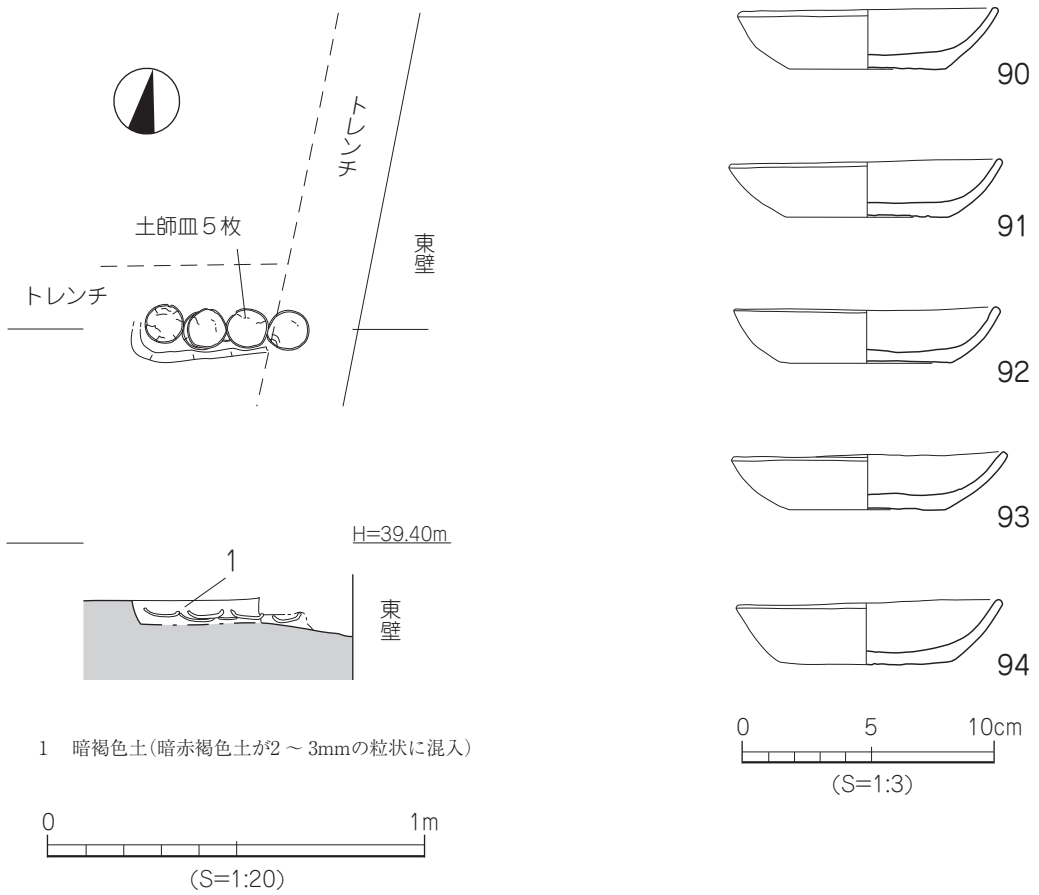
出土遺物（第52図）

90 ～94は土師器の坏である。口縁10.1 ～10.7cm、底径6.2 ～6.8cm、器高2.2 ～2.5cmを測る復元完形品で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。色調は乳橙色を呈し、底部外面には回転糸切り痕とスノコ痕を残す。

時　期　出土遺物から14世紀以降である。

地鎮関連遺構（第53図、図版５・11）

調査区東部中央ＳＢ６上層に位置し、第Ⅱ層下層にて検出した。遺構は土師器甕内中央に土師器坏を置き、周囲に河原石を配する。中央に置かれた坏は３個体分あり、２個体はほぼ完形、１個体は約２分の１の残存である。ほぼ完形の２個体は、上下に口縁部を重ね、残り１個体は口縁部を内側に向け、甕



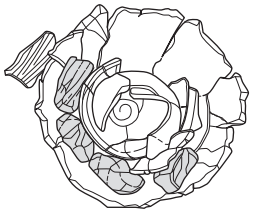
第52図　SK12測量図・出土遺物実測図

の胴部内面に沿って立て置かれる。坏の周囲に置かれる河原石は、長さ６㎝前後、幅３～５㎝の角の取れた河原石である。状況からも検出された以上の石が置かれていたのではないかと考える。甕の残存は胴部以下約９㎝程度で、横に立て置かれた坏もほぼ同位置で上部を破壊されている。遺構検出当初はこれら遺物は埋納されたものと考え、周囲を精査したがこれに伴うと考えられる遺構プランは検出できなかった。遺構の性格は現時点では同様な類例は少なく不明であるが、地鎮に関わる何らかの遺構と考えられる。

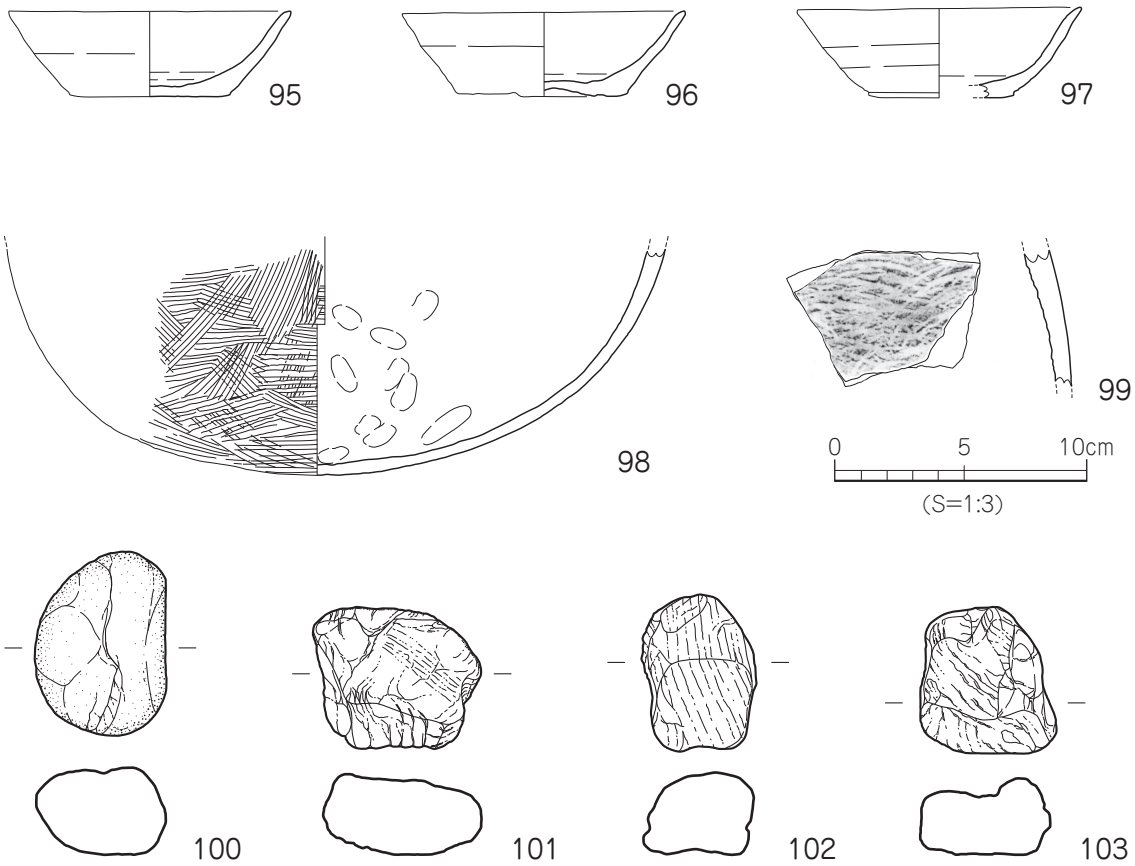
出土遺物（第53図）

95～98は土師器。95～97は坏で、口径11.2cm、底径5.7～6.7cm、器高3.4～3.6cmを測り、色調はにぶい橙色を呈する。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。底部の切り離しは、回転ヘラケズリ技法による。98は甕の底部で、外面にはタタキ調整後ハケメ調整を施す。99は須恵器甕の胴部片で、外面に回転カキメ調整、内面には円弧タタキを施す。100～103は河石礫である。

時　期　出土遺物から13世紀後半までのものと考えられる。



0　20cm
（S=1:10）



第53図　地鎮遺構測量図・出土遺物実測図

（5）包含層出土遺物・トレンチおよび地点不明遺物

遺物包含層の第Ⅱ層、第Ⅲ層、第Ⅳ層から多数の遺物が出土した。時代の古い層から順に出土遺物について詳細を述べる。

1．第Ⅳ層出土遺物（第54・55図、図版11）

104 ～109は甕形土器。104は「く」の字口縁を呈し、頸部内面にはヘラケズリを施す。106は短く外反する口縁部をもち、口縁端部は丸く仕上げる。107は口縁部より下がった位置に凸帯を貼付け、口縁端部及び凸帯上に刻目を施す。108・109は胴部片で、108の外面にはヨコ方向のタタキ調整を施す。110・111は底部片で、110はわずかに上げ底、111は平底となる。112 ～121は壺形土器。112 ・113は広口壺で、113は口縁端部を下方に拡張し、口縁端面に羽状文、頸部には凸帯を貼付け、凸帯上に斜格子目文を施す。頸部内外面には丁寧なヘラミガキを施す。114は長頸壺の口縁部片で、外面にはタテ方向の丁寧なヘラミガキを施す。115・116は複合口縁壺の口縁部片で、115は半截竹管文、116は半截竹管文と羽状文を施す。117・118は頸部片で、凸帯上に斜格子目文を施す。119 ～121は底部片で、平底となる。122 ～124は高坏形土器。122は坏部中位に稜をもち、口縁部は外反する。123 ・124は脚部片で、123は径1.8cm大の円孔を穿ち、124は脚裾部が「ハ」の字状に外反する。なお、123・124共に、外面には、タテ方向の細かなヘラミガキを施す。125 ～132は鉢形土器。125は推定口径30.0cmを測る大型品で、片口部分をもつ。126は小形品で、わずかに上げ底を呈する。127は脚付鉢の脚部片で、円孔を看取する。128 ～132は底部で、128 ～130は上げ底、131 ・132は平底となる。133は器台形土器の柱部で、径2.1cm大の円孔を穿つ。134 ～139は支脚形土器。134の受部は「U」字状にカットされ、器表面には、指頭痕を顕著に残す。135 ・136は角状の突起部で、断面円形を呈する。137 ～139は脚部片で、中空となる。

時　期　大半は弥生時代後期後半～末のものではあるが、前期や中期後半以降のものも少なからず見られ、第Ⅳ層の時期は弥生時代と考える。

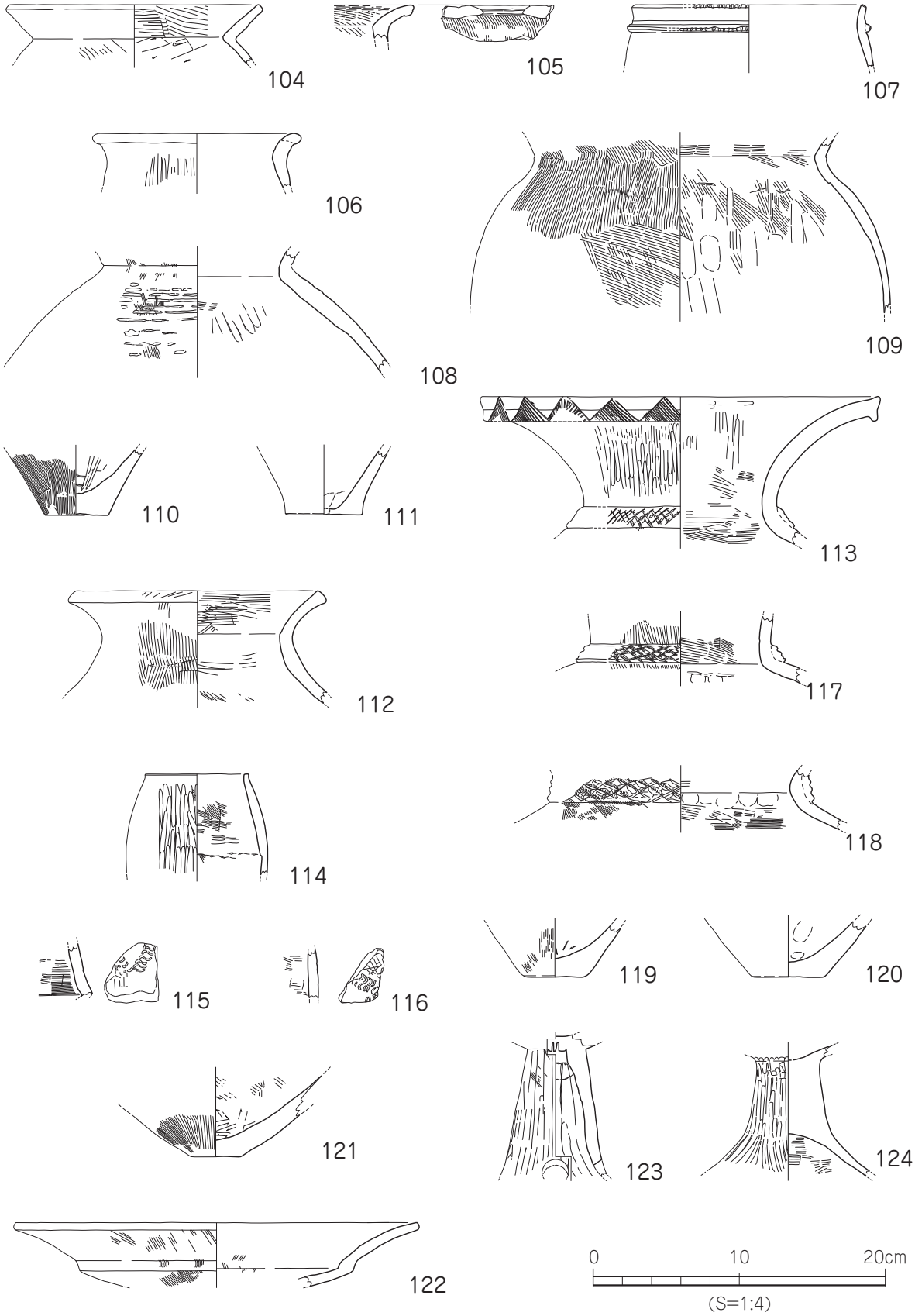
2．第Ⅲ層出土遺物（第56図、図版12）

140 ～145は土師器。140 ・141は甕形土器で口縁部は内湾し、口縁端部は内側に肥厚する。142は出雲系の二重口縁鉢で、口縁端部は丸く仕上げる。143 ・144は高坏形土器の坏部片で、口縁部は、わずかに外反する。145は甑形土器の底部片で、径3cm大の円孔を穿つ。146 ～153は須恵器。146 ～148は坏身で、146は立ち上がり径12.5cm、底径1.6cm、器高4.4cmを測る。ほぼ完形品で、立ち上がり端部は尖り気味に仕上げる。底部外面には、ヘラ状工具による線刻が残る。147・148は小片で、立ち上がりは低く内傾し、立ち上がり端部は尖り気味となる。149 ～151は坏で、149は口径9.1cm、底径1.6cm、器高3.9cmを測る。体部下位に沈線状の凹みが巡り、底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。150 ・151は坏Bで、「ハ」の字状に開く高台が付く。152・153は高坏の脚部片で、長方形状の透かしを看取する。

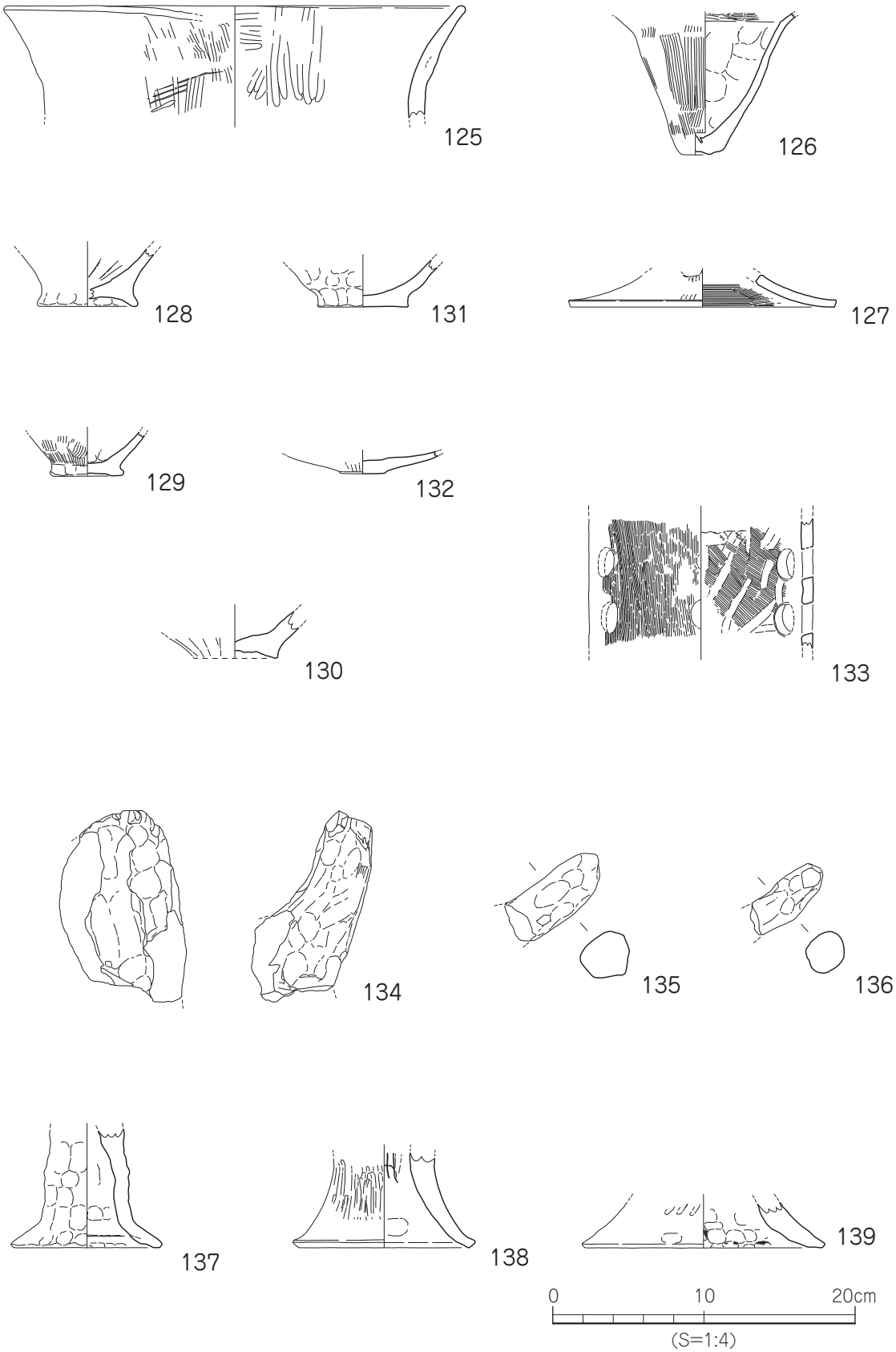
時　期　第Ⅲ層中からは５世紀後半～６世紀中頃までと８世紀前半の遺物が出土している。第Ⅲ層の時期は概ね古墳時代～古代と考えられる。

3．第Ⅱ層出土遺物（第57・58図、図版12）

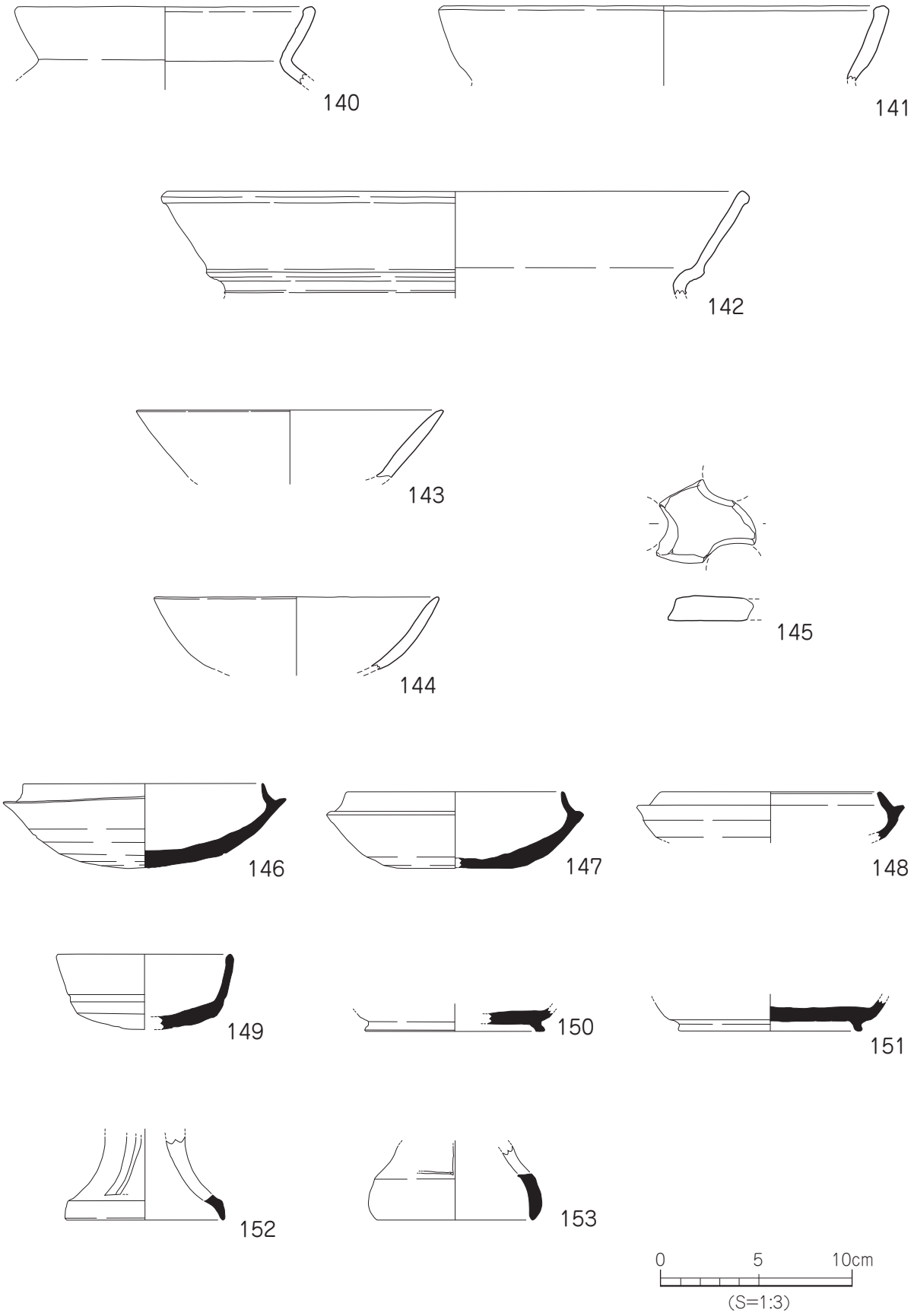
154 ～156は土師器の坏、157 ～159は土師器の皿である。154は3/4の残存で、推定口径11.2cm、底径6.9cm、器高2.4cmを測る。色調は淡乳褐色を呈し、底部外面には回転糸切り痕を残す。157 ～159は推定口径7.5 ～7.9cm、底径5.1 ～5.3cm、器高1.9 ～2.2cmを測り、157・159の底部外面には回転糸切り痕やスノ



第54図　第Ⅳ層出土遺物実測図(1)



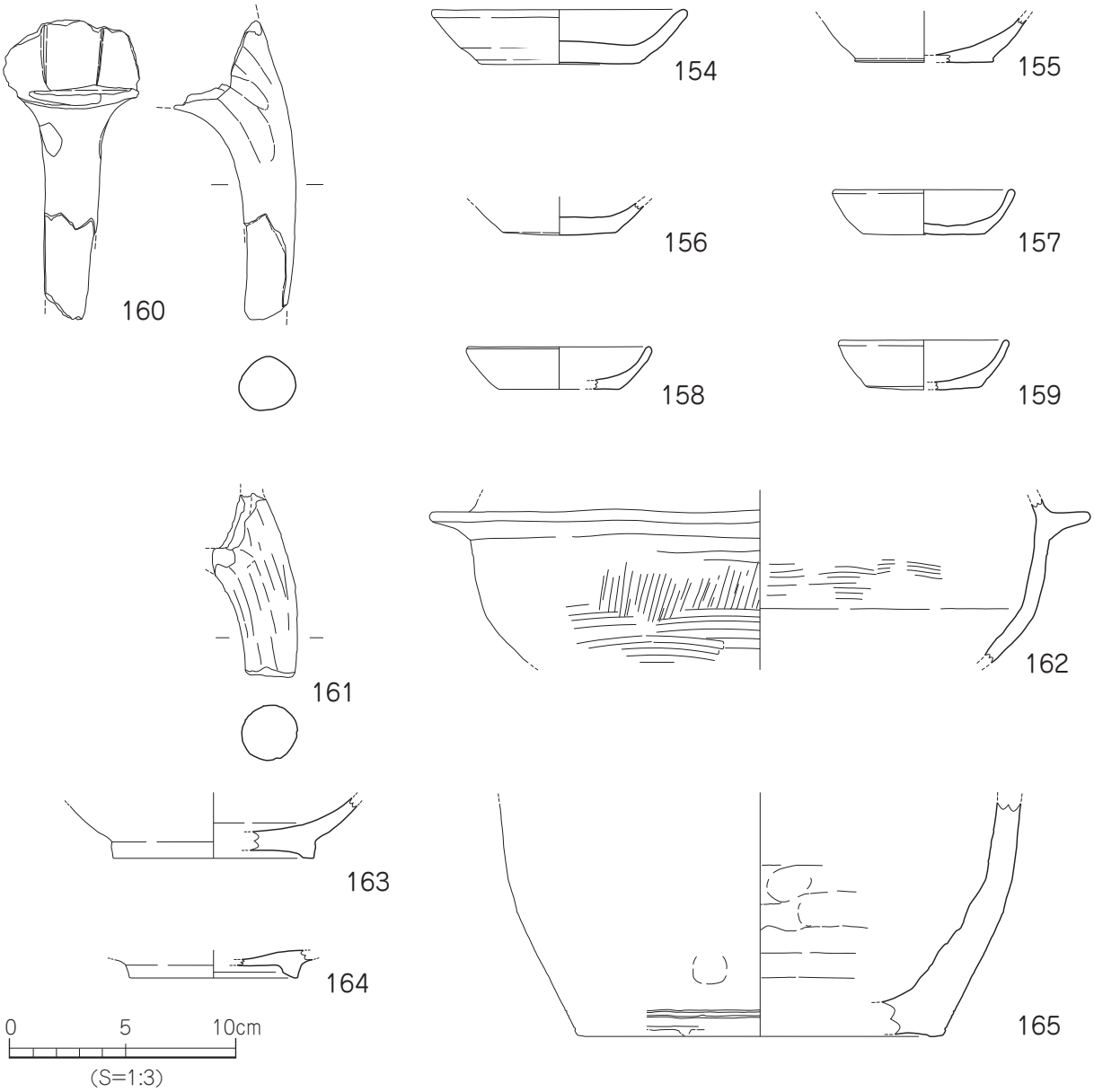
第55図　第Ⅳ層出土遺物実測図(2)



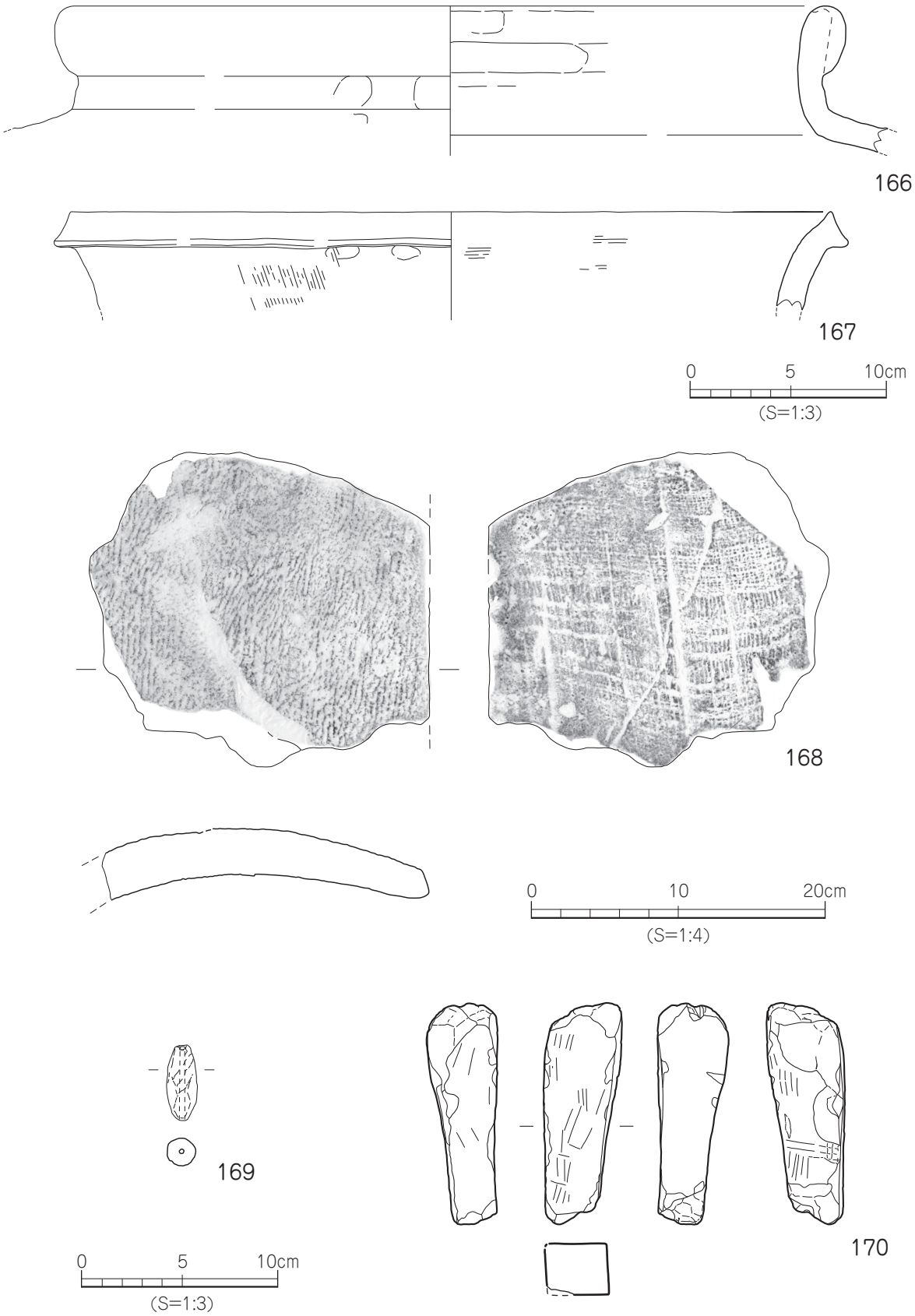
第56図　第Ⅲ層出土遺物実測図

コ痕を残す。160・161は土師器三足付土釜の脚部で、断面円形を呈する。162は瓦質の羽釜で、鍔部は水平にのび、底部外面にはタテないしヨコ方向の粗いハケメ調整を施す。色調は外面が灰色、内面はにぶい黄色を呈する。163・164は緑釉陶器の椀である。両者共に須恵質で、163の胎土は灰白色を呈し、底部内面に薄緑色の釉がわずかに残る。164は胎土が灰色を呈し、内外面に薄緑色の釉が掛けられている。165・166は備前焼の壺と甕で、間壁縮年Ⅲ期の特徴を示す。167は亀山焼の甕で、色調は黒灰色を呈し、内外面共にハケメ調整を施す。168は須恵質の平瓦で、凸面には細縄のタタキ、内面は布目痕と罫引き痕を残す。169は土錘で、長さ3.9cm、幅1.5cm、重量6.27gを測る。色調は乳白色を呈し、径2.5mm大の穴が貫通する。170は石英粗面岩製の砥石で、四面の砥面をもつ。

時　期　第Ⅱ層中からは、平安時代中頃から13～14世紀、また14世紀以降の遺物が出土しており、概ね中世と考えられる。



第57図　第Ⅱ層出土遺物実測図(1)



第58図　第Ⅱ層出土遺物実測図(2)

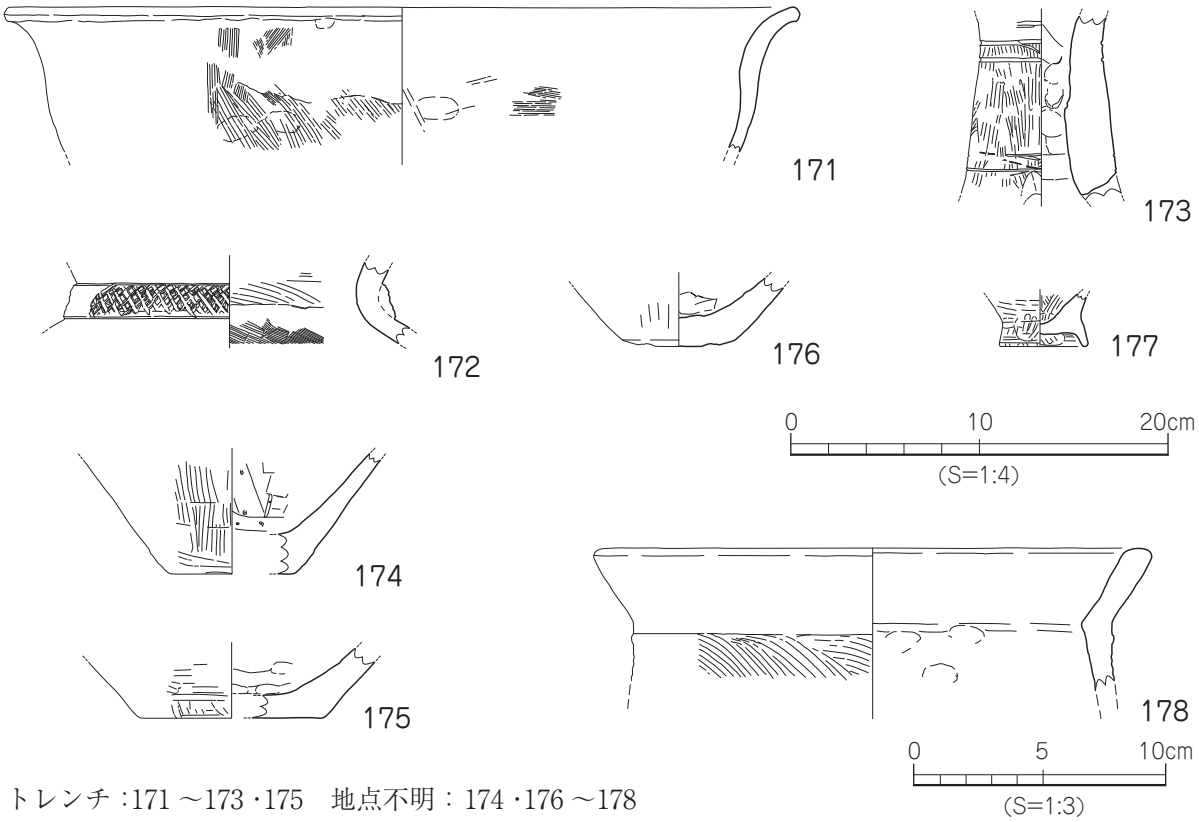
４．トレンチ・地点不明物（第59図、図版12）

171 ～177は弥生土器。171は推定口径41.4cmを測る大型の鉢形土器で、口縁部は短く外反する。172は壺形土器の頸部片で、凸帯上に斜格子目文を施す。173は高坏形土器の脚部で、ヘラ描き沈線文と円孔を穿つ。外面には、タテ方向の丁寧なヘラミガキを施す。174は甕形土器、175・176は壺形土器、177は鉢形土器の底部である。174 ～176は平底、177は上げ底となる。178は土師器の甕形土器で、口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する。胴部外面には、粗いハケメ調整を施す。

５．ＳＢ群（第60図、図版８）

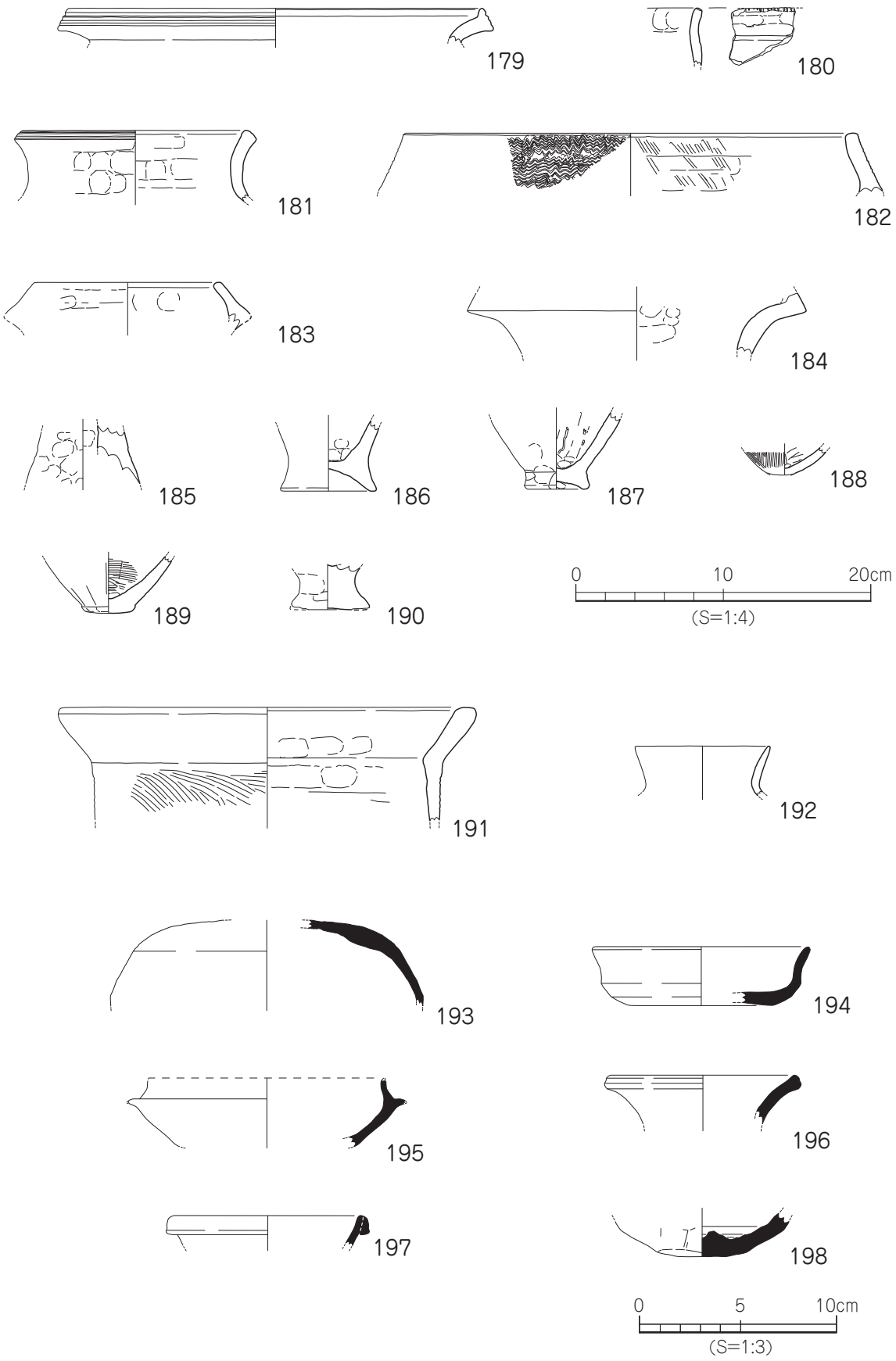
主にＳＢ４・５・６付近の遺構検出面での採取遺物である。

179 ～190は弥生土器。179 ・180は甕形土器で、179の口縁部は上方に拡張し、口縁端面に凹線文３条を施す。弥生中期後半。180は刻目凸帯文土器、凸帯は剝離している。弥生前期前半。181 ～184は壺形土器。181は広口壺で口縁端面に凹線文３条を施す。弥生後期初頭。182 ～184は複合口縁壺。182 ・183は口縁端部は内傾し、182の口縁部外面には櫛描波状文17条以上を施す。弥生後期。185は支脚形土器の脚部片で、中空となる。弥生後期。186 ～188は甕形土器。189 ・190は鉢形土器の底部で、186はくびれをもつ上げ底、187は突出する上げ底、190は突出部をもつ平底、188 ・189は平底となる。186は弥生中期後半、その他は弥生後期。191・192は土師器。191は甕形土器で口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。胴部外面は粗いハケメ調整を施し、口縁部の器壁は厚い。7世紀。192は壺形土器の口縁部片で、口縁端部は先細りする。古墳前期。193 ～198は須恵器。193は坏蓋片で、深めの天井部をもつ。194は坏で、口縁部は外反し、口縁端部は丸く仕上げる。8世紀。195は坏身片で、立ち上がり端部は欠損する。7世紀前半。196・197は広口壺で、196の口縁端面に沈線１条が巡る。197は口縁部が方形状に肥厚する。198は壺の底部片で、

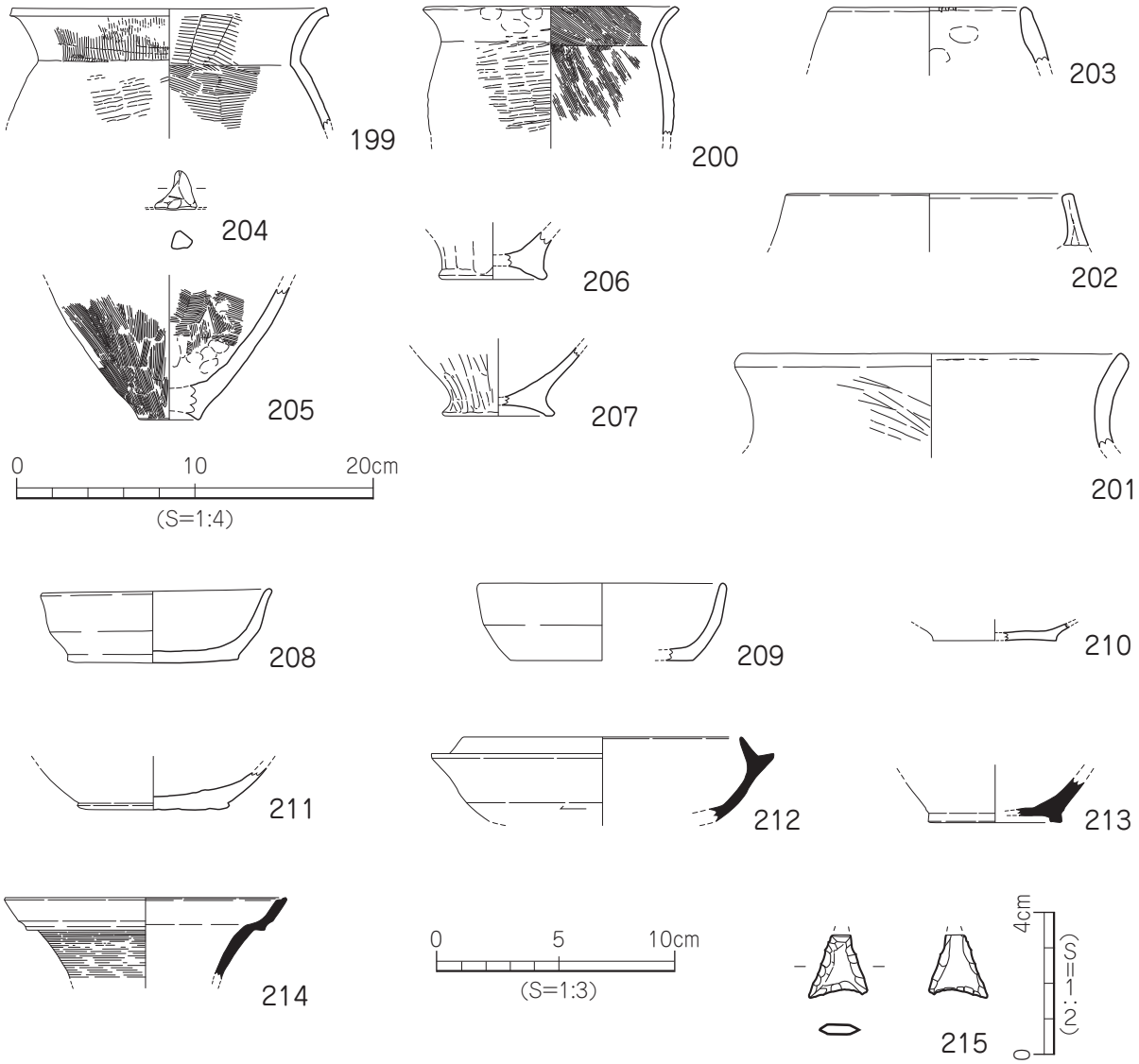


トレンチ：171 ～173 ・175　地点不明：174 ・176 ～178

第59図　トレンチ・地点不明出土遺物実測図



第60図　ＳＢ群出土遺物実測図



第61図　SP出土遺物実測図

外面に手持ちヘラケズリを施す。

SP出土遺物（第61図、図版11）

199 ～207は弥生土器。199 ・200は甕形土器で、胴部外面にタタキ調整を施す。弥生末。201は広口壺で、口頸部外面にはナナメ方向のヘラミガキを施す。202・203は複合口縁壺の口縁部片で、202の口縁端部は内傾する面をなし、203は丸く仕上げる。弥生後期。204は蓋形土器のつまみ部である。205 ・206は甕形土器の底部で、上げ底を呈する。弥生後期前葉。207は鉢形土器の底部で、突出する上げ底を呈し、外面にはヘラミガキを施す。弥生後期後葉。208 ～211は土師器の坏である。208は口径9.5cm、底径7.2cm、器高3.1cmを測り、色調は橙色を呈する。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。底部の切り離しは、回転糸切り技法による。209の体部は内湾し、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。210・211は底部片で、210は底部外面には回転糸切り痕が残る。13 ～14世紀。212 ～214は須恵器。212は坏身片で、立ち上がりは短く内傾し、立ち上がり端部は尖り気味に仕上げる。７世紀初～前半。213は長頸壺の底部で、断面方形状の高台が付く。８世紀。214は甕で口縁端部は内傾し、頸部外面に回転カキメ調整を施す。６世紀後半。215は凹基無茎石鏃で、先端部は欠損している。サヌカイト製。

第５節　小　結

今回の調査では、主に弥生時代終末から古墳時代初頭の本遺跡周辺を含めた集落構造解明を目的として調査を実施した。その結果、主に弥生時代前期、および中期後半から中世までの遺構・遺物を確認し、特に当初からの目的とする時期に該当する遺構・遺物を得ることができた。ここでは、時代ごとに主な調査成果を中心にまとめを行う。

（１）弥生時代

調査区北に隣接する樽味四反地7次調査に於いて、南北方向を走る幅66 ～ 88㎝を測る前期後半までの溝ＳＤ301が検出されており、また今回の調査では幅20 ～ 30㎝の南北方向を走るＳＤ１からは弥生時代前期の遺物が出土している。７次調査ＳＤ301との関係はややＳＤ１が西に位置するが、位置、方向、規模および埋没時期から同一遺構の可能性が高い。

掘立柱建物は３棟（中期後半～後期末まで）検出しているが、各遺構の重複状況から掘立５および掘立６は同時期併存の可能性はあるが、それぞれ掘立４との併存はない。また、掘立４は７次調査地より関連と考えられる有効な掘立は検出されておらず、東西－南北４間が妥当な規模と考えられる。

本調査区東部で検出された竪穴住居址ＳＢ６は同遺跡20次ＳＢ２と同一遺構であり、本調査での検出規模は約6.3m×約2.7mを測る。今回の調査では遺跡保存の観点からＳＢ６はトレンチおよび南北部分の一部掘削した調査とし、東半未検出部は次年度に委ねるかたちとなった。

ＳＢ６遺構内からは、周壁溝の一部が見つかっている。遺物は弥生時代後期後半～後葉の甕・壺・鉢・高坏が大半を占め、床面より弥生時代後期末とみられる鉢形土器（図版15－５）が出土しており、帰属時期は20次調査の所見と大きな差異はないと考えられる。

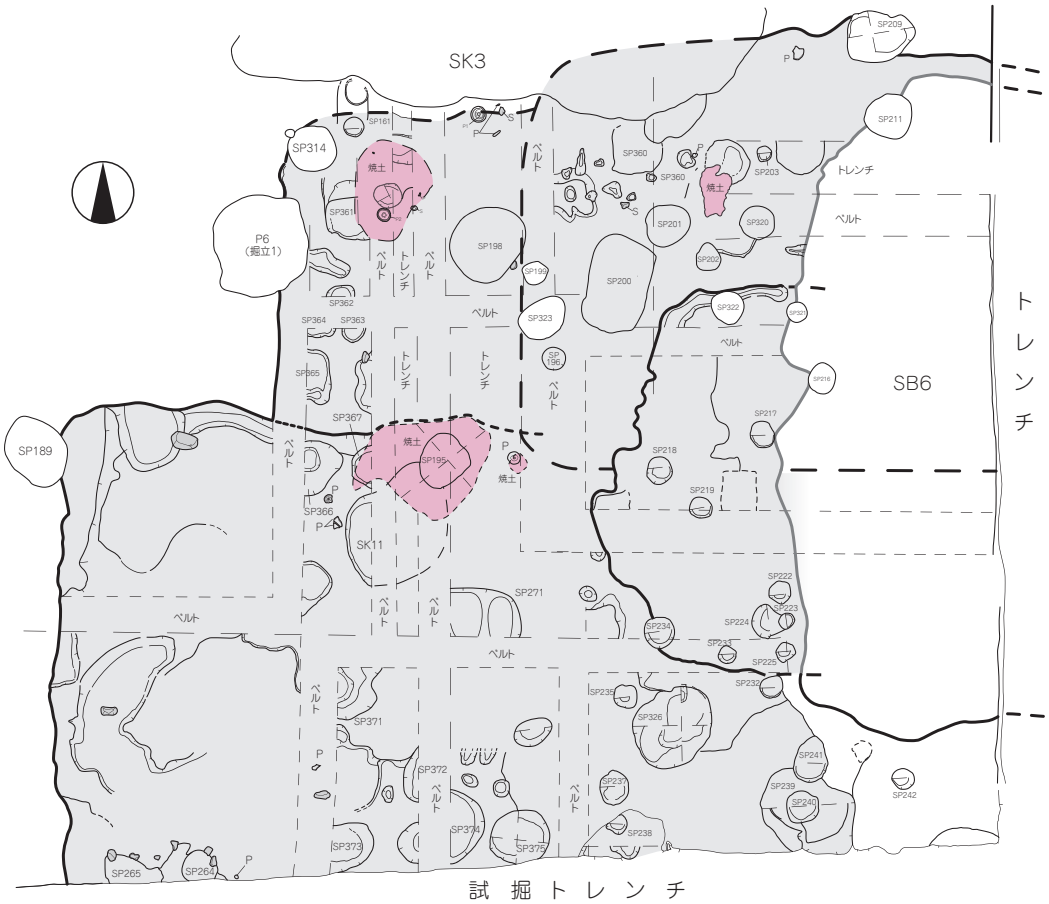
また、ＳＫ５は弥生終末期の遺物が一括で多量に出土し、出土遺物の中からは口縁部に波状文を施したのち、山形文を描くもの（図版21－37）や、吉備系の二重口縁を持つ甕（図版21－35）などがあり、他の遺構に比べやや特徴的な遺物内容である。

（２）古墳時代

古墳時代の掘立柱建物には、掘立１～３・７の４棟がある。そのうち掘立１・３・７はほぼ北に対し正方位を向く建物である。掘立１および掘立３の北部は調査区外に展開するが、北に隣接する７次調査からは該当する掘立柱跡は検出されておらず、掘立１は４×３の南北棟、掘立３は５×３の南北棟と考えるのが妥当と思われる。また掘立３は南北柱間1.65m前後でほぼ均等であるが、掘立1は南北両端柱間は1.5m、中間は1.3mを計り、やや狭くなっている。時期的に掘立1が掘立3を切ることから掘立1が後出するものではあるが、出土遺物からは共に５世紀後半～６世紀初段階の建物である。

周辺の遺跡でこの時期前後の正方位を向く掘立柱建物は、樽味四反地遺跡６次調査、同16次調査において確認されるが検出例は多くなく注目される。

調査区南東部では竪穴住居を複数検出しているが、明確に検出できたのはＳＢ４・５住居の西辺プランのみである。付近では複数の焼土痕、周溝状の溝が確認されているが、それぞれに帰属する竪穴住居プランの確認は困難であった。



第62図　調査区南東部竪穴住居重複推定復元図

第62図は調査区南東部付近の焼土および遺構プラン、周溝状の小溝をもとに竪穴住居の重複を推定復元したものである。この周辺では弥生時代を除いて恐らく５世紀末から７世紀後半までには最低でも大小４棟以上の竪穴住居が次々と重複しながら造営されたのではないかと考えられる。

（３）古代～中世

本調査ではこの古代から中世にかけての遺構は極端に少なく、焼土・土抗・地鎮関連遺構などがある。古代の竪穴住居の付属施設と思われるＳＢ５北西隅に位置する焼土１は、出土遺物から７世紀後半に比定され、周辺に重複し広がる竪穴住居の中でも最後出のものとなる。また、ＳＢ６上層で確認した地鎮関連遺構は、遺物から13世紀後半までに比定され、このような土師皿の埋納は、現時点では類例に乏しく、何らかの祭祀または地鎮に関わる遺構と考えており、今後の類例増加に期待したい。

中世では、調査区東部中央壁面にかけて確認したＳＫ12がある。土師皿の埋納は、土師皿４枚を直列に据え置き一枚のみその列の下に重ね敷かれた状況である。このような遺構には銭貨等が同時に確認される土抗墓などの例が多いが、今回はそれらの出土は見ていない。

本調査では弥生時代前期から中世の集落関連遺構が検出された。特に弥生時代・古墳時代に関しては遺構数も多く、貴重な資料が得られ、また樽味周辺における集落動態の一部が伺える調査となった。

遺物観察表　－ 凡例 －

（1）　以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（2）　遺物観察表の各掲載について

法量欄　（　）：推定復元値

調整欄　土製品の各部名称を略記した。

例）口→口縁部、頸→頸部、胴→胴部、底→底部、天→天井部、坏→坏部、肩→肩部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤→赤色土粒、密・精→精製土。

（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1 ～ 4）→「1 ～ 4mm 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良。

表２　竪穴式住居址一覧

竪穴（ＳＢ）	時　期	平面形	規　模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	埋　土	床面積（㎡）	主柱穴（本）	内部施設				備　考
							高床	土坑	炉	カマド	
1	5C 前半	方形	2.58 × 1.74+ α × 0.12	暗褐色土（地山砂粒多含）	2.90						SB6 を切り、SP148 に切られる。
2	6C 末～ 7C	方形	2.65+ α × 3.90+ α × 0.20	暗褐色土（砂粒含）	9.62					○	掘立２に切られる。
3	弥生後期～6C 初	方形	4.00+ α × 2.26+ α × 0.05	暗褐色土（砂粒多含）	8.01			○			掘立 7、SK12 に切られる。
4	7C 前半	方形	4.45 × 4.45 × 0.22	暗褐色土（砂・礫含）	21.22			○			SB5、SK4、SD2 を切る。
5	5C 末～6C 初以前	方形	2.76+ α × 1.20+ α × 0.12	暗褐色土（地山ブロック状含）	16.52						SB4、掘立 1、SK3 に切られる。
6	弥生終末期	隅丸方形	6.30 × 2.70 × 0.70	暗褐色土	10.60						SB1 に切られる。

表３　竪穴住居の炉・カマド一覧

竪穴（ＳＢ）	時　期	炉	カマド	位　置	平面形	埋　土	規　模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	備　考
4	7C 後半			北壁中央部	方形	灰褐色土	1.30 × 0.92 × 0.22	
5	6C 末～ 7C 前半			北西壁部	方形	灰褐色土	0.92 × 0.74 × 0.12	

表４　掘立柱建物址一覧

掘立	規模（間）	方向	桁　行		梁　行		床面積（㎡）	時　期	備　考
			実長（m）	柱間寸法(m)	実長（m）	柱間寸法(m)			
1	4 × 3	南北	8.80 + α	1.60 ～ 2.60	5.50	1.30 ～ 1.50	35.59 + α	5C 末～ 6C 初	掘立 3・4、SB5、SD1 を切る。
2	（2）× 1	北西−南東	3.18 + α	1.20	2.70	1.20	6.02 + α	6C 後半以降	SB2 を切る。
3	（4）× 3	南北	7.22 + α	1.55 ～ 1.75	5.28	1.35 ～ 1.95	29.55 + α	5C 後半	掘立 6、SD1 を切り、掘立 1 に切られる。
4	（3）× 4	東西	6.50 + α	1.48 ～ 2.22	7.20	2.18 ～ 2.20	50.09 + α	弥生中期後半～後期末	
5	（1）× 2	北西−南東	2.60 + α	2.43 ～ 2.60	3.20	1.57 ～ 1.64	11.59 + α	弥生中期後半～後期末	SD1 を切る。
6	（1）× 1	南西−北東	3.18 + α	2.50	3.20	2.60	6.46 + α	弥生後期後半以降	掘立 3 に切られる。
7	2 × 1	南北	4.67	1.52 ～ 2.28	3.62	2.93	11.97	6C 中頃以降	SB3、SK1・2 を切る。

表５　溝一覧

溝（ＳＤ）	地　区	断面形	規　模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	B ～ C・4 ～ 8	舟底形	14.20 × 0.6 ～ 1.22 × 0.48	南北	黒褐色土	弥生	弥生前期	掘立 1・3・5、SK4、SD2 に切られる。
2	B ～ D・6 ～ 7	逆台形	6.80 × 2.00 ～ 2.60 × 0.46	東西	暗褐色土（砂粒・礫含）	弥生	弥生前期後半	SD1 を切り、SB4 に切られる。

表 6　土坑一覧

土坑（ＳＫ）	地　区	平面形	断面形	規　模（m）長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積（㎡）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	D～E・3～4	不定楕円形	逆台形	2.90 × 1.60 × 0.50	3.41	黒褐色土	弥生須恵	6C 中頃以降	SK2 を切り、掘立 7 に切られる。
2	E・4～5	不定方形	逆台形	3.00 × 1.60 × 0.38	4.75	暗褐色土(砂粒･礫含)	弥生須恵	6C 中頃以降	掘立 7、SK1・3 に切られる。
3	D～F・5	不定楕円形	逆台形	3.86 × 1.56 × 0.23	5.31	褐灰色土	弥生・須恵土師・陶磁器	13C 代	SB5、SK2 を切る。
4	B～D・7～8	不定方形	逆台形	3.80 × 3.60 × 0.22	10.31	暗褐色土(砂粒･礫含)	弥生	弥生後期後半	SD1 を切り、SB4 に切られる。
5	E・8	不定方形	逆台形	2.00 + α × 2.10 × 0.65	3.35	暗褐色土(砂粒･礫多含)	弥生	弥生終末	SP252 に切られる。
6	F・8	方形	舟底形	2.70 × 0.40 + α × 0.45	0.77	黒褐色土	弥生須恵・土師	弥生中期以降	
7	B・6	円形	逆台形	0.90 × 0.95 × 0.32	0.63	暗褐色土	弥生須恵	古墳後期	
8	F・3	不定楕円形	逆台形	1.43 × 1.10 × 0.05	1.21	褐灰色土		古墳時代	
9	A～B・8	不定長方形	逆台形	3.00 + α × 0.56 + α × 0.10	1.21	灰褐色土(砂粒少含)		古代	
10	F・3～4	楕円形	逆台形	1.80 × 1.40 × 0.33	2.05	暗褐色土	弥生	弥生後期	SB3、SP328 に切られる。
11	D～E・6～7	不定楕円形	舟底形	1.10 × 0.70 + α × 0.28	0.84	暗褐色土(砂粒･礫含)	土師	7C 代	
12	F・3	不明	逆台形	0.38 + α × 0.10 + α × 0.32	0.02	暗褐色土	弥生須恵・土師	14C 以降	SB3 を切る。

表 7　柱穴一覧

柱穴(SP)	地　区	平面形	規　模（m）長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
337	F・5～6	楕円形	0.63 × 0.48+ α × 0.45	黒褐色土（砂粒混）	須 恵	6C 末～7C 前半	

表 8　性格不明遺構一覧

性格不明遺構（ＳＸ）	地　区	平面形	断面形	規　模（m）長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積（㎡）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	D・8	不定長方形	舟底形	1.62 × 0.54 ～ 0.90 × 0.20	1.22	暗褐色土(砂粒含)	弥生須恵	古墳時代	
2	D～E・8	不定長方形	舟底形	1.42 × 0.46 ～ 0.64 × 0.24	0.75	暗褐色土(砂粒・礫含)	弥生	弥生時代	SP257 に切られる。

表 9　掘立 4 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（㎝）	形 態・施 文	調　整		色調（外面）（内面）	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	鉢	底径 (10.4) 残高 6.6	平底。	ナデ	マメツ	黒褐色 にぶい橙色	石・長(1～2) 金 ○	P5 煤付着	

表 10　SB6 出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量（㎝）	形 態・施 文	調　整		色調（外面）（内面）	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
2	壺	口径 (14.2) 残高 23.4	複合口縁壺。口縁端部は内傾。	口・頸 ハケ→ナデ 胴 タタキ→ハケ	ハケ→ナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ◎ 金・赤		8
3	壺	残高 24.2	1/6 の残存。	ハケ→ナデ	ハケ 底 ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3)赤 ◎		
4	鉢	口径 (37.4) 残高 25.5	外反口縁。口縁端部は「コ」字状。大型品。	口 ハケ→ヨコナデ 胴 タタキ→ハケ	口 ハケ→ヨコナデ 胴 ハケ→ミガキ	にぶい橙色・橙色 橙色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	8
5	鉢	口径 10.0 器高 7.0	直口口縁。口縁端部は「コ」字状。ほぼ完形。	ハケ ナデ	ミガキ ナデ	にぶい橙色 明赤褐色	石・長(1～3) ◎		8
6	甕	底径 (6.0) 残高 3.2	平底。	ハケ→ナデ 底 ナデ	ナデ	褐灰色 灰黄褐色	石・長(1～2) ◎		
7	甕	底径 (5.8) 残高 3.3	わずかに上げ底。	ミガキ・ナデ	ナデ	黒褐色・橙色 褐灰色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
8	甕	底径 (5.2) 残高 3.6	上げ底。	ハケ→ナデ 底 ナデ	ナデ	橙色・灰褐色 灰褐色	石・長(1～5) ◎		
9	甕	底径 (4.8) 残高 4.1	上げ底。	胴 マメツ 底 ナデ	ナデ	にぶい橙色 赤褐色	石・長(1～3) ◎		
10	壺	底径 (5.0) 残高 4.2	平底。	ハケ→ナデ 底 ナデ	ナデ	灰黄褐色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) ◎		
11	壺	底径 (3.8) 残高 3.7	平底。	工具によるナデ	工具によるナデ	橙色 灰黄褐色	石・長(1～2) ◎		

SB6 出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
12	壺	底径 3.6 残高 2.5	平底。	ハケ (底) ナデ	ハケ	橙色 灰褐色・にぶい橙色	石・長(1～5) ◎		
13	甕	残高 3.2	内湾口縁。口縁端部は内傾。	ヨコナデ？	ヨコナデ？	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) ◎		
14	甕	口径 (19.2) 残高 4.1	直立口縁。口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 にぶい赤褐色	石・長(1～3) ◎		
15	高坏	残高 7.0	柱裾部は「ハ」の字状に外反。	ナデか？	マメツ (絞り痕)	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) ◎		
16	甑	口径 (21.6) 残高 (4.2)	口縁端部は面をなす。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長(1) ◎		
17	甑	口径 (28.2) 残高 12.0	口縁端部は「コ」字状。	ナデ(押圧痕)	ナデ	灰黄褐色 にぶい橙色	石・長(1～3) ◎		8

表 11　SK4 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
18	甕	口径 (13.9) 残高 6.6	「く」の字状口縁。口縁端部は先細り。	ナデ ハケ	ハケ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長(1～2)金 ◎		9
19	壺	口径 (10.8) 残高 6.0	直口壺。口縁端部は面をなす。	ハケ	ハケ(工具痕) ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長(1～6)金 ◎		
20	壺	口径 (8.0) 残高 3.4	直口壺。小片。	ミガキ	ヨコナデ ミガキ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1～2.5) ◎		
21	壺	口径 (7.8) 残高 6.8	長頸壺。櫛描き細沈線文3条+38条、有軸羽状文あり。	ミガキ	ヨコナデ ハケ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) ◎		9
22	壺	残高 0.9	ヘラ状工具による線刻あり。	ハケ	ナデ ハケ	にぶい褐色 灰黄褐色	石・長(1～3)金 ◎	線刻	9
23	鉢	残高 18.8	貼付凸帯。凸帯上に斜格子目文あり。	ハケ	(頸) ハケ (胴) ハケ→ミガキ	橙色 橙色	石・長(1～5)金 ◎	黒斑	9
24	高坏	口径 (24.0) 残高 1.7	櫛描き波状文5条。	ヨコナデ・マメツ (ミガキ痕)	マメツ (ミガキ痕)	橙色 橙色	石・長(1～2)金 ◎		9
25	器台	口径 (42.8) 残高 1.6	小片。	マメツ (ハケ痕)	ハケ→ナデ ヨコナデ	黄橙色 橙色	石・長(1～3)金 ○		
26	支脚	底径 (13.4) 残高 5.8	中空。	ナデ(押圧痕)	ナデ(指頭痕)	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3)金 ◎		
27	甕	底径 3.0 残高 8.1	平底。	ミガキ(一部ハケ痕) ナデ	ミガキ ナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
28	壺	底径 (5.0) 残高 6.2	平底。	ハケ・ナデ (底) ミガキ	ナデ ミガキ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
29	鉢	底径 4.2 残高 3.5	突出する平底。	ハケ・ヨコナデ ナデ(工具痕)	ハケ ナデ	にぶい赤褐色 橙色	石・長(1～5)金 ◎		
30	鉢	底径 3.4 残高 4.2	突出部をもつ。わずかに上げ底。	ハケ ナデ	ハケ ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	9

表 12　SK5 出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
31	甕	口径 17.2 残高 13.9	「く」の字状口縁。	(口) ハケ→ヨコナデ (胴) タタキ→ハケ	ヨコナデ・ハケ ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3)金 ○	黒斑	9
32	甕	口径 (13.7) 残高 6.7	「く」の字状口縁。 口縁端部は「コ」字状。	ヨコナデ ハケ→ナデ	ヨコナデ・ナデ ケズリ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1～4) ◎		
33	甕	口径 (15.9) 残高 6.9	「く」の字状口縁。	ヨコナデ 板状工具によるナデ	ヨコナデ・ナデ ヘラケズリ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ◎		9
34	甕	口径 (14.6) 残高 4.9	「く」の字状口縁。	ナデ	ハケ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) ◎		
35	甕	口径 (14.6) 残高 2.9	口縁端部を上方に拡張。吉備系。	ヨコナデ (一部ハケ痕)	ヨコナデ ナデ	黒褐色 黒褐色	石・長(1～2) ◎		9
36	甕	残高 12.3	1/4 残存。	タタキ	ハケ→ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～5) ◎		
37	壺	口径 26.8 器高 41.4 底径 7.8	広口壺。櫛描き波状文5条+山形文+刻目凸帯。	ヨコナデ ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ ナデ	橙色・褐色 橙色・にぶい橙色	石・長(1～3) ◎	黒斑	10
38	壺	口径 25.8 残高 9.4	広口壺。 円形浮文5ヶ+櫛描き波状文9条。	ヨコナデ ハケ→ミガキ	ヨコナデ ハケ→ミガキ	橙色 灰黄色・橙色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	9
39	壺	口径 24.2 器高 30.6 底径 6.9	広口壺。口縁端面に櫛状工具による刻目あり。	(頸) ハケ→ヨコナデ (胴) ハケ→ミガキ (底) タタキ・ナデ(小口痕)	ハケ→ミガキ ナデ(指頭痕)	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ◎		10

SK5 出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
40	壺	残高 4.9	複合口縁壺。	ヨコナデ ハケ	ヨコナデ ハケ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ◎		
41	壺	残高 2.3	複合口縁部。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎		
42	壺	底径 9.4 残高 50.7	平底。大型品。	ハケ→ミガキ (底) ナデ	ハケ	にぶい赤褐色 黒褐色・褐灰色	石・長(1～5) ◎		10
43	壺	底径 7.2 残高 32.4	広口壺の底部。突出する平底。	ハケ→ミガキ (底) ナデ	ナデ ハケ	浅黄橙色・橙褐色 褐色	石・長(1～4) ◎		10
44	壺	底径 1.2 残高 18.2	小さな平底。	ハケ→ミガキ (底) ナデ(工具痕)	ハケ→ナデ	橙色 灰黄褐色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
45	壺	残高 11.1	平底。	タタキ→ハケ (工具痕)	ハケ 工具によるナデ	橙色・にぶい橙色 橙色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
46	壺	残高 9.5	平底。	(胴) タタキ→ハケ (底) ナデ	ハケ	明褐灰色・褐灰色 暗褐灰色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
47	鉢	口径 21.7 器高 8.6	直口口縁。1/2 残存。	ヨコナデ ハケ・ナデ	ヨコナデ・ナデ ハケ→ミガキ	橙色 橙色	石・長(1～4)金 ◎	黒斑	10
48	鉢	底径 4.6 残高 4.2	平底。	タタキ→ハケ・ミガキ (底) ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	にぶい橙色 灰黄褐色	石・長(1～3) ◎		

表 13　SK6 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
49	壺	口径 (18.8) 残高 1.7	広口壺。口縁端部は上方に拡張し、凹線文 3 条を施す。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ (マメツ)	にぶい橙色 橙色	石・長(1～4) ◎		

表 14　SD2 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
50	甕	口径 (18.8) 残高 10.1	ヘラ描き沈線文 2 条＋刻目。	ヨコナデ・ハケ目 (頸) ハケ痕	ヨコナデ ナデ(指頭痕)	褐色 にぶい黄褐色	石・長(1～3)金 ○		8

表 15　掘立 1 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
51	坏身	残高 2.4	小片。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ◎	P4	
52	高坏	底径 (8.2) 残高 2.2	透かしあり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	P7	8
53	支脚	口径 (6.7) 器高 3.9 底径 (6.0)	沓形。1/2 残存。	ナデ・指頭痕	ナデ・指頭痕	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～4) ◎	P1	8
54	甕	底径 (3.2) 残高 2.7	上げ底。	ハケ ナデ	ナデ(工具痕)	にぶい橙色 橙色	石・長(1～2) ○	P9	

表 16　掘立 3 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
55	高坏	残高 3.7	長方形状透かし 3 方向。	カキメ	回転ナデ ナデ	灰色 灰色	石・長(1～3) ◎	P4	

表 17　SB1 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
56	甕	口径 (26.0) 残高 7.7	外反口縁。	(口・胴) マメツ (頸) ナデ・ヨコナデ	マメツ (頸) ナデ	茶色 茶色	石・長(1～4) ○		7
57	甕	口径 (17.7) 残高 3.9	「く」の字状口縁。	ヨコナデ ハケ	ヨコナデ ハケ	茶色 茶褐色	石・長(1～3)金 ◎		
58	甕	底径 (2.5) 残高 3.9	尖底。	タタキ ハケ→ナデ	ナデ	褐色・暗褐色 褐色・茶褐色	石・長(1～2) ◎		
59	椀	口径 (11.4) 器高 5.3	口縁端部は丸い。1/2 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙褐色・乳褐色 橙褐色	石・長(1～3)金 ◎		7
60	甑	残高 10.8	把手部。断面円形。	ナデ	ナデ	暗茶色・橙褐色 橙褐色・暗茶色	石・長(1～2)金 ◎		

表 18　SB1 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
61	砥石	完形	砂岩	43.8	13.15	7.3	6,800		7

表 19　SB2 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
62	甕	口径 (13.4) 残高 6.1	内湾口縁。口縁端部は内傾。	ヨコナデ ハケ	ヨコナデ ナデ (指頭痕)	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1～3) ○		7
63	坏蓋	口径 (10.8) 残高 2.7	断面三角形状の鋭い稜。口縁端部は内傾。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰黒色・灰色 灰黒色	密 ◎		7
64	壺	残高 5.5	広口壺。貼付凸帯上に斜格子目文。	マメツ	ナデ？	乳橙褐色 茶色	石・長(1～2) ◎		
65	壺	底径 (11.6) 残高 3.4	平底。	ヨコナデ ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) 金 ◎		

表 20　SB4 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
66	坏蓋	口径 (11.9) 残高 3.3	口縁端部は尖り気味。	ⓘ 回転ナデ ㊇ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰黒色 灰色	密 ◎		
67	坏蓋	残高 3.4	断面三角形状の鋭い稜。	ⓘ 回転ナデ ㊇ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色・暗灰色 青灰色	密 ◎		
68	坏身	残高 2.2	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色・灰黒色 青灰色	密 ◎		
69	甕	残高 3.2	内湾口縁。口縁端部は内傾。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ (マメツ)	橙褐色 暗茶色	石・長(1～2) ○		
70	甕	口径 (17.0) 残高 3.5	内湾口縁。口縁端部は内傾。	マメツ	ヨコナデ	明褐色 茶褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
71	壺	口径 (19.4) 残高 3.7	広口壺。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ (マメツ)	乳白色・乳茶色 乳白色・乳茶色	石・長(1～2) ◎		
72	壺	口径 (13.3) 残高 3.0	広口壺。口縁端面に凹線文 4 条。	ヨコナデ？	ヨコナデ	暗茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) 金 ◎		
73	壺	残高 4.3	複合口縁壺。口縁端部は内傾。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡乳褐色・乳茶色 淡乳褐色・乳茶色	石・長(1～2) 金 ◎		
74	甕	底径 (4.2) 残高 1.7	わずかに上げ底。	ヨコナデ	ナデ	暗赤褐色 暗灰色	石・長(1～2) 金 ◎		
75	甕	底径 (8.4) 残高 3.5	平底。	ナデ	ナデ (指頭痕)	にぶい赤褐色 にぶい褐色	石・長(1～3) ◎		

表 21　SB5 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
76	坏蓋	口径 (12.5) 残高 2.4	小片。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 青灰色	密 ◎		
77	支脚	底径 (10.6) 残高 3.0	脚裾は外反して開く。 器壁が厚い。	ナデ (押圧痕)	ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
78	鉢	底径 (3.8) 残高 3.6	平底。	ナデ	ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長(1～4) ◎	黒斑	

表 22　SK1 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
79	甕	口径 (15.0) 残高 4.2	「く」の字状口縁。	タタキ (指頭痕)	ハケ ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～4) 金 ◎		

表 23　SK2 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
80	坏身	残高 3.2	立ち上がり端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		8

表 24　SK11 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
81	椀	口径 (19.2) 残高 3.8	口縁端部は尖り気味に丸い。	マメツ	マメツ (一部にヨコナデ)	橙色 橙色	石・長(1～1.5) ○		

表 25　焼土 2 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
82	坏身	器高 3.7 底径 9.0	立ち上がり端部は尖り気味。 底部に焼け歪みあり。ほぼ完形。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	灰色 灰黄色	石・長(1～3) ◎	SB5	7
83	坏身	器高 3.7	立ち上がり端部は尖り気味。 ほぼ完形。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SB5	7

表 26　柱穴 337 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
84	坏蓋	口径 (11.2) 残高 2.3	小片。	口 回転ナデ→ナデ 天 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
85	坏蓋	口径 (14.4) 残高 3.5	小片。	口 回転ナデ 天 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
86	坏身	残高 3.1	立ち上がり端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		8

表 27　焼土 1 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
87	坏蓋	口径 9.6 かえり径 7.8 器高 2.7	乳頭状つまみ。	天 回転ヘラケズリ 口 回転ナデ	天 回転ナデ 口 ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SB4	7
88	坏蓋	口径 11.8 かえり径 8.8 器高 2.6	宝珠状つまみ。完存品。	天 回転ヘラケズリ 口 回転ナデ	天 ナデ 口 回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SB4	7

表 28　SK3 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
89	土釜	残高 7.1	脚部片。断面三角形。	ナデ(押圧痕)	ナデ	にぶい黄褐色 褐灰色	石・長(1～2) 金 ◎		

表 29　SK12 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
90	坏	口径 10.1 器高 2.4 底径 6.2	ほぼ完形。	ヨコナデ 底 回転糸切り	ヨコナデ	乳茶褐色 乳橙褐色	精 ◎		9
91	坏	口径 10.7 器高 2.3 底径 6.4	ほぼ完形。	ヨコナデ 底 回転糸切り	ヨコナデ 底 ナデ	淡橙褐色・乳茶色 乳橙褐色	精 ◎	黒斑	9
92	坏	口径 10.3 器高 2.2 底径 6.7	ほぼ完形。	ヨコナデ 底 回転糸切り	ナデ ヨコナデ	乳橙褐色・乳茶色 乳茶色・淡乳褐色	長(1) ◎		9
93	坏	口径 10.7 器高 2.3 底径 6.2	底部と体部を一部欠損。	ヨコナデ 底 回転糸切り	ヨコナデ	乳橙褐色・乳茶色 乳橙褐色	精 ◎	黒斑	9
94	坏	口径 10.4 器高 2.5 底径 6.8	ほぼ完形。	ヨコナデ 底 回転糸切り	ヨコナデ	乳橙褐色・乳褐色 乳橙褐色・乳褐色	精 ◎		9

表 30　地鎮遺構出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
95	坏	口径 11.2 器高 3.4 底径 6.4	1/2 の残存。	ヨコナデ 底 回転ヘラ切り	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	密・赤 ◎		11
96	坏	口径 11.2 器高 3.4 底径 6.7	口縁部 1/3 の欠損。	ヨコナデ 底 回転ヘラ切り	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	密・赤 ◎		11
97	坏	口径 11.2 器高 3.6 底径 (5.7)	1/2 の残存。	ヨコナデ 底 回転ヘラ切り	ヨコナデ	にぶい橙色 橙色	密・赤 ◎		11
98	甕	残高 9.0	丸底。	タタキ→ハケ	ナデ(指頭痕)	黒褐色 黒褐色	石・長(1～3) 金 ○		11
99	甕	残高 6.6	胴部片。	回転カキメ	円弧タタキ	黄灰色 灰色	密 ◎		

表 31　地鎮遺構出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
100	礫	完形	砂岩	7.35	5.2	3.45	178.54		11
101	礫	完形		6.7	5.65	3.05	161.05		11
102	礫	完形		6.25	4.4	3.2	118.73		11
103	礫	完形		5.8	5.4	3.05	143.27		11

表 32　第Ⅳ層出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調	胎土	備考	図版
				外面	内面	（外面）（内面）	焼成		
104	甕	口径 (17.0) 残高 4.0	「く」の字状口縁。	口 ヨコナデ 胴 ハケ	口 ハケ 胴 ヘラケズリ	橙色 橙色	石・長(1) ◎		
105	甕	残高 2.5	外反口縁。	口 ヨコナデ・ハケ	ハケ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) 金 ◎		
106	甕	口径 (13.2) 残高 3.7	外反口縁。	ヨコナデ ハケ	ヨコナデ ナデ	褐色 にぶい黄橙色	石・長(1～5) 金 ◎		
107	甕	口径 (15.5) 残高 4.3	貼付凸帯。口縁端部と凸帯上に刻目あり。	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	明赤褐色 灰黄色	石・長(1～6) ◎		11
108	甕	残高 8.35	胴部片。	ナデ・タタキ (ハケ痕)	ナデ・マメツ (ハケ痕)	橙色 橙色	石・長(1～5) ○		
109	甕	残高 11.9	胴部片。	ハケ	ハケ→ナデ	橙色 橙色	石・長(1～4) ◎	黒斑	
110	甕	底径 (4.3) 残高 4.5	わずかに上げ底。	ハケ	板ナデ？ (工具痕あり)	淡茶色・淡褐色 灰色・黒色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
111	甕	底径 (5.0) 残高 4.4	平底。	ナデ	ナデ	褐灰色 褐灰色	石・長(1～2) ◎		
112	壺	口径 (16.5) 残高 7.7	広口壺。口縁端部は「コ」字状。	ハケ	ハケ→ナデ	にぶい橙褐色 にぶい橙褐色	石・長(1～4) ◎　金・赤		
113	壺	口径 (27.0) 残高 10.1	口縁端面に羽状文。頸部に貼付凸帯、凸帯上に斜格子目文あり。	ヨコナデ 頸 ハケ→ミガキ	マメツ(ミガキ痕) ハケ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(1～4) 金 ◎		11
114	壺	口径 (7.0) 残高 6.9	長頸壺。	ヨコナデ ミガキ	ヨコナデ・ハケ→ ナデ・ヨコナデ	明赤褐色 明赤褐色	密・金 ◎		
115	壺	残高 3.6	複合口縁壺。半截竹管文あり。	マメツ(ハケ痕)	ハケ	橙褐色・茶褐色 淡橙褐色	石・長(1～2) ◎		11
116	壺	残高 3.3	複合口縁壺。半截竹管文と羽状文あり。	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色 乳茶褐色	石・長(1～3) ◎		11
117	壺	残高 4.6	貼付凸帯上に斜格子目文あり。	ハケ	ハケ ヨコナデ	橙褐色 橙褐色	石・長(1～3) ◎		
118	壺	残高 4.1	貼付凸帯上に斜格子目文あり。	ハケ	ナデ ハケ	淡茶褐色 橙褐色・茶褐色	石・長(1～3) ◎		
119	壺	底径 (4.0) 残高 3.5	平底。	ハケ 底 ナデ	ナデ (工具痕？)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) ◎		
120	壺	底径 (4.8) 残高 3.8	平底。	ナデ	ナデ(指頭痕)	にぶい褐色 にぶい赤褐色	石・長(1～5) ◎		
121	壺	底径 3.4 残高 5.5	平底。	ハケ ナデ	ハケ ケズリ	にぶい褐色 にぶい橙色	石・長(1～4) ◎	黒斑	
122	高坏	口径 (27.4) 残高 4.3	坏部中位に稜あり。	坏 ヨコナデ・ハケ 底 ハケ	坏 ナデ(ハケ痕) 底 ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) 金 ◎		
123	高坏	残高 10.0	円孔4ヶを看取。	ハケ→ミガキ (マメツぎみ)	ナデ(しぼり痕)	橙褐色 橙褐色	石・長(1～3) ◎		
124	高坏	残高 8.9	脚裾部は「ハ」の字状に外反。	ミガキ	マメツ 底 ハケ	褐色・暗褐色 褐色・乳褐色	石・長(1～2) 金 ◎		11
125	鉢	口径 (30.0) 残高 7.4	片口鉢。	ハケ→ヨコナデ・ タタキ→ハケ	ミガキ	にぶい橙褐色 にぶい橙褐色	石・長(1～4) 金 ◎		11
126	鉢	底径 2.1 残高 7.0	小型品。1/2の残存。	ハケ	ナデ(押圧痕) 脚裾 ハケ	茶色・淡黒色 茶褐色・暗茶褐色	石・長(1～2) ◎		11
127	鉢	底径 (17.4) 残高 2.1	脚付鉢の脚部。円孔を看取。	ミガキ 裾端面 ヨコナデ	ハケ	橙色 橙色	石・長(1～2) ◎		
128	鉢	底径 (6.4) 残高 3.8	突出部をもつ上げ底。	ナデ(指頭痕)	ナデ(小口痕)	にぶい赤褐色 にぶい橙色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
129	鉢	底径 4.6 残高 2.9	突出部をもつ上げ底。	ハケ ナデ	ナデ	褐茶色 茶色・黒色	石・長(1～2) 金 ◎	黒斑？	
130	鉢	底径 (5.4～5.8) 残高 3.1	上げ底。	ケズリ	ナデ	橙色 にぶい褐色	石・長(1～2) ◎		

第Ⅳ層出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
131	鉢	底径 (5.8) 残高 3.1	突出する平底。	ナデ (押圧痕)	ナデ	灰黄褐色 にぶ黄褐色	石・長(1 ～ 2) ◎		
132	鉢	底径 (3.0) 残高 1.5	小さな平底。	ミガキ	ナデ	にぶい橙色 灰褐色	石・長(1 ～ 2) 金 ◎		
133	器台	残高 8.6	径 2.1cm 大の円孔。	ハケ	ハケ→ナデ	灰黄褐色・褐灰色 にぶい赤褐色	石・長(1 ～ 2) ◎	黒斑	
134	支脚	残高 12.7	「U」字形支脚。	ナデ (指頭痕) 工具痕？	ナデ (指頭痕) 工具痕？	灰茶色・灰褐色 灰色・灰白色	石・長(1 ～ 4) 金 ◎		
135	支脚	残高 (5.8)	角状の突起部。	ナデ		灰褐色・橙色	石・長(1 ～ 3) ◎		
136	支脚	残高 4.6	角状の突起部。	ナデ		明褐灰色・橙色	石・長(1 ～ 3) ◎		
137	支脚	底径 9.6 残高 7.9	中空。	ナデ (押圧痕)	ナデ	にぶい赤褐色 褐灰色	石・長(1 ～ 2) ◎		
138	支脚	底径 (11.1) 残高 6.2	脚端部は「コ」字状。	ミガキ (裾部)ヨコナデ	ヨコナデ (しぼり痕)	乳白褐色・褐色 乳白褐色	石・長(1 ～ 3) ◎		
139	支脚	底径 (15.6) 残高 3.0	小片。	タタキ？ ナデ	ナデ (押圧痕)(布目圧痕)	灰褐色 黒褐色	石・長(1 ～ 4) 金 ◎		

表 33　第Ⅲ層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
140	甕	口径 (15.3) 残高 4.0	内湾口縁。口縁部は内側に肥厚。	ヨコナデ	マメツ ナデ	橙褐色 橙色	石・長(1 ～ 2) ○	煤付着	
141	甕	口径 (23.0) 残高 3.9	内湾口縁。口縁端部は内側に肥厚。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 橙褐色・灰黄褐色	石・長(1 ～ 3) 金 ◎		
142	鉢	口径 (30.0) 残高 5.4	出雲系。大型鉢。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		
143	高坏	口径 (15.8) 残高 3.5	小片。	丁寧なナデ	ヨコナデ	橙色・にぶい橙色 橙色・にぶい橙色	石・長 (1) ◎		
144	高坏	口径 (14.8) 残高 3.8	小片。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1) ◎		
145	甑	残高 1.3	円孔 3 ヶを看取。	ハケ→ナデ	ナデ	黒褐色 橙色	石・長 (1) ◎	煤付着	
146	坏身	器高 4.4 底径 1.6	ほぼ完形。立ち上がり端部は尖る。	(口) 回転ナデ (底) 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色・黒色 青灰色	密 ◎		12
147	坏身	器高 4.0 底径 (6.0)	立ち上がり端部は尖り気味。平底風。	(口) 回転ナデ (底) 回転ヘラケズリ	回転ナデ	黒灰色・灰色 灰色	密 ◎		
148	坏身	残高 2.5	立ち上がり端部は尖り気味。	(口) 回転ナデ (底) 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
149	坏	口径 9.1 器高 3.9 底径 (1.6)	坏部下位に沈線状の凹みが巡る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 (釉) 淡緑色 灰白色	密 ◎	自然釉	
150	坏	底径 (9.3) 残高 1.2	「ハ」の字状に開く高台。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
151	坏	底径 (9.3) 残高 1.6	「ハ」の字状に開く高台。	回転ナデ 工具によるナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
152	高坏	底径 (8.1) 残高 5.3	長方形状の透かしあり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰黒色	密 ◎		
153	高坏	底径 (8.2) 残高 3.9	長方形状の透かしあり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表 34　第Ⅱ層出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
154	坏	口径 (11.2) 器高 2.4 底径 6.9	3/4 の残存。	ヨコナデ・ナデ (底) 回転糸切り	マメツ	淡乳褐色 乳白褐色	精 ◎		
155	坏	底径 (6.0) 残高 2.0	小さく突出する底部。	ヨコナデ (底) ナデ	ヨコナデ ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		
156	坏	底径 5.0 残高 1.4	小片。	ヨコナデ (底) ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1 ～ 2) ◎		
157	皿	口径 (7.8) 器高 2.0 底径 (5.3)	1/2 の残存。	ヨコナデ (底) 回転糸切り	ヨコナデ	淡橙褐色・乳茶色 乳橙褐色	密 ◎		
158	皿	口径 (7.9) 器高 1.9 底径 (5.3)	小片。	マメツ (ヨコナデ)	ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	精 ◎		
159	皿	口径 (7.5) 器高 2.2 底径 (5.1)	1/3 の残存。	ヨコナデ (底) 回転糸切り	ヨコナデ	淡橙褐色・乳茶色 乳橙褐色	石 (1) ◎		

第Ⅱ層出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
160	土釜	残高 13.3	脚部片。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ◎		
161	土釜	残高 8.2	脚部片。	ナデ	ナデ	茶色・褐灰色 茶色・灰茶色	石・長(1～3) ◎		
162	羽釜	残高 7.2	瓦質土器。	ヨコナデ・ハケ	マメツ (ハケ痕)	灰色 にぶい黄色	石・長(1～3) ○		12
163	椀	底径 (8.8) 残高 2.7	緑釉陶器。須恵質。	回転ナデ	施釉	乳白褐色 明緑色	密 ◎	緑釉	12
164	椀	底径 (7.4) 残高 1.2	緑釉陶器。須恵質。	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	灰色・暗オリーブ色 灰色・暗オリーブ色	石・長(1～2) ◎	緑釉	12
165	壺	底径 (16.1) 残高 10.3	備前焼。	ヨコナデ・ナデ (施釉)	ヨコナデ	暗赤灰色・灰色 灰色	石・長(1～5) ◎		
166	甕	口径 (38.6) 残高 7.4	備前焼。	ヨコナデ ナデ	(口) ヨコナデ (肩) 工具によるナデ	暗灰緑色・灰緑色 赤褐色	密 ◎	自然釉	
167	甕	口径 (38.7) 残高 5.0	亀山焼。	ハケ→ヨコナデ マメツ	ヨコナデ・マメツ (ハケ痕)	黒灰色 黒灰色	石・長(1～2) ○		
168	瓦	残長 17.3 厚さ 2.5	平瓦。	細縄叩き	布目痕 罫引き痕	灰白色 灰白色	密 ◎		12
169	土錘	長さ 3.9 幅 1.5	完存品。径 2.5mm 大の孔を穿つ。	マメツ		乳白色	石(1)・金 ○		12

表 35　第Ⅱ層出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
170	砥石	ほぼ完形	石英粗面岩	11.3	3.9	3.8	186.40		12

表 36　トレンチ・地点不明出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
171	鉢	口径 (41.4) 残高 7.7	外反口縁。大型品。	ヨコナデ・ハケ ハケ→ナデ	マメツ (ハケ痕看取)	橙色・にぶい橙色 橙色	石・長(1～5)金 ◎		
172	壺	残高 4.3	貼付凸帯上に斜格子目文あり。	ヨコナデ	ヨコナデ・ハケ	乳橙褐色 灰白色	石・長(1～3) ◎		
173	高坏	残高 9.7	沈線文３条+2条+円孔。	ミガキ	ナデ ヨコナデ	褐色・暗褐色 褐色・暗褐色	石・長(1～4) ◎		12
174	甕	底径 (6.6) 残高 6.3	平底。	ナデ→ハケ	ナデ→板ナデ	にぶい橙色・黒色 にぶい褐色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
175	壺	底径 (9.6) 残高 3.7	平底。	ミガキ	ナデ	暗茶褐色・褐色 暗茶色	石・長(1～3)金 ◎		
176	壺	底径 (4.3) 残高 3.6	平底。	板ナデ	板ナデ	褐色 明褐色	石・長(1～5) ◎		
177	鉢	底径 (4.5) 残高 2.8	ミニチュア。上げ底。	ナデ→ミガキ	ミガキ ナデ→ミガキ	茶褐色・黒色 茶褐色	石・長(1～4)金 ◎	黒斑	
178	甕	口径 (21.6) 残高 5.7	内湾口縁。口縁端部は内傾。	(口) ヨコナデ (胴) ハケ	ヨコナデ→ナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長(1～4)金 ◎		

表 37　SB 群出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
179	甕	口径 (27.9) 残高 2.3	口縁端面に凹線文３条を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶色・暗茶色 茶褐色	石・長(1～4)金 ◎		
180	甕	残高 4.1	口縁端面に刻目。凸帯が削離。	ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	茶色・乳茶色 橙褐色・乳茶色	石・長(1～3)金 ◎		8
181	壺	口径 (15.0) 残高 4.8	広口壺。凹線文３条を施す。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	暗茶褐色 暗褐色・暗茶褐色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
182	壺	口径 (30.4) 残高 4.0	複合口縁壺。櫛描き波状文、17条以上。	ミガキ	ハケ→ヨコナデ	乳茶色・茶褐色 乳茶色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
183	壺	口径 (12.6) 残高 3.2	複合口縁壺。口縁端部は内傾。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長(1～3)金 ◎		
184	壺	残高 4.1	複合口縁壺。	マメツ	ナデ(マメツ)	橙褐色 淡褐色・灰色	石・長(1～4)金 ◎		
185	支脚	残高 4.0	小片。	ナデ(指頭痕)	ナデ(指頭痕)	茶褐色 暗褐色	石・長(1～2) ◎		
186	甕	底径 (6.4) 残高 4.8	くびれをもつ上げ底。	マメツ (ナデ？)	ナデ	暗褐色 淡褐色・褐灰色	石・長(1～3) ◎	黒斑	

SB 群出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
187	甕	底径 (3.9) 残高 5.2	突出部をもつ上げ底。	ナデ	工具によるナデ (底) ナデ	暗茶褐色・暗褐色 暗灰色・茶褐色	石・長(1～5) 金 ◎	黒斑	
188	甕	残高 1.8	平底。	ハケ	板ナデ (底) ナデ	茶褐色・暗茶褐色 茶褐色・灰色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
189	鉢	底径 (3.1) 残高 3.8	突出する平底。	丁寧なナデ	ハケ ナデ	暗灰色 暗茶色	石・長(1～2) 金 ◎		
190	鉢	残高 2.8	突出部をもつ平底。	ナデ ヨコナデ	—	淡橙褐色・橙褐色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
191	甕	口径 (20.9) 残高 5.8	内湾口縁。口縁端部は内傾する面をもつ。器壁は厚い。	(口) ヨコナデ (胴) ハケ	(口) ヨコナデ (胴) ナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長(1～4) ◎		
192	壺	口径 (6.8) 残高 2.5	小片。	マメツ (ナデ？)	マメツ (ナデ？)	橙褐色 橙褐色	密 ◎		
193	坏蓋	残高 4.4	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色・灰黒色 黒灰色	密 ◎		
194	坏	口径 (10.8) 器高 3.0 底径 (7.2)	外反口縁。口縁端部は丸い。	(口) 回転ナデ (胴・底) 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
195	坏身	残高 3.4	小片。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
196	壺	口径 (9.3) 残高 2.5	口縁端面に沈線 1 条あり。	回転ナデ	回転ナデ	赤褐色・灰色 灰白色	密 ◎		
197	壺	口径 (9.4) 残高 1.6	口縁部は方形状に肥厚。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
198	壺	底径 (2.4) 残高 2.2	平底。	手持ちヘラケズリ ナデ	回転ナデ	乳白色 灰色	密 ◎		

表 38　SP 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
199	甕	口径 (17.6) 残高 6.8	「く」の字状口縁。	ハケ→ヨコナデ タタキ→ナデ	ハケ	橙色 橙色	石・長(1～2) ◎	SP329	
200	甕	口径 (14.0) 残高 7.2	外反口縁。	タタキ ナデ	ハケ ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ◎	SP293	
201	壺	口径 (21.2) 残高 5.3	広口壺。	ミガキ	ヨコナデ ナデ	明赤褐色 橙色	石・長(1～2) ◎	SP288	
202	壺	口径 (15.8) 残高 2.9	複合口縁壺。口縁端部は面をなす。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ◎	SP71	
203	壺	口径 (10.6) 残高 3.1	複合口縁壺。口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	明赤褐色 橙色	石・長(1) ◎	SP227 黒斑	
204	蓋	残高 2.3	つまみ部。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) ◎	SP304 黒斑	
205	甕	底径 (3.4) 残高 7.4	小さな上げ底。	ハケ ナデ	ハケ ナデ（指頭痕）	にぶい橙色 橙色・にぶい黄橙色	石・長(1～3) ◎	SP288 黒斑	
206	甕	底径 (5.8) 残高 2.6	上げ底。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) ◎	SP105	
207	鉢	底径 (6.0) 残高 3.9	上げ底。	ミガキ (底) ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ◎	SP329 黒斑	
208	坏	口径 9.5 器高 3.1 底径 7.2	口縁部 1/3 を欠損。	ヨコナデ (底) 回転糸切り	ヨコナデ ナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎	SP376	11
209	坏	口径 (10.0) 器高 3.2 底径 (7.7)	1/4 の残存。	ヨコナデ (底) 回転糸切り	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長(1) ◎	SP376	
210	杯	底径 (5.2) 残高 0.7	小片。	ナデ (底) 回転糸切り	ヨコナデ ナデ	橙色 橙色	石・長(1) ◎	SP300	
211	坏	底径 (6.2) 残高 1.7	底部 1/3 の残存。	ナデ	ヨコナデ ナデ	浅橙色・橙色 橙色	精 ◎	SP215	
212	坏身	残高 3.6	立ち上がり端部は尖り気味。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP47	
213	壺	底径 (5.6) 残高 1.9	長頸壺の底部。	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP161	
214	甕	口径 (11.6) 残高 3.4	口縁端部は内傾。	回転ナデ カキメ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP128	

表 39　SP 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
215	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	1.8	1.6	0.2	0.80	SP345	

第Ⅳ章　樽味四反地遺跡20次調査

第１節　調査の経緯

（１）調査に至る経緯

調査地が所在する石手川中流域左岸では、樽味遺跡（愛媛大学農学部構内）をはじめ、樽味四反地遺跡や樽味高木遺跡、樽味立添遺跡などこれまでに数多くの発掘調査が実施され、縄文時代から中世に至る複合遺跡であることが近年の調査･研究により明らかになってきた。また、古墳時代初頭とされる3棟の大型建物が検出されたことから松山平野において重要な地域であることも明らかになりつつある。

平成15年度に松山市教育委員会事務局文化財課（以下、文化財課）が主体となり、重要遺跡確認調査として樽味地区における試掘調査を実施した。このうちＣ区として実施した試掘調査の結果、溝、柱穴、遺物包含層等が確認された。この結果を受け、文化財課と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（当時の組織名称、以下埋文センター）は協議を重ね、樽味四丁目付近における大型建物群及び関連遺構の有無とその範囲を把握することを主目的とした重要遺跡確認調査を実施することを決定した。

今回の調査は、平成20年度国庫補助事業として文化財課が埋文センターに業務委託し、平成20年7月より開始した。

第 63 図　調査地測量図

（2）調査の経緯

樽味四反地遺跡19次調査地と本調査地は元々1枚の田圃である。遺跡保護のため対象地の全面発掘を行わず、調査区を1区、2区の二つに分けて実施した。また、廃土置き場は前年度に実施した19次調査地側とした。平成20年7月1日、調査地、排土置き場、仮設事務所設置場所の草刈り、安全対策等、調査の諸準備を開始した。7月17日より1区の調査を開始する。重機（バックホー0.25㎥、0.1㎥、不整地運搬車）を使用し、表土層及び包含層を掘削し、土層ごとに遺物を取り上げる。7月22日、1区Ⅲ層上面にて土坑や柱穴等の遺構を検出する。同日、文化財課と埋文センター合同の現地検討会を実施する。7月23日、1区と並行して2区の調査を開始する。7月29日、測量業者（有限会社　四国測量設計）に国家座標軸測量業務を委託し、調査地内に6m四方のグリッドを設定する。7月30日、1区、2区（第一遺構検出面）の検出状況の写真撮影を行う。9月9日、2区北側で竪穴建物跡からカマド検出する。8月12日、1区では遺構測量作業、2区では中世以降の遺構を掘り下げる作業を進める。9月12日、2区中央部（竪穴建物内）大型鉄斧が出土する。9月16日、下條信行先生（愛媛大学名誉教授）、田﨑博之先生（愛媛大学教授）から現地調査指導を受ける。9月27日、一般市民対象の現地説明会を開催し、約130名の方が見学に訪れる。終了後、村上恭通先生（愛媛大学教授）から調査指導を受ける。10月23日、下條信行先生から調査指導を受ける。10月25日、各遺構の最終測量作業を行う。10月27日、1区の終了状況写真を撮影する。10月29日、2区の終了状況写真を撮影する。調査調査地は調査終了後も水田耕作を行うため、遺構は真砂土で保護した後、10月30日より重機を使用して包含層、表土（床土、耕作土）の順に埋め戻し作業を行った。10月31日、全ての埋め戻し作業、田圃戻し（耕作）作業を終了し、発掘調査を終了する。

（3）調査組織

所 在 地：松山市樽味四丁目219番3、220番1の各一部

調査期間：2008（平成20）年7月1日～同年10月31日

調査面積：約418㎡のうち約143㎡

調査担当：財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター調査員　武正　良浩

第2節　層　位

（1）基本層位（第64～66図・80～81図）

調査地は、調査以前は水田として利用されていた。現況では標高39.4m前後を測る。調査地の基本層位は、以下の5層である。

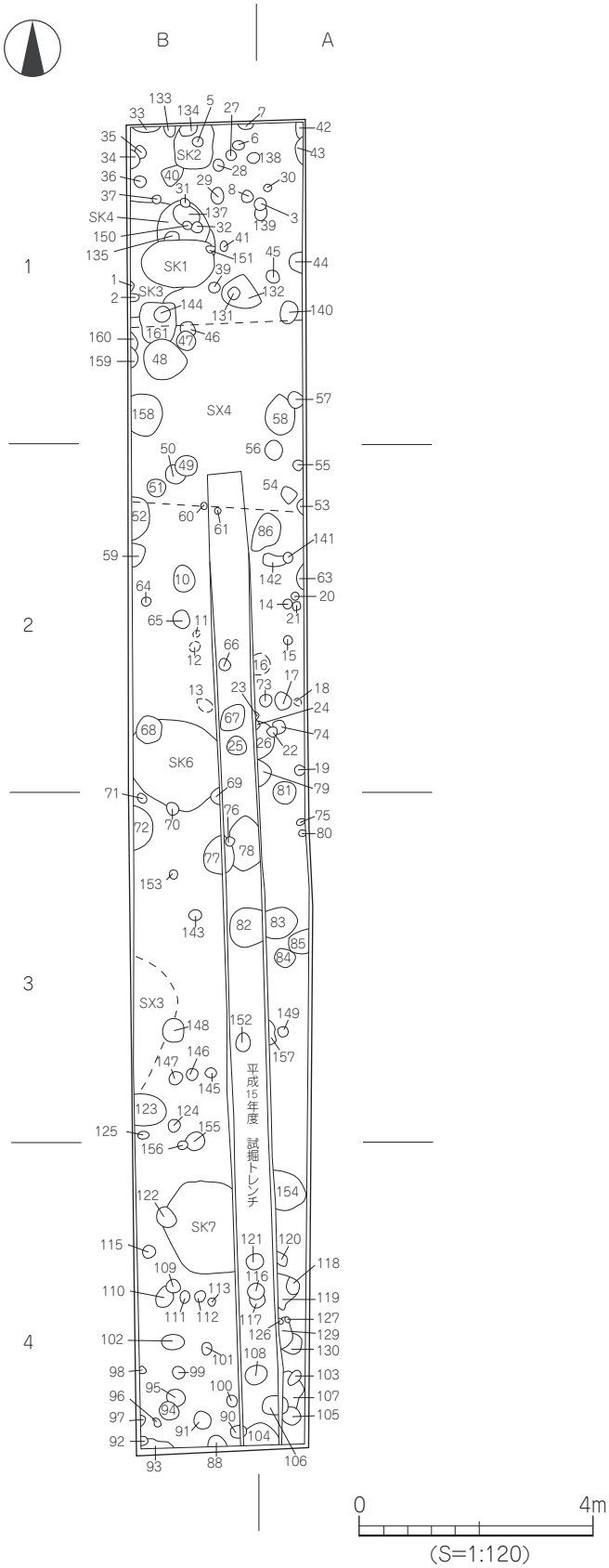
Ⅰ層：近現代の農耕に伴う客土で、土色・土質の違いにより4層に分層される。

Ⅰ①層－灰色〔7.5Y4/1〕土で、水田耕作土である。層厚11～17cm。

Ⅰ②層－黄褐色〔10YR5/6〕土で、水田床土である。層厚4～13cm。

Ⅰ③層－にぶい黄褐色〔10YR5/4〕粘質土で、旧水田耕作土である。層厚2～14cm。

Ⅰ④層－暗灰黄色〔2.5Y4/2〕粘質土で、旧水田床土である。層厚4～14cm。



第64図　1区遺構配置図

Ⅱ層：褐灰色〔5YR5/1〕土で、2区においてみられる。層厚6～18cm。本層中からは、中世の土師器片、陶磁器片等が出土した。

Ⅲ層：暗赤褐色〔5YR3/2〕土で、1区、2区共にみられる。層厚6～20cm。本層中からは、主に古代までの土器、石器等が数多く出土した。

Ⅳ層：黒色〔5Y2/1〕土で、2区においてみられる。層厚6～27cm。本層中からは、少量の弥生土器片や土師器片が出土した。

Ⅴ層：本層上面は、調査における最終遺構検出面である。土色・土質の違いにより2層に分層される。なお、本層上面の標高を測量すると北東側から南西側に向けて緩傾斜をなし、1区北東隅の標高が39.5m、2区南西隅の標高が39.1mとなる。

Ⅴ①層－明赤褐色〔5YR5/8〕粘質土で、1区、2区共にみられる。

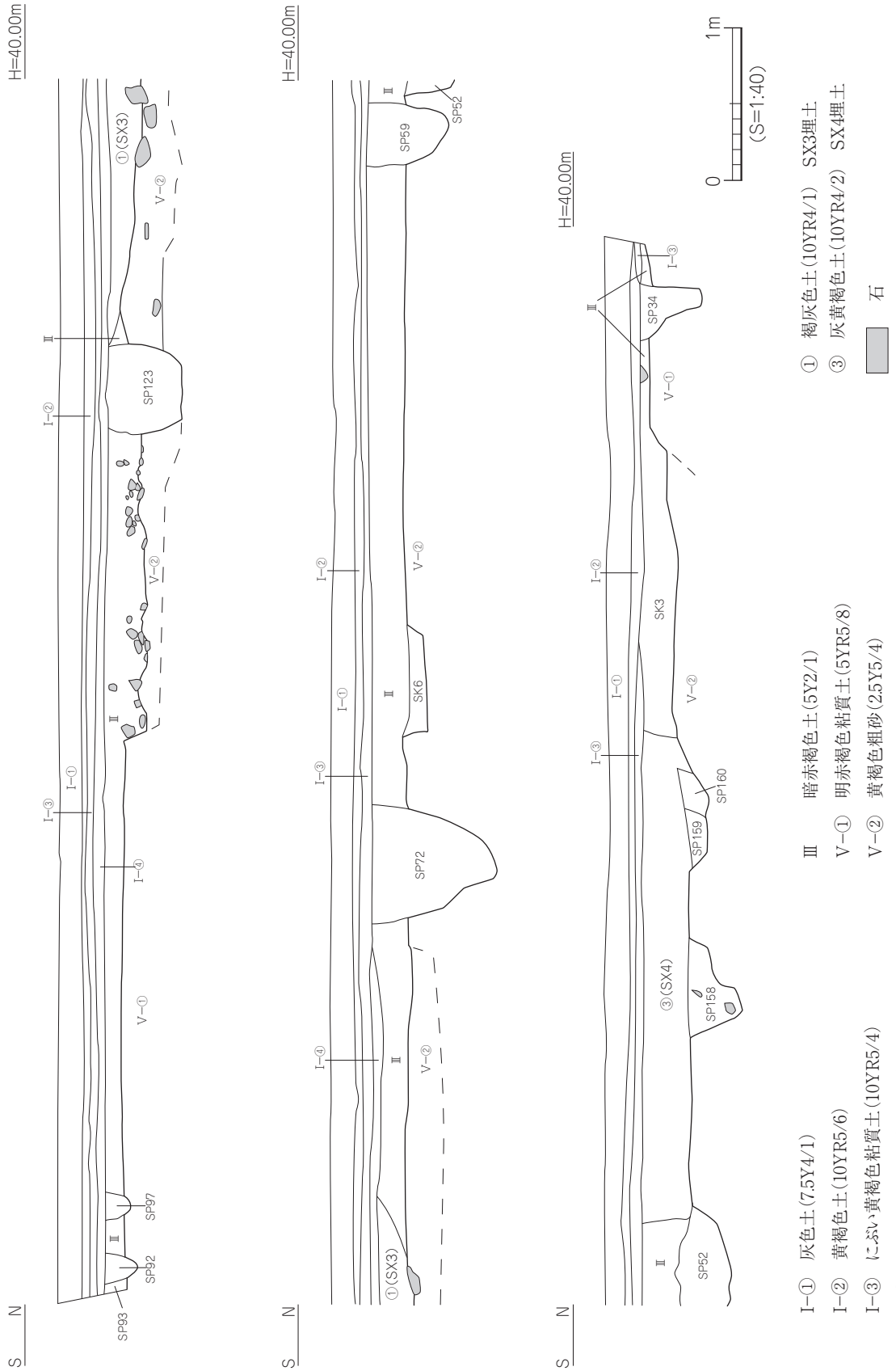
Ⅴ②層－黄褐色〔2.5Y5/4〕粗砂で、1区にみられる。

検出状況や出土遺物から、Ⅳ層は古墳時代、Ⅲ層は古代、Ⅱ層は中世までに堆積したものと考えられる。

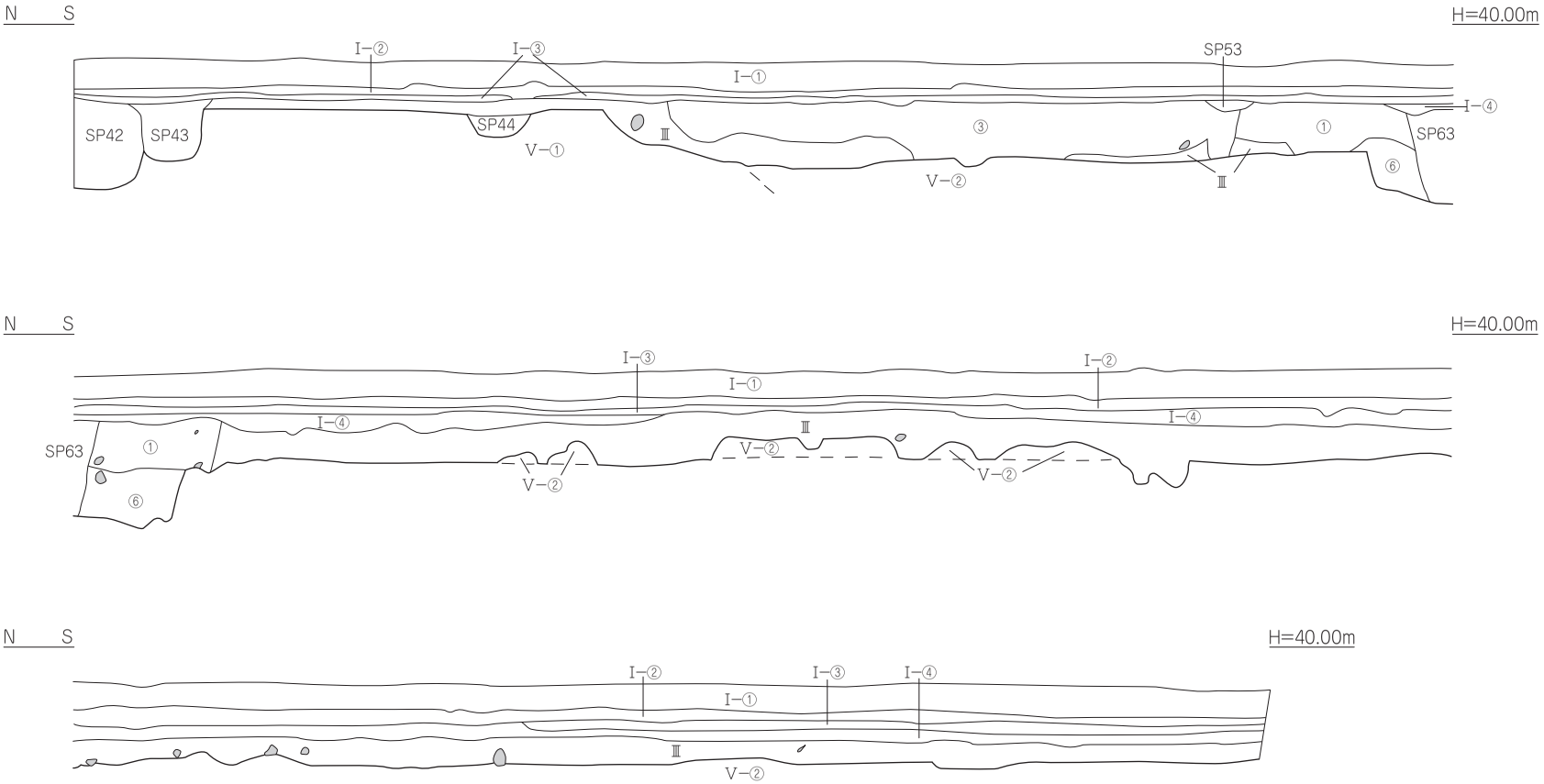
なお、調査にあたり調査区内を6m四方のグリッドに分けた。グリッドは遺構の位置表示や遺物の取り上げ指標等に利用した。

（2）検出遺構・遺物

今回の調査は、1区、2区それぞれ別に遺構番号を付けた。1区で検出した遺構は、土坑7基、柱穴161基、性格不明遺構4基である。2区で検出した遺構は、竪穴建物4棟（弥生～古墳期：1棟、古墳期：3棟）、掘立柱建物1棟、土坑9基、柱穴179基、石組み遺構1基で



第 65 図　1 区調査区　西壁土層図



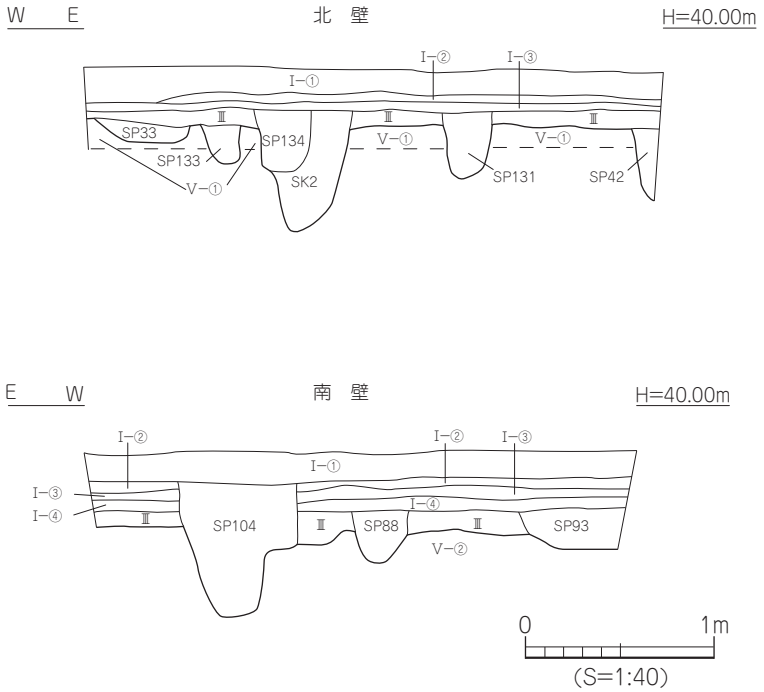
I−① 灰色土(7.5Y4/1)
I−② 黄褐色土(10YR5/6)
I−③ にぶい黄褐色粘質土(10YR5/4)
I−④ 暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2)
Ⅲ 暗赤褐色土(5Y2/1)
V−① 明赤褐色粘質土(5YR5/8)
V−② 黄褐色粗砂(2.5Y5/4)

① 褐灰色土(10YR4/1) SX3埋土
③ 灰黄褐色土(10YR4/2) SX4埋土
⑥ 黒褐色土(7.5YR3/2)

石

0 1m
(S=1:40)

第66図 1区調査区 東壁土層図



I−①　灰色土(7.5Y4/1)
I−②　黄褐色土(10YR5/6)
I−③　にぶい黄褐色粘質土(10YR5/4)
I−④　暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2)
Ⅲ　暗赤褐色土(5Y2/1)
V−①　明赤褐色粘質土(5YR5/8)
V−②　黄褐色粗砂(2.5Y5/4)

第 67 図　1 区調査区　北壁・南壁土層図

ある。

遺物は遺構や包含層、及び重機掘削時に出土したもので、弥生土器（前期～後期）、土師器（古墳～中世）、須恵器（古墳～古代）、陶磁器（備前）、陶磁器、石器、鉄器、土製紡錘車などが出土した。

第３節　１区の遺構と遺物

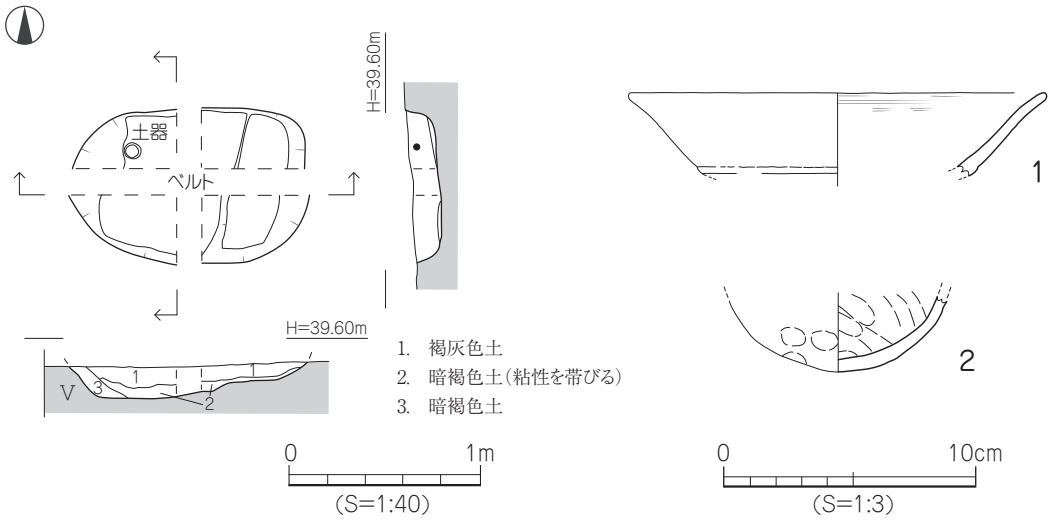
（１）土坑

ＳＫ１（第67図）

調査区北西部、Ｂ・1区に位置する。ＳＫ3・4より後出する。第Ｖ層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈する。検出規模は東西長125cm、南北長81cm、深さは検出面下16cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は3層に分層され、1層：褐灰色土、2層：暗褐色土（粘性を帯びる）、3層：暗褐色土である。遺物は、埋土中より土師器が少量出土した。

出土遺物（第67図、図版20）

1は高坏の坏部上部。口縁部は外傾して延びる。2は底部から内湾して立ち上がる埦の体部。内面には放射状の指頭痕が残る。



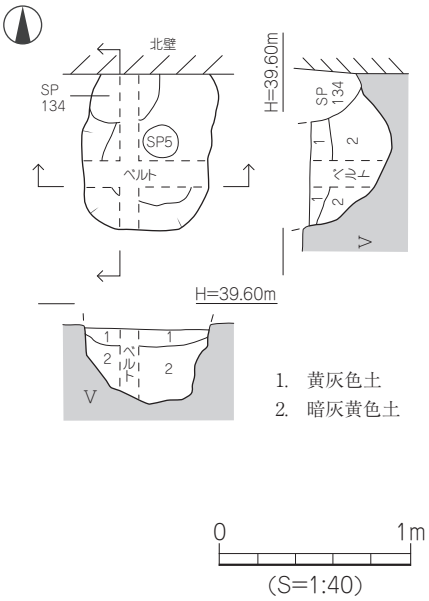
第 68 図　1 区 SK1 測量図・出土遺物実測図

時　期：出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが、ＳＫ3･4に後出することから、埋没時期は概ね古代以降とする。

ＳＫ２（第68図）

調査区北部、Ｂ・1区に位置する。ＳＰ5・134に切られる。第Ⅲ層上面で検出された。北側は調査区外に続くが、平面形は楕円形を呈するものと考えられる。検出規模は南北長83cm、東西長69cm、深さは検出面下42cmを測る。断面形態は舟底状を呈する。埋土は2層に分けられ、上層：黄灰色土、下層：暗灰黄色土である。遺物は、埋土中より土師器片、須恵器片が出土したが、図化しうるものはない。

時　期：出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが、検出面や切り合いなどから概ね中世の遺構とする。



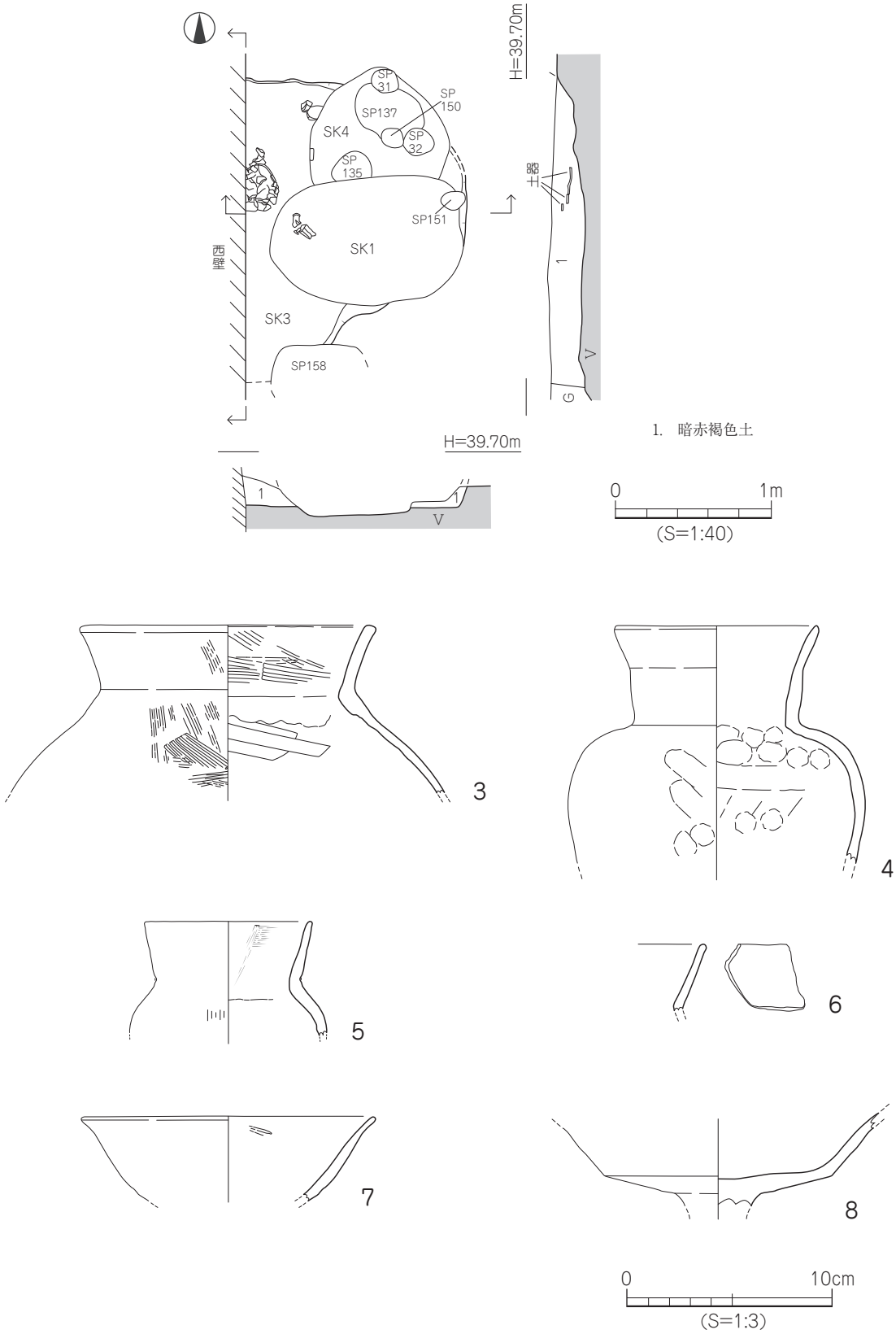
第 69 図　1 区 SK2 測量図

ＳＫ３（第69図、図版14）

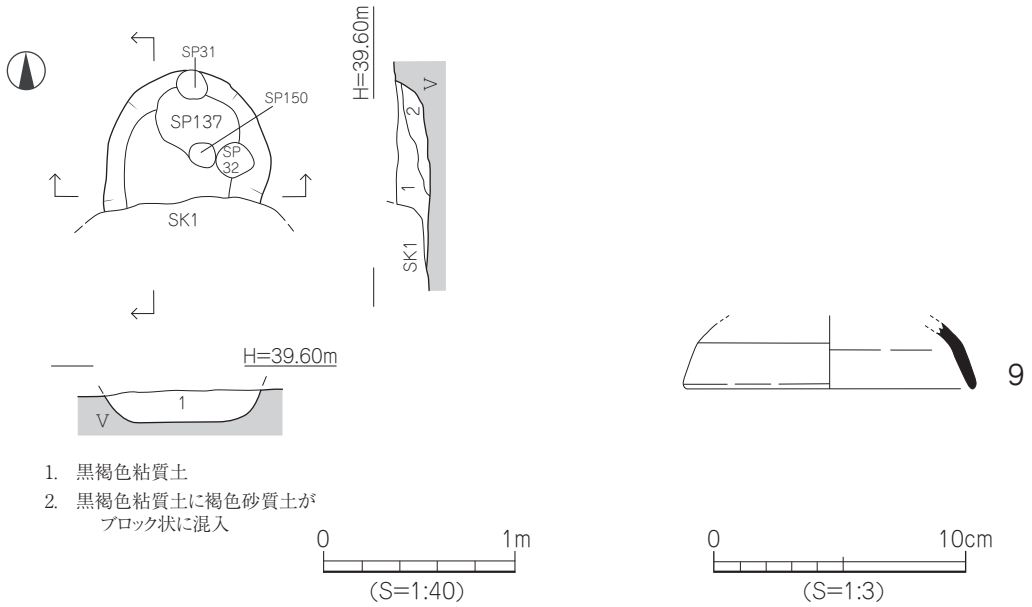
調査区北西部、Ｂ・1区に位置する。ＳＫ1・4、ＳＰ158、ＳＸ4に切られる。遺構西側は調査区外に続く。第Ｖ層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈するものと考えられる。検出規模は東西長146cm、南北長200cm、深さは検出面下22cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は暗赤褐色土である。遺物は、埋土中より土師器が出土した。

出土遺物（第69図、図版20）

3～8は土師器である。3は甕の口縁部。端部は丸くなり、内傾する面をもつ。体部の器厚は頸部を境に薄くなる。古墳中期。4～6は壺。4は直口壺。口縁上部は僅かに外反す



第 70 図　1 区 SK3 測量図・出土遺物実測図



第 71 図　1 区 SK4 測量図・出土遺物実測図

る。5は小型品。口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。5世紀。6は小型壺の口縁部。7・8は高坏の坏部。7は上部片で端部付近で短く外傾する。8は下部片。底部は水平をなし、体部は外傾して立ち上がる。

時　期：出土した土師器の特徴とＳＫ1･4との切り合いから、埋没時期は古墳時代中期前半とする。

ＳＫ４（第70図）

調査区北西部、Ｂ・1区に位置する。ＳＫ3・ＳＰ135より後出し、ＳＫ1、ＳＰ31・32・137・150に切られる。第Ｖ層上面で検出した。平面形態は楕円形を呈するものと考えられる。検出規模は東西長83cm、南北長100cm、深さは検出面下18cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は2層に分層され、1層：黒褐色粘質土、2層：黒褐色粘質土（褐色砂質土がブロック状に混入）である。遺物は埋土中より須恵器が出土した。

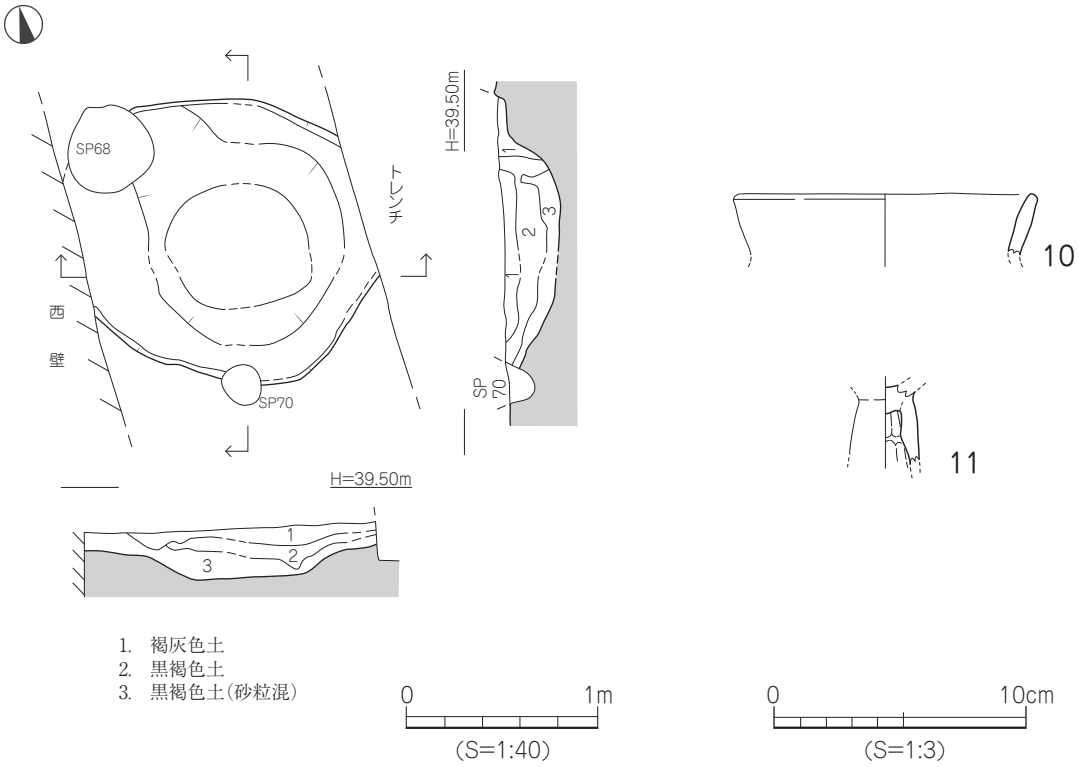
出土遺物（第70図）

9は須恵器の坏蓋である。口縁部は外側へ外傾する。

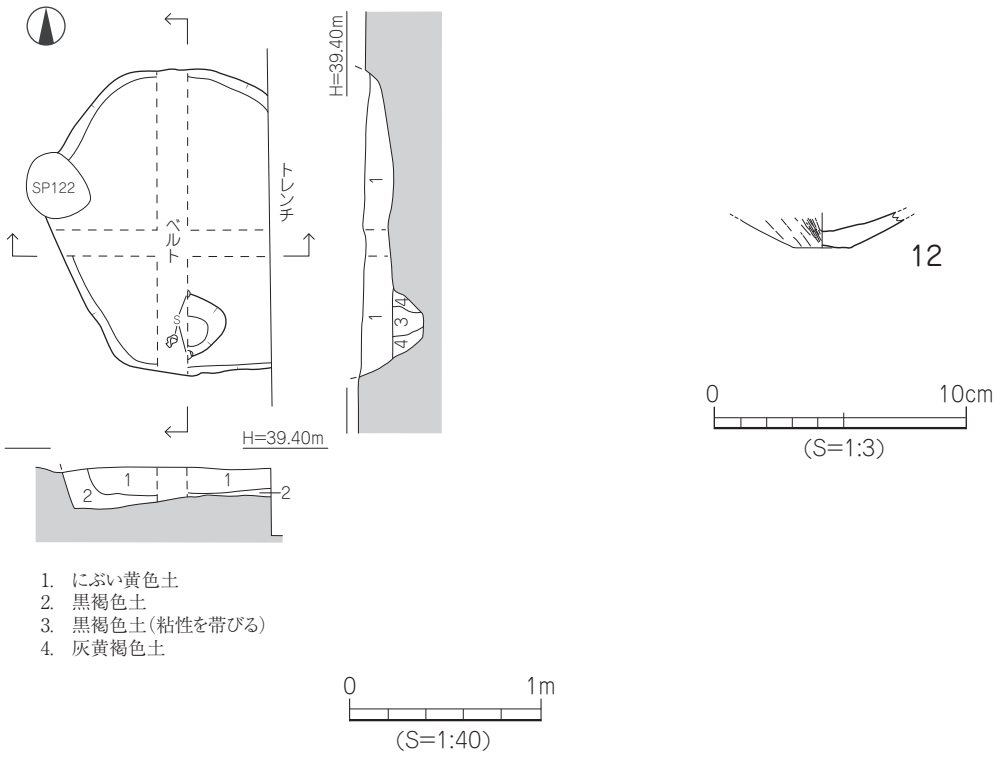
時　期：出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが、ＳＫ3より後出することから、埋没時期は古墳時代後期後半とする。

ＳＫ６（第71図）

調査区中央部Ｂ・2～3区に位置する。ＳＰ68・70に切られる。また、遺構西側は調査区外に続き、東側は平成15年度に実施した確認調査トレンチに切られる。第Ⅳ層上面で検出であり、第Ⅲ層が覆う。平面形態は東西にやや広がる円形を呈し、検出規模は東西長155cm、南北長140cm、深さは検出面下31cmを



第 72 図　1 区 SK6 測量図・出土遺物実測図



第 73 図　1 区 SK7 測量図・出土遺物実測図

測る。断面形態は皿状となる。埋土は3層に分層され、1層：褐灰色土、2層：黒褐色土、3層：黒褐色土（砂粒が混じる）である。遺物は埋土中から弥生土器と土師器が出土した。

出土遺物（第71図）

10は弥生土器の甕で口縁部。外傾して立ち上がり、端部は丸くなる。外面は工具によるナデ調整となる。11は土師器の高坏脚柱部。坏部接合法は粘土塊充填による。

時　期：出土遺物と埋土から古墳時代前期とする。

ＳＫ７（第72図）

調査区南側Ｂ・4区に位置する。ＳＰ122に切られる。また、東側は平成15年度に実施した確認調査トレンチに切られる。第Ｖ層上面で検出した。平面形態は円形を呈し、検出規模は東西長111cm、南北長164cm、深さは検出面下22cmを測る。断面形態は皿状となり、南側の一部は柱穴状に凹む。埋土は4層に分層され、1層：にぶい黄色土、2層：黒褐色土、3層：黒褐色土（粘性を帯びる）、4層：灰黄褐色土である。遺物は埋土中より弥生土器が出土した。

出土遺物（第72図）

12は弥生土器の鉢。底面は平底を呈し、底部からの立ち上がりは大きく外傾する。弥生後期後半～末。

時　期：出土遺物が僅少で時期特定は困難である。時期不明。

（２）その他の遺構と遺物

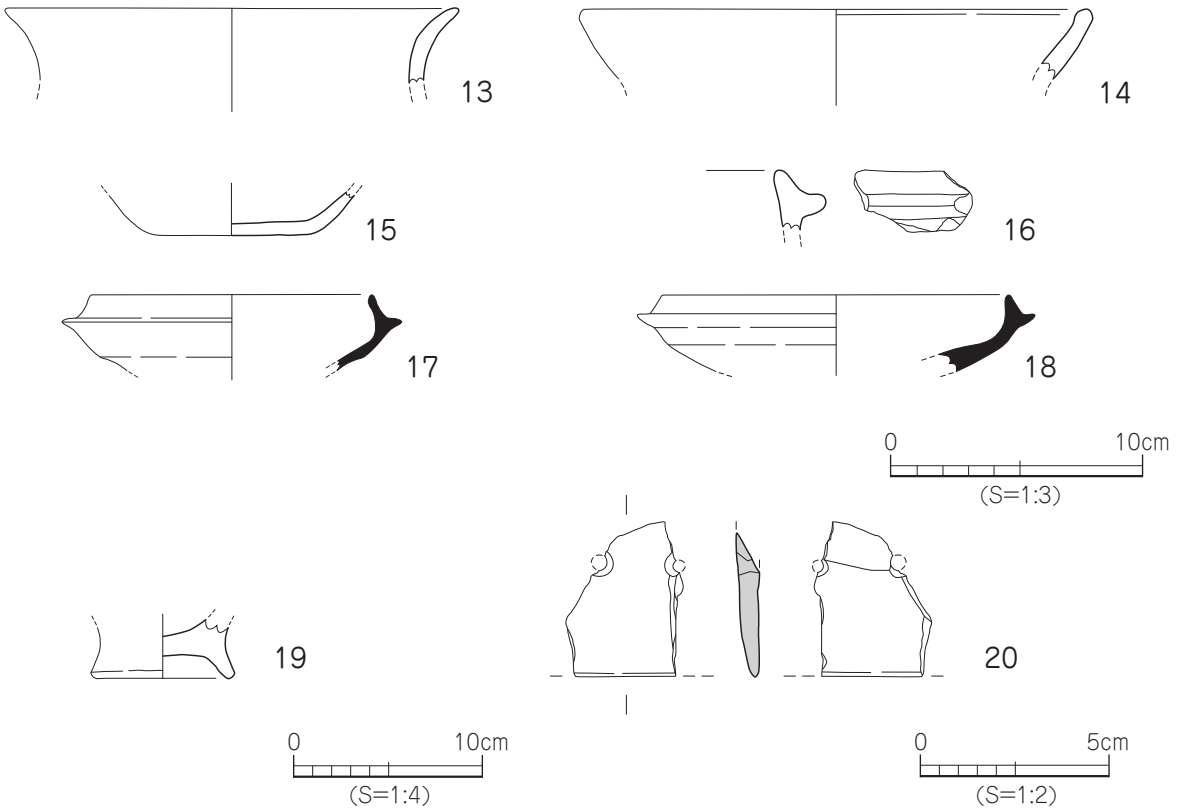
調査では161基の柱穴と4基の性格不明遺構を検出した。この中でＳＸ4の遺物は当初包含層出土物として取り上げたが、調査区東西壁の土層観察及びＳＫ3との切り合いから性格不明遺構として扱う。このほか、包含層や重機掘削時に遺物が出土した。なお、重機掘削時の出土品は層位や地点が不明であるため、ここでは「地点不明出土遺物」として実測図を掲載する。

１）柱穴（第73図）

13～16は土師器。13はＳＰ17出土の甕。口縁部は短く外反する。14はＳＰ82出土の甕。口縁端部は内側に肥厚される。15はＳＰ31出土の坏。16はＳＰ22出土の土釜口縁部。端部外面に断面三角形凸帯が貼付される。17･18は須恵器の坏身。17はＳＰ34出土。立ち上がりは内傾し、端部は細く上を向く。6世紀末。18はＳＰ138出土。立ち上がりは短く内傾する。6世紀後半～末。19はＳＰ118出土の甕底部。上げ底を呈する。弥生中期後半。20はＳＰ99出土の石庖丁で破損品。穿孔は両面から施されている。

２）性格不明遺構（第74図）

21～32はＳＸ4出土遺物。21～29は土師器。21～28は土釜。21～23の口縁部は内傾し、端部外面直下に断面三角形の凸帯が貼り付けられる。24・25の凸帯は、口縁端部からやや下がった部位に貼り付けられる。26～28は脚部。29は皿。体部は底部から直線的に外傾する。近世。30・32は備前焼。30は壺の口縁端部。外側へ丸く肥厚される。32は擂鉢。口縁端部は下方に拡張される。内面に10条の櫛目条線を看取。31は東播系の壺底部。



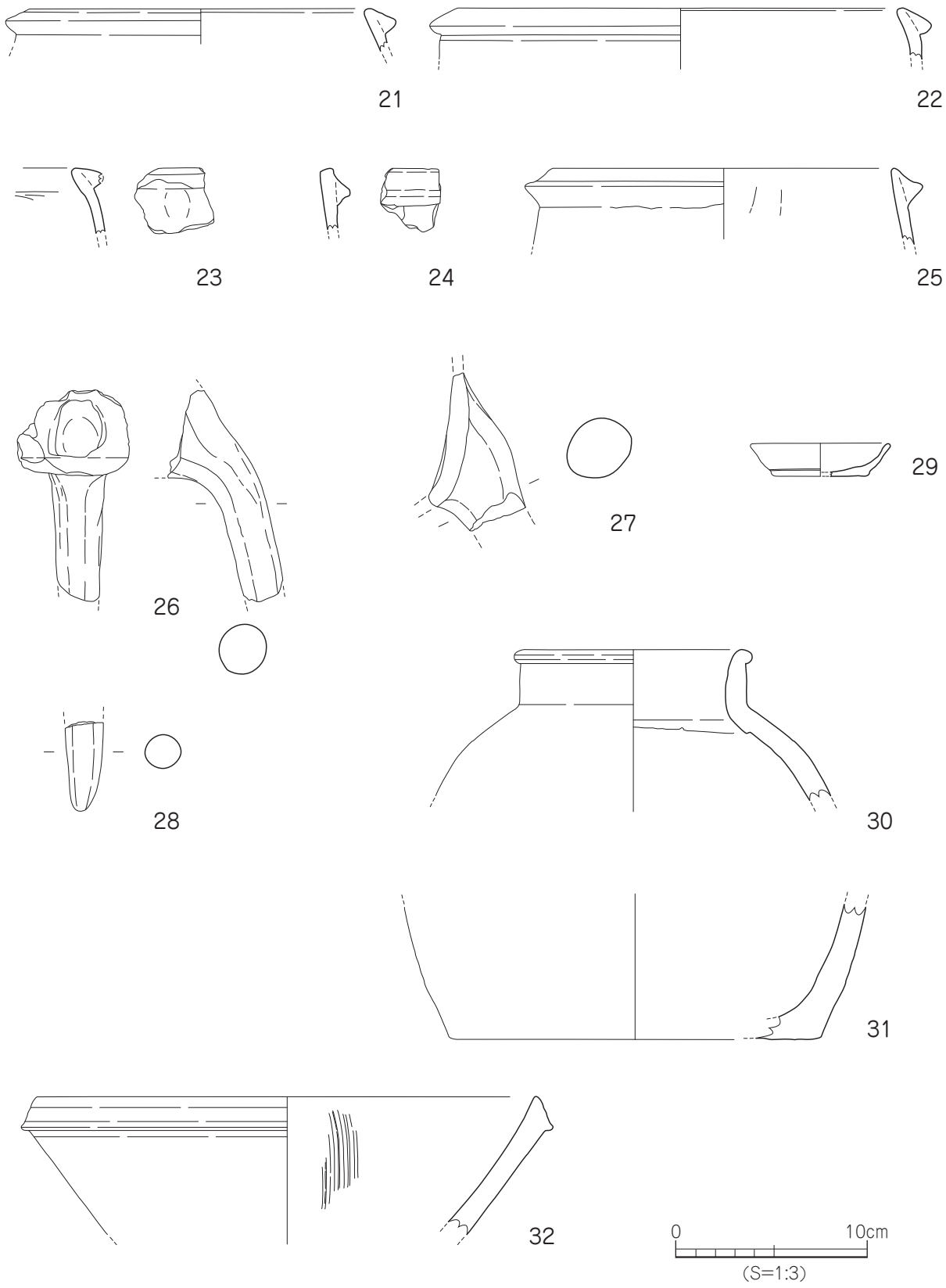
第 74 図　1 区 SP 出土遺物実測図

3）第Ⅲ層出土遺物（第75図、図版20）

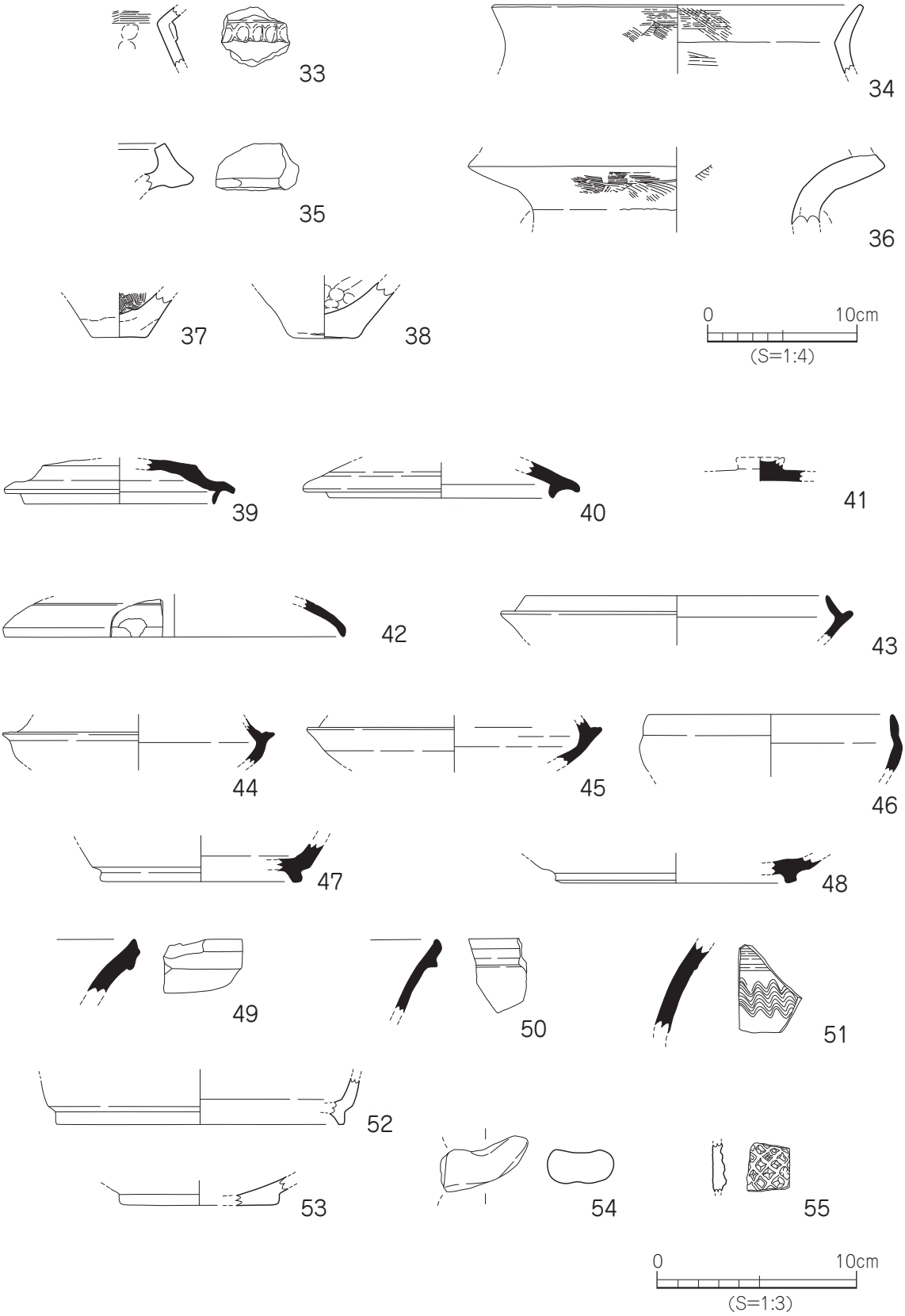
33 ～38は弥生土器である。33は甕。頸部に押圧の凸帯が貼り付けられる。弥生中期後半。34は鉢の口縁部。端部は細くなる。35・36は複合口縁壺の口縁部。36の頸部には貼付凸帯の痕跡が残る。37は甕の底部で平底を呈する。38は壺の底部で底面中央が僅かに凹む。弥生後期。39 ～51は須恵器。39 ～42は坏蓋。39の天井部は明瞭な段をなす。内面かえりの先端は尖る。7世紀後半。40はかえり部小片。7世紀後半。41はつまみ部で中央部が凹む。8世紀。42の口縁端部は短く垂れる。8世紀前半。43 ～45は坏身。43の立ち上がり部は短く内傾する。6世紀後半。44の受部は短く水平となる。6世紀後半。45の受部先端は尖る。6世紀末～7世紀。46 ～48は坏。46の体部は内湾して立ち上がり、端部は直立する。47の底部外側につく高台は「ハ」字状に開く。8世紀前半。48の高台接地部は内側となる。8世紀前半。49は甕の口縁部。端部中央は凸線的に膨らむ。6世紀前半。50は陶質系壺の口縁部。外面に1条の凸線が施される。5世紀中頃。51は甕の頸部。1条の凸線下に8条の波状文が施される。52・53は土師器の坏。52の高台は底部外側に付く。8世紀。53の底部は円盤高台。11 ～12世紀。54は甑の把手部。55は軟質土器の甕胴部片。タタキによる格子文が施される。古墳前期。

4）グリッド出土遺物（第76図）

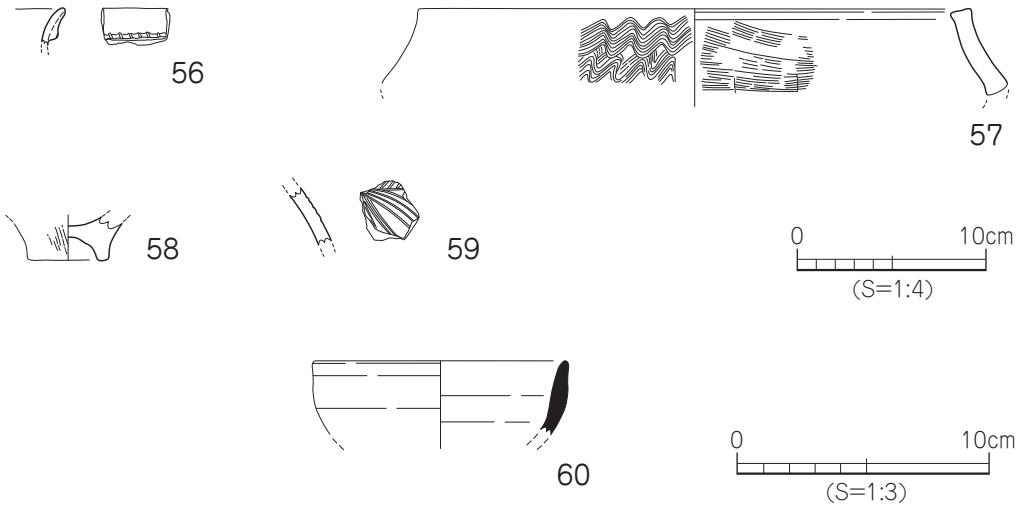
56 ～59は弥生土器。56はＡ・4出土の甕口縁部。外面に刻目凸帯文を看取。弥生前期前半。57はＡ・4出土で複合口縁壺の拡張部。10条の波状文が施される。58はＡ・3出土で甕の底部。くびれの上げ底を呈する。弥生中期後半。59はＡ・2出土の壺胴部片。木葉文を看取。弥生前期後半。60はＡ・3出土の須恵器坏。内



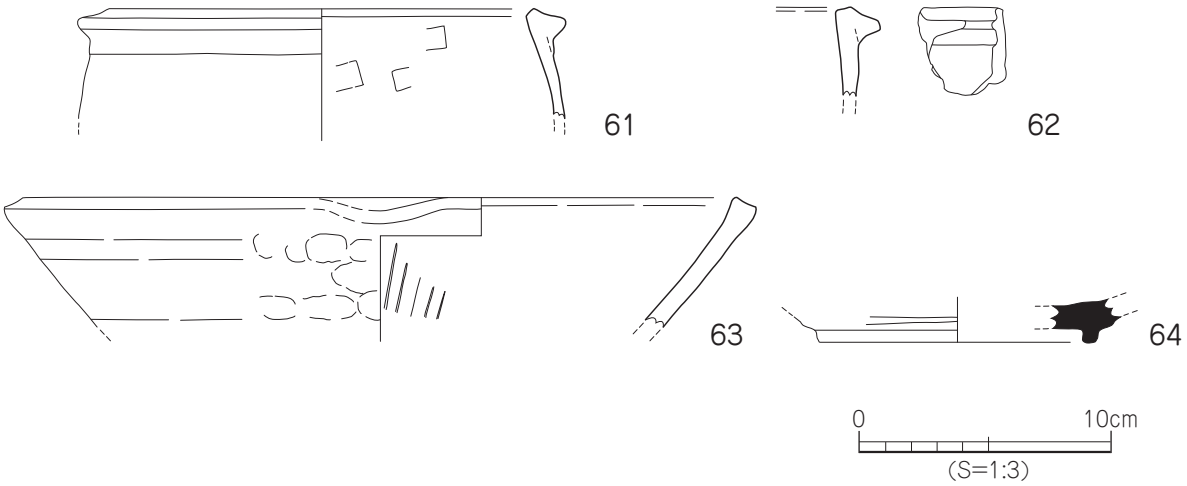
第 75 図　1 区 SX4 出土遺物実測図



第 76 図　1 区Ⅲ層出土遺物実測図



第 77 図　1 区グリッド出土遺物実測図



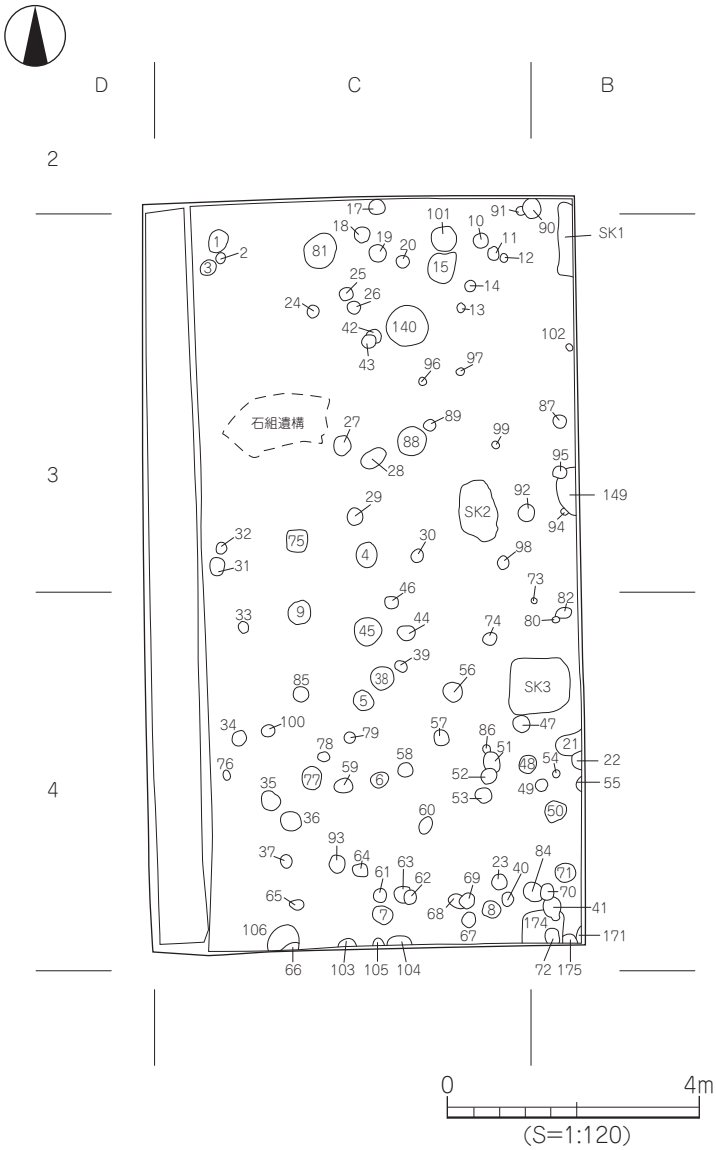
第 78 図　1 区出土地不明遺物実測図

湾気味に立ち上がる体部片。

5）地点不明出土遺物（第77図）

61 ～63は土師器。61は土釜。口縁部は内湾し、端部外面に断面三角形の凸帯が貼り付けられる。13 ～14世紀。62は羽釜。63は片口鉢。内面に櫛描条線が施される。64は須恵器の坏。底部に貼り付けられる高台端部の全面が接地する。

第４節　２区の遺構と遺物



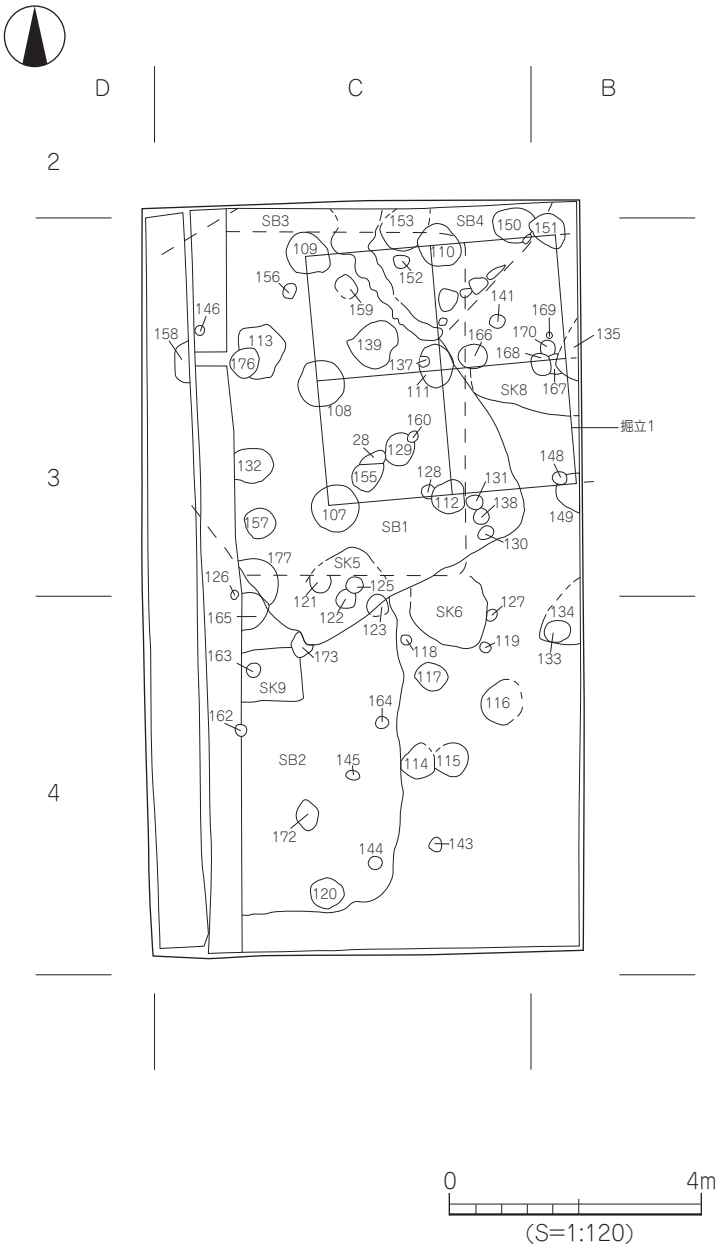
第 79 図　２区遺構配置図（第一遺構検出面）

（１）竪穴建物

ＳＢ１（第82･83図、図版16）

調査区Ｃ・3区に位置し、掘立1、ＳＰ159（暗褐色シルト）に切られる。第Ⅴ層上面での検出であり、第Ⅳ層が覆う。遺構検出時には埋土の大半は遺存していなかったが、東西に残したベルトの土層観察から3層の埋土と建物東側壁の立ち上がりを確認した。埋土は上から1層：黒褐色土、2層：やや粘性を帯びる黒褐色土、3層：オリーブ褐色砂質土である。また、東側壁の立ち上がりよりＳＢ1の規模は東西長4.3ｍ以上、深さ25cmを測る。建物の平面形態は主柱穴及びカマドの位置から方形を呈するものと考えられる。主柱穴はＳＰ113・139・155・132の4本を検出した。平面形はＳＰ132が円形、外は楕円形である。規模は、最長径54～83cm、深さ30～40cmを測る。主柱穴の配置は若干長方形を呈し、南北（長）の心々距離190cm、東西（短）の心々距離168cmを測る。埋土は暗褐色シルトを基調とし、ＳＰ155のみが黒褐色シルトである。

カマドは建物北壁中央部に付設されている。カマド燃焼部は掘立1を構成する柱穴の一つであるＳＰ109に削平され、焚口部及び前庭部付近も4基の柱穴（ＳＰ24･25･156･159）により一部削平を受けている。カマドは南側に開く馬蹄形状を呈していたものと考えられ、残存の規模は東西121cm、南北96cm、袖部の高さ6cmを測る。カマド燃焼部は深さ13cm程掘りくぼめられ、3層（にぶい黄褐色砂質土に褐灰色・暗赤褐色粒が混じる）の堆積を確認した。遺物は燃焼部中央付近で土師器の高坏脚部（第85図 67）が押しつぶされた状態で出土した。遺物は埋土中より、土師器の甕、高坏、鉄製品が出土した。



第80図　2区遺構配置図（第二遺構検出面）

出土遺物（第84図、図版20）

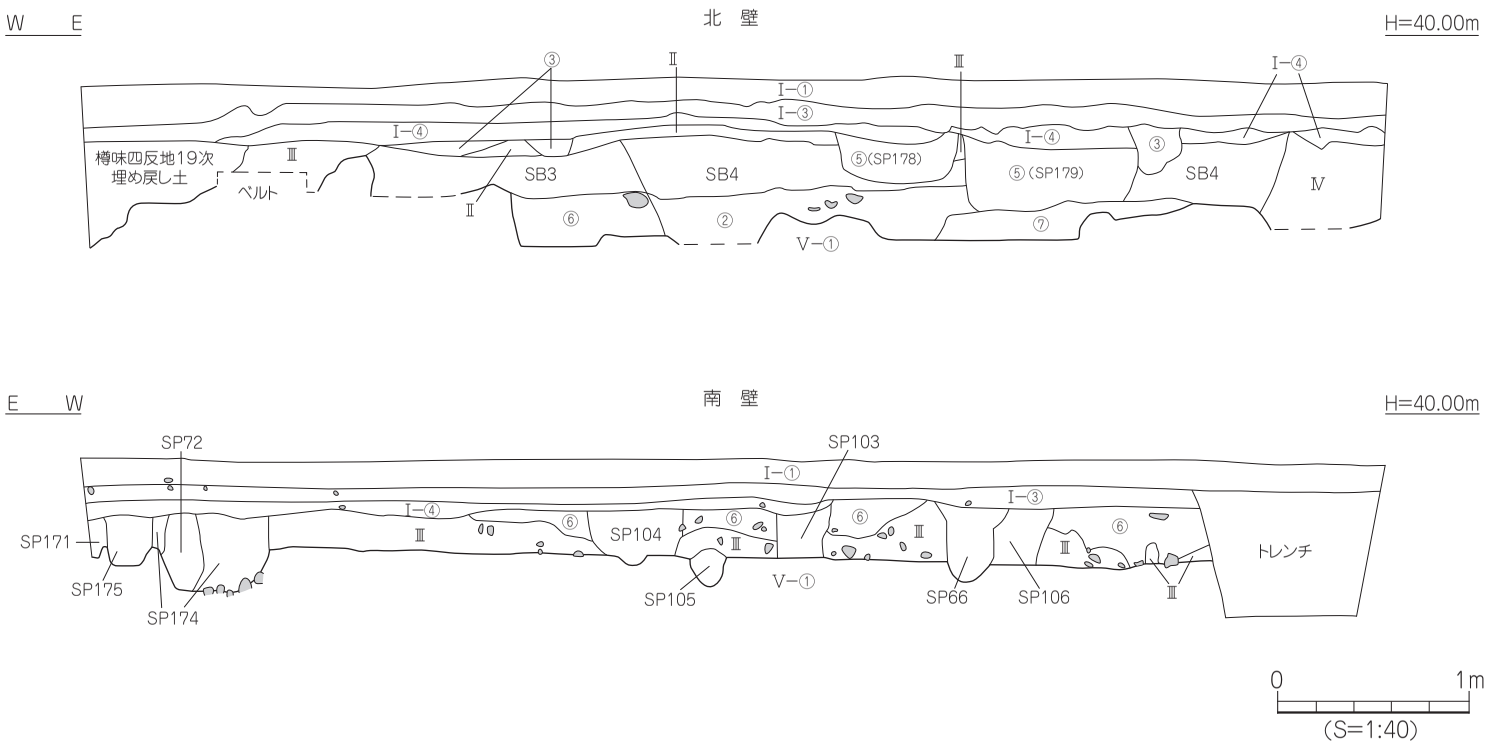
65・66は土師器の甕である。65は丸底の底部から大きく内湾する胴部に短く直線的に外傾する口縁部をもつ。口縁端部は僅かに内傾する。66は「く」の字状を呈する口縁・頸部片。口縁端部は内側へ肥厚される。67は土師器の高坏脚部である。低く直線的に開く裾部内面に明瞭な稜を有する。68は長さ19cm、最大幅8.2cmを測る完形の鍛造鉄斧。柄を挿入する袋部は折り曲げられ丸筒状を呈する。

時　期：出土した土師器の特徴より、ＳＢ1の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半、5世紀後半とする。

ＳＢ２（第85・86図、図版17）

調査区南西部Ｃ・3～4区に位置し、ＳＢ3に切られる。建物西側半分は樽味四反地遺跡19次調査で検出されたＳＢ6となる。第Ⅴ層上面での検出であり、第Ⅳ層が覆う。平面形態は方形を呈するものと考えられ、20次調査での検出規模は南北長5.95m、東西長2.55m、壁高は検出面下約85cmを測る。

先述したように隣接する19次調査地との間に設置した南北ベルトの土層観察より建物埋土は5層に分層でき、上から1層：暗褐色土、2層：にぶい黄褐色土、3層：黒色土、4層：黒褐色土、5層：オリーブ褐色砂質土である。検出状況から、5層は内部施設の設置に伴う貼付土及び床面修復のための貼床土と考えられる。なお、ベルト土層では確認出来なかったものの、掘り下げ時に5層とほぼ同じ高さで薄い炭化物混じりの層が部分的に検出された。また、1層中からは径5～20cm大の河原石に混じって弥生土器（前期～後期末）や土師器が出土した。これらの石や土器は建物廃絶時に投入されたものと推察される。



Ⅰ−①　灰色土(7.5Y4/1)

Ⅰ−③　にぶい黄褐色粘質土(10YR5/4)

Ⅰ−④　暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2)

Ⅱ　褐灰色土(5YR5/1)

Ⅲ　暗赤褐色土(5Y2/1)

Ⅳ　黒色土(5Y2/1)

Ⅴ−①　明赤褐色粘質土(5YR5/8)

②　褐灰色土(10YR4/1)と明黄褐色土(2.5Y6/6)の混合層

③　灰黄褐色土(10YR4/2)

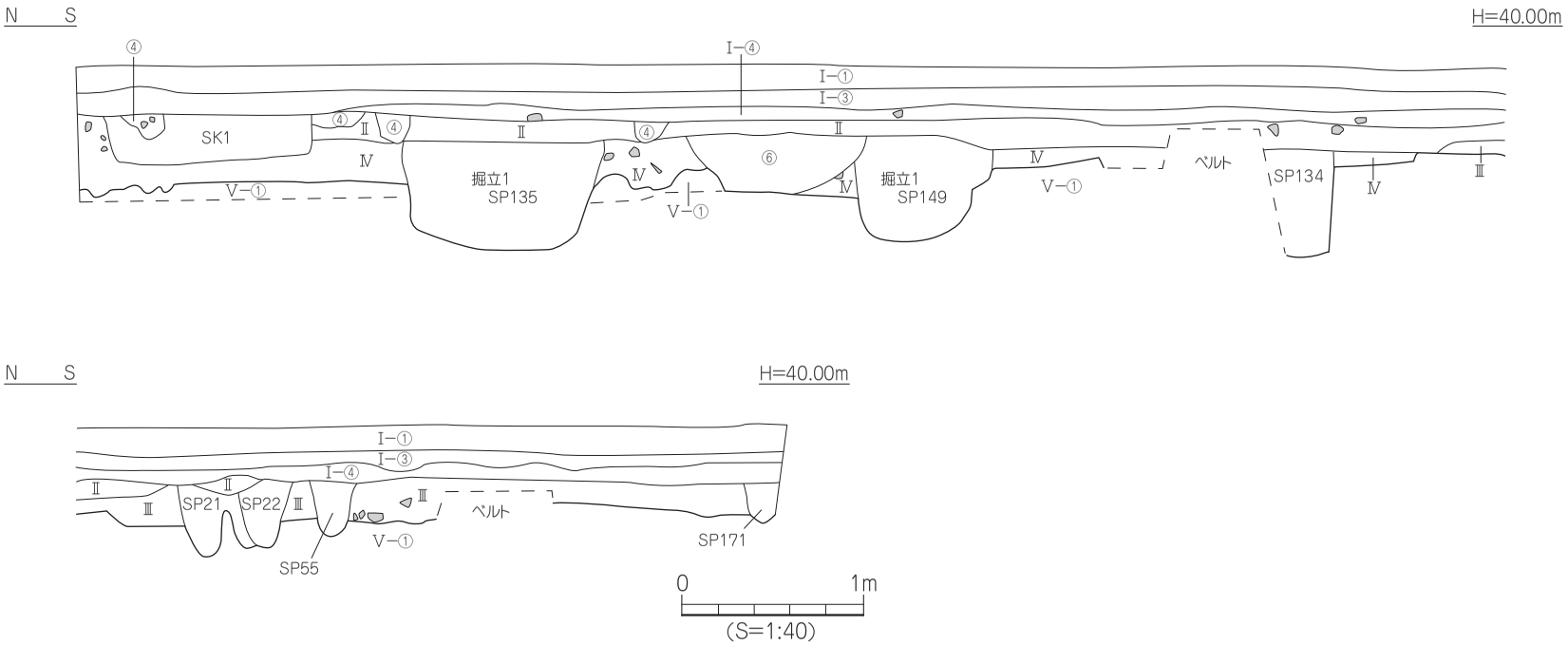
⑤　暗褐色土(7.5YR3/3)

⑥　黒褐色土(7.5YR3/2)

⑦　黒褐色土(7.5YR3/2)と褐色砂(10YR4/4)の混合層

石

第 81 図　2 区調査区　北壁・南壁土層図



I−① 灰色土(7.5Y4/1)

I−③ にぶい黄褐色粘質土(10YR5/4)

I−④ 暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2)

Ⅱ 褐灰色土(5YR5/1)

Ⅲ 暗赤褐色土(5Y2/1)

Ⅳ 黒色土(5Y2/1)

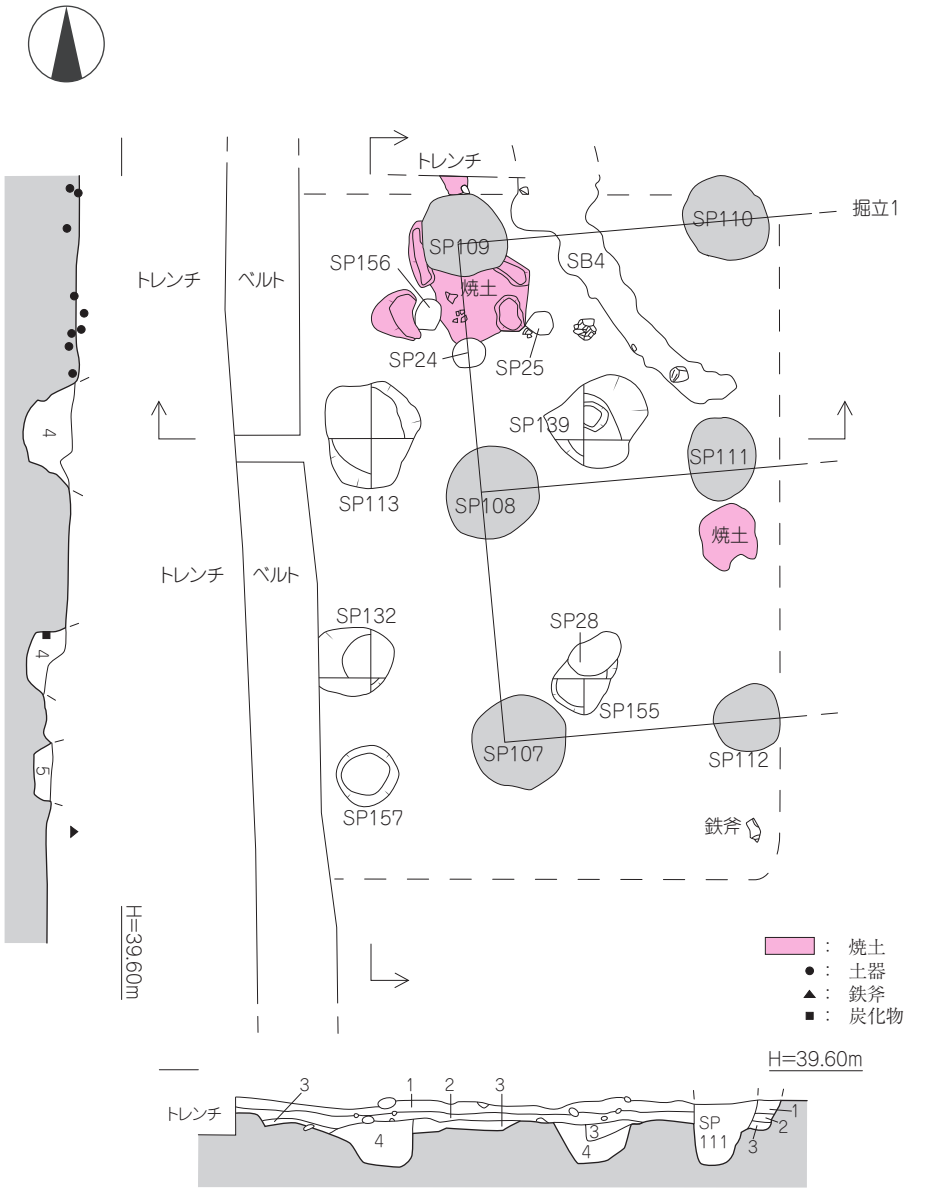
V−① 明赤褐色粘質土(5YR5/8)

④ 灰色土(5Y5/1)

⑥ 黒褐色土(7.5YR3/2)

石

第82図 2区調査区 東壁土層図

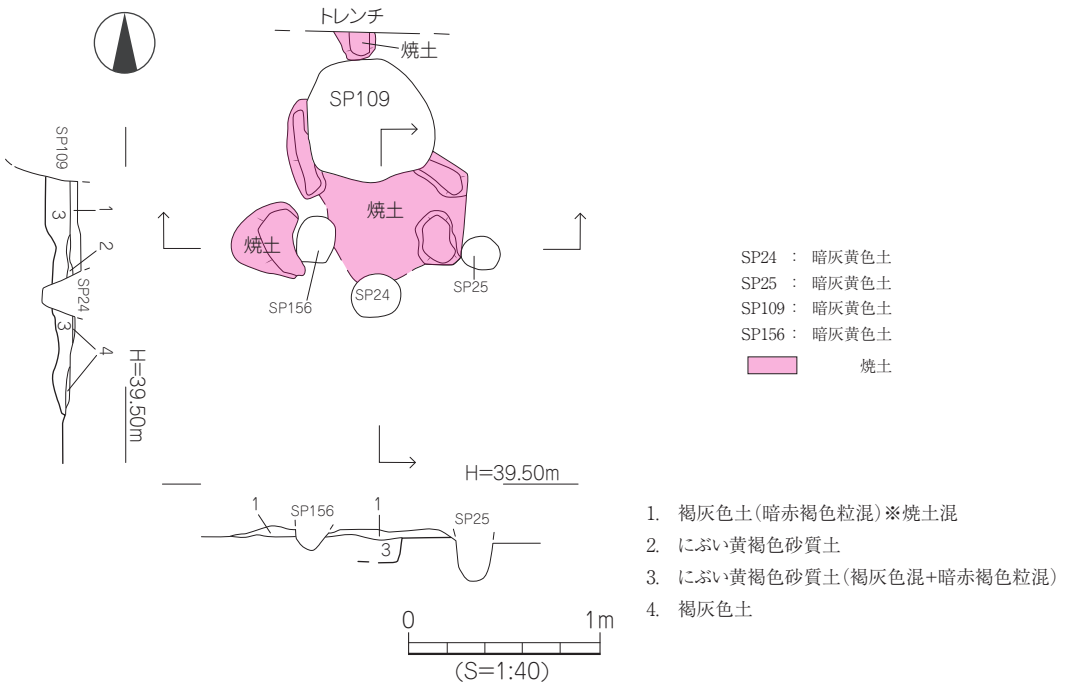


1. 黒褐色土（1～3mm大の乳白色角礫を含む）
2. 黒褐色土（やや粘性を帯びる）
3. オリーブ褐色砂質土（硬化）
4. 暗褐色シルト
5. 黒褐色シルト

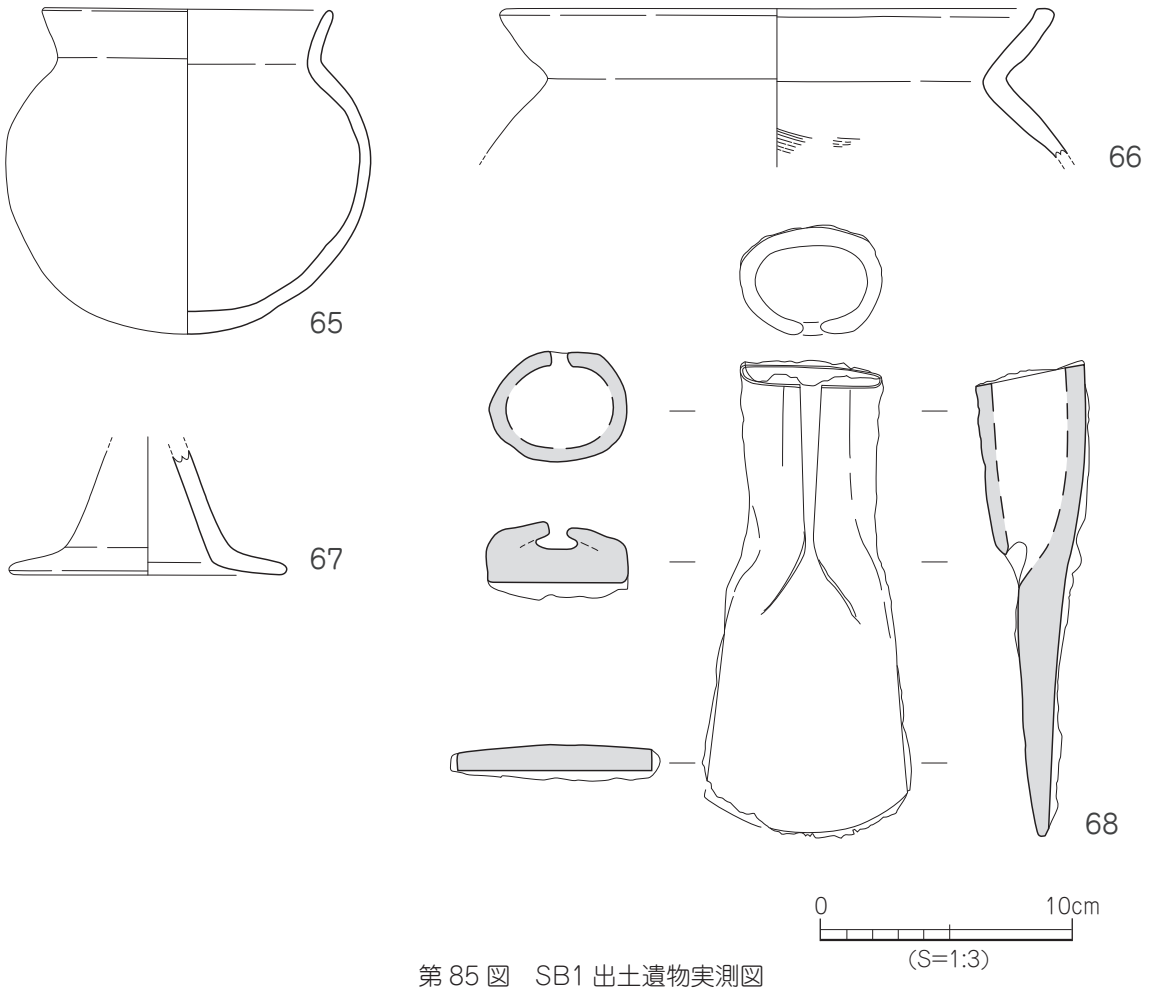
0　2m
（S=1:60）

第 83 図　SB1 測量図

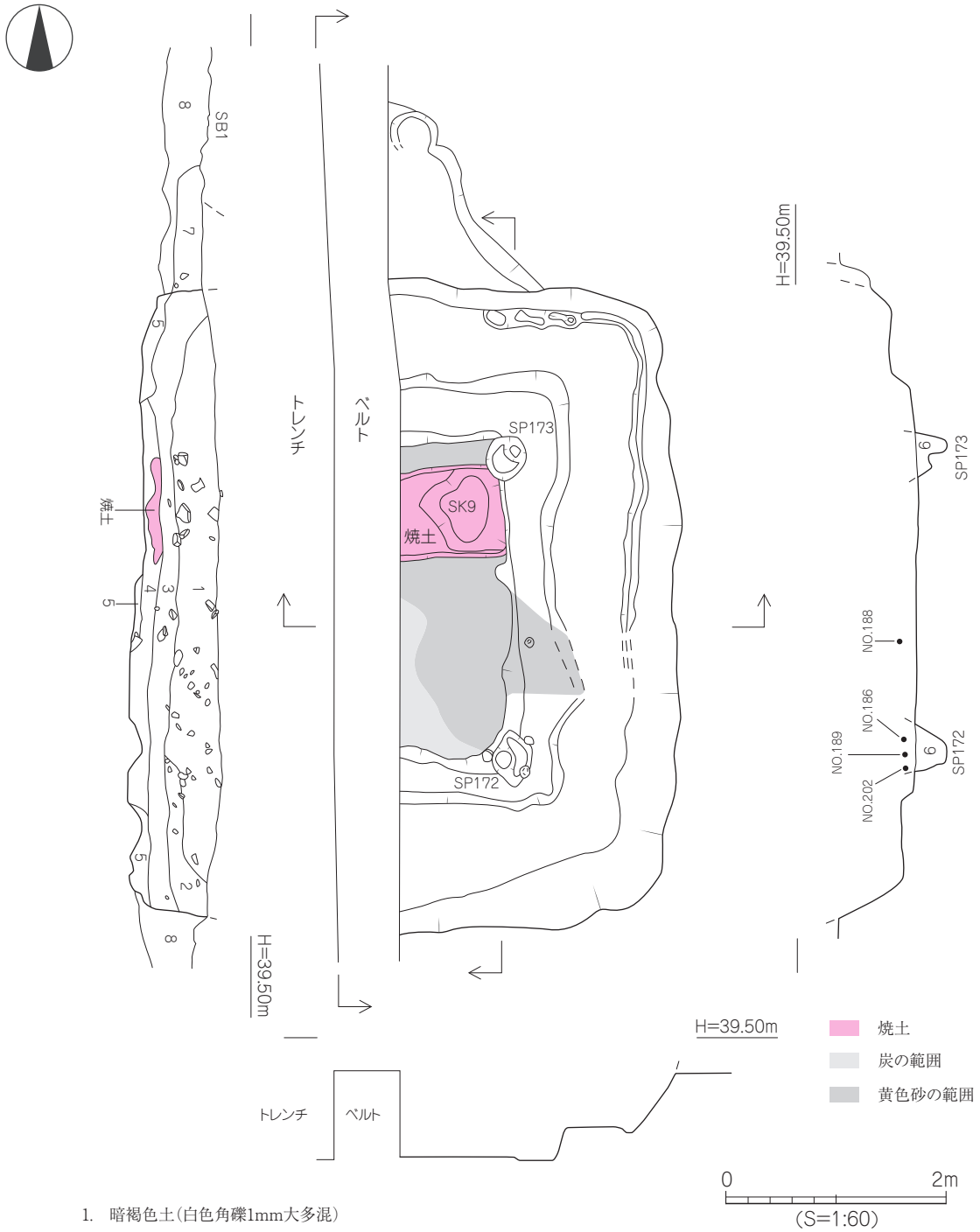
内部構造に関連する遺構として周壁溝、高床部、周溝、土坑、柱穴が検出された。建物北東側の壁で検出された周壁溝の規模は、幅8 ～17cm、深さ3 ～5cmを測る。また、北側壁溝底面にて長さ18 ～27cm、深さ5cm程の長細い小穴を3基検出した。高床部は壁から幅38 ～92cmで検出し、8 ～17cmを測る。埋土は5層のオリーブ褐色砂質土である。周溝は高床部の内側で検出され、規模は幅38 ～64cm、深さ13 ～20cmを測る。埋土は建物埋土4層と同様の黒褐色土である。土坑（ＳＫ9）は建物内中央やや北よりで検出された。平面形態はやや不整形の方形を呈し、検出規模は長さ75cm、幅74cm、深さ7cmを測る。埋土は黒褐



第 84 図　SB1 カマド測量図



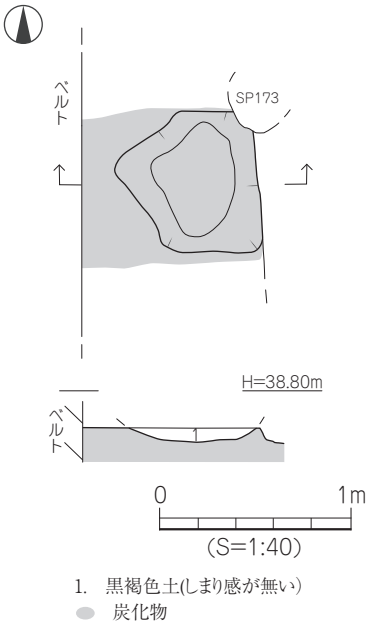
第 85 図　SB1 出土遺物実測図



1. 暗褐色土(白色角礫1mm大多混)
2. にぶい黄褐色土(乳白色角礫1～3mm大多混)
3. 黒色土(白色角礫1mm大多混)
4. 黒褐色土(締り感が無い)
5. オリーブ褐色砂質土(暗褐色混)(貼床)
6. 暗灰黄色土
7. 淡黄色砂礫層
8. 淡黄色砂礫層(3～10cm大の丸礫)

1～6 : SB2埋土
7 : SX1埋土
8 : 地山

第 86 図　SB2 測量図



第87図　2区SK9測量図

色土である。なお、ＳＫ9の下には焼土混じりの層が部分的に遺存する。層厚は約8cmである。柱穴（ＳＰ172・173）はＳＫ9及び周溝を切る形で検出された。ＳＰ172の平面形態は楕円形を呈し、検出規模は長さ51cm、幅35cm、深さ28cmを測る。埋土は暗灰黄色土である。ＳＰ173の平面形態は楕円形を呈し、検出規模は長さ40cm、幅36cm、深さ28cmを測る。埋土は暗灰黄色土である。住居底面は黄褐色粗砂層であり、北側から南側へ向けて緩やかな傾斜をなす。なお、西側の土層観察と遺構検出状況からＳＢ2の構築順は次のように推察される。①全体を掘り、②高床部、ＳＫ9、周溝を設定する。③その後、5層を用いて床面を補修（貼り替え）し、④柱穴（ＳＰ172・173）を掘削する。

調査では南北ベルトに対し直角となるセクションベルトを設定し、建物埋土を便宜的に上層、中層、下層に分け、順次掘り下げ、遺物の取り上げを行った。

上層出土遺物（第87～90図、図版21）

69～77は弥生土器で甕の口縁部である。69・70は「く」の字状を呈し、端部は上方に短く拡張される。弥生中期後半。71の口縁は直線的に短く外傾する。端部は面をなし、1条の凹線文が施される。弥生後期初頭。72の口縁は開き気味に外傾する。端部はやや窪む。弥生後期前半。73～76の口縁は僅かに外反する。73・75の端部は面をなす。74・76の端部は丸く収める。77の口縁は外傾し、頸部内面に明瞭な稜をなす。78～91は弥生土器で甕の底部である。78の底面は僅かに上げ底を呈し、直線的に立ち上がる体部外面の仕上げはミガキとなる。弥生後期初頭。79～86の底面は平底を呈する。87・88の底面は上げ底となる。89～91の底部は外方向にやや突出する。

92～112は弥生土器の壺。92の口縁は外反し、端部に工具による刺突文と3条の凹線文が施される。93の口縁端部は下方に拡張され、端面に3条の櫛描波状文が施される。94の口縁部は低く外傾し、端部に斜格子目文を看取。95・96の口縁は外反し、端部は面をなす。97～102は複合口縁壺。97～99は口縁拡張部。97は外面に沈線内刺突文2条、櫛描波状文4条が施される。99は外面に6条の沈線文と6条の波状文を交互に施す。100～102は複合口縁接合部片。101の接合部は面を持ち、「コ」字状をなす。103は壺の頸部。3列の竹管文が施される。104は小型壺の胴部。105～112の底面は平底を呈する。112の底部はナデにより外側へ拡張される。113は土師器の壺で丸底を呈する。

114・116～119、121～124は弥生土器の鉢。114の体部は内湾し、口縁端部は外側に弱く肥厚される。116～118は内湾気味に立ち上がる口縁部。117の口縁端部は面をなす。119は屈折口縁鉢。口縁部はやや内湾気味に延びる。121～124は鉢の底部。121～123は突出する平底を呈する。121は外面に丁寧なヘラミガキが施される。124はくびれの上げ底を呈する。115・120は土師器の鉢。115は直線的に外傾する口縁部。120は小型鉢。125～130・133は土師器の高坏。125の坏下半部は短く、坏上半部は直線的に外傾する。坏底部に脚挿入円孔。127・128の坏接合部外面は明瞭な稜をなす。130は脚柱部。坏部との接合は粘土塊充填技法による。133はラッパ状に開く脚裾部。131・132は弥生土器の高坏脚柱部。131には3つの円孔が

穿たれる。134は弥生土器で鉢或いは高坏の脚裾部。

135・136は弥生土器の器台口縁部。135は端面に4条の櫛描波状文、135は山形文が施される。137・138は弥生土器の支脚。137の内部は中空。138は底部で端部は丸く仕上げられる。139は須恵器の坏蓋。6世紀後半。

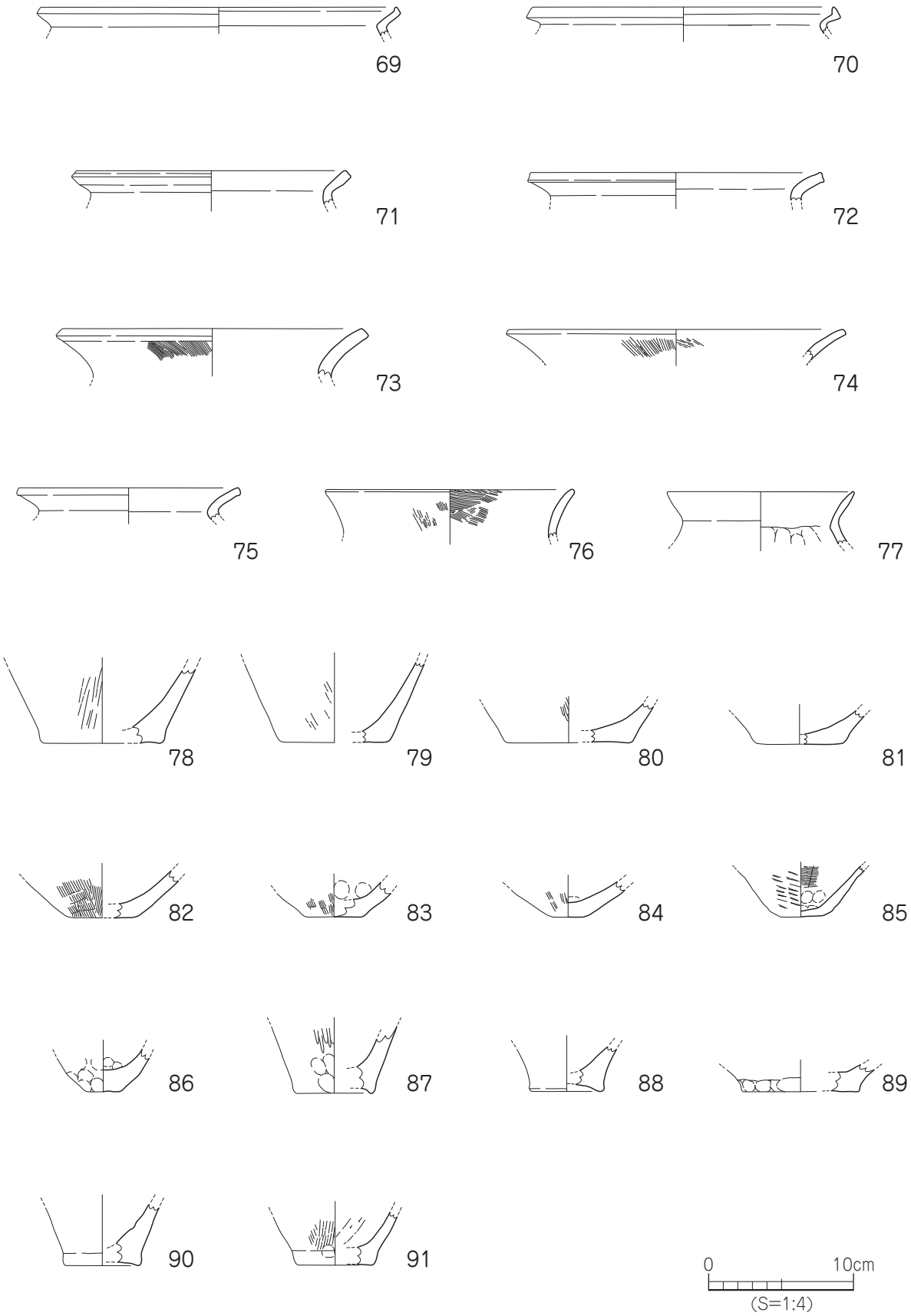
中層出土遺物（第91図、図版22）

140・141は弥生土器で甕の口縁部。140は頸部からほぼ直角に曲がる口縁部。端部はナデ凹む。弥生中期後半。141の口縁部は直線的に外傾し、端部は細くなる。弥生後期。142～144は土師器の甕で、頸部から口縁部にかけて「く」の字状を呈する。器厚は薄く、口縁端部は内側に肥厚される。古墳前期前半。145・146は弥生土器で甕の底部。145の底面は上げ底を呈する。弥生中期後半～後期初頭。146は狭小な平底から内湾気味に立ち上がる体部を持つ。弥生末。147～154は弥生時代の壺である。147は口縁端部が上方に拡張され、端面には3条の凹線が巡る。弥生中期後半。148の口縁端面には斜格子目文が施される。149は広口壺の口縁部で端面に山形文を看取。弥生末。150の口縁端部は上下に拡張される。151は底部からの立ち上がり付近にミガキが施される。弥生後期前半。152～154は複合口縁壺の口縁部。155～157は弥生時代の鉢である。155の口縁端部は短く外傾する。156の底面は平底を呈し、底部からの立ち上がり付近にタタキ調整痕を看取。弥生末。157は上げ底を呈するミニチュア鉢の底部。158～161は弥生土器。158は高坏或いは脚付鉢の脚部。弥生末。159～161は支脚。159は低い筒状をなす。160の中央部は棒で穿孔される。弥生末。161は上端の一部が低く窪み「受部」状を呈する。162はサヌカイトの剥片。163は鉄製品。器種不明。

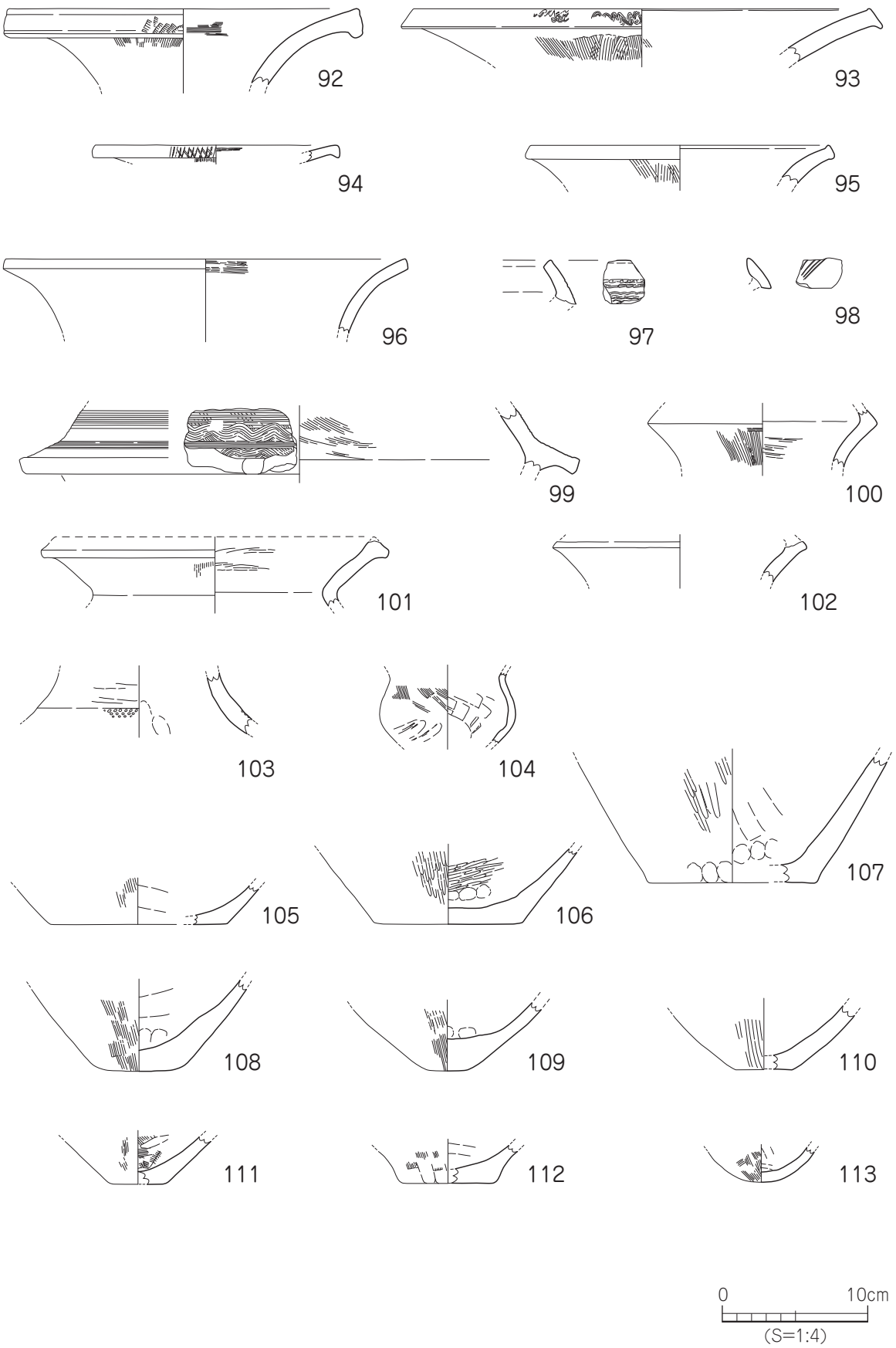
下層出土遺物（第92・93図、図版22・23）

164～169は弥生時代の甕である。164の口縁部は直立気味に短く外傾する。弥生末。165は口縁部片。端部下方に刻目文が施される。弥生前期前半。166の底面は平底を呈し、底部から立ち上がる体部外面にミガキ痕を看取。弥生中期後半。167・168の底面は平底をなす。169の底部外面は僅かに突出する。170～174、177～183は弥生時代の壺である。170は広口壺の口縁部。端部は上方に肥厚され、端面には2条の凹線が巡る。弥生中期後半。171の口縁部は外反し、肥厚される端部には2条の凹線が施される。弥生中期後半～後期初頭。172は広口壺の口縁部。弥生末。173の口縁端部は下方へ拡張される。174の口縁部は上下に拡張され、端面には6条以上の波状文が施される。175は土師器の直口壺。口縁部は頸部から直線的に立ち上がる。176は頸部から大きく外反する口縁部を持つ。頸部以下に斜め方向の平行タタキ調整痕を看取。177～179は複合口縁壺。177・178の接合部は断面「コ」の字状をなす。178の拡張部には4条の沈線文・波状文が交互に施文される。179の頸部には斜格子が刻まれた凸帯が貼り付けられる。180は頸部片。181～183は平底を呈する。弥生中期後半。

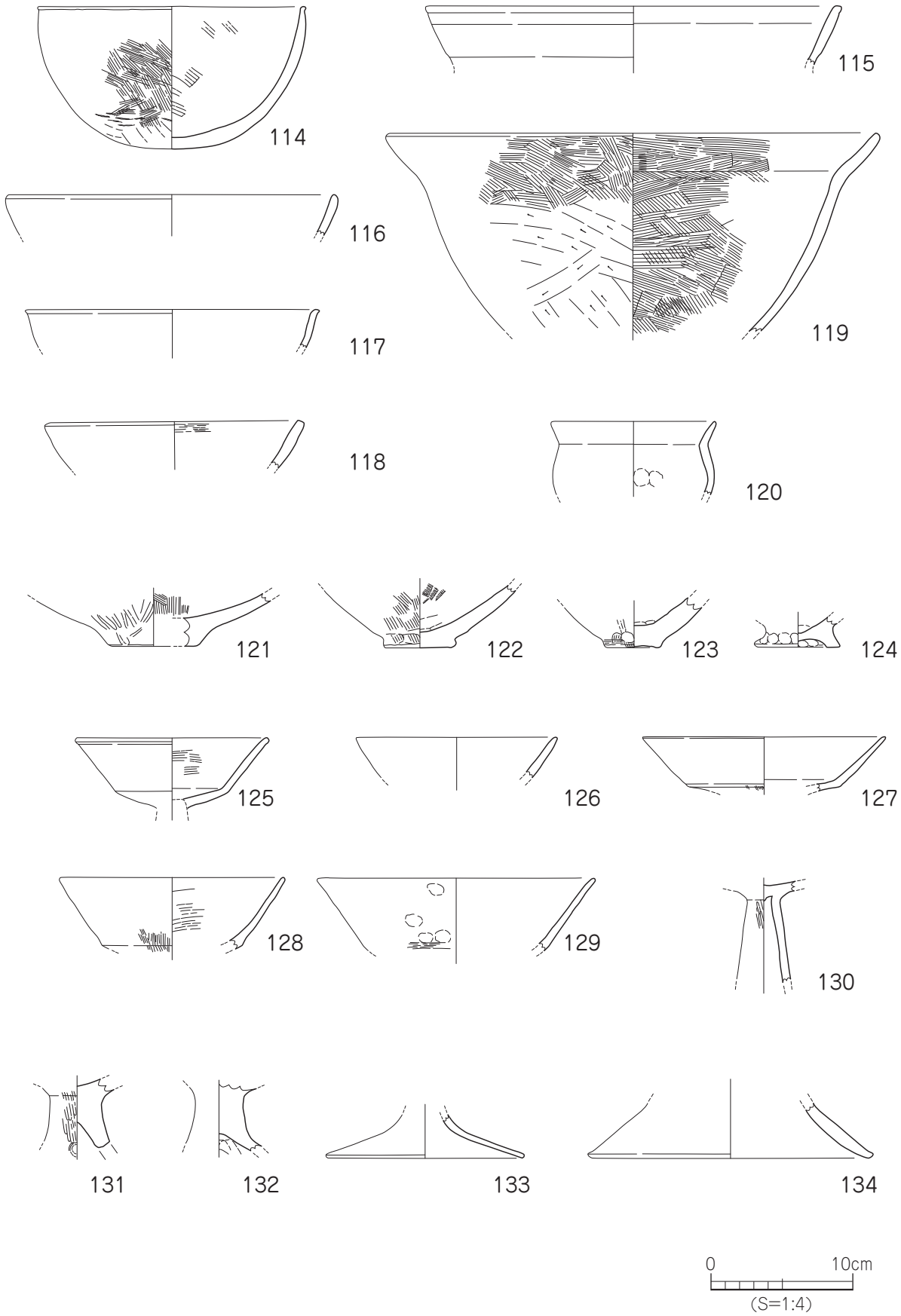
184～191・193は弥生時代の鉢である。184～189は直口口縁鉢。188は完存品。器表面に縦方向のミガキが残る。底部は手持ちによるヘラケズリ痕を看取。189は体部内面に工具痕が残る。口縁端部は波状をなす。190の成形は手捏ねによる。内外面に煤付着。弥生末。193は脚付鉢の脚裾部。弥生末。192は土師器のミニチュア鉢。194・195は弥生時代の高坏。194は中位に矢羽根透かし、裾部外面に2条の凹線文が施される。弥生中期後半。195は中位に円孔が穿たれる。弥生末。196～201は弥生時代の支脚。196は突起部。端部の一部は面をなす。弥生末。197は柱部。13条の沈線文が施される。198は中空の脚部。199～201は裾



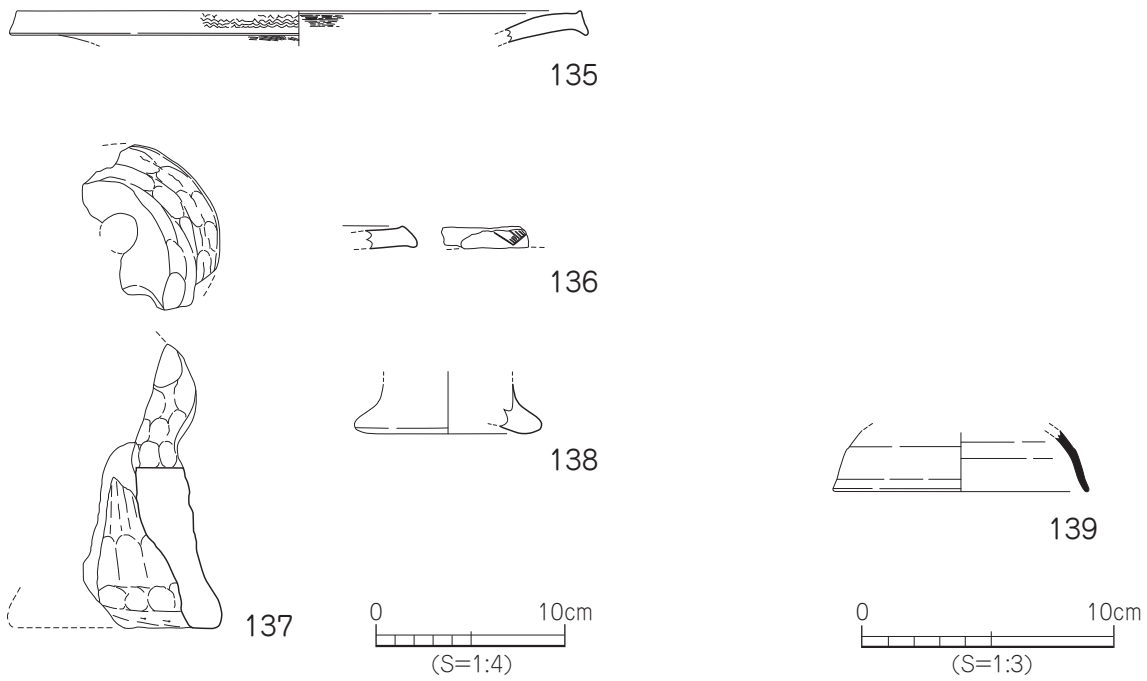
第 88 図　SB2 上層出土遺物実測図（1）



第 89 図　SB2 上層出土遺物実測図 (2)



第 90 図　SB2 上層出土遺物実測図 (3)



第 91 図　SB2 上層出土遺物実測図（4）

部。202は土師器の匙形土器。内面に葉脈状痕看取。203は鉈。先端欠損。

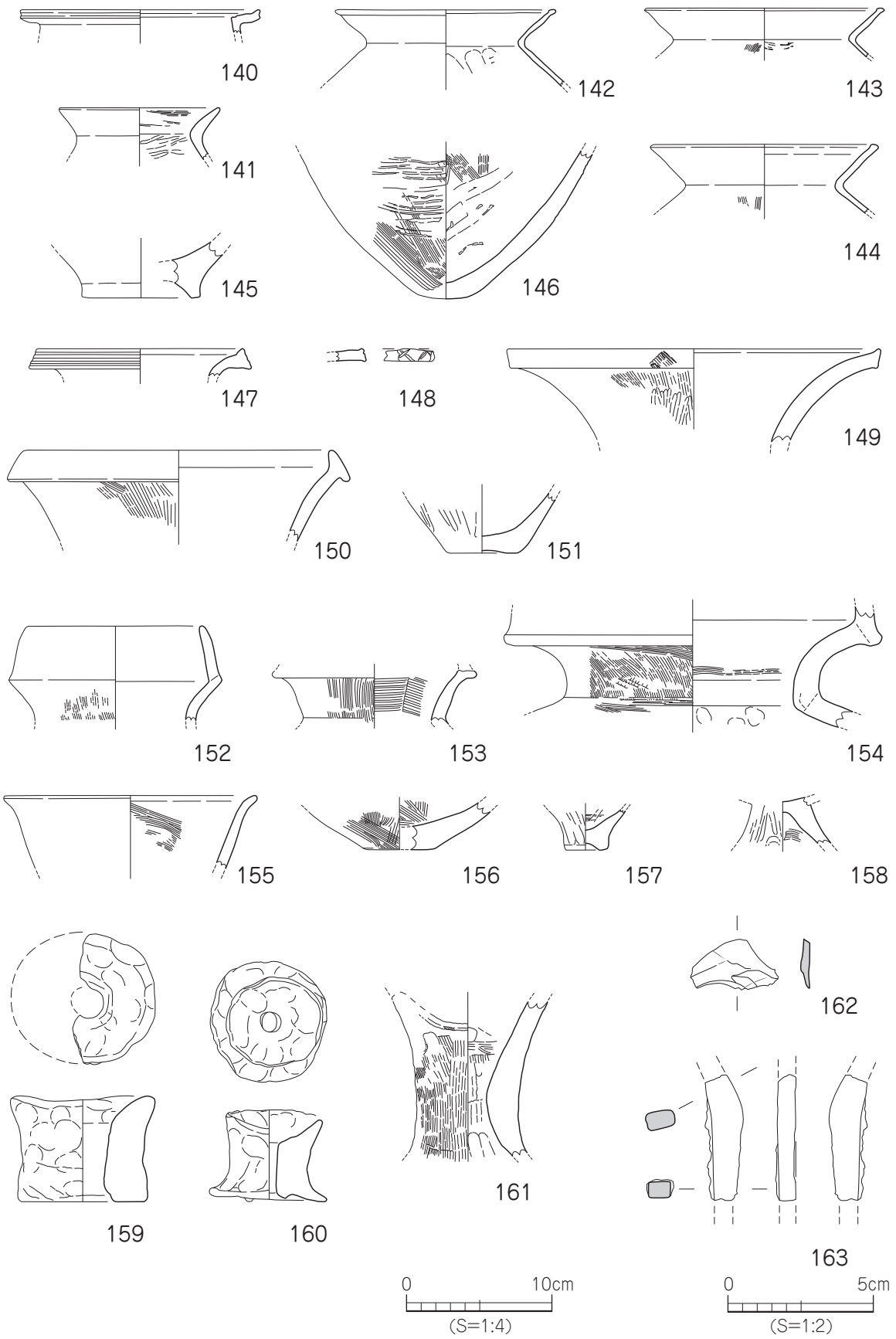
層不明出土遺物（第94図）

204 ～224は弥生時代の遺物である。204 ～210は甕。206の口縁部は短く外反し、端部はナデ凹む。208・209の底面は上げ底を呈する。弥生中期後半。210の底部外面はやや突出する。211 ～218は壺。211の口縁端部には2条の凹線が施される。弥生中期後半。212の口縁端部は下方に拡張される。213の口縁端部は下方に拡張し、端面に斜格子目文を施す。214 ・215は複合口縁壺。214は拡張部に6条の櫛描波状文を施す。215は拡張部下にハケ状工具による刻み目が施される。216は頸部に「ノ」字状の刻みが施される。弥生中期後半～後期前半。217 ・218は平底の底部。217は底部からの立ち上がり外面にミガキ痕を看取。弥生中期後半。219は鉢の底部。底部外面は円盤高台状にやや突出する。220・221は弥生中期後半の高坏脚柱部。220は1条の沈線下に山形文状の沈線が施される。221は5条のヘラ描沈線文下に矢羽根の透かしが施される。222は器台。口縁端部に山形文を看取。223・224は支脚。

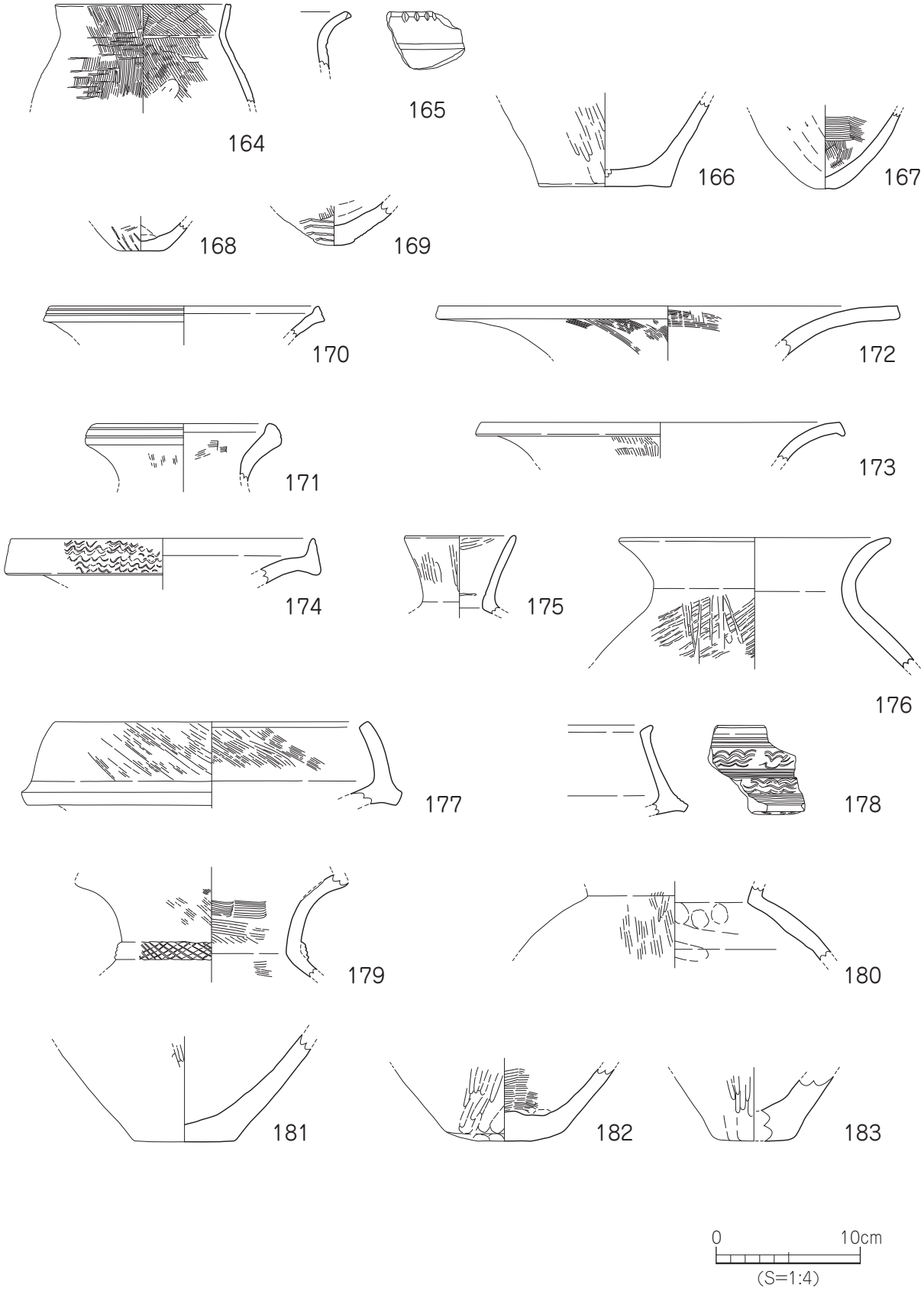
時　期：出土した土師器の特徴より、ＳＢ2の廃棄・埋没時期は弥生時代末～古墳時代初頭とする。

ＳＢ３（第95図、図版16）

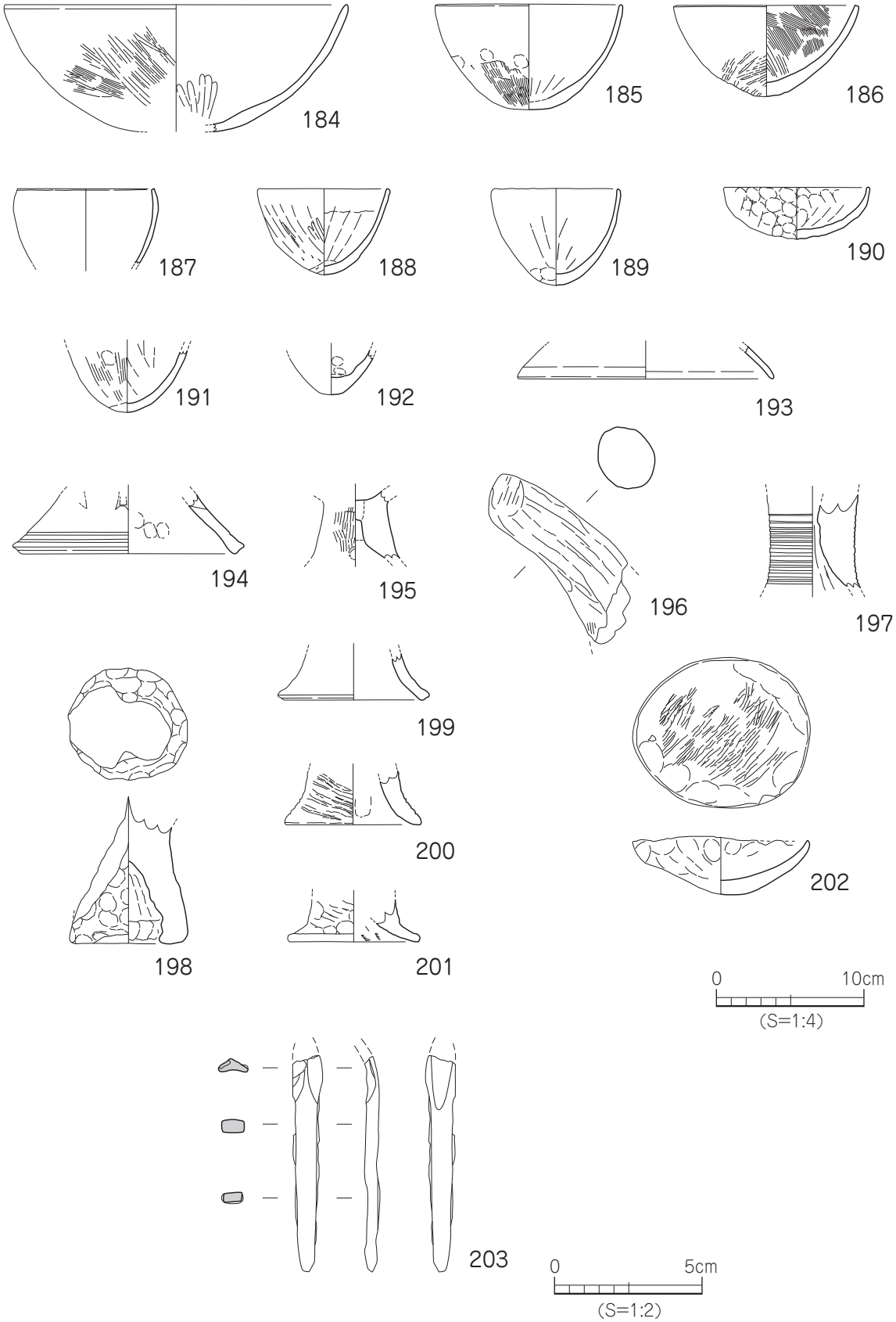
調査区北西部Ｃ・３～４区に位置し、掘立1、ＳＢ1に切られる。建物の北西隅部は樽味四反地遺跡19次調査で検出されたＳＢ1となる。第Ⅴ層上面での検出であり、第Ⅳ層が覆う。遺構検出時に建物北半分の埋土は遺存していなかったが、調査区北壁の土層観察により埋土は極暗赤褐色土である。平面形態は長方形を呈するものと考えられ、規模は南北長約6.6m、東西長4.65mを測る。なお、壁高は調査区北壁の土層観察より約25cmを測る。



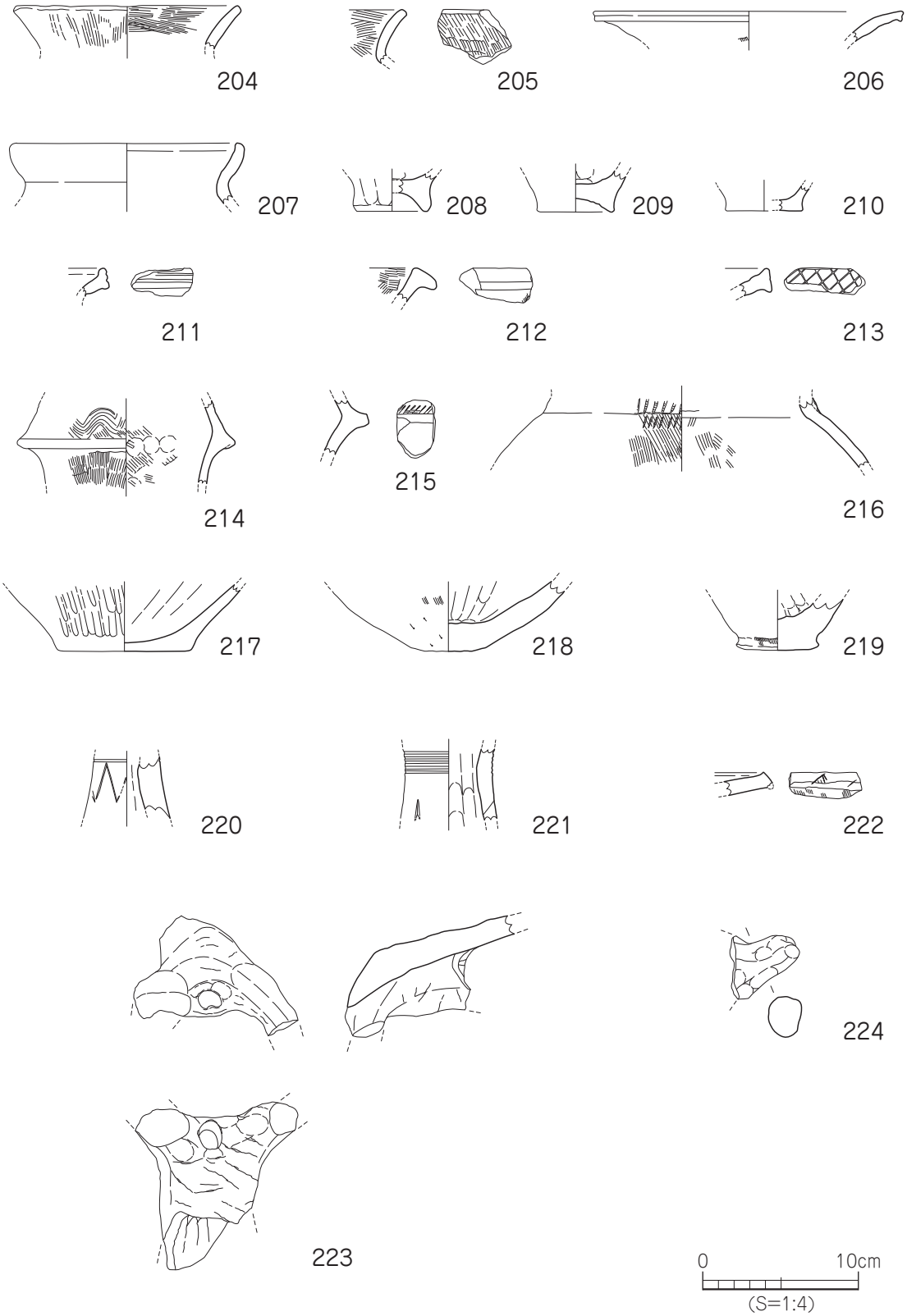
第 92 図　SB2 中層出土遺物実測図 (5)



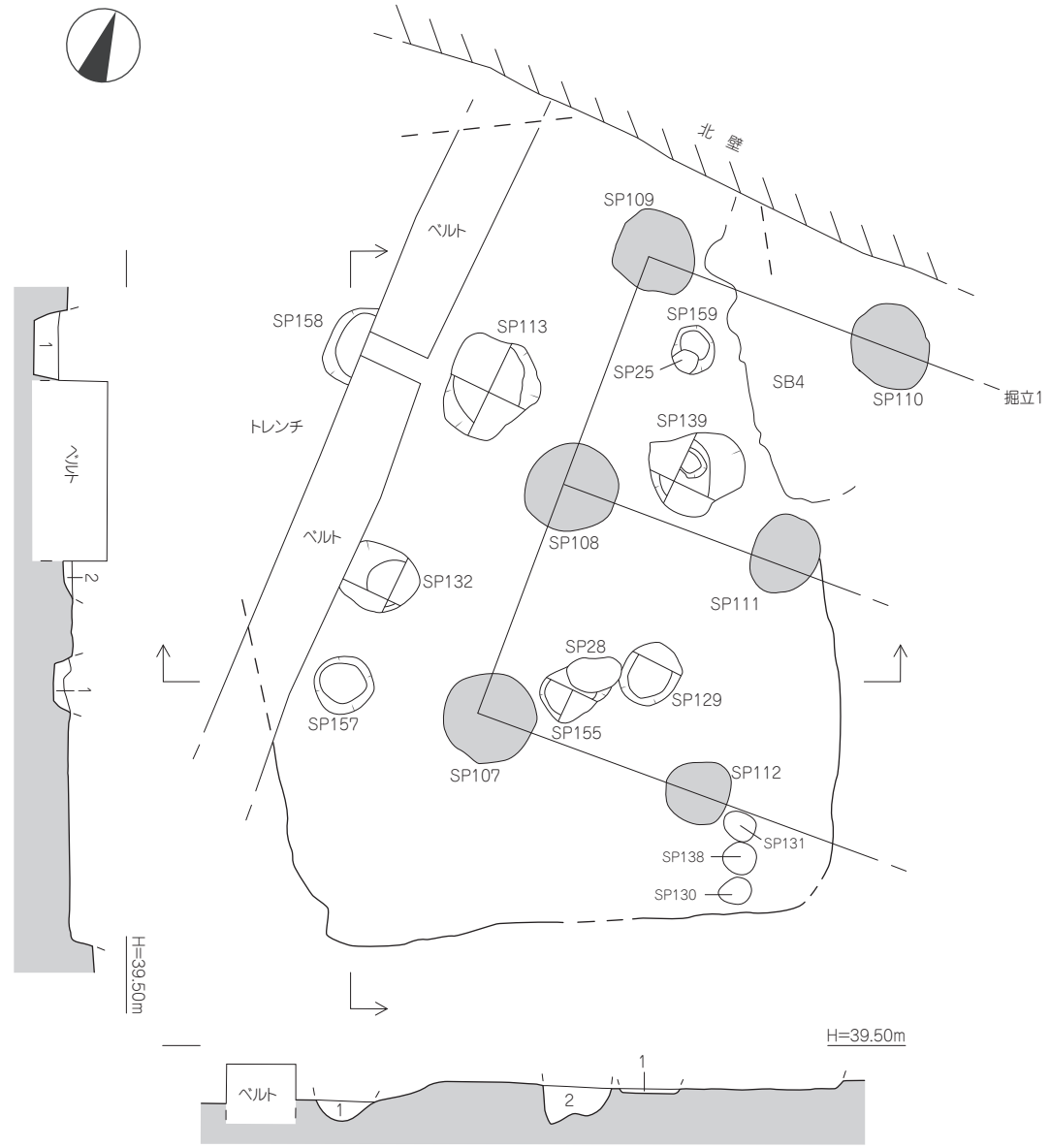
第 93 図　SB2 下層出土遺物実測図 (6)

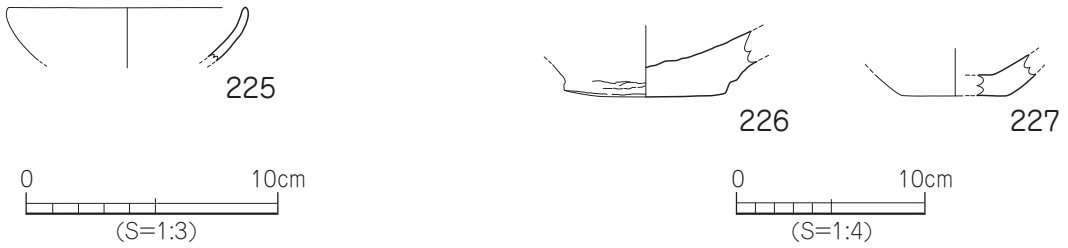


第 94 図　SB2 下層出土遺物実測図 (7)

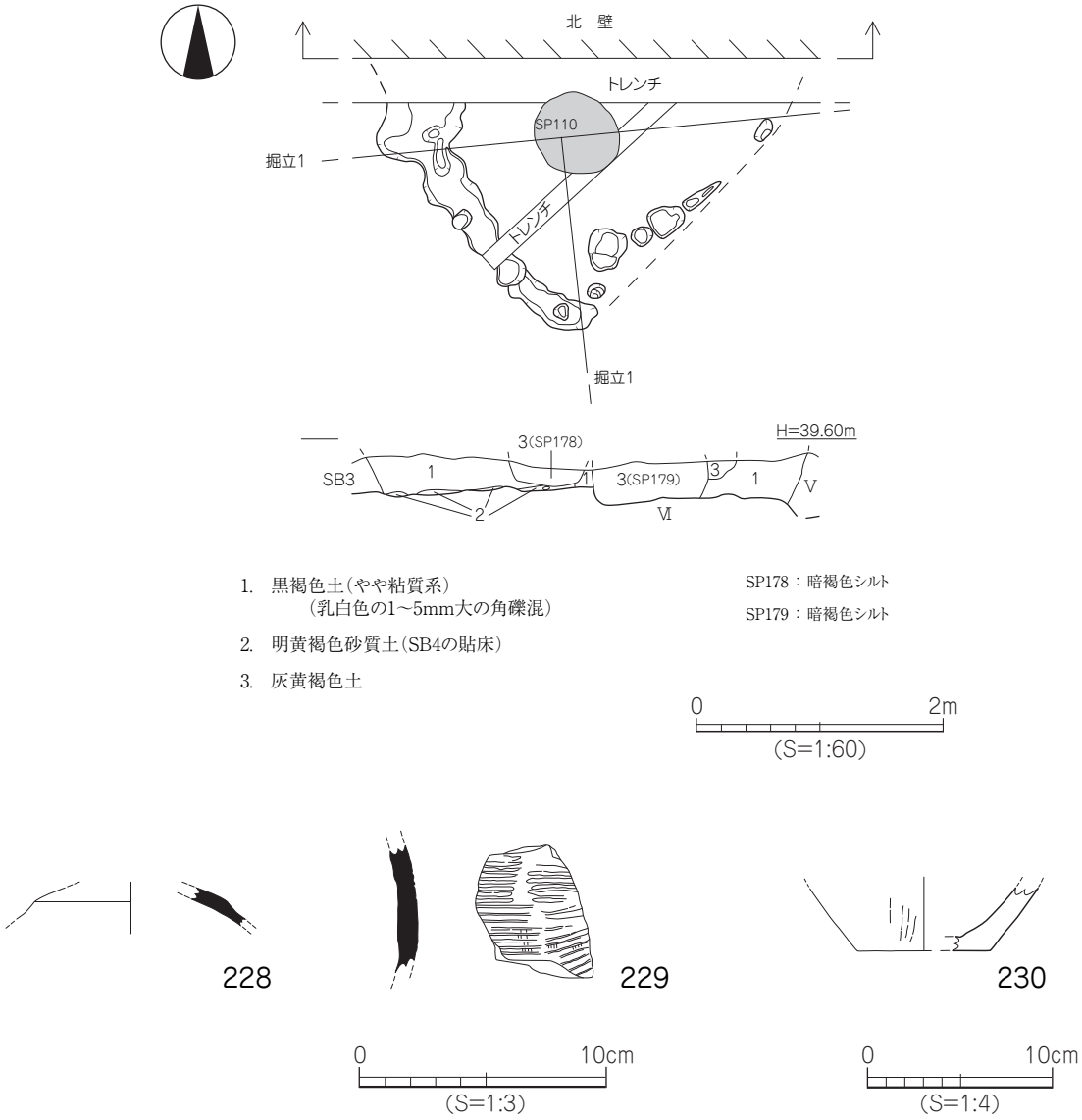


第 95 図　SB2 層不明出土遺物実測図 (8)





第 96 図　SB3 測量図・出土遺物実測図



第 97 図　SB4 測量図・出土遺物実測図

主柱穴はＳＰ129・157・158・159の4本と考えられる。平面形態は全て円形を呈し、規模は径36～68cm、深さ5～28cmを測る。主柱穴の配置は方形を呈し、南北・東西の心々距離は270cmを測る。埋土は黒褐色土を基調とし、ＳＰ159のみが暗褐色シルトである。

遺物は埋土中より、土師器の埦、弥生土器の壺が少量出土した。

出土遺物(第95図)

225は土師器埦。体部から内湾して口縁部へ立ち上がる。226・227は弥生時代の壺。226は平底を呈し、底部は円盤高台状に突出する。227の底面は平底を呈する。

時　期:出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが、遺構の切り合いや埋土などからＳＢ3の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半以前、5世紀中葉から後半とする。

ＳＢ４（第96図、図版17）

調査区北東部Ｂ～Ｃ・2～3区に位置し、掘立1に切られ、建物北側は調査区外に続く。第Ｖ層上面で検出したが、調査区北壁の土層観察より第Ⅳ層上面から掘り込まれており、埋土はやや粘質を帯びる黒褐色土で1～5mm程度の乳白色を呈する角礫が混じる。なお、遺構検出時には既に壁体は遺存しておらず、周壁溝のみの検出である。平面形態は方形或いは長方形を呈するものと考えられ、検出規模は北西－南東長2.45m、北東－南西長2.45mを測る。壁高は調査区北壁の土層観察より約32cmを測る。

壁溝の検出規模は幅21～78cm、深さ2～5cmを測る。埋土は黒褐色土である。壁溝内からは径12～28cm、深さ3～10cmを測る小ピットを検出した。小ピットは壁溝に打ち込まれた柱痕と考えられる。

遺物は周壁溝内より、須恵器、弥生土器が少量出土した。

出土遺物（第96図）

228・229は須恵器。228は坏蓋の天井部。外面は回転ナデ成形により明瞭な段をなす。229は甕の胴部。外面に平行タタキ痕を看取。230は弥生時代で甕の底部。底面は平底を呈する。底部からの立ち上がり外面はミガキによる仕上げがなされる。弥生中期後半。

時　期：出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが、遺構の切り合いや埋土などからＳＢ4の廃棄・埋没時期は古代、7世紀後半とする。

（２）掘立柱建物

掘立１（第97図、図版16）

調査区北東部Ｂ～Ｃ・3区に位置する。東西2間以上、南北2間以上の総柱建物で、ＳＢ1・3・4との切り合いより、掘立1は3棟の竪穴建物より後出する。建物を構成する9基の柱穴（ＳＰ107～112、ＳＰ135・149・151）は第Ⅲ層上面及びＳＢ1・3・4の床面にて検出した。建物の検出規模は心々距離で東西長3.97m、南北長3.95mを測り、建物方位をＮ－5°－Ｗにとる。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径49～95cm、深さは検出面下12～62cmを測る。柱穴掘り方埋土は5層あり、ＳＰ110・151が黒色土、ＳＰ112・149が黒褐色砂質土、ＳＰ108がにぶい黄褐色砂質土、ＳＰ109が暗灰黄色砂質土、ＳＰ107・111・135が黒褐色土（礫混じり）である。柱痕は3基の柱穴（ＳＰ107・108・109）で検出した。規模は径17～31cm、深さは検出面下24～45cmを測る。柱痕埋土は黄褐色土（白色角礫を含む）である。

遺物は、柱穴掘り方埋土中より土師器片、須恵器片が少量出土した。

出土遺物（第97図、図版24）

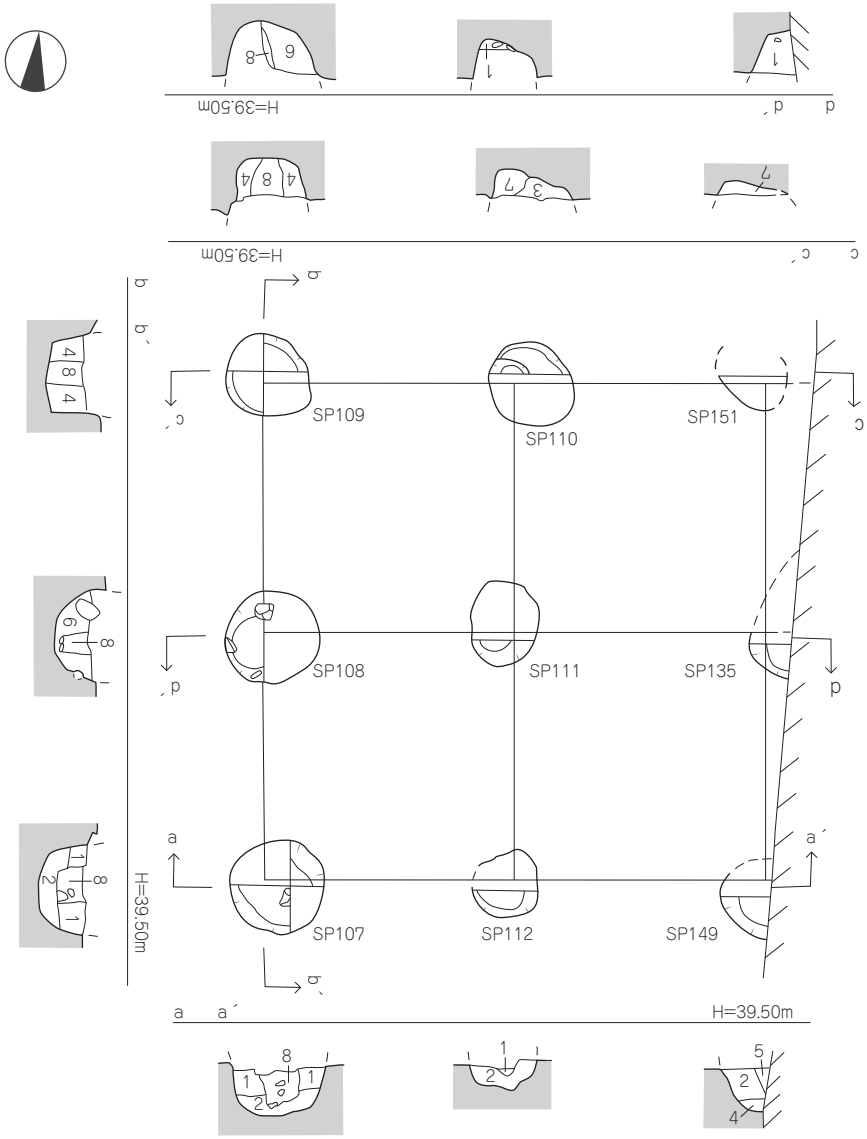
231・232は土師器の高坏である。231は坏上部片。口縁端部は短く外反する。5世紀。232は坏下半部片。233は土師器で台付き坏の底部片。高台は断面「ハ」の字状に開き、端部は内側が凹む。234は土師器の坏で体部は内湾する。235は須恵器で平瓶の頸部片。

時　期：出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが、ＳＢ1・3・4に後出することから、古代、7世紀後半以降とする。

（３）土坑

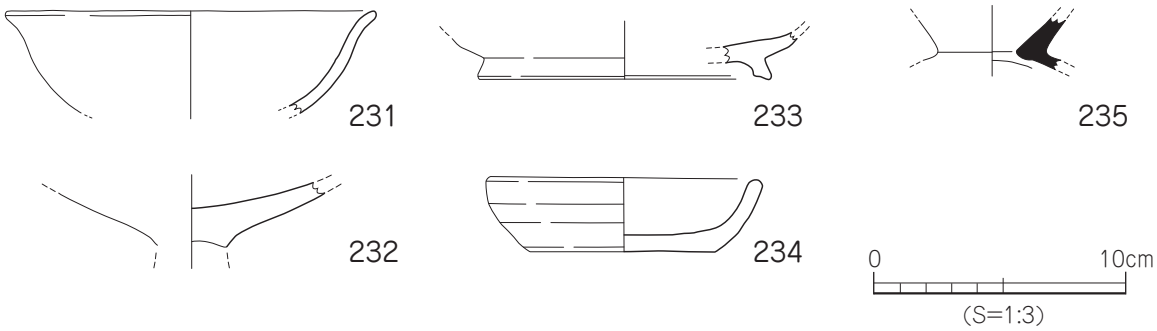
ＳＫ１（第98図）

調査区北東部、Ｂ・2～3区に位置する。東側は調査区外に続く。第Ⅲ層上面で検出したが、調査区東壁の土層観察より第Ⅱ層上面から掘り込まれており、上面は第Ⅰ層が覆う。平面形態は長方形を呈すると



1. 黒褐色土
（淡黄色･乳白色の角礫1～3mmを含む）
2. 黒褐色砂質土
3. 黒褐色土と黄褐色土の混合土
4. 暗灰黄色砂質土
5. にぶい黄褐色砂質土（濃褐色）
6. にぶい黄褐色砂質土
7. 黒色土
8. 黄褐色土(白色角礫を含む)
（柱痕）

0 2m
（S=1:60）



第 98 図　掘立 1 測量図・出土遺物実測図

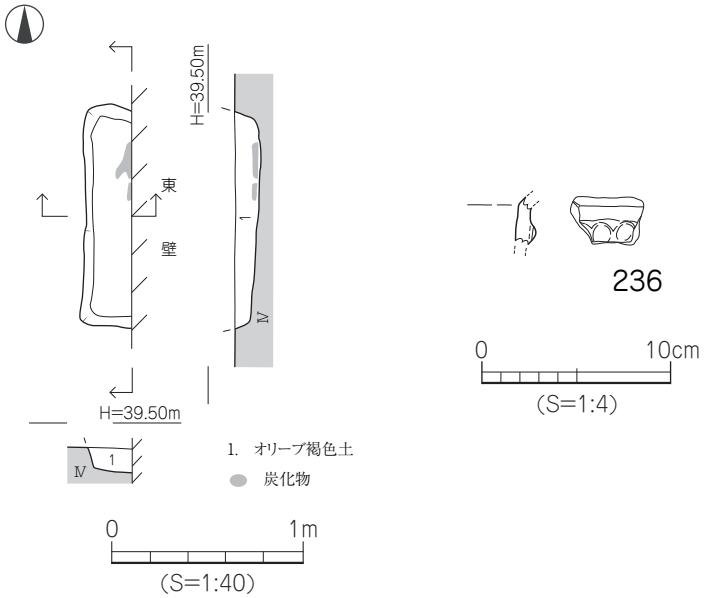
考えられる。検出規模は南北長118cm、東西長27cm、深さは検出面下13cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土はオリーブ褐色土である。

遺物は、埋土中より弥生土器片が1点出土した。また、遺構内北側の底付近で炭化物が検出された。

出土遺物（第98図）

236は弥生土器で甕の頸部片である。1条の凸帯文が貼付される。

時　期：236は混入品と考えられるものであり、時期特定しうる遺物の出土はないが、検出層位や埋土から概ね中世の遺構としておく。



第 99 図　2 区 SK1 測量図・出土遺物実測図

ＳＫ２（第99図、図版18）

調査区Ｃ・3区に位置する。第Ⅳ層上面での検出である。平面形態は楕円形を呈し、検出規模は長さ98cm、幅62cm、深さは検出面下12cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、床面は平坦である。埋土は暗灰黄色土である。遺構内からは北枕横臥屈葬された人骨と供献遺物と考えられる土師質の坏（3点）が検出された。人骨の頭位は北向きで、正面は西である。骨の遺存は芳しくなく、脆弱であった。坏の位置はは背骨、腕、膝付近に1点ずつ配されていた。

出土遺物（第99図、図版23）

237～239は土師質土器の坏で完存品。底部の切り離し技法は回転糸切りによる。237の口縁端部はやや肥厚される。238の底面には「スノコ」状痕が残る。239は器壁が厚く、外面はナデにより稜をなす。240は青磁碗の底部。輪高台は断面「ハ」の字状に開く。241は土師器土鍋の脚部。

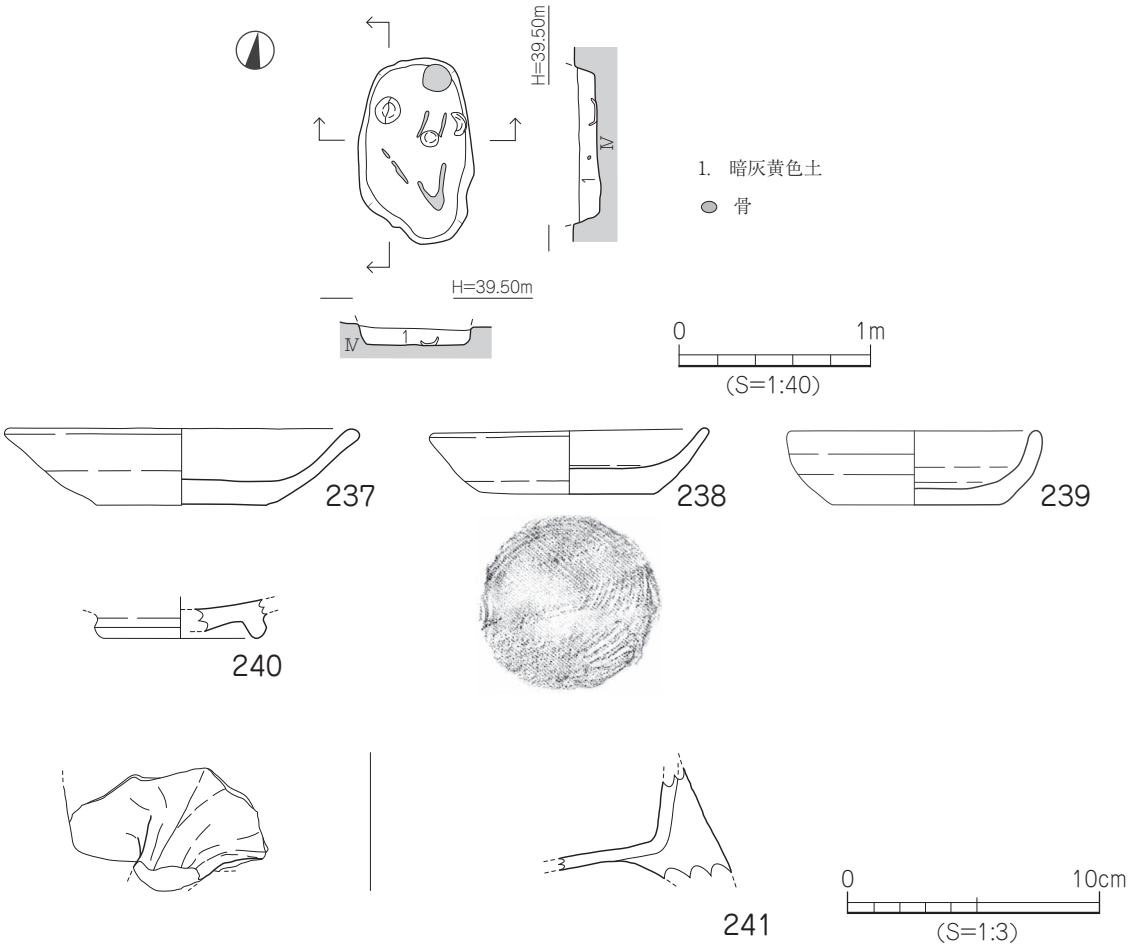
時　期：出土遺物から埋葬された時期は中世、14～15世紀とする。

ＳＫ３（第100図）

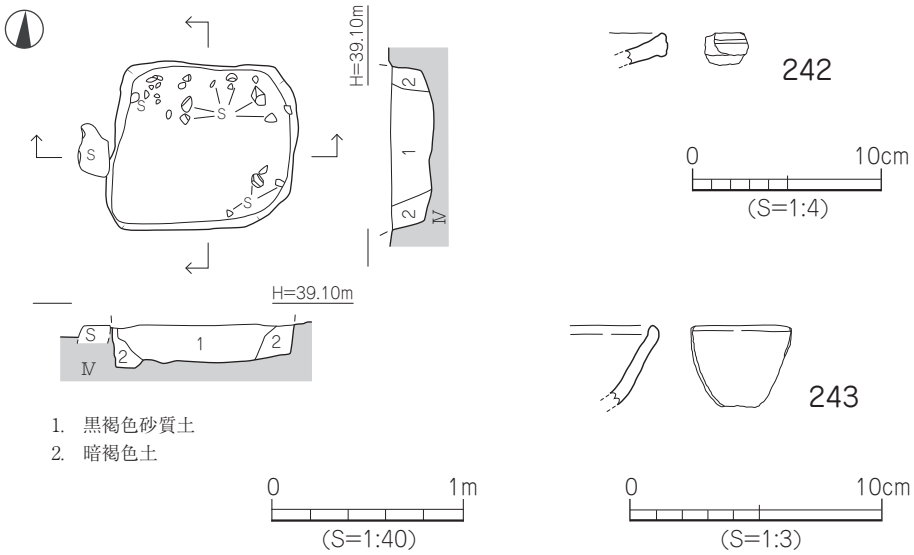
調査区Ｂ～Ｃ・4区に位置する。第Ⅳ層上面での検出である。平面形態は方形を呈し、検出規模は東西長96cm、南北長86cm、深さは検出面下23cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、西側の一部を除き床面はほぼ平坦である。埋土は2層に分層され、1層：黒褐色砂質土、2層：暗褐色土である。なお、床面から3～7cm大の小礫が少量検出された。また、西側壁体に接する状況で30cm大の平坦な礫が遺存する。遺物は少量の弥生土器、土師器が出土した。

出土遺物（第100図）

242は弥生土器の壺。口縁端部は下方に拡張され、端面に1条の凹線文が施される。弥生中期後半。243



第 100 図　2 区 SK2 測量図・出土遺物実測図



第 101 図　2 区 SK3 測量図・出土遺物実測図

は土師器の壺。口縁端部は内側に肥厚される。

時　期：出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが、検出面及び埋土などから古墳時代前期とする。

ＳＫ５（第101図）

調査区Ｃ・3区に位置する。第Ｖ層上面での検出である。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、検出規模は東西長130cm、南北長53cm、深さは検出面下8cmを測る。断面形態は皿状を呈し、床面は若干の凹凸はあるものの、ほぼ平坦である。埋土は黒褐色砂質土で炭化物と焼土が混入する。遺物は埋土中より弥生土器が少量出土した。

出土遺物（第101図、図版23）

244～248は弥生土器である。244・245は甕。244の口縁部は直線的に外傾し、端部は外側水平に肥厚される。245は外来系土器である。口縁部は上外方に拡張される。246は壺の口縁部。端部は僅かに下方へ肥厚される。247・248は高坏。247は坏部で口縁端部は短く外反する。248は脚柱部。坏部との接合は脚部挿入法による。

時　期：出土した土器の特徴と検出層位や埋土より、古墳時代初頭～前半とする。

ＳＫ６（第102図）

調査区Ｃ・3～4区に位置する。ＳＢ３に切られる。第Ｖ層上面での検出である。平面形態は円形を呈するものと考えられ、検出規模は東西長95cm、南北長46cm、深さは検出面下50cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。遺構内の南西部は段をなす。埋土は黒褐色土である。遺物は少量の弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

出土遺物（第102図）

249は弥生土器の複合口縁壺。口縁端部に5条の擬凹線文が施される。弥生後期中葉。250・251は土師器。250は小型壺の口縁部。僅かに外反する。251は高坏。坏部と脚部の接合法は粘土塊挿入法による。252は須恵器の坏蓋。

時　期：出土遺物が少なく時期特定は困難であるが、検出面及び埋土から古墳時代中期以前とする。

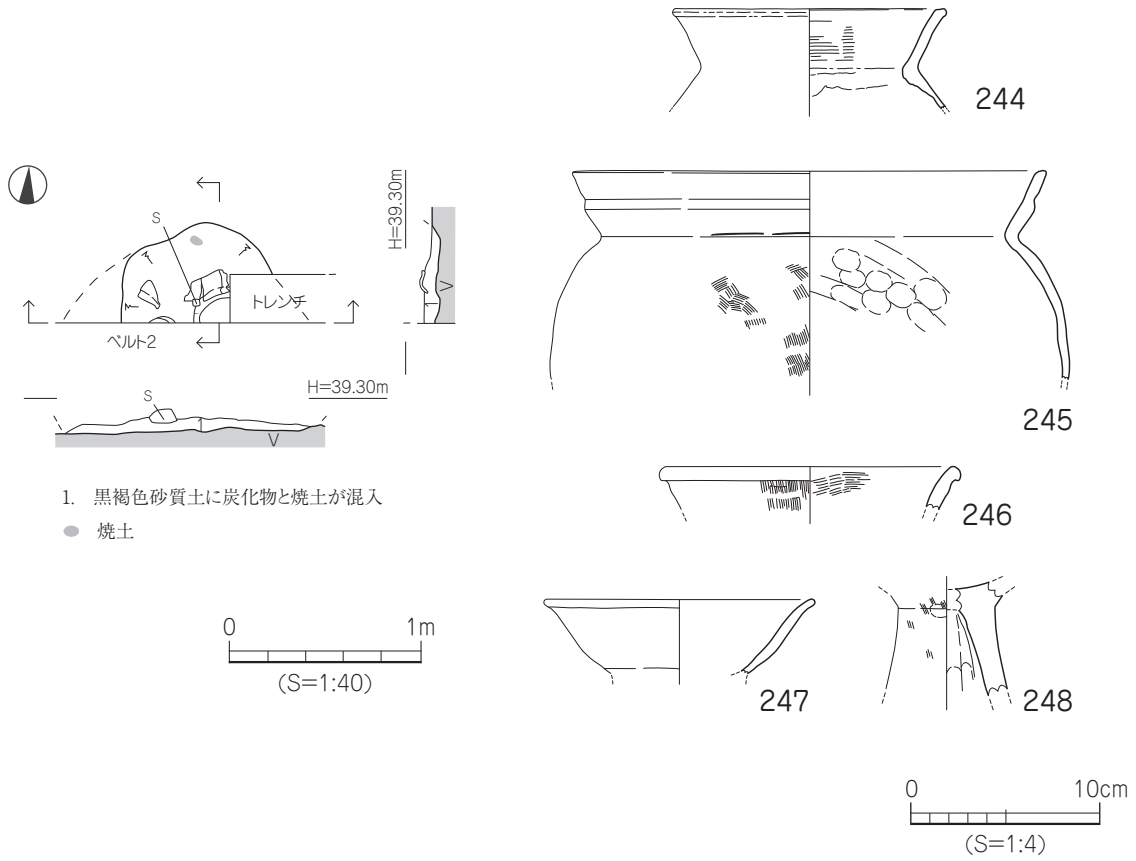
ＳＫ８（第103図）

調査区Ｂ～Ｃ・3区に位置する。掘立1を構成する柱穴（ＳＰ135）に切られる。第Ｖ層上面での検出である。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、検出規模は東西長139cm、南北長43cm、深さは検出面下29cmを測る。断面形態は長方形を呈するものと考える。埋土は黒褐色土である。また、遺構内南側で東西方向へ延びる小溝を検出した。小溝の検出規模は長さ128cm、幅32cm、深さ15cmを測る。溝底は若干の凹凸がある。遺物は少量の弥生土器が出土した。

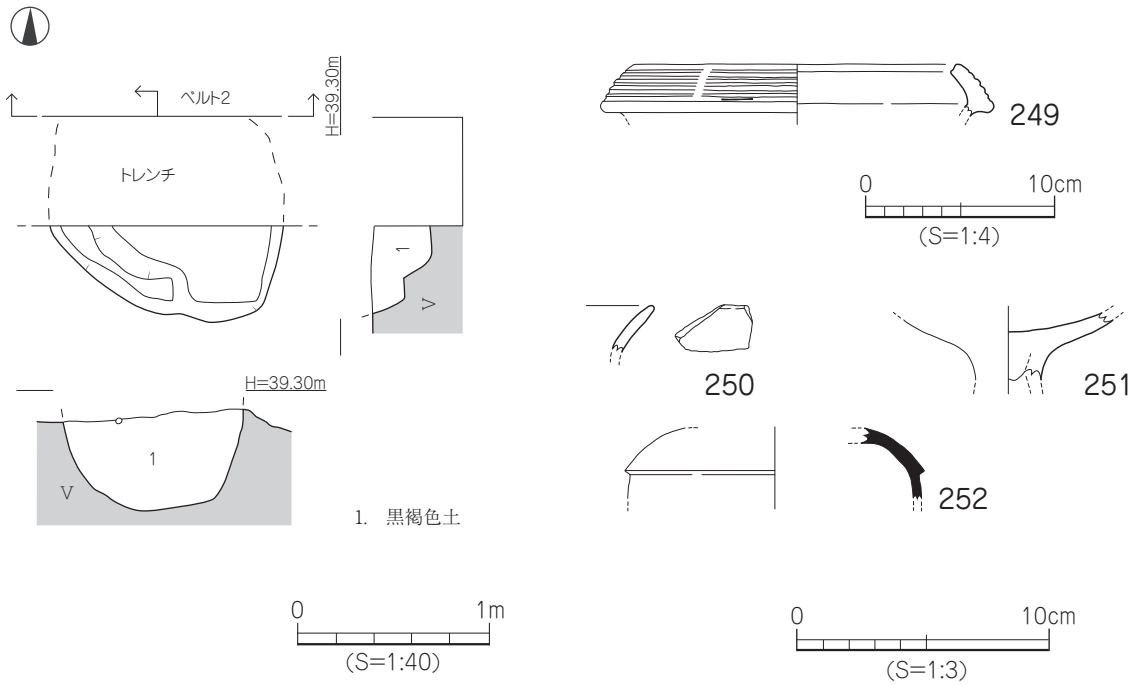
出土遺物（第103図、図版24）

253・254は弥生土器の壺である。253の口縁部は短く外反し、端部は上下に拡張される。端面には3条の凹線文が巡る。また、頸部には刺突文が施される。弥生中期後半。254は頸部片か。ハケ状工具による刻目文を看取。弥生中期後半。

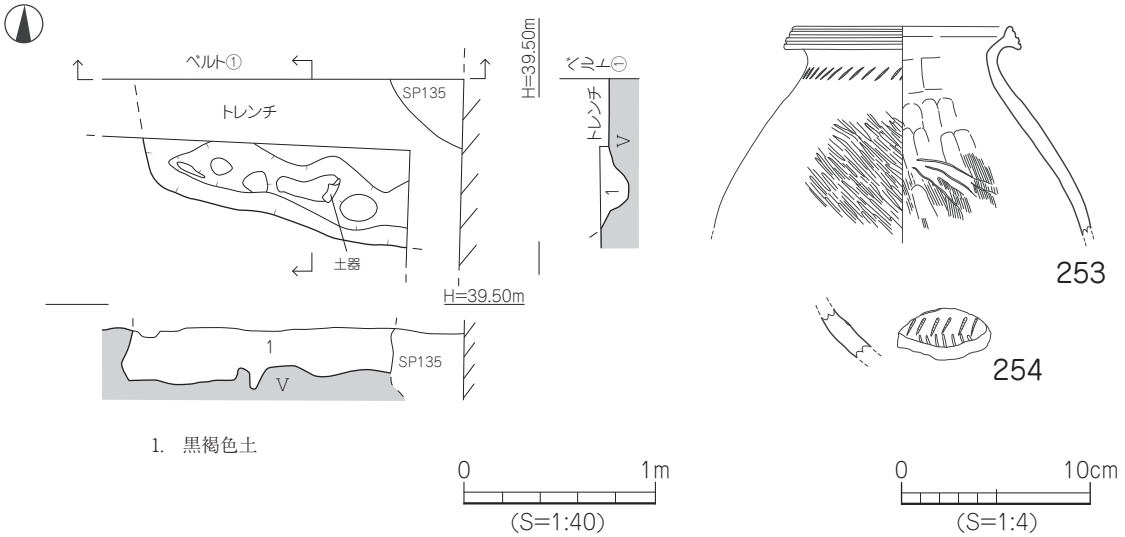
時　期：出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが、遺構の切り合いや埋土などから弥生時代中期後半とする。



第 102 図　2 区 SK5 測量図・出土遺物実測図



第 103 図　2 区 SK6 測量図・出土遺物実測図



第 104 図　2 区 SK8 測量図・出土遺物実測図

(4)その他の遺構と遺物

調査では遺構内及び掘立柱建物を構成する柱穴を除き、170基の柱穴を検出した。また、最初の遺構検出の際に石組み遺構が検出された。ここでは出土遺物の中で図化出来たものを記載する。このほか、包含層や重機掘削時に遺物が出土した。なお、重機掘削時の出土品は層位や地点が不明であるため、ここでは「地点不明出土遺物」として実測図を掲載する。

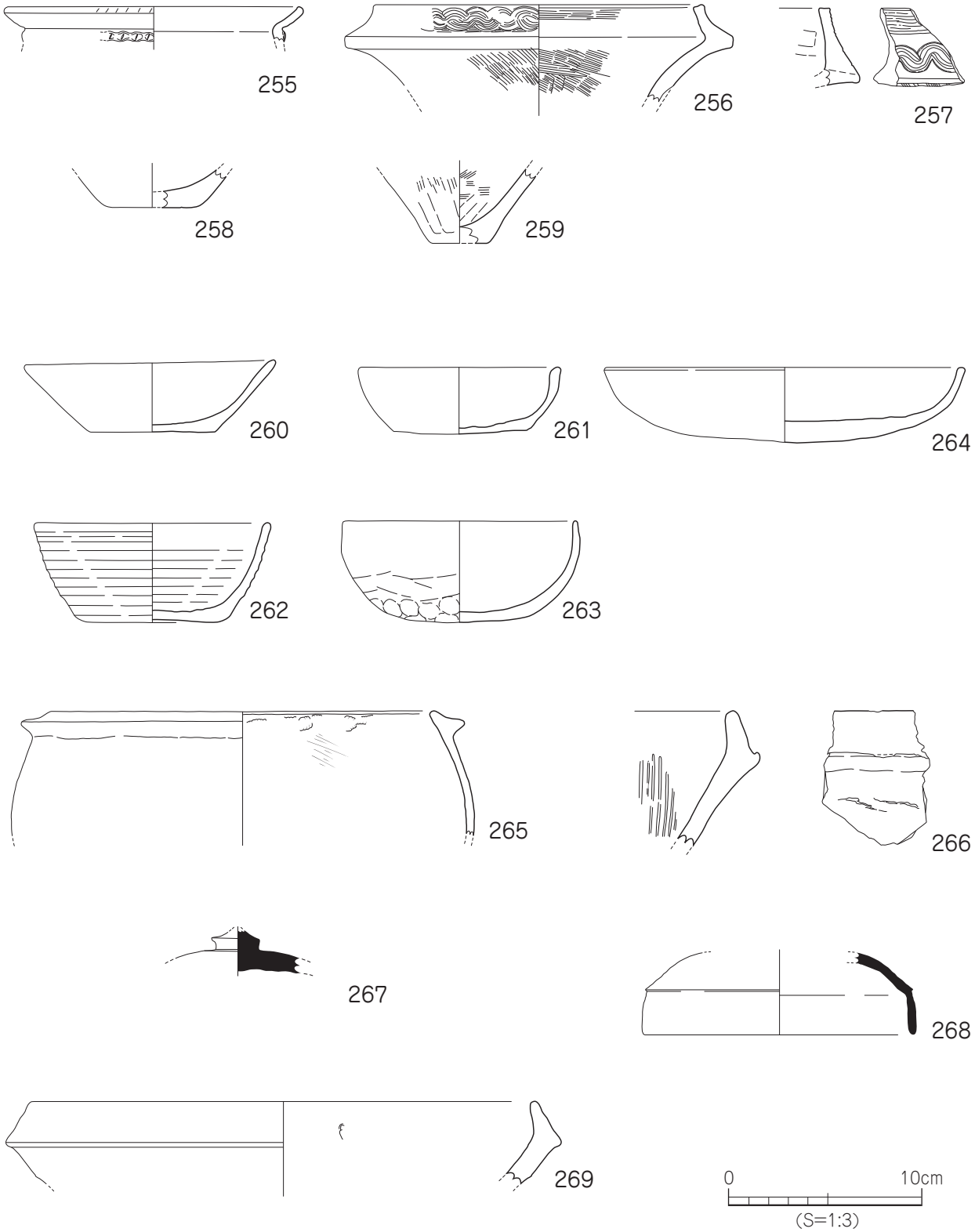
1)柱穴内出土遺物(第104図、図版18・24)

255 ～259はＳＰ178出土の弥生土器である。255は甕の口縁・頸部片。端部に細い刻目、頸部に刻目凸帯文が貼付される。弥生中期後半。256・257は複合口縁壺。256は拡張部に10条の波状文が施される。257の拡張部には4条の波状文下に8条の櫛描波状文が施される。弥生後期。258は壺の底部。259は甕の底部。共に平底を呈する。弥生後期。260 ～263は土師器の坏である。260はＳＰ81出土で口縁部は僅かに肥厚される。10 ～11世紀。261はＳＰ142出土。262はＳＰ57出土。体部外面に横ナデによる明瞭な稜が残る。263はＳＰ140出土。口縁端部は細く上向きとなる。7世紀。264はＳＰ106出土で瓦質土器の皿。8世紀。265はＳＰ59出土で土師質土器の土釜。端部外面に断面三角形の凸帯が貼られる。13世紀。266はＳＰ27出土で土師質土器の擂鉢。口縁部は上方に延びて立ち上がる。14 ～15世紀。267・268は須恵器の坏蓋。267はＳＰ9出土で宝珠つまみ部。8世紀前半。268はＳＰ166出土。6世紀前半～中頃。269はＳＰ7出土で備前焼の擂鉢。口縁部内側に櫛目看取。15世紀。

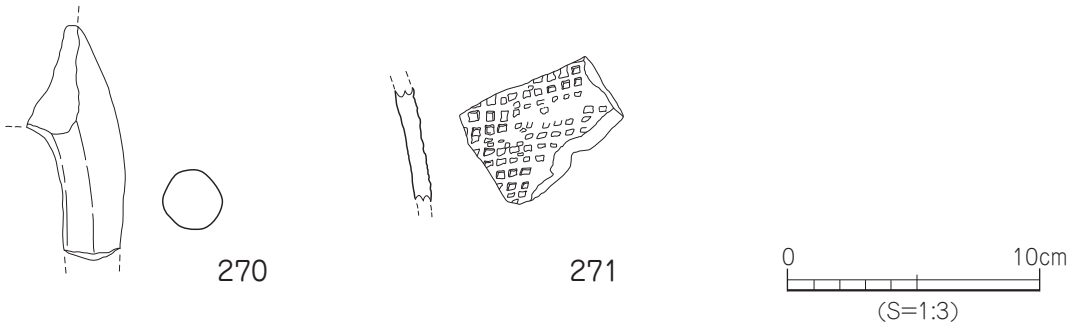
2)石組み遺構出土遺物(第105図)

調査区Ｃ・3区に位置する。検出規模は東西長175cm、南北長80cm、高さ15cmを測る。概ね5 ～20cm大の角礫で構成される。礫・土器以外は検出されなかった。

270・271は土師器である。270は土釜の脚部。断面は円形である。271は壺の胴部。格子状のタタキ痕が残る。



第 105 図　2 区 SP 出土遺物実測図



第 106 図　2 区石組遺構出土遺物実測図

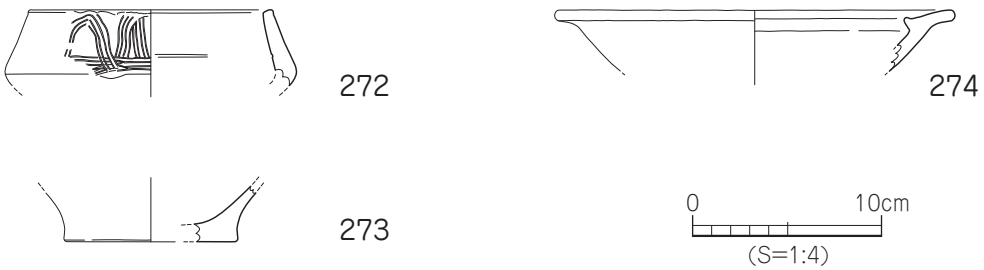
3）第Ⅳ層出土遺物（第106図）

272 ～274は弥生土器である。272は複合口縁壺の拡張部。4条の直線文に4条の櫛描波状文を重ねる。273は甕の底部で、平底を呈する。弥生中期後半。274は高坏の坏部口縁。端部は内外方に拡張される。弥生中期中葉。

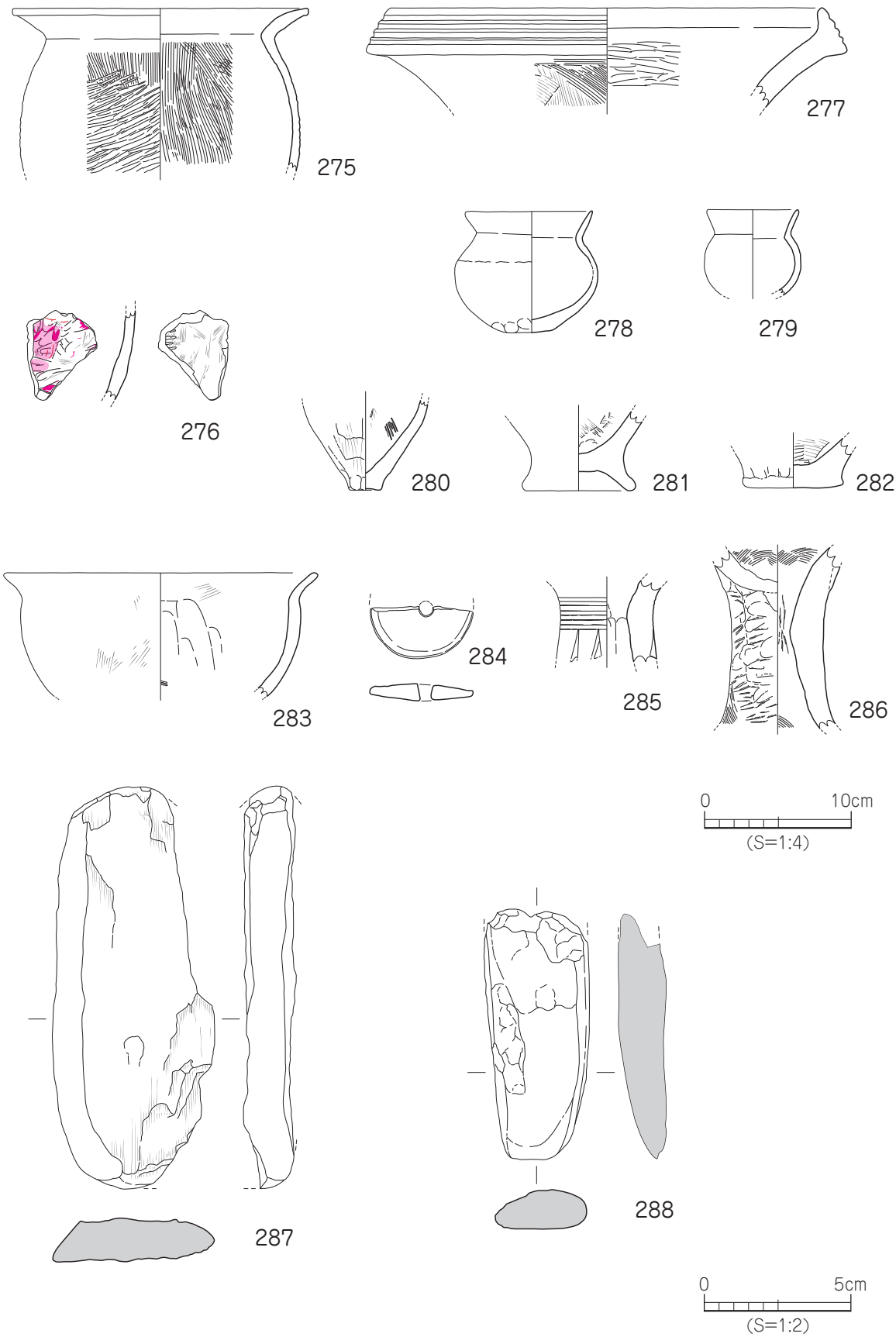
4）第Ⅲ層出土遺物（第107･108図、図版24）

275 ～283、285 ･286は弥生土器である。275は甕。口縁部は短く外反気味に延びる。弥生末。276は甕の胴部と考える。外面に赤色顔料付着（未分析）。277 ～279は壺。277は上方に拡張される口縁端部に 4 条の凹線文が巡る。弥生中期後半。278はほぼ完存する小型壺。底部は平底を呈する。279はミニチュア品。280 ～282は底部。280は僅かに上げ底を呈する。弥生中期。281はくびれの上げ底。弥生中期後半。282は平底。弥生後期後半。283は屈折口縁鉢。弥生末。284は紡錘車。焼成前穿孔。285は高坏脚柱部。上位に8条の沈線文、下位に矢羽根透かしが施される。弥生中期後半。286は中空の支脚。弥生後期後半～末。287は柱状片刃石斧。緑色片岩。288は扁平片刃石斧。緑色片岩。

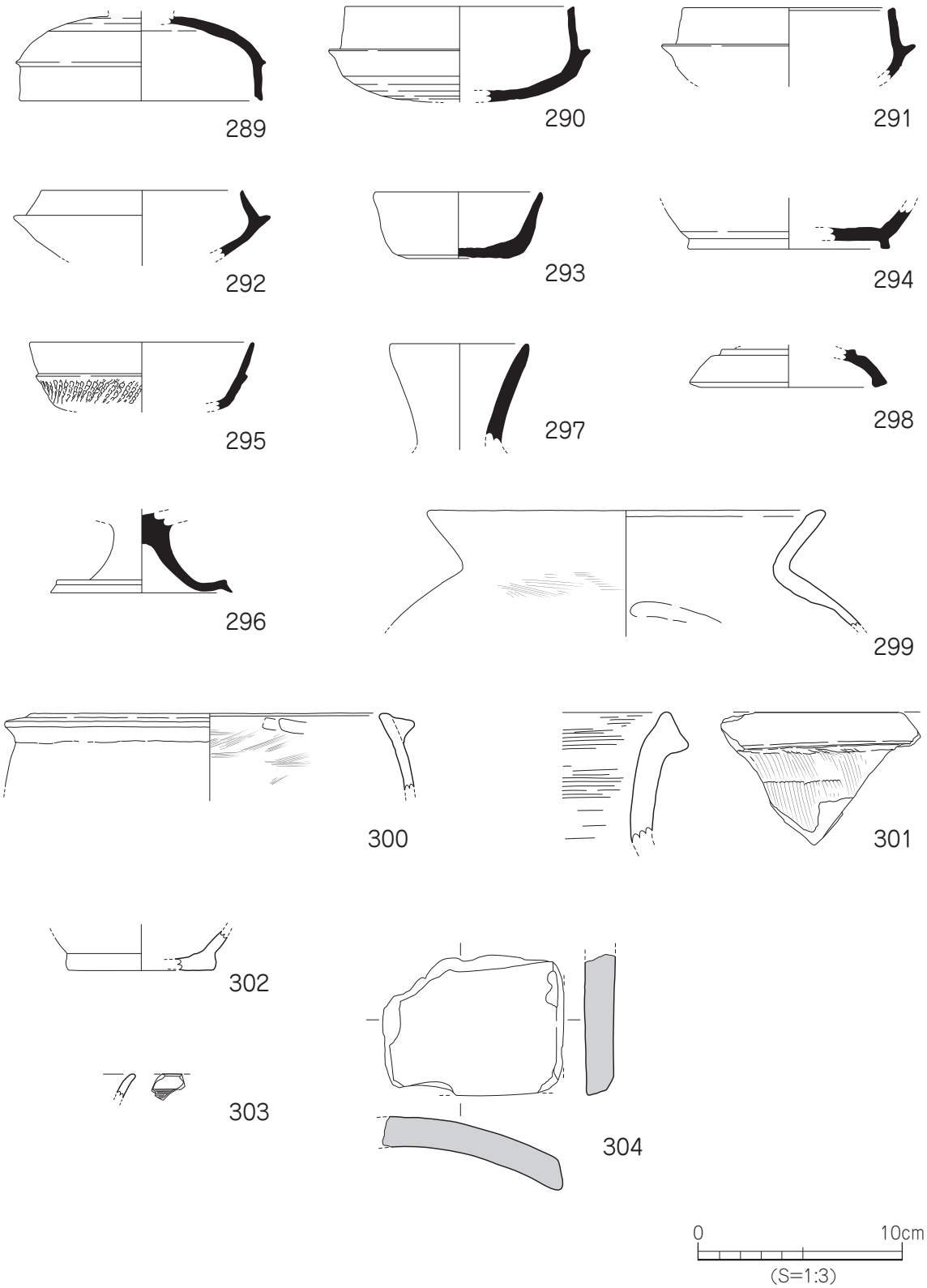
289 ～298は須恵器。289は有蓋高坏の蓋。つまみ部欠損。5世紀後半。290 ～292は坏身。292の口縁部は内傾後細く上向きとなる。6世紀中葉～後葉。293･294は坏。293の底面は平底を呈し、口縁部は外傾する。7世紀後半。294は底部に高台が付く。8世紀前半。295･296は高坏。295は無蓋高坏の坏部。下半部に刺突列点文が施される。6世紀後半～末。296は外反して開く脚柱部。7世紀前半。297は平瓶の口縁部。7世紀。298



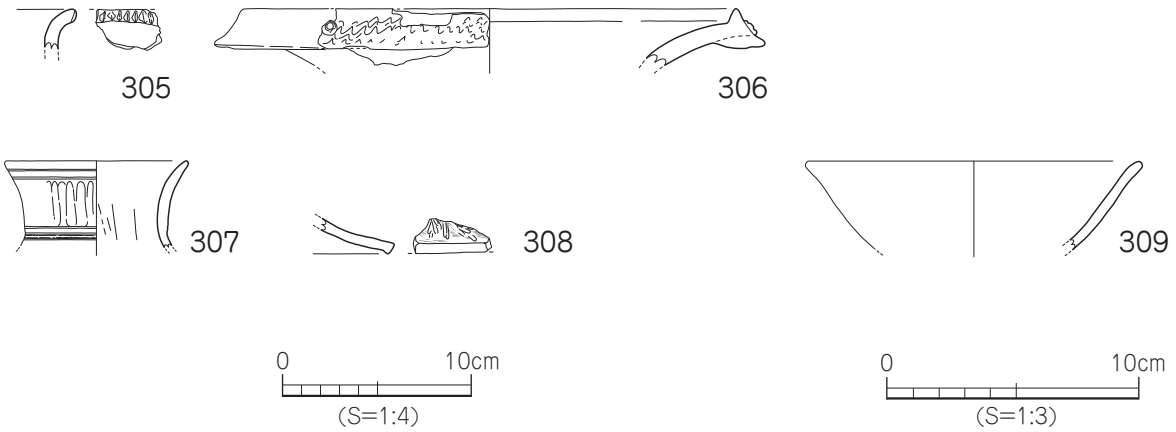
第 107 図　2 区Ⅳ層出土遺物実測図



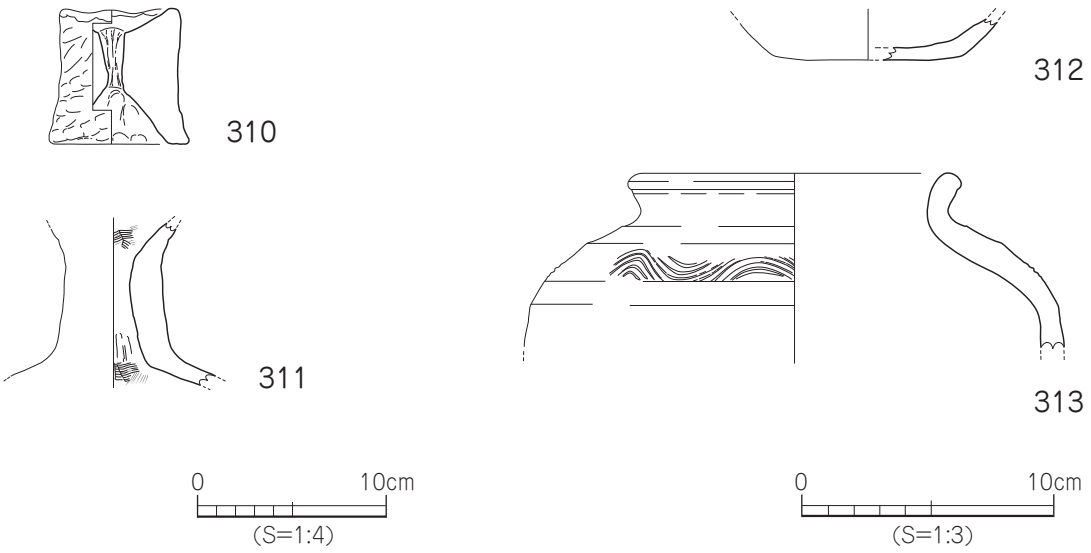
第 108 図　2 区Ⅲ層出土遺物実測図 (1)



第 109 図　2 区Ⅲ・Ⅱ層出土遺物実測図 (2)



第 110 図　2 区グリッド出土遺物実測図



第 111 図　2 区出土地不明遺物実測図

は脚付壺の脚部。6 ～7世紀。299は土師器の甕。6世紀前半。

5）第Ⅱ層出土遺物（第108図）

300 ～302は土師質土器。300は土釜。口縁端部外面に断面三角形の凸帯が貼付される。13世紀。301は甕。口縁端部は下方に拡張される。302は坏。底部は円盤高台を呈する。10 ～11世紀。303は陶磁器碗の口縁部。304は平瓦。

6）グリッド出土遺物（第109図、図版24）

305 ～308は弥生土器。305はＢ・3出土の甕。口縁部は短く折り曲げられ外反する。端部に刻目が施される。弥生前期。306はＣ・4出土で広口壺の口縁部。端部は波状文を描線後、円形浮文が貼付される。弥生

末。307・308はＣ・3出土。307は直口壺の口縁部。沈線文が上下に施される。308は器台の裾部。309はＢ・3から出土した緑釉陶器の碗。10～11世紀。

7）地点不明出土遺物（第110図）

310・311は弥生土器。310は中実の支脚。中心は棒で穿孔される。弥生末。311は中空の支脚。弥生末。312は土師質土器の坏。313は備前焼の壺。口縁部は短く外反し、肩部に5条の櫛描波状文が施される。

第5節　小　結

調査では、弥生時代中期後半から中世までの遺構・遺物を確認することができた。ここでは、集落の変遷を中心にまとめを行う。

（1）弥生時代

①　弥生時代中期後半：2区で土坑1基を検出した。ＳＫ8は一部を検出したに過ぎず、規模は不明である。出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが、概ね該当期とした。

②　弥生時代末～古墳時代初頭：2区で竪穴建物1棟を検出した。ＳＢ2の平面形は方形であり、本調査区では東側の約半分を検出し、西半分は隣接する同遺跡19次調査で検出されたＳＢ6となる。検出規模は、南北長5.95m、東西長（19次と20次の図面合成長）約6.25m、壁高約85cmを測る。内部からは周壁溝、高床部、周溝、土坑、柱穴が検出された。出土遺物は1点の須恵器を除き、弥生時代前期前半～古墳時代前期前半に帰属する。

（2）古墳時代以降

①　古墳時代中期中葉：2区で竪穴建物1棟を検出した。ＳＢ3は約6.6m×4.65mを測る長方形建物で、北西隅は19次調査ＳＢ1となる。

②　古墳時代中期後半：2区で竪穴建物1棟を検出した。ＳＢ1は一辺4.3m以上を測る方形建物である。4本柱構造で、北壁中央部に馬蹄形状のカマドが付設されている。燃焼部中央からは土師器高坏の脚部が出土している。また、南東隅から出土した鍛造鉄斧の法量は全長18.5cm、最大幅8cm、重量1kgである。刃先の一部が欠損するものの、ほぼ完存する優品で西日本有数の大きさである。

③　古墳時代後期後半：1区でＳＫ4を検出した。出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが、遺構の切り合い関係も踏まえて概ね該当期とした。

④　７世紀後半：2区で竪穴建物1棟、掘立柱建物1棟を検出した。ＳＢ4の平面形は方形或いは長方形になると思われるが、一部を検出したに過ぎず、全体の規模は不明である。掘立1はＳＢ4より後出することから7世紀後半以降と考えられ、2間以上×2間以上の総柱構造を呈する。

⑤　中世：2区で土坑2基（ＳＫ1・2）を検出した。このうちＳＫ2は14～15世紀に比定される土坑墓であり、埋葬された人骨と供献遺物と思われる土師器の坏が検出された。

本調査では、弥生時代末から中世の集落関連遺構が検出された。このうちＳＢ2は、構築方法、廃絶方法を解明するうえで貴重な資料が得られ、更に帰属時期が大型建物群に近い弥生時代末～古墳時代初

頭であることが分かった。また、ＳＢ1で検出された大型の鍛造鉄斧は全国的に集落関連施設からの出土例が少なく貴重な資料と言える。

遺物一覧　－凡例－

（1）以下の表は、本調査地検出の遺物の計測値及び観察一覧である。

（2）遺物観察表の各記載について。

法量欄　（　）：復元推定値

調整欄　土器の各部位名称を略記した。

例）口→口縁部、口端→口縁端部、天→天井部、頸→頸部、胴→胴部、
体→体部、　脚→脚部、　底→底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土。

（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1 ～4）→「1 ～4mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表 40　１区土坑一覧

土坑（ＳＫ）	地 区	平面形	断面形	規　模　（m） 長さ（長径）×幅（短径）×深さ	埋 土	出土遺物	時 期	備　考
1	B・1	楕円形	皿状	1.25 × 0.81 × 0.16	褐灰色土・暗褐色土	土師	古代以降	SK3・4 を切る
2	B・1	楕円形	舟底状	(0.83 + α) × 0.69 × 0.42	黄灰色土・暗灰黄色土	土師・須恵	中世	SP5・134 に切られる
3	B・1	楕円形	皿状	(2.00 + α) × (1.46 + α) × 0.22	暗赤褐色土	土師	５Ｃ前半	SK1・4 に切られる
4	B・1	楕円形	逆台形	1.00 × (0.83 + α) × 0.18	黒褐色粘質土	須恵	６Ｃ後半	SK1、SP31・32・137・150 に切られ、SK3、SP135 を切る
5	－	－	－	－ × － × －	－			欠番
6	B・２～３	円形	皿状	(1.55 + α) × 1.40 × 0.31	褐灰色土・黒褐色土	弥生・土師	４Ｃ	第Ⅲ層が覆う
7	B・4	円形	皿状	1.64 × (1.11 + α) × 0.22	鈍い黄色土・黒褐色土 灰黄褐色土	弥生	不明	

表 41　２区土坑一覧

土坑（ＳＫ）	地 区	平面形	断面形	規　模　（m） 長さ（長径）×幅（短径）×深さ	埋 土	出土遺物	時 期	備　考
1	B・２～３	長方形	逆台形	1.18 × (0.27 + α) × 0.13	オリーブ褐色土	弥生	（中世）	第Ⅱ層上面から掘削
2	C・3	楕円形	逆台形	0.98 × 0.62 × 0.12	暗灰黄色土	土師・骨・青磁	室町	墓
3	B～C・4	方形	逆台形	0.96 × 0.86 × 0.23	黒褐色砂質土 暗褐色土	弥生・土師	古墳前期	SK5 と埋土が酷似
4	－	－	－	－ × － × －	－			欠番
5	C・3	楕円形	皿状	(1.30 + α) × (0.53 + α) × 0.08	黒褐色砂質土 （炭・焼土）	弥生・土師	古墳初頭 ～前半	
6	C・３～4	円形	逆台形	(0.95 + α) × (0.46 + α) × 0.50	黒褐色土	弥生・土師・須恵	古墳 中期以前	第Ⅴ層上面から掘削 SB3 に切られる
7	－	－	－	－ × － × －	－			欠番
8	B～C・3	楕円形	長方形	(1.39 + α) × (0.43 + α) × 0.29	黒褐色土	弥生	弥生 中期後半	
9	C・4	方形	皿状	0.75 × 0.74 × 0.07	黒褐色土		弥生末～ 古墳初頭	SB2 床面検出

表 42　竪穴式住居址一覧

竪穴（ＳＢ）	地 区	平面形	規　模　（m） 長さ（長径）×幅（短径）×深さ	埋 土	主柱穴（本）	内部施設				周壁溝	備　考
						高床	土坑	炉	カマド		
1	C・3	長方形	(5.4 + α) × (3.8 + α) × 0.25	黒褐色土・オリーブ褐色砂質土	4	－	－	－	北	－	
2	C・3～4	方形	5.95 × (2.55 + α) × 0.85	暗褐色土・他	2	○	○	○	－	○	
3	C・3～4	長方形	(6.6 + α) × 4.65 × 0.25	極暗赤褐色土	4	－	－	－	－	－	
4	B～C・2～3	長方形	(2.45 + α) × (2.45 + α) × 0.32	黒褐色土	－	－	－	－	－	○	

表 43　竪穴式住居址一覧

竪穴（ＳＢ）	時 期	炉	カマド	位 置	平面形	規　模　（m） 長さ（長径）×幅（短径）×深さ	出土遺物	備　考
1	５Ｃ後半	－	○	北壁中央	馬蹄形	1.21 × 0.96 × 0.06	土師・鉄	

表 44　掘立柱建物址一覧

掘立	規模（間）	方向	桁　行		梁　行		方 位	床面積（㎡）	時 期	備　考
			実長（m）	柱間寸法（m）	実長（m）	柱間寸法（m）				
1	2 × 2	－	3.95	1.97・1.98	3.97	1.97・2.0	N- 5° -W	15.68+ α	７Ｃ後半以降	SB1・3・4 を切る

表 45　出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
1	高坏	口径 (16.4) 残高 3.3	坏部上部片。口縁部は外傾。	マメツ	ハケ (5 本／ｃｍ)	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1) ◎		
2	埦	残高 3.1	内面に放射状の指頭痕。	ナデ（指頭痕）	ナデ（指頭痕）	灰黄色 灰黄褐色	微砂粒・ウンモ ◎	黒斑	20
3	甕	口径 (14.4) 残高 8.2	口縁端部は丸くなる。内傾する面を有す。	口 横ナデ ハケ (8 本／ｃｍ)	ハケ (7 本／ｃｍ) ケズリ→ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 4) ◎		20
4	壺	口径 (10.0) 残高 11.6	口縁部は僅かに外反する。	ナデ	横ナデ ナデ（指頭痕）	橙色 橙色	石・長 (1) ◎	黒斑	20
5	壺	口径 (8.0) 残高 5.6	口縁部は外傾。	ハケ (5 本／ｃｍ)	ハケ (5 本／ｃｍ)	にぶい黄橙色 にぶい橙色	細粒 ◎		
6	壺	残高 3.2	口縁部片。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	微砂粒 ◎		
7	高坏	口径 (14.4) 残高 4.1	坏部片。口縁端部は細くなる。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 橙色	微砂粒 ◎		
8	高坏	残高 4.6	坏部片。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
9	坏蓋	口径 11.4 残高 2.6	口縁部は外側へ外傾。	回転横ナデ	回転横ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	長 (1) ◎		
10	甕	口径 (16.0) 残高 3.2	外面は工具によるナデ。	ナデ	ナデ	橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
11	高坏	残高 4.2	脚柱部片。坏部接合法は粘土塊充填。	ナデ	ナデ（指頭痕）	にぶい褐色 にぶい橙色	長 (1) ◎		
12	鉢	底径 3.0 残高 1.8	底部は平底。	ナデ	ナデ	橙色 灰色	石・長 (1) 金 ◎	黒斑	
13	甕	口径 (18.0) 残高 3.0	口縁部は短く外反。	ナデ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1) ◎		
14	甕	口径 (19.9) 残高 3.0	口縁端部は内側に肥厚。	ナデ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
15	坏	底径 (6.0) 残高 1.7	体部は外傾。	マメツ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
16	土釜	残高 2.4	端部外面に断面三角形凸帯。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
17	坏身	口径 (11.2) 残高 3.0	立ち上がりは内傾し、端部は細く上を向く。	回転横ナデ 底 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転横ナデ	黄灰色 黄灰色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
18	坏身	口径 (13.7) 残高 3.0	立ち上がりは短く内傾。	回転ナデ 底 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ナデ	黄灰色 黄灰色	密・石 (1) ◎		
19	甕	底径 (7.7) 残高 3.1	底部は上げ底。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
21	土釜	口径 (16.8) 残高 2.1	口縁部は内傾し、端部外面に断面三角形凸帯を貼付。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1) ◎		
22	土釜	口径 (22.6) 残高 2.6	口縁部は内湾し、端部外面に断面三角形凸帯を貼付。	ナデ	ナデ	黒色 黒色	密 ◎		
23	土釜	残高 3.5	口縁部は内湾し、端部外面に断面三角形凸帯を貼付。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
24	土釜	残高 3.2	端部外面に断面三角形凸帯を貼付。	ナデ	ナデ	褐色 橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
25	土釜	口径 (15.6) 残高 3.5	口縁部は内傾し、端部外面に断面三角形凸帯を貼付。	ナデ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
26	土釜	残高 10.8	脚部。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰褐色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
27	土釜	残高 7.7	脚部。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
28	土釜	残高 4.5	脚端部。	ナデ	ナデ	にぶい橙色	石・長 (1) ◎		
29	皿	口径 (7.1) 底径 (4.8) 器高 1.7	体部は底部から直線的に外傾する。	ナデ 底 回転糸切り	ナデ	灰黄色 灰黄色	微砂粒 ◎		
30	壺	口径 (12.0) 残高 7.7	備前焼壺の口頸部片。端部は丸く外側へ肥厚。	回転ナデ	回転ナデ	暗赤褐色 暗赤褐色	密 ◎		
31	壺	底径 (18.7) 残高 6.9	東播系壺の底部片。平底。	ナデ	ナデ	黒色 灰色	長 (1) ◎	釉	
32	擂鉢	口径 (25.4) 残高 7.0	口縁端部は下方に拡張。内面には 10 条の櫛目。	回転横ナデ	回転横ナデ	赤色 灰黄褐色	石・長 (1 ～ 4) ◎		
33	甕	残高 4.0	頸部に押圧の貼付突帯。	ナデ	ハケ (6 本 /cm) →ナデ	にぶい橙色 黒色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
34	鉢	口径 (24.8) 残高 4.6	口頸部片。端部は細くなる。	口 ナデ ハケ (10 本／ｃｍ)	ハケ (6 本 /cm)	にぶい赤褐色 橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
35	壺	残高 3.1	複合口縁壺の拡張部片。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
36	壺	残高 4.7	複合口縁壺の口縁部片。頸部に貼付凸帯の痕跡有。	ハケ (6 本／ｃｍ)	ナデ	灰褐色 褐灰色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
37	甕	底径 (3.6) 残高 3.0	底部は平底。	ナデ	ハケ (8 本／ｃｍ)	にぶい黄橙色 褐灰色	石・長 (1) ◎		

出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
38	壺	底径 (4.7) 残高 3.7	底部中央が僅かに凹む。	ナデ	ナデ（指頭痕）	明灰黄色 明灰黄色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
39	坏蓋	口径 (9.6) 残高 2.2	天井部は明瞭な段をなす。内面かえりの先端は尖る。	回転横ナデ ㊦ 回転ヘラ切り	回転横ナデ	灰色 灰色	石・長 (1) ◎		
40	坏蓋	口径 (11.2) 残高 1.8	かえり部付近の小片。かえり端は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	暗オリーブ灰色 灰白色	密 ◎	自然釉	
41	坏蓋	残高 1.1	つまみ部片。中央部は凹む。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
42	坏蓋	口径 (17.0) 残高 1.8	口縁端部は短く垂れる。	回転横ナデ	回転横ナデ	灰白色 灰白色	長 (1) ◎		
43	坏身	口径 (15.0) 残高 2.1	立ち上がり部は短く内傾。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
44	坏身	残高 2.3	受部は短く水平。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	密 ◎		
45	坏身	残高 2.3	受部は短く水平方向を向く。	回転横ナデ	回転横ナデ	灰色 灰色	石・長 (1) ◎		
46	坏	口径 (11.6) 残高 2.7	体部は内湾して立ち上がり、端部は直立する。	回転横ナデ	回転横ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
47	坏	底径 (10.0) 残高 1.9	底部外側につく高台は「ハ」の字状に開く。	回転横ナデ	回転横ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
48	坏	底径 (12.0) 残高 1.2	接地面は高台のやや内側。	回転横ナデ	回転横ナデ	灰色 灰色	密・長 (微砂粒) ◎		
49	甕	残高 2.5	口縁端部中央は凸線的に膨らむ。	回転横ナデ	回転横ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
50	壺	残高 3.4	口縁部片。凸線 1 条。	回転横ナデ	回転横ナデ	黄灰色 灰色	密・長 (微砂粒) ◎	釉	20
51	甕	残高 4.6	1 条の凸線下に波状文 8 条。	ナデ	ナデ	オリーブ黒色 オリーブ黒色	密 ◎	自然釉	
52	坏	底径 (14.4) 残高 2.3	高台は底部外側に付く。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 灰白色	密 ◎		
53	坏	底径 (8.0) 残高 1.4	底部は円盤高台。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		
54	甑	残高 2.7	把手部。	ナデ	ナデ	橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
55	甕	残高 2.45	タタキによる格子文を看取。	タタキ	ハケ (7 ～ 8 本 / ｃｍ)	黄灰色 にぶい橙色	石・長 (1) ◎		20
56	甕	残高 1.9	刻目凸帯文土器。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) 金 ◎		
57	壺	口径 (30.8) 残高 4.8	複合口縁壺の拡張部片。波状文 10 条が 2 段施される。	ナデ	ハケ (6 本 / ｃｍ)	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 5) ◎		
58	甕	底径 (4.3) 残高 2.2	底部はくびれの上げ底。	ハケ→ナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) ◎		
59	壺	残高 3.1	木葉文を看取。	ナデ	ナデ	浅黄色 浅黄色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
60	坏	口径 (9.2) 残高 2.7	内湾気味に立ち上がる体部片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
61	土釜	口径 (18.0) 残高 4.6	口縁部は内湾し、端部外面に断面三角形凸帯を貼付。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1) 金 ◎		
62	羽釜	残高 3.6	口縁端部外面に断面三角形凸帯。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1 ～ 4) ◎		
63	片口鉢	残高 5.1	内面に櫛描条線。	ナデ (指頭圧痕)	ナデ	暗褐色 灰黄色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
64	坏	底径 (11.0) 残高 1.7	底部に高台付けられる。 接地面は端部ほぼ全面。	回転横ナデ	ナデ	黄灰色 黄灰色	密・長 (1) ◎		
65	甕	口径 11.5 器高 13.0	口縁端部は僅かに内傾し、底部は丸底。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		20
66	甕	口径 (22.0) 残高 5.9	口縁端部は内側へ肥厚。	ナデ	ハケ (8 本 / ｃｍ)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1 ～ 2) 金 ◎		
67	高坏	底径 (11.9) 残高 4.9	脚部片。内面に明瞭な稜有。	マメツ（ミガキ？）	マメツ	橙色 橙色	微砂粒 ◎		
69	甕	口径 (25.0) 残高 2.0	「く」の字状口縁。 端部は上方に短く拡張される。	横ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
70	甕	口径 (21.6) 残高 1.8	「く」の字状口縁。 端部は上方に短く拡張される。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	微砂粒 ◎		
71	甕	口径 (19.2) 残高 2.3	口縁部は外傾。 口縁部端面に凹線文 1 条。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1) ◎		
72	甕	口径 (20.4) 残高 1.9	口縁部は外傾。 口縁部端面はﾅﾃﾞ凹む。	横ナデ	横ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
73	甕	口径 (21.2) 残高 3.4	口縁部は外反し、口縁端部は面をなす。	㊥ ナデ ハケ (10 本 / ｃｍ)	ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
74	甕	口径 (23.4) 残高 2.1	口縁部は外反し、口縁端部はやや丸い面をなす。	㊥ 横ナデ ハケ (8 本 / ｃｍ)	ナデ	灰黄色 にぶい黄橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		

出土遺物観察表　土製品　(3)

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
75	甕	口径 (15.4) 残高 2.2	口縁部は外反し、口縁端部は面をなす。	ナデ	ナデ	暗灰黄色 浅黄色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
76	甕	口径 (17.2) 残高 3.3	口縁部は外反し、口縁端部は丸くなる。	口 ナデ ハケ (10 本 / ｃｍ) →ナデ	ハケ (10 本 / ｃｍ)	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) 金 ◎		
77	甕	口径 (12.8) 残高 3.6	口縁部は外傾し、頸部内面は明瞭な稜有。	マメツ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
78	甕	底径 (8.6) 残高 5.1	底部はやや上げ底。	ミガキ 底 ナデ	マメツ	にぶい橙色 灰黄褐色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
79	甕	底径 (7.4) 残高 5.5	底部は平底。	ハケ (単位不明) → ナデ	ナデ	浅黄色 黄灰色	石・長 (1 ～ 3) 金 ◎		
80	甕	底径 (8.4) 残高 2.7	底部は平底。	ミガキ 底 ナデ	ナデ	にぶい橙色 褐灰色	石・長 (1 ～ 3) ◎	黒斑	
81	甕	底径 (6.4) 残高 2.3	底部は平底。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1) ◎		
82	甕	底径 (4.0) 残高 3.2	底部は平底。	ハケ (12 本 / ｃｍ) 底 ナデ	ナデ	褐灰色 にぶい橙色	石・長 (1) ◎		
83	甕	底径 (4.0) 残高 2.4	底部は平底。	ハケ (10 本 / ｃｍ) → ナデ　底 ナデ	ナデ（指頭痕）	灰白色 橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
84	甕	底径 (2.3) 残高 2.4	底部は平底。	ハケ (7 本 / ｃｍ) 底 ナデ	ナデ（指頭痕）	にぶい橙色 灰色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
85	甕	底径 (3.0) 残高 3.5	底部は平底。	タタキ 底 ナデ	ハケ (8 本 / ｃｍ) 底 ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
86	甕	底径 (2.4) 残高 3.0	底部は平底。	ナデ（指頭痕）	ナデ（指頭痕）	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長 (1) ◎	黒斑	
87	甕	底径 (5.2) 残高 4.6	底部は上げ底。	ミガキ ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1) ◎		
88	甕	底径 (5.4) 残高 3.2	底部は上げ底。	ナデ 底 ケズリ	マメツ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長 (1) ◎		
89	甕	底径 (8.0) 残高 1.8	底部は平底。底部外面はやや突出する。	ナデ（指頭痕）	マメツ	にぶい橙色 黄灰色	石・長 (1) ◎		
90	甕	底径 (5.4) 残高 4.2	底部は上げ底。底部外面はやや突出する。	ナデ	マメツ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) ◎		
91	甕	底径 (5.2) 残高 3.7	底部は平底。底部外面はやや突出する。	ハケ (6 本 / ｃｍ) 底 ナデ	ケズリ	にぶい黄橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
92	壺	口径 (24.6) 残高 5.2	口縁部は外反。口縁端部にハケ状工具刺突文と凹線 3 条。	ハケ (8 本 / ｃｍ)	ハケ (10 本 / ｃｍ)	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		21
93	壺	口径 (33.0) 残高 3.6	口縁端部は下方に拡張。端面に 3 条の波状文。	口 ナデ ハケ (6 本 / ｃｍ)	ナデ	浅黄橙色 灰黄褐色	石・長 (1 ～ 4) ◎		
94	壺	口径 (17.0) 残高 1.2	口縁部は外傾し、口縁端部に斜格子目文。	口 ナデ ハケ (10 本 / ｃｍ)	口 ナデ ハケ (10 本 / ｃｍ)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		21
95	壺	口径 (21.2) 残高 2.6	口縁部は外反し、端部は面をなす。	口 ナデ ハケ (6 本 / ｃｍ)	ナデ	橙色 浅黄橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
96	壺	口径 (22.0) 残高 4.7	口縁部は外反し、端部は面をなす。	口 横ナデ ナデ	ハケ (7 本 / ｃｍ) →ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
97	壺	残高 3.0	拡張部片。沈線内刺突文 2 条、櫛描波状文 4 条。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 にぶい黄褐色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
98	壺	残高 2.1	拡張部片。	ナデ	マメツ	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
99	壺	残高 4.5	拡張部に 6 条の沈線 + 6 条の波状文が 2 段有。	ナデ	ハケ (7 本 / ｃｍ) →ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		21
100	壺	残高 3.9	「く」の字状の拡張部片。端部欠損。	ハケ (8 本 / ｃｍ) →ナデ	ハケ (9 本 / ｃｍ)	橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
101	壺	口径 (23.8) 残高 4.5	拡張部欠損。	ハケ (8 本 / ｃｍ) →ナデ	ナデ	暗灰黄色 にぶい橙色	石・長 (1 ～ 3) 金 ◎		
102	壺	残高 2.8	拡張部欠損。	ナデ	ナデ	浅黄色 灰黄色	石・長 (1 ～ 3) 金 ◎		
103	壺	残高 4.2	頸部片。3 列の竹管文。	ミガキ	ナデ	にぶい橙色 にぶい褐色	石・長 (1) ◎		
104	壺	残高 4.9	体部片。内面に工具痕顕著。	ハケ (9 本 / ｃｍ) ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 橙色	微砂粒 ◎		
105	壺	底径 (12.0) 残高 2.6	底部は平底。	ハケ (7 本 / ｃｍ) → ナデ　底 ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎	黒斑	
106	壺	底径 (10.2) 残高 5.2	底部は平底。	ミガキ 底 ナデ	ミガキ 底 ナデ	にぶい黄橙色 褐灰色	石・長 (1 ～ 2) ◎	黒斑	21
107	壺	底径 (11.6) 残高 8.6	底部は平底。	ミガキ 底 ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 灰黄褐色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
108	壺	底径 (5.0) 残高 6.4	底部は平底。	ハケ (8 本 / ｃｍ)	ナデ 底 ナデ（指頭痕）	にぶい黄橙色 灰黄褐色	石・長 (1) ◎		
109	壺	底径 (2.4) 残高 4.4	底部は平底。	ハケ (8 本 / ｃｍ) →ナデ　底 ナデ	ナデ（指頭痕）	にぶい黄橙色 灰黄褐色	石・長 (1 ～ 4) ◎		
110	壺	底径 (4.0) 残高 4.4	底部は平底。	ハケ (5 本 / ｃｍ)	ナデ	にぶい赤褐色 灰褐色	石・長 (1 ～ 4) ◎		

出土遺物観察表　土製品　(4)

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
111	壺	底径 (4.0) 残高 3.2	底部は平底。	ハケ（単位不明） →ナデ　(底) ナデ	ハケ (10 本／ｃｍ)	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) 金 ◎		
112	壺	底径 (7.0) 残高 2.6	底部は平底。ナデにより外側へ拡張される。	ハケ (12 本／ｃｍ) →ナデ	ナデ	にぶい橙色 明赤褐色	石・長 (1) ◎		
113	壺	残高 2.4	底部は丸底。	ハケ (8 本／ｃｍ)	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) 金 ◎		
114	鉢	口径 (18.6) 残高 8.5	体部は内湾し、口縁部は外側にやや肥厚される。	(口) ナデ タタキ →ハケ (7 本／ｃｍ)	ハケ (5 本／ｃｍ) →ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) 金 ◎		
115	鉢	口径 (29.2) 残高 4.1	口縁部は外傾。	横ナデ	横ナデ	橙色 にぶい黄橙色	微砂粒 ◎		
116	鉢	口径 (23.0) 残高 2.9	口縁部小片。	ナデ	ナデ	褐灰色 にぶい黄橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
117	鉢	口径 (20.6) 残高 2.7	口縁部小片。口縁部は外側にやや肥厚。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長 (1) ◎		
118	鉢	口径 (18.2) 残高 3.4	口縁部小片。	(口) 横ナデ ナデ	ハケ (8 本／ｃｍ) →ナデ	にぶい黄橙色 淡黄色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
119	鉢	口径 (34.6) 残高 13.9	体部は内湾。口縁部は内湾気味に外傾。	ハケ (5 本／ｃｍ)	ハケ (5 本／ｃｍ)	浅黄色 浅黄色	石・長 (1 ～ 3) 金 ◎		21
120	鉢	口径 (12.0) 残高 5.3	口縁・体部片。口縁部は外傾。	マメツ	ナデ	にぶい黄橙色 橙色	石・長 (1) ◎		
121	鉢	底径 (6.4) 残高 3.7	底部は平底。	ミガキ (底) ナデ	ハケ (10 本／ｃｍ)	黒色 灰黄褐色	石・長 (1 ～ 5) ◎		
122	鉢	底径 (5.0) 残高 4.4	底部片。底部は平底。	ハケ (5 本／ｃｍ) →ナデ	ハケ (12 本／ｃｍ)	褐灰色 橙色	石・長 (1) ◎	黒斑	21
123	鉢	底径 (4.0) 残高 3.5	底部片。底部は僅かな上げ底。	ハケ (8 本／ｃｍ) →ナデ	ナデ	黒褐色 浅黄橙色	石・長 (1 ～ 3) 金 ◎		21
124	鉢	底径 (5.0) 残高 2.1	底部は上げ底。	ナデ（指頭痕）	ナデ（指頭痕）	淡黄色 淡黄色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
125	高坏	口径 (13.5) 残高 5.0	坏下半部は短く外傾。坏上半部は直線的に外傾。坏底部に脚挿入円孔有。	ナデ	ハケ (6 本／ｃｍ) →ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 4) ◎	黒斑	
126	高坏	口径 (14.4) 残高 2.9	坏部上半部片口縁端部は僅かに尖る。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) 金 ◎		
127	高坏	口径 (17.0) 残高 3.8	浅い坏部片。口縁端部は細く尖る。	ハケ (10 本／ｃｍ) →ナデ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
128	高坏	口径 (15.4) 残高 4.9	坏部上半部片。	ハケ (8 本／ｃｍ)	ハケ→ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) 金 ◎		
129	高坏	口径 (18.8) 残高 5.1	坏部上半部片。直線的に外傾する。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長 (1) ◎		
130	高坏	残高 6.8	脚柱内接合部に捻り痕有。	ミガキ→ナデ	ナデ	浅黄色 にぶい橙色	石・長 (1) 金 ◎		
131	高坏	残高 4.8	脚部 3 方向の円孔を看取。	ミガキ	ナデ（しぼり痕）	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
132	高坏	残高 4.7	脚柱部。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
133	高坏	底径 (13.8) 残高 3.1	脚裾部片。	ナデ	ナデ	浅黄色 浅黄色	石・長 (1) ◎		
134	鉢 or 高坏	底径 (20.0) 残高 3.9	脚裾部片。	横ナデ	横ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1 ～ 5) ◎		
135	器台	口径 (30.6) 残高 1.6	口縁端部に櫛描波状文 4 条。	(口) ナデ ハケ (10 本／ｃｍ)	(口) ナデ ハケ (12 本／ｃｍ)	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		
136	器台	残高 1.1	口縁端部に山形文。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		
137	支脚	底径 (13.0) 残高 15.0	突起部は 1 本 1/2 の残存。下半部は 1/3 の残存。	ナデ（指頭痕）	ナデ（指頭痕）	浅黄色 浅黄色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
138	支脚	底径 (9.5) 残高 2.5	底部片。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1) ◎		
139	坏蓋	口径 (13.0) 残高 3.1	外面に 2 箇所の段有。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	微砂粒 ◎		
140	甕	口径 (18.4) 残高 1.8	口縁端部はナデ凹む。	横ナデ	ナデ	橙色 橙色	微砂粒 ◎		
141	甕	口径 (11.0) 残高 3.6	口縁・頸部片。	ナデ	(口) ハケ (8 本／ｃｍ) ケズリ→ミガキ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		
142	甕	口径 (15.0) 残高 5.3	口縁端部は内側に肥厚。器厚は薄い。	ナデ	ナデ・ケズリ	褐色 褐色	石・長 (1) ◎		22
143	甕	口径 (16.4) 残高 3.4	口縁端部は内側に肥厚。器厚は薄い。	(口) 横ナデ ハケ (11 本 /cm)	(口) 横ナデ ケズリ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	微砂粒 ◎		22
144	甕	口径 (15.6) 残高 4.7	口縁端部は内側に肥厚。	(口) 横ナデ ハケ (8 本 /cm)	(口) 横ナデ ケズリ	橙色 橙色	石・長 (1) 金 ◎		22
145	甕	底径 (8.1) 残高 3.8	底部は上げ底。	ナデ	ナデ	明赤褐色 にぶい黄橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
146	甕	底径 3.5 残高 9.9	底部は狭小な平底。体部は内湾気味。	タタキ → ハケ (7 本／ｃｍ)	ハケ (7 本／ｃｍ) (底) ケズリ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎	黒斑	22

出土遺物観察表　土製品　(5)

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
147	壺	口径 (15.2) 残高 1.8	口縁端部に凹線文３条。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	微砂粒 ◎		
148	壺	残高 0.9	口縁端部に斜格子目文。	ナデ	ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
149	壺	口径 (26.0) 残高 6.5	口縁端部は上方に肥厚。斜線の山形文。	⊟ 横ナデ ハケ (6 本 /cm) →ミガキ	マメツ	橙色 浅黄橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
150	壺	口径 (21.6) 残高 5.8	端部は上下に拡張。	ハケ (5 本 / ｃｍ)	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 4) ◎		
151	壺	底径 4.7 残高 4.1	底部は平底。(中央部僅かに凹む)	ミガキ 底 ナデ	ナデ	橙色 黒色	石・長 (1 ～ 3) 金 ◎		
152	壺	口径 (12.0) 残高 6.5	口縁拡張部片。	ハケ (7 本 / ｃｍ) ナデ	ナデ	黄橙色 橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
153	壺	残高 3.7	拡張部欠損。口縁部は外反気味。	ハケ (9 本 / ｃｍ)	ハケ (9 本 / ｃｍ)	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長 (1) ◎		
154	壺	残高 8.2	拡張部欠損。口縁部は外反。	ハケ (6 本 / ｃｍ) ナデ	ハケ (9 本 / ｃｍ) ナデ	橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎	黒斑	
155	鉢	口径 (17.3) 残高 5.0	口縁端部は短く外傾。	ナデ	⊟ ナデ ハケ (8 本 / ｃｍ)	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎	黒斑	
156	鉢	底径 (5.0) 残高 3.2	底部は平底。	タタキ ハケ (8 本 / ｃｍ)	ハケ (6 本 / ｃｍ)	にぶい橙色 オリーブ黒色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
157	鉢	底径 3.0 残高 2.7	ミニチュア。底部は上げ底。	ハケ（単位不明） →ナデ	ナデ	橙色 暗灰黄色	石・長 (1) ◎		
158	高坏 or 鉢	残高 3.1	脚中位に円孔２箇所残存。	ミガキ	ハケ (6 本 / ｃｍ)	橙色 黒色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
159	支脚	口径 (9.8) 底径 (8.8) 器高 7.3	中空タイプ。1/2 の残存。	ナデ	ナデケズリ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長 (1 ～ 3) 金 ◎		22
160	支脚	口径 6.5 底径 8.0 器高 6.3	中実タイプ。完形品。	ナデ（指頭痕）	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長 (1) 金 ◎		22
161	支脚	残高 9.6	上部の一部が受部状に凹む。	ハケ (7 本 / ｃｍ)	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) 金 ◎		
164	甕	口径 12.1 残高 6.7	口縁部は短く外傾。	タタキ ハケ (7 本 / ｃｍ)	ハケ (7 本 / ｃｍ)	灰黄褐色 橙色	石・長 (1) ◎	煤付着	
165	甕	残高 4.0	口縁部に沈線１条。口縁端部に刻み目。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1) ◎		
166	甕	底径 (9.0) 残高 6.0	底部は平底。	ミガキ→ナデ	ナデ	橙色 灰黄褐色	石・長 (1 ～ 2) 金 ◎		
167	甕	底径 (14.0) 残高 5.2	底部は狭小の平底。	ケズリ→ナデ	ハケ (7 本 / ｃｍ)	明赤褐色 灰褐色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
168	甕	底径 (3.0) 残高 2.0	底部は平底。	タタキ 底 ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		
169	甕	底径 (2.4) 残高 3.0	底部は狭小の平底。底部外面は僅かに突出。	タタキ ハケ (5 本 / ｃｍ)	ナデ	黒色 にぶい黄橙色	石・長 (1 ～ 5) ◎	黒斑	
170	壺	口径 (18.4) 残高 2.2	口縁端部は上方に肥厚。口縁端面に凹線２条。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1) ◎		
171	壺	口径 (12.0) 残高 4.0	口縁端部に凹線２条。	ハケ（単位不明） →ナデ	ハケ（単位不明） →ナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
172	壺	口径 (32.2) 残高 3.4	口縁部は大きく外反。	⊟ ナデ ハケ (8 本 /cm)	ハケ(5～10本/ｃｍ) →ナデ	黄橙色 明黄褐色	石・長 (1 ～ 5) ◎	黒斑	
173	壺	口径 (23.6) 残高 2.5	口縁部は大きく外反。口縁端部は下方へ肥厚。	⊟ 横ナデ ハケ (8 本 /cm)	ナデ	橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
174	壺	口径 (20.2) 残高 3.0	口縁端部に波状文６条以上。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) 金 ◎		
175	壺	口径 7.8 残高 5.4	口縁部は外傾。	⊟ ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	浅黄橙色 にぶい橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		22
176	壺	口径 (18.1) 残高 8.7	口縁部は大きく外反。	⊟ ナデ 平行タタキ→ナデ	ナデ	浅黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		22
177	壺	口径 (21.6) 残高 5.8	複合口縁壺の拡張部片。	ハケ (5 本 / ｃｍ) ナデ	ハケ (5 本 / ｃｍ) ナデ	橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
178	壺	残高 6.2	複合口縁の拡張部片。沈線４条が３段の間に波状文４条が施される。	ナデ	ナデ	橙色 暗灰黄色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
179	壺	残高 7.1	複合口縁壺の口頸部片。頸部に斜格子の貼り付け突帯。	ハケ（単位不明） ナデ	ハケ (5 本 / ｃｍ)	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
180	壺	残高 5.6	頸部片。	ハケ (6 本 / ｃｍ) →ミガキ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		
181	壺	底径 (7.0) 残高 7.4	底部は平底。	ミガキ 底 ナデ	マメツ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
182	壺	底径 (8.0) 残高 5.0	底部は平底。	ミガキ 底 ナデ	ハケ (11 本 / ｃｍ)	明黄褐色 褐灰色	石・長 (1) ◎	黒斑	
183	壺	底径 (5.7) 残高 4.5	底部は平底。	ミガキ 底 ナデ	ナデ	灰黄褐色 橙色	石・長 (1 ～ 2) 金 ◎		
184	鉢	口径 (23.2) 残高 8.6	体部は内湾。口縁部は僅かに尖る。	⊟ 横ナデ ハケ (6 本 /cm)	ナデ ミガキ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		

出土遺物観察表　土製品　(6)

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
185	鉢	口径 (12.6) 底径 (2.0) 器高 7.1	体部は内湾し、口縁部は僅かに尖る。	ⓘ ナデ ハケ (6 本 /cm)	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1) ◎	黒斑	
186	鉢	口径 (12.5) 底径 (2.0) 器高 6.2	体部は内湾し、口縁部は僅かに尖る。	ナデ・タタキ	ハケ (9 本 / ｃｍ)	橙色 橙色	石・長 (1) ◎	黒斑	22
187	鉢	口径 (9.2) 残高 5.0	底部欠損口縁部は僅かに尖る。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) 金 ◎		
188	鉢	口径 9.0 底径 0.8 器高 5.8	完形品。体部は内湾し、口縁部は僅かに尖る。	ナデ→ミガキ ㊞ ナデ	ナデ	暗黄褐色 暗黄褐色	長 (3) ◎	黒斑	22
189	鉢	口径 8.7 器高 6.6	口縁部は一部欠損。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎	黒斑	22
190	鉢	口径 (9.8) 器高 3.5	内外面に煤付着。	ナデ（指頭痕）	ナデ（指頭痕）	黒色 灰褐色	石・長 (1 ～ 2) 金 ◎		
191	鉢	残高 4.2	端部欠損。体部は内湾。	ハケ (6 本 / ｃｍ) →ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (密) ◎	黒斑	
192	鉢	残高 3.0	ミニチュア品。体部中位以上欠損。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
193	鉢	口径 (17.4) 残高 2.2	脚付鉢の脚裾部片。	ナデ	横ナデ	橙色 橙色	微砂粒 ◎		
194	高坏	底径 (15.2) 残高 4.3	中位に矢羽根透かし。裾部に２条の凹線。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1) ◎		
195	高坏	残高 4.6	脚部片。円孔看取。	ハケ (6 本 / ｃｍ) →ナデ	ナデ	灰赤色 にぶい橙色	石・長 (1 ～ 2) 金 ◎		
196	支脚	残高 7.6	突起部。端部は一部面をなす。	ナデ	ナデ	橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
197	支脚	残高 6.3	柱部に 13 条の沈線。	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色 明赤褐色	石・長 (1 ～ 7) ◎		
198	支脚	残高 10.0	上部欠損。	ナデ（指頭痕）	ナデ（指頭痕）	橙色 橙色	石・長 (1) ◎	黒斑	
199	支脚	底径 (12.0) 残高 3.1	支脚裾部。端部はナデ凹む。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		
200	支脚	底径 (9.2) 残高 3.7	支脚裾部。	タタキ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
201	支脚	底径 (9.0) 残高 2.9	支脚裾部。端部は丸みを帯びる。	タタキ ㊞ ナデ	ハケ (4 本 / ｃｍ) →ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
202	匙形土器	口径 12.0 器高 4.0	完形品。内面に葉脈状痕看取。	ナデ（指頭痕）	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) 金 ◎	黒斑	23
204	甕	口径 (14.6) 残高 2.9	口縁部片。短く外傾。	ⓘ ナデ ハケ (7 本 / ｃｍ)	ハケ (8 本 / ｃｍ)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1) ◎		
205	甕	残高 3.5	口縁部片。短く外反。	ⓘ ナデ ハケ (5 本 / ｃｍ)	ハケ (5 本 / ｃｍ)	橙色 橙色	微砂粒 ◎		
206	甕	口径 21.0 残高 1.9	口縁部は短く外反。口縁端部はﾅﾃﾞ凹む。	ナデ（単位不明）	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
207	甕	口径 (14.2) 残高 3.5	口縁部は内湾。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 5) ◎		
208	甕	底径 (4.5) 残高 2.4	底部は上げ底。	ナデ	ナデ	橙色 褐灰色	石・長 (1) ◎		
209	甕	底径 (5.0) 残高 2.6	底部は上げ底。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1) ◎		
210	甕	底径 (5.0) 残高 1.6	底部は平底。	ナデ	ナデ	明赤褐色 にぶい赤褐色	石・長 (1) ◎		
211	壺	残高 1.8	口縁端部に凹線２条。	ナデ	ナデ	褐灰色 褐灰色	微砂粒 ◎		
212	壺	残高 2.2	口縁端部は下方に拡張。	ナデ	ハケ (6 本 / ｃｍ)	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
213	壺	残高 1.8	口縁端部に斜格子目文。下方に拡張。	ナデ	ナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
214	壺	残高 5.2	複合口縁壺の口縁部片。拡張部に櫛描波状文６条。	ハケ (10 本 / ｃｍ)	ハケ (10本/ｃｍ) →ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
215	壺	残高 3.4	複合口縁壺の口縁部片。ハケ状工具による刻み。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		
216	壺	残高 4.6	頸部に「ノ」字状の刻み。	ハケ (6 本 / ｃｍ)	ハケ (6 本 / ｃｍ)	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
217	壺	底径 (8.7) 残高 4.3	底部は平底。	ミガキ ㊞ ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
218	壺	底径 (3.0) 残高 4.5	底部は平底。	ハケ (8 本 / ｃｍ) →ナデ　ケズリ	ナデ（指頭痕）	黒色 浅黄色	石・長 (1) ◎		
219	鉢	底径 (5.2) 残高 3.3	底部は平底。	ハケ (13 本 /cm) →ナデ	ナデ（指頭痕）	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
220	高坏	残高 4.0	脚柱部片。沈線１条、山形文状の施文を看取。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
221	高坏	残高 4.6	脚柱部片。上位にﾍﾗ描沈線５条。下位に矢羽根透かし１箇所。	ナデ	ナデ （絞り痕）	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		

出土遺物観察表　土製品　(7)

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
222	器台	残高 1.5	口縁端部に山形文。	ハケ(10本／ｃｍ) →ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1) ◎		
223	支脚	残高 10.4	中空タイプ。受部突起２箇所有。	ナデ（指頭圧痕）	ナデ	明黄褐色 明黄褐色	石・長(1～2) ◎		
224	支脚	残高 4.1	受部突起部片。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1～5) ◎		
225	埦	口径 (12.8) 残高 2.8	内湾して立ち上がる体部片。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	長(1) ◎		
226	壺	底径 (8.5) 残高 3.5	底部は円盤高台状に突出。平底。	ナデ	マメツ	橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ◎		
227	壺	底径 (5.6) 残高 2.2	底部は平底。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ◎		
228	坏蓋	残高 1.5	天井部片。回転ナデにより段をなす。	ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 灰色	微砂粒 ◎		
229	甕	残高 5.3	胴部片。	ハケ(8本／ｃｍ) →平行タタキ	同心円文	灰色 灰白色	密 ◎		
230	甕	底径 (7.2) 残高 3.4	底部は平底。	ミガキ (底) ナデ	ナデ	にぶい褐色 橙色	石・長(1) ◎		
231	高坏	口径 (14.6) 残高 3.8	坏部片。口縁端部は短く外反。	ナデ	ナデ	橙色 浅黄橙色	石・長(1) 金 ◎		
232	高坏	残高 2.5	坏部下半部片。	ナデ	マメツ	橙色 浅黄橙色	石・長(1～2) ◎		
233	坏	底径 (11.6) 残高 1.8	高台端部→内側が凹む。	回転ナデ	ナデ	橙色 橙色	微砂粒・赤 ◎		
234	坏	口径 (10.5) 底径 7.3 器高 3.0	体部は 1/3 欠損。	ナデ (底) 回転糸きり	ナデ	橙色 橙色	密 ◎		24
235	平瓶	残高 2.0	頸部片。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
236	甕	残高 2.2	頸部小片。貼付凸帯文１条。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1) ◎		
237	坏	口径 14.1 底径 6.8 器高 3.0	完形品。口縁端部はやや肥厚。	ナデ (底) 回転糸きり	ナデ	橙色 橙色	密 ◎		23
238	坏	口径 (11.1) 底径 7.0 器高 2.6	ほぼ完形品。底面に「ｽﾉｺ」状痕。	ナデ (底) 回転糸きり	ナデ	黄橙色 にぶい橙色	密 ◎		23
239	坏	口径 10.1 底径 6.6 器高 2.9	完形品。口縁部は内湾する。	横ナデ (底) 回転糸きり	ナデ	橙色 橙色	密 ◎		23
240	碗	底径 (6.1) 残高 1.5	「ハ」字状に開く輪高台付き。	ナデ (底) 回転糸きり	ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	密 ◎	施釉	23
241	鍋	残高 4.4	脚接合部片。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ◎	煤付着	
242	壺	残高 1.6	口縁端部は下方に拡張される。端面に凹線文１条。	ナデ	マメツ	橙色 橙色	長(微砂粒) ◎		
243	壺	残高 3.1	口縁端部は内側に肥厚される。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1) ◎		
244	甕	口径 (14.2) 残高 5.3	口縁部は外傾。端部は外側水平に肥厚。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～5) 金 ◎		23
245	甕	口径 (25.0) 残高 11.0	口縁部は外傾Ｓ字状的に段をなす。	(口) ナデ ハケ(8本／ｃｍ)	ナデ（指頭痕）	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) 金 ◎		23
246	壺	口径 (15.0) 残高 2.2	口縁部小片。端部は僅かに下方へ肥厚。	(口) ナデ ハケ(6本／ｃｍ)	(口) ナデ ハケ(7本／ｃｍ)	橙色 橙色	石・長(1) ◎		
247	高坏	口径 (14.2) 残高 3.9	坏部片。口縁端部は短く外反する。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(微砂粒) ◎ 金・赤		
248	高坏	残高 5.7	脚柱部片。坏部接合は脚部挿入法。	ハケ(8本／ｃｍ) →ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1) 金 ◎		
249	壺	口径 (17) 残高 2.8	口縁端部は上下に拡張。端面に凹線５条。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
250	壺	残高 1.9	口縁部は僅かに外反する。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 橙色	長(微砂粒) ◎		
251	高坏	残高 2.6	坏下半部。坏部接合法は粘土塊充填。	ナデ	マメツ	橙色 明赤褐色	石・長(1～2) ◎		
252	坏蓋	残高 2.8	天井部と口縁部の境は鋭い稜をなす。	ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 黄灰色	長(1) ◎		
253	壺	口径 (11.6) 残高 11.1	口縁端部に凹線３条。頸部に刺突文。	ミガキ	ハケ(8本／ｃｍ) →ナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1) 金 ◎	黒斑 煤付着	24
254	壺	残高 2.6	ハケ状工具刺突文看取。	ナデ ミガキ	ナデ	橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ◎		
255	甕	口径 (22.0) 残高 2.4	口縁端部に刻目。頸部に刻目凸帯文貼付。	ナデ	ナデ	橙色 灰黄褐色	石・長(1) 金 ◎		
256	壺	口径 (22.2) 残高 6.6	複合口縁壺の口縁部片。拡張部に波状文10条看取。	ハケ(5本／ｃｍ) ナデ	ハケ(8本／ｃｍ)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) ◎		
257	壺	残高 5.3	複合口縁壺の拡張部片。波状文４条下に櫛描波状文８条。	ハケ(７本／ｃｍ) ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1) ◎	黒斑	

出土遺物観察表　土製品　(8)

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
258	壺	底径 (5.8) 残高 2.5	底部は平底。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎	黒斑	
259	甕	底径 (4.0) 残高 5.0	底部は平底。	ハケ (7 本／ｃｍ) →ナデ	ハケ (5 本／ｃｍ) →ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎	黒斑	
260	坏	口径 (12.6) 底径 (6.3) 器高 3.65	体部は直線的に外傾し、口縁部は僅かに肥厚される。	回転ナデ	マメツ	橙色 橙色	密 ◎		24
261	坏	口径 10.2 底径 6.7 器高 3.4	体部は 1/3 欠損。口縁部は厚く肥厚。	ナデ (底) 回転糸きり	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	長・石 (微砂粒) ◎		
262	坏	口径 (12.0) 底径 6.5 器高 5.1	ほぼ完形品。口縁部に横撫による明瞭な稜を看取。	横ナデ (底) ナデ	横ナデ	橙色 にぶい橙色	密・金 ◎		24
263	坏	口径 11.9 底径 5.0 器高 5.2	体部は内湾する。口縁部は細く直立気味。	ナデ (底) 指頭痕	ナデ	橙色 橙色	長・石 (微砂粒) ◎　　金		24
264	皿	口径 18.1 器高 3.8	底部は厚い。口縁部は丸くおさめる。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	長 (1) 金 ◎		24
265	土釜	口径 (19.4) 残高 6.3	口縁部は内湾し、端部外面は断面三角形凸帯がつく。	ナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1 ～ 2) 金 ◎	外面 煤付着	
266	擂鉢	残高 6.8	口縁端部下側はつまみ上げ。内面に条線。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 緑灰色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
267	坏蓋	残高 2.15	宝珠つまみ部片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1 ～ 1.5) ◎		
268	坏蓋	口径 (13.6) 残高 4.15	約 1/4 の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長 (1 ～ 3) 金 ◎	自然釉	
269	擂鉢	口径 (25.5) 残高 4.15	口縁端部は上方に拡張。	回転ナデ	回転ナデ	赤褐色 赤褐色	細粒 ◎		
270	土釜	残高 9.3	脚部片。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
271	壺	残高 4.5	タタキによる格子文を看取。	タタキ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1) ◎		
272	壺	口径 (12.8) 残高 4.0	複合口縁壺の拡張部片。直線文 4 条後櫛描波状文 4 条。	ナデ	ナデ	橙色 褐灰色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
273	甕	底径 (9.2) 残高 2.9	底部は平底。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
274	高坏	口径 (20.8) 残高 3.2	坏部口縁部片。口縁端部は内外方に拡張。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1) ○		
275	甕	口径 (20.1) 残高 11.1	口縁部は短く僅かに外反。	(口) 横ナデ ハケ(6本／ｃｍ)→タタキ	(口) 横ナデ ハケ (6 本／ｃｍ)	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 3) 金 ◎	煤付着	
276	甕	残高 6.1	胴部片。	ハケ・ナデ タタキ	ナデ	淡橙色 乳白色	石・長 (1 ～ 4) 金 ◎	赤色顔料 (未分析)	
277	壺	口径 (29.4) 残高 6.8	口縁端部に凹線 4 条。上方に拡張。	(口) 横ナデ ハケ (6本／ｃｍ)	(口) 横ナデ ミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1 ～ 3) 金 ◎		
278	壺	口径 8.7 底径 3.2 器高 8.3	ほぼ完形品。底部は平底。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) 赤 ◎		24
279	壺	口径 (3.2) 残高 5.8	ミニチュア。	(口) 横ナデ ナデ	(口) 横ナデ ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 4) 金 ◎	黒斑	
280	甕	底径 (2.1) 残高 6.2	底部は僅かに上げ底。	ナデ	ナデ ハケ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 4) ◎		
281	甕	底径 (7.3) 残高 5.4	底部はくびれ上げ底。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 黒色	石・長 (1 ～ 5) ◎		
282	壺	底径 6.6 残高 3.4	底部は平底。	ナデ	ハケ (4 本／ｃｍ) ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 4) ◎		
283	鉢	口径 (20.9) 残高 8.5	口縁部は短く外傾。端部は丸い仕上げ。	ハケ	ハケ ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 2) 金 ◎	黒斑	
284	紡錘車	外径 7.0 厚さ 1.2 孔径 1.1	1/2 の残存。縁は細い仕上げ。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	長・石 (微砂粒) ◎　　ウンモ		24
285	高坏	残高 5.6	脚柱部片。上位に沈線 8 条。下位に矢羽根透かし 4 箇所。	マメツ	ナデ（しぼり痕）	乳白色 橙色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
286	支脚	残高 12.2	中空タイプ。	タタキ→ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 4) 金 ◎		
289	蓋	口径 (11.8) 残高 4.3	有蓋高坏。つまみ部欠損。	(天) 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
290	坏身	口径 11.1 残高 4.7	立ち上がり端部は内傾。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗青灰色 暗青灰色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
291	坏身	口径 (10.2) 残高 3.6	立ち上がり端部は内傾。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	石・長 (1) ◎		
292	坏身	口径 (9.8) 残高 3.3	口縁部は内傾後直立。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	微砂粒 ◎		
293	坏	口径 (8.1) 底径 3.2 器高 5.0	底部は平底を呈し、口縁は外傾する。	回転ナデ	回転ナデ (底) 回転ヘラ切	灰色 灰色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
294	坏	残高 2.0	底部は高台付き。接地面はほぼ全面。	回転ナデ	回転ナデ	緑灰色 緑灰色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
295	高坏	口径 10.8 残高 3.3	無蓋高坏の坏部片。刺突列点文看取。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ◎	自然釉	

遺物観察表　土製品　(9)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
296	高坏	底径 (8.9) 残高 3.9	外反して開く脚部片。端部は鋭く尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ◎		
297	平瓶	口径 (6.6) 残高 5.0	口縁部は直線的に外傾。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
298	壺	底径 (8.5) 残高 1.9	脚付壺の脚部片。端部は内側に肥厚される。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	微砂粒 ◎		
299	甕	口径 19.2 残高 5.7	口縁部は直線的に外傾。	ハケ (5 本 / ｃｍ) →ナデ	ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長 (1 ～ 3) 金 ◎		
300	土釜	口径 (17.2) 残高 3.8	口縁部は内湾。端部外面に断面三角形凸帯。	◎ ナデ ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
301	甕	残高 6.5	口縁端部は下方に拡張。	◎ 横ナデ ハケ (6 本 / ｃｍ)	◎ 横ナデ ハケ (6 本 / ｃｍ)	暗灰色 暗灰色	石・長 (1 ～ 3) ◎		
302	坏	底径 (7.1) 残高 1.9	底部は円盤高台。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ◎		
303	碗	残高 1.2	口縁部小片。	ナデ	ナデ	暗オリーブ色 暗オリーブ色	密 ◎	施釉	
304	平瓦	長さ 6.8 幅 8.5 厚さ 1.5	瓦質。1/4 程の残存か。	マメツ ヘラケズリ	ナデ	灰白色 灰色	石・長 (1) ◎		
305	甕	残高 2.1	口縁部は短く折り曲げられ外反する。端部に刻目。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
306	壺	口径 (26.0) 残高 3.0	口縁端部に波状施文後に円形浮文貼付。	横ナデ	横ナデ	浅黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1 ～ 2) 金 ◎		
307	壺	口径 (9.5) 残高 4.6	口縁端部下に沈線文 2 条、頸部上に沈線文 3 条を看取。	横ナデ ミガキ	横ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1 ～ 2) ○		
308	器台	残高 1.9	裾部片。	ハケ→ミガキ	ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
309	碗	口径 (13.2) 残高 3.5	体部片。精緻な施釉を看取。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	施釉	24
310	支脚	器高 7.2 底径 (7.4)	中実タイプ (棒で穿孔) 脚柱内にしぼり痕。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 にぶい橙色	石・長 (1 ～ 4) ◎		
311	支脚	残高 8.6	中空タイプ。	ナデ	ハケ (7 本 / ｃｍ) ナデ	にぶい橙色 灰褐色	石・長 (1 ～ 2) ◎		
312	坏	底径 (7.4) 残高 1.7	底部 1/4 の残存。	回転横ナデ	ナデ	橙色 橙色	密 ◎		
313	壺	口径 (12.0) 残高 6.9	口縁部は短く外反。肩部に櫛描波状文 5 条。	◎ 横ナデ 回転ヘラケズリ	◎ 横ナデ 回転ナデ	にぶい赤褐色 灰褐色	石・長 (1 ～ 3) ○		

表 46　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ (cm)	法量 幅 (cm)	法量 厚さ (cm)	法量 重さ (g)	備考	図版
20	石庖丁	約 1/4	緑色片岩	2.6	4.1	0.55			
162	剥片		サヌカイト	3.0	1.6	0.3			
287	柱状片刃石斧	約 1/3	緑色片岩	13.75	5.55	1.8	190.486		
288	扁平片刃石斧	約 2/3	緑色片岩	8.58	3.6	1.6	78.899		

表 47　出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ (cm)	法量 幅 (cm)	法量 厚さ (cm)	法量 重さ (g)	備考	図版
68	鉄斧	ほぼ完形	鉄	19.00	8.2	4.4	1026.33		20 21
163	不明	不明	鉄	4.3	1.2	0.6	7.33		
203	鉋	先端部欠損	鉄	7.3	1.0	0.4	5.80		23

第Ⅴ章　調査の成果と課題

平成10年以降、樽味地区では３棟の大型建物が相次いで発見され、古墳時代前期前半の大型建物の存在が明らかとなり、その実体解明が強く望まれている。これを受け平成15年以降、この大型建物関連遺構の周辺への広がりを確認する目的で重要遺跡確認調査として継続的に調査を行っている。

今回の２遺跡（樽味四反地遺跡19次調査、樽味四反地遺跡20次調査）の調査では、弥生時代から中世にかけての遺構と遺物が確認でき、樽味地区の集落の変遷、および集落の動態解明に数多くの貴重な資料の追加ができた。本稿ではこの２遺跡について遺跡別に成果と課題としてまとめる。

樽味四反地遺跡19次調査

本調査からは大型建物関連の施設と考えられるＳＢ６およびＳＫ５が検出され、調査の大きな成果の一つとなった。調査ではＳＢ６については遺構全容の約３割程度の検出であり、また遺構内は遺構保護の目的からトレンチ２本と北西隅の一部掘り下げにとどまる調査であった。遺構の詳細については同20次調査が詳細に報告しているが、本調査でも竪穴住居施設の一部と多量の遺物が見つかり、帰属時期および遺構内容も同20次調査と大差ないことが確認されている。この竪穴住居はその帰属時期だけではなく建物の規模や構造は、松山平野の竪穴住居の検出例からも一般的な竪穴住居としてはやや特異なものと考えられるが、その性格については本調査では明らかにすることはできなかった。また、ＳＫ５は遺構内より弥生時代終末期の遺物が一括して出土し、良好な資料となるものであると同時に大型建物関連資料の追加と関連遺構の広がりの一部を確認することができたと考える。

掘立柱建物の７棟のうち正方位を向くものを数棟確認しており、規模的にもやや大きな部類に入るものが多い。また一部にほぼ方形のしっかりとした堀方を持ち、中央に密な柱間を持つものなどがある。これら５世紀後半から６世紀後半の正方位を持つ掘立柱建物は周辺遺跡での確認は少なく、やや特異な存在である。また、調査地南西に近接する、「樽味四反地遺跡５次調査」では７世紀後半以降のＳＲ１に破棄された硯４個体（円面硯）が出土している事からも、周辺における寺院・役所、その他の重要な施設が存在する可能性も考えられ、今後の周辺調査においては注目される視点である。また、この時期を前後し（５世紀前半～７世紀後半まで）調査区東部では、いくつもの竪穴住居が重複しながら造営されており、活発な集落活動が窺える。

古代から中世の遺構数は少なく本遺跡での集落動態は窺い難いが、土師皿を利用した祭祀関連行為や周辺では中世の土抗墓もいくつか確認されている。

調査で確認された遺構・遺物やその内容から遺跡周辺では、弥生時代後期～古墳時代初め、古墳時代後半に於いて特に集落活動が活発化した状況を知ることができた。今後はこれら集落関連遺跡の成果と大型建物施設との関係を比較検討し、当該期の様相解明が急がれる。

【参考文献】
「樽味四反地遺跡 -5 次調査 -」『松山市文化財調査報告書第 87 集』 2002
「樽味四反地遺跡 -6 次調査 -」『松山市文化財調査報告書第 94 集』 2003
「樽味四反地遺跡 7・8・9・11 次調査地」『松山市文化財調査報告書第 117 集』 2007
「樽味高木遺跡 -12 次・13 次調査 -」『松山市文化財調査報告書第 131 集』 2009
「樽味四反地遺跡 -14 次・16 次調査 -」『松山市文化財調査報告書第 133 集』 2009
「樽味四反地遺跡 -17 次・18 次調査 -」『松山市文化財調査報告書第 139 集』 2010

樽味四反地遺跡20次調査

樽味四反地遺跡６次・同８次・同13 次調査地において弥生時代終末から古墳時代前期初頭の巨大な建物が３棟相次いで確認された。その後、「弥生時代～古墳時代へ移行する転換期の地域における首長層の動向を端的に示す極めて重要な遺構が伴う遺跡」であり、「周辺における継続的な調査が必要である」との学術的評価及び調査方針に基づき、本調査は、樽味地区重要遺跡確認調査として実施した。なお、首長層の重要施設と考えられる３棟の周囲に同時期の施設が一定範囲存在しないバッファーゾーン（緩衝地帯）があるのではないかとの予測が立てられていることから、該当期の遺構や旧地形を確認することを調査の主目的とした。その結果、弥生時代中期から中世の集落遺構や遺物を確認することができた。

注目される遺構は、弥生時代末～古墳時代初頭に廃棄・埋没したと考えられるＳＢ２である。平面形態は方形を呈し、樽味四反地遺跡19 次（ＳＢ６）・20 次調査（ＳＢ２）を合わせると検出規模は南北長5.95 m、東西長約6.3 m、床面積約37㎡を測る大型建物である。特筆すべきは深さで壁高は検出面下約85cm を測る。類例として挙げられるのは西石井遺跡１次調査で検出された弥生時代末の２棟（ＳＢ101・102）で、共に長さ６～７m、幅５～６m、壁高検出面下約70cm を測り、床面積は40㎡を超える大型住居址である。検出面から壁高30cm 程度の遺存であれば良好とされる松山平野の竪穴建物の中で、この３棟は当時の建築構造を測り知る貴重な資料と言える。

注目される遺物はＳＢ１内から出土した長さ19cm、最大幅8.2cm を測る鍛造鉄斧である。大きさは西日本有数で、集落内からの出土例として稀少である。Ｘ線撮影調査の結果、錆の進行によるひび割れが各所に確認されるものの、遺存状況は概ね良好であり、刃部の一部が欠損していることが判明した。また、袋部巻き始め肉厚部分や刃部にメタルが良く残っていることから、素材の原料・産地や製造工程を明らかに出来る可能性があることが分かった。

本調査の目的の一つは大型建物群に関連する施設の確認であった。現段階でＳＢ２の帰属時期は、出土した土器の一部から３棟の大型建物に最も近いと考えられ、一つの成果と言える。なお、ＳＢ２の埋土上位では河原石と共に弥生土器（前期～後期末）や土師器が出土し、建物廃絶に伴う人為的な埋め戻しが行われたものと考えられ、大型建物群の北側に近接し、東西方向へ延びる大溝埋土の検出状況に似ている。また、大型建物群の中心部からの距離は約75 mを測り、予想されているバッファーゾーンを考える上で参考になるものと思われる。その他、後続する時代時期の遺構・遺物が多数検出された。これらは長きに渡る樽味地区の集落変遷を把握する上で貴重な資料となるものである。

樽味地区及び隣接する桑原地区では近年、高規格の幹線道路が相次いで建設され、同時に土地開発が急増している。今後は、全国的に注目されている大型建物群の周辺様相と松山平野内で既に確認されている集落関連遺跡との比較検討を行い、当該期の様相解明が急務となる。

【参考文献】「樽味地区確認調査（Ａ～Ｇ区）」『松山市埋蔵文化財調査年報18』 2006
「樽味四反地遺跡８次調査地」『松山市文化財調査報告書第117 集』 2007
「西石井遺跡１次調査地」『松山市文化財調査報告書第112 集』 2005

写真図版

写真図版 1～12：樽味四反地遺跡19調査
写真図版13～24：樽味四反地遺跡20調査

写真図版データ

1．遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判フィルムカメラ・デジタルカメラで補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カ　メ　ラ	トヨフィールド45A	レ　ン　ズ	スーパーアンギュロン	90㎜他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67	55㎜他
	ニコンニューFM 2		ズームニッコール28～85㎜他	
フ　ィ　ル　ム	白　黒　ネオパンSS・アクロス			

2．遺物は、4×5判で撮影した。一部を除き、すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カ　メ　ラ	トヨビュー45G
レ　ン　ズ	ジンマーS 240㎜ F 5.6他
ス　ト　ロ　ボ	コメット/CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フ　ィ　ル　ム	ネオパンアクロス

3．単色図版は、一部を除き、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引　伸　機	ラッキー450MD・90MS
レ　ン　ズ	エル・ニッコール135㎜ F5.6A・50㎜ F2.8N
印　画　紙	イルフォードマルチグレードⅣ RCペーパー

4．製　　版：写真図版175線
印　　刷：オフセット印刷
用　　紙：マットコート110kg

【参考】『埋文写真研究』vol.1～20・『報告書制作ガイド』

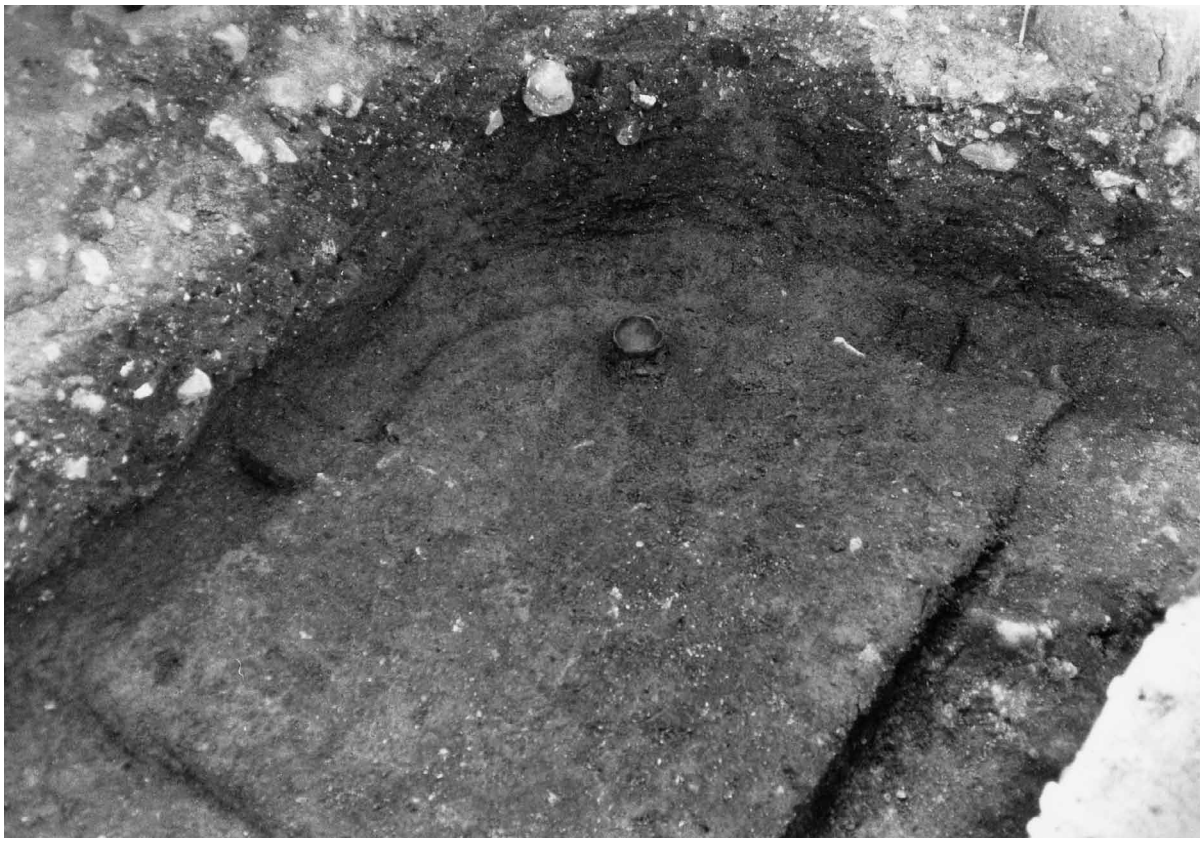
［大西 朋子］

１．　掘立1全景(南より)

1．遺構検出状況（北東より）

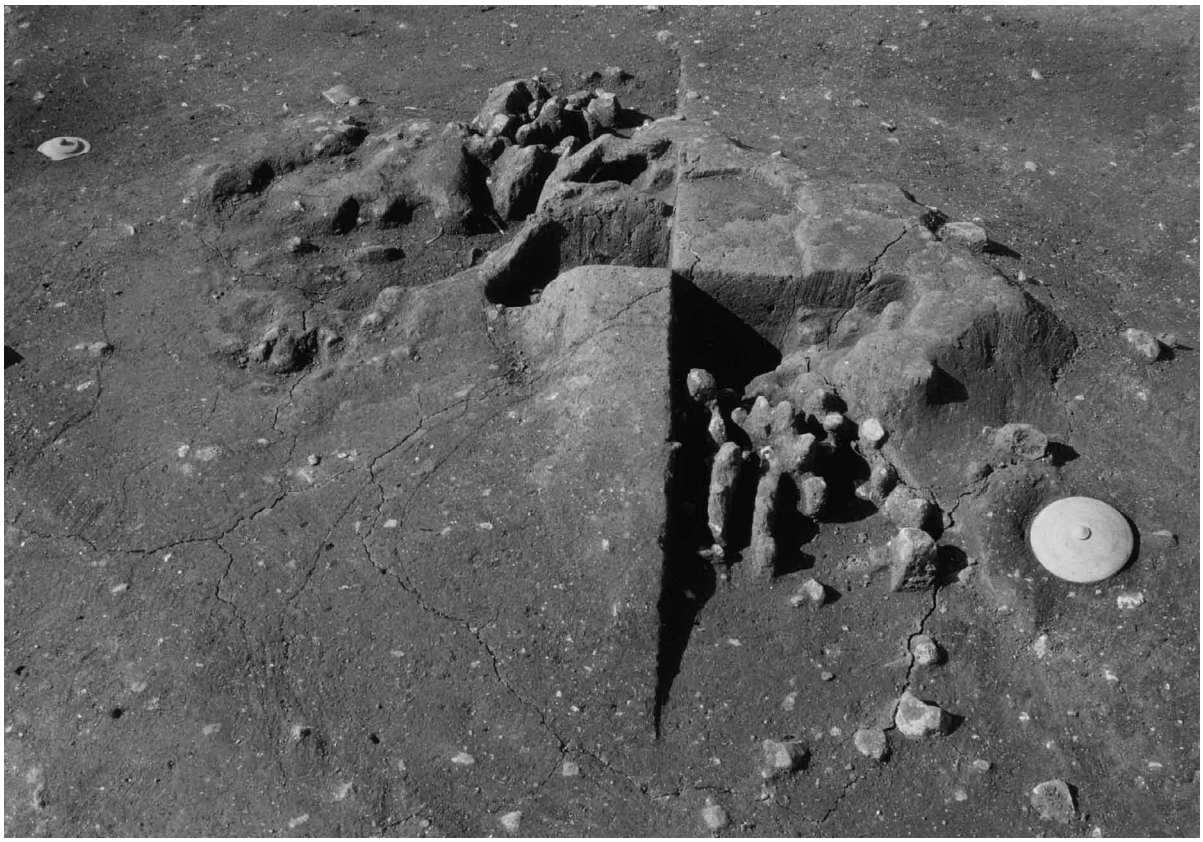
2．調査区南東部遺構掘り下げ状況（南より）

１．　SB1掘り下げ状況（北より）



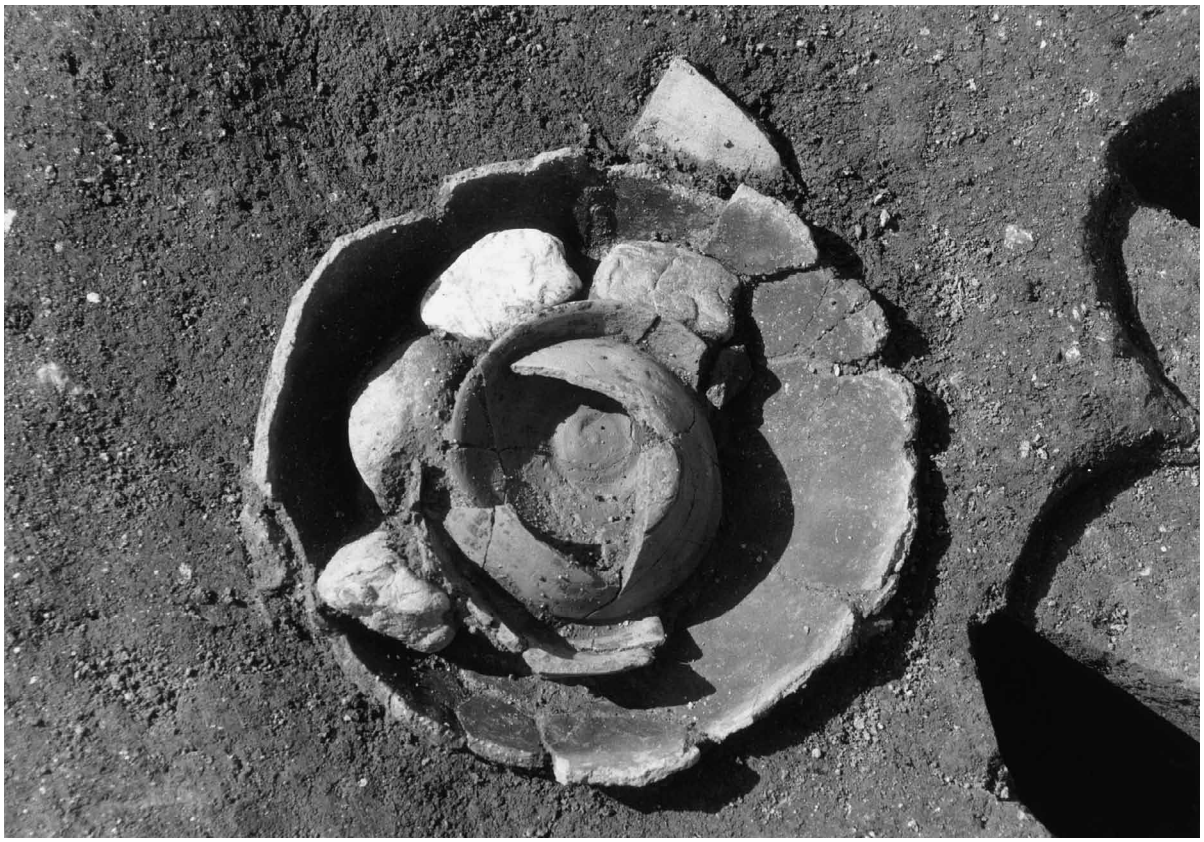
２．　SB6掘り下げ状況（周壁溝、遺物出土状況）（北東より）

1．　SK5遺物出土状況（北西より）



2．　SB4カマド半截状況及び遺物出土状況（南より）

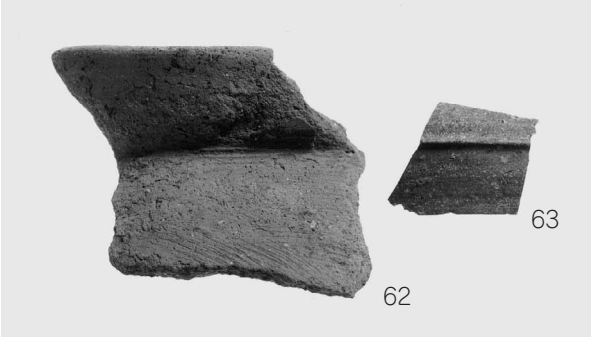
１．　SK12遺物出土状況（北より）



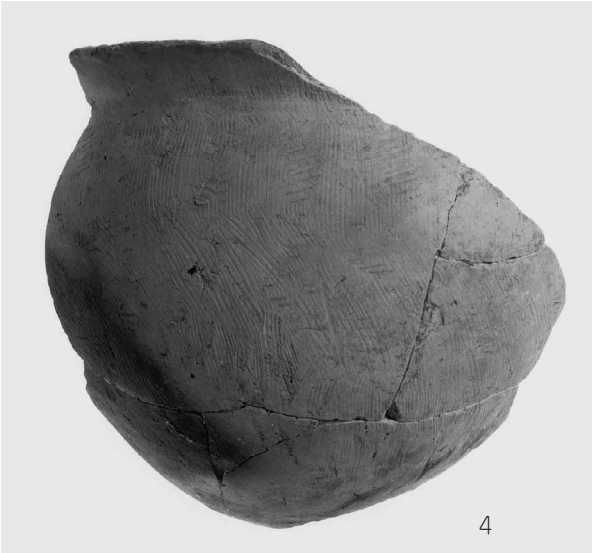
２．　地鎮遺構遺物出土状況（東より）

1．　調査区全景（南東より）

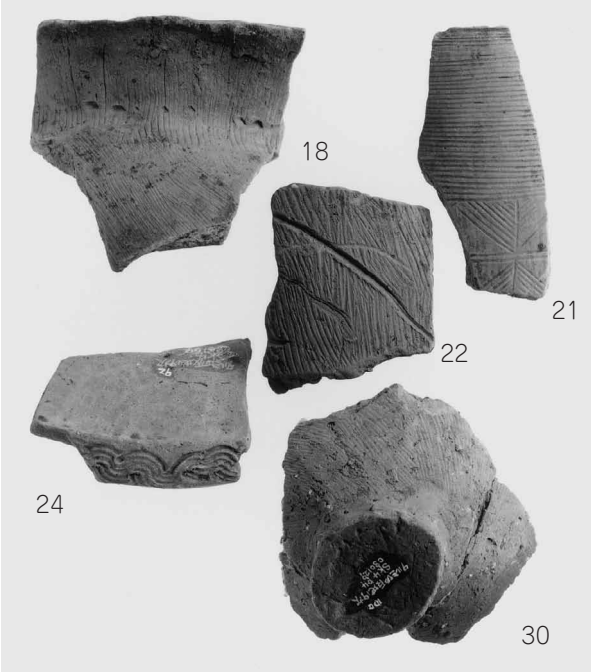
2．　現地説明会風景（北西より）

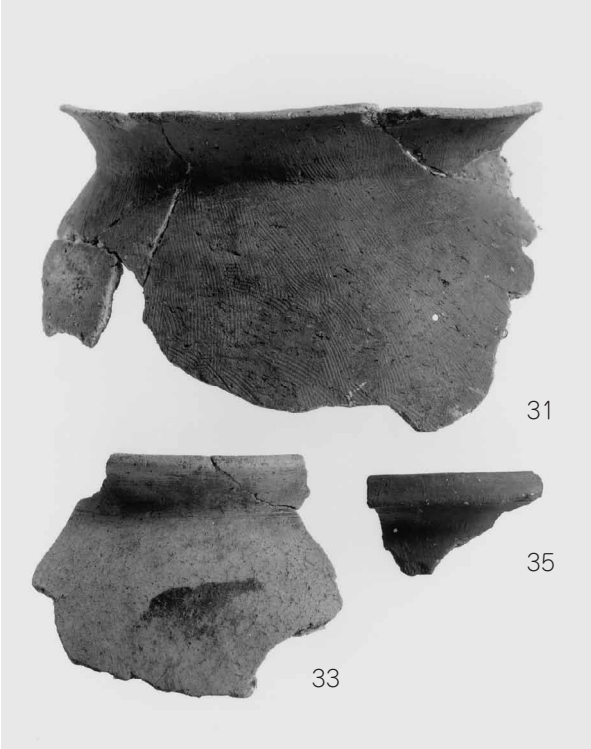


1．　出土遺物（SB1：56・59・61、SB2：62・63、焼土 1：87・88、焼土 2：82・83）



1．出土遺物（SB6：2・4・5・17、SB 群：180、SD2：50、掘立 1：52・53、SK2：80、柱穴 337：86）

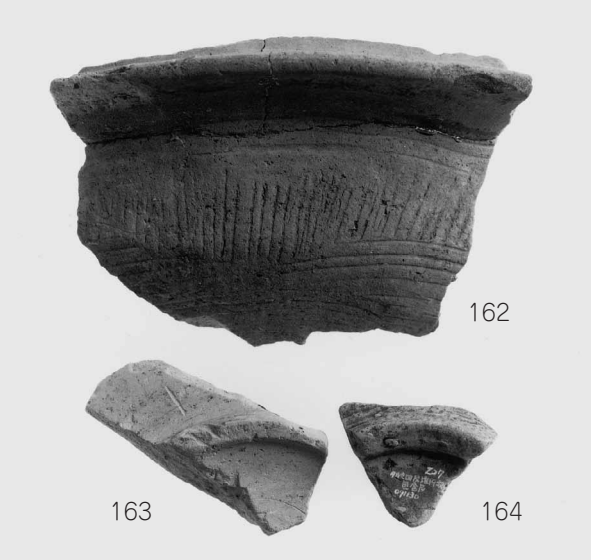




1．出土遺物（SK12：90 ～ 94、SK4：18・21 ～ 24・30、SK5：31・33・35・38）

1．　SK5 出土遺物

1．　出土遺物（地鎮遺構：95 ～ 98・100 ～ 103、SP376：208、第Ⅳ層：107・113・115・116・124 ～ 126）



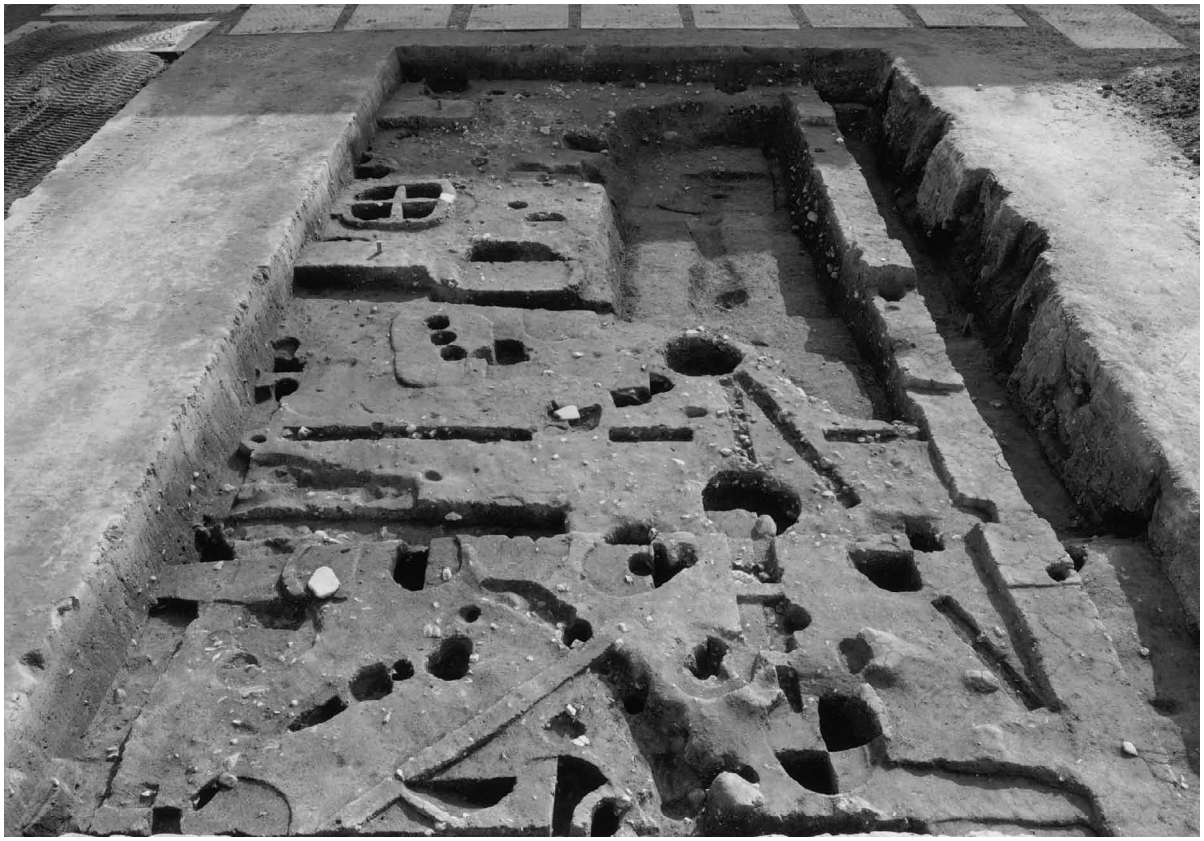
1．　出土遺物（第Ⅲ層：146、第Ⅱ層：162 ～ 164・168 ～ 170、トレンチ：173）

1．　調査前全景（北東より）

2．　1・2区遺構検出状況（北より）

1．　1区完掘状況（南西より）

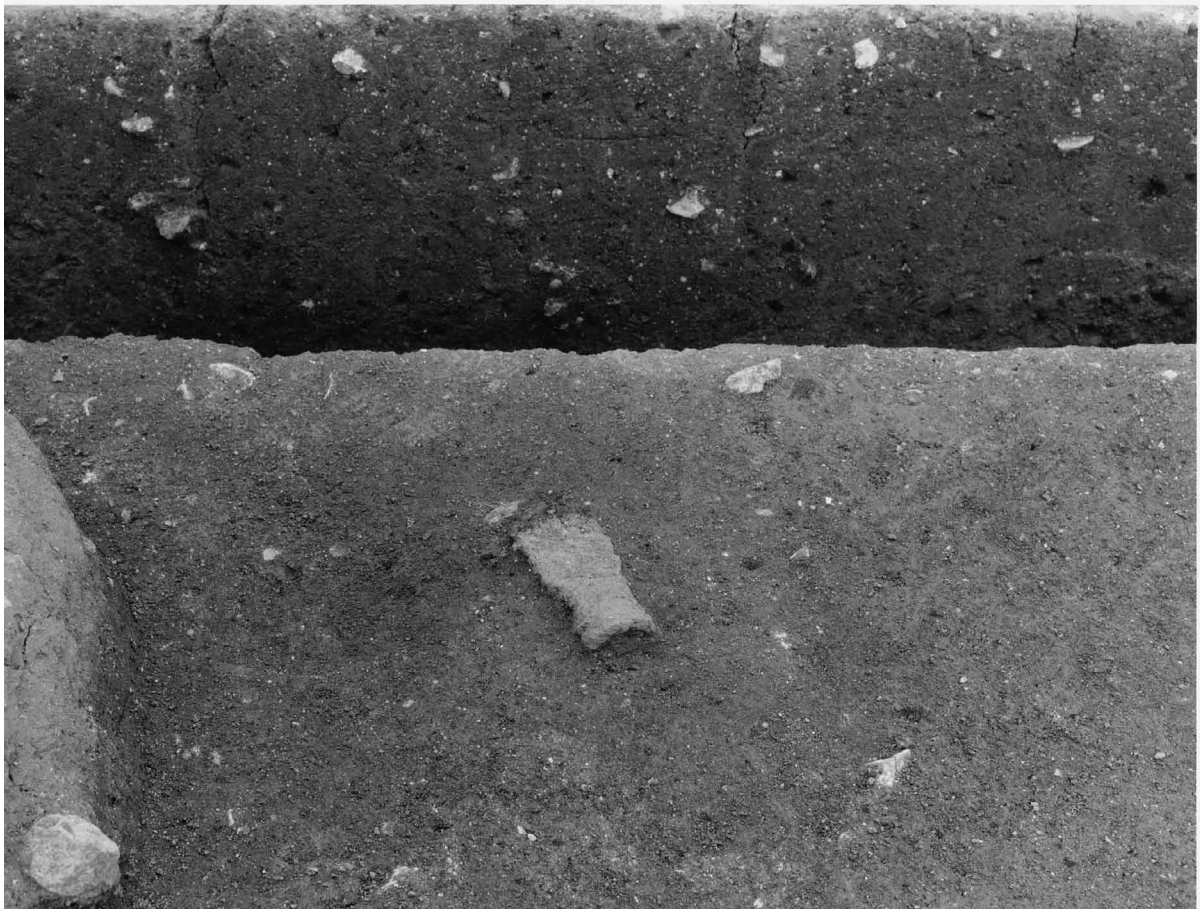
2．　1区SK３完掘状況（東より）



1．２区完掘状況（北より）

2．西壁土層（北西より）

１．　２区SB１・３、掘立１完掘状況（南東より）

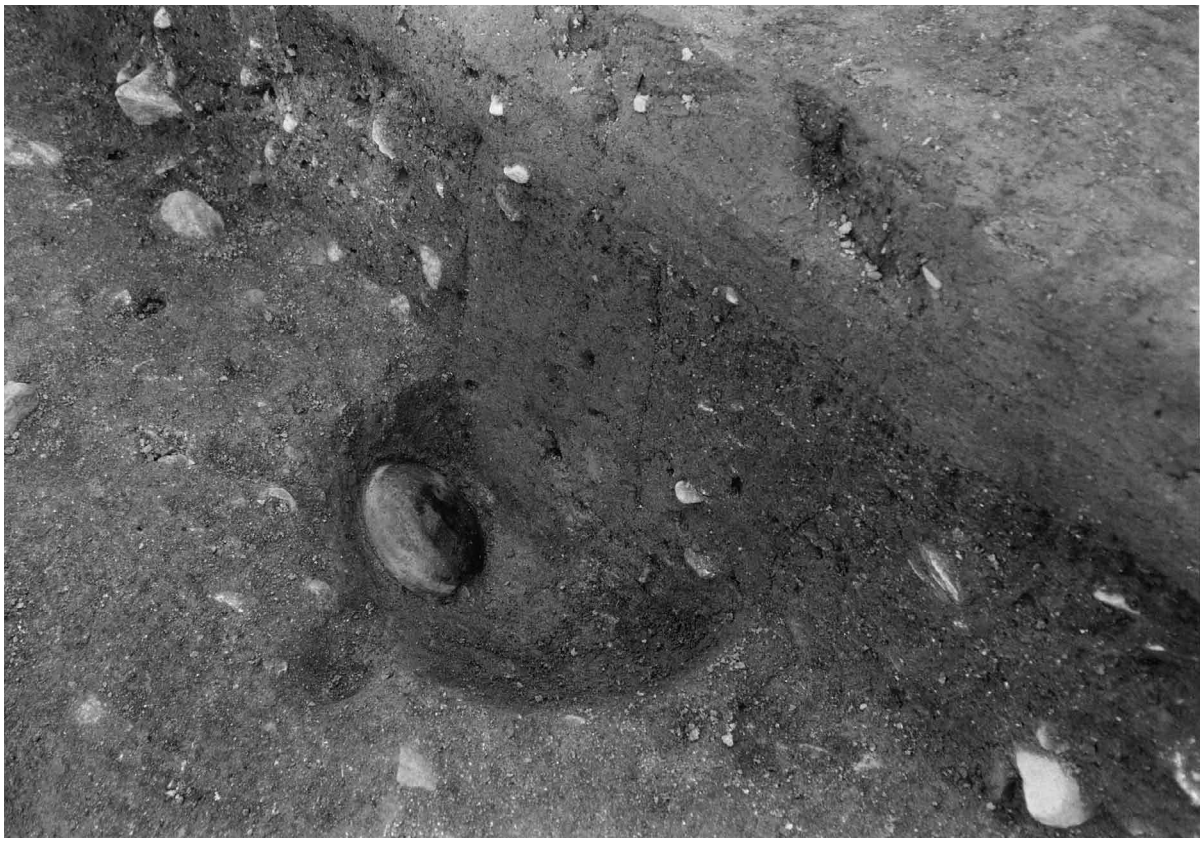


２．　２区SB１鉄斧出土状況（北より）

1．　２区SB2完掘状況（東より）

2．　２区SB4完掘状況（南東より）

1．　２区SK2遺物出土状況（東より）

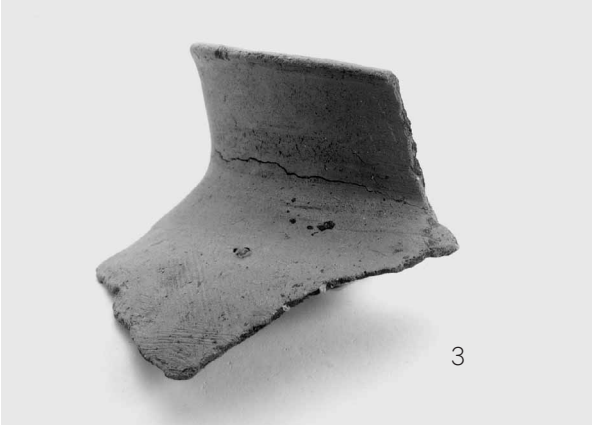


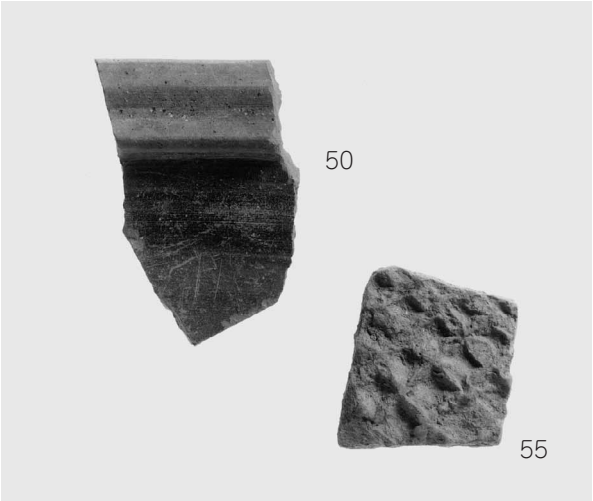
2．　２区SP106遺物出土状況（北西より）

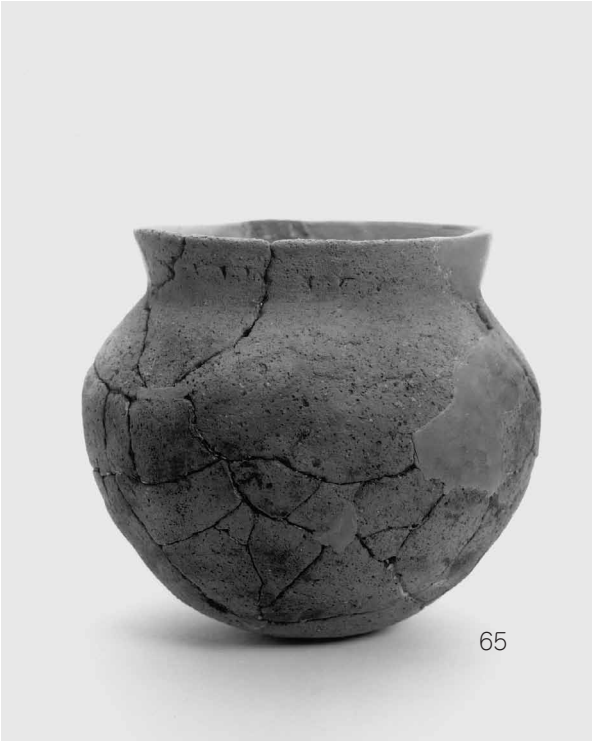
1．　現地調査指導

2．　現地説明会

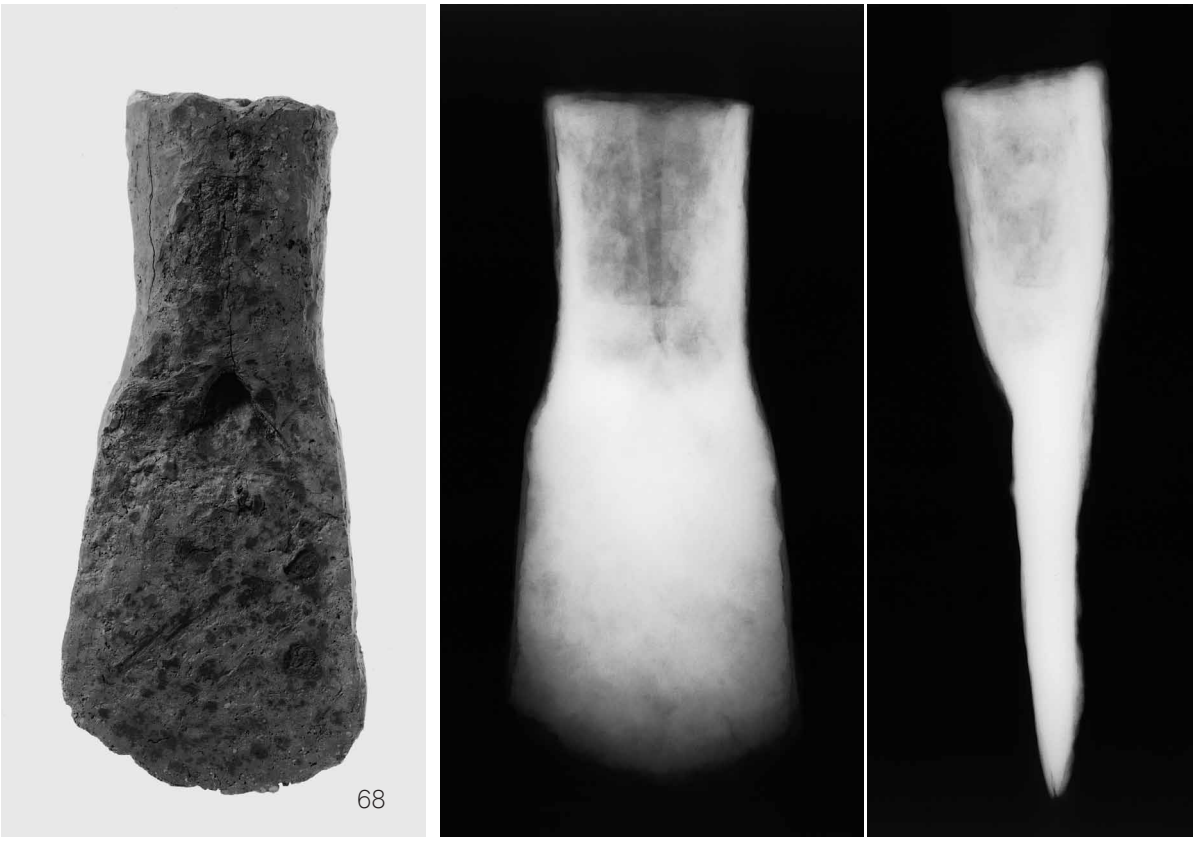
3．　調査地
埋め戻し状況



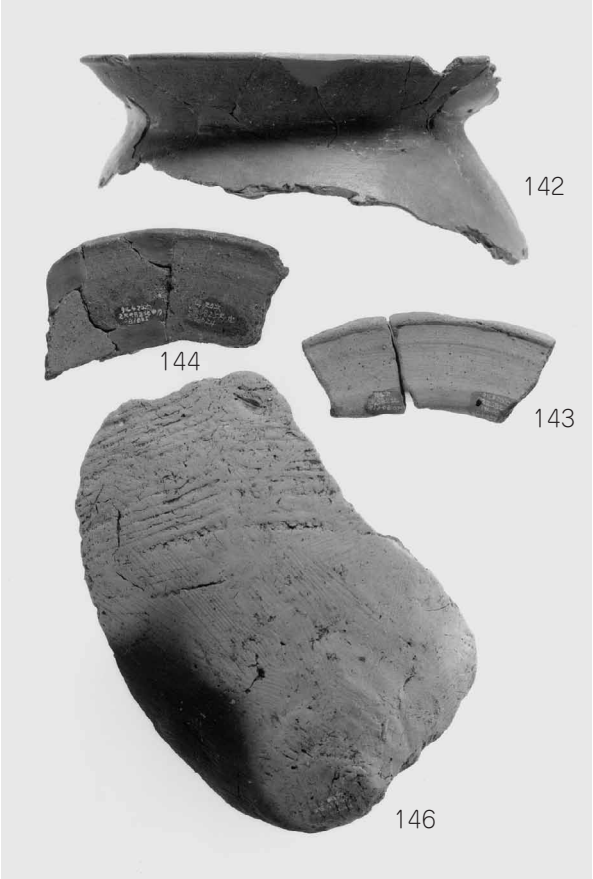




1．　出土遺物（1 区 SK1：2、1 区 SK3：3・4、1 区Ⅲ層：50・55、2 区 SB1：65・68）



1．　2 区 SB2 出土遺物



1．　2区 SB2 出土遺物

1．２区出土遺物（SB2：202・203、SK2：237 ～ 240、SK5：244・245）

1．　２区出土遺物（SK8：253、掘立１：234、SP57：262、SP140：263、SP142：260、SP106：264、Ⅲ層：278・284、グリッド：309）

報　告　書　抄　録

ふりがな	たるみしたんじいせき
書名	樽味四反地遺跡　－19次・20次調査－
副書名	国庫補助市内遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第１５１集
編著者名	小笠原善治・武正良浩・大西朋子
編集機関	財団法人　松山市文化・スポーツ振興財団　埋蔵文化財センター
所在地	〒791－8032　愛媛県松山市南斎院町乙67－6　　TEL089－923－6363
発行年月日	西暦2011（平成23）年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
たるみしたんじ 樽味四反地遺跡 19次調査	まつやまし 松山市樽味四丁目219番3、220番1の各一部	38201		33°50′18″	132°47′20″	20071116 ～ 20080331	約290㎡	重要遺跡確認調査
たるみしたんじ 樽味四反地遺跡 20次調査	まつやまし 松山市樽味四丁目219番3、220番1の各一部	38201		33°50′18″	132°47′21″	20080701 ～ 20081031	約143㎡	重要遺跡確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
樽味四反地遺跡 19次調査	集落	弥生時代 古墳時代 中世	竪穴住居・掘立・土坑・溝・性格不明遺構 竪穴住居・掘立・土坑・性格不明遺構 土坑・地鎮関連遺構	弥生土器 弥生土器・須恵器・土師器・石器 土師器・須恵器・近世陶磁器	甕形土器の中に土師器坏と河原石を置いた地鎮関連遺構
樽味四反地遺跡 20次調査	集落	弥生時代 弥生時代～古墳時代 古墳時代 中世	土坑 竪穴建物 竪穴建物・掘立柱建物 土坑墓	弥生土器 弥生土器・土師器・須恵器 土師器・須恵器・鉄器 土製紡錘車 土師器	大型鋳造・鉄斧

要約 樽味四反地遺跡 19次調査	樽味四反地遺跡では古墳時代前半の大型建物３棟が確認されている。調査はこの関連遺構および同時期の遺構の広がりを確認するため、重要遺跡確認調査として平成19年度に本書の２遺跡を調査した。樽味四反地遺跡19次では、調査の目的である大型建物に近い時期の遺構ＳＫ５を検出した。また、古墳時代の掘立柱建物や竪穴住居を多く検出し、特に樽味地区において６世紀末～７世紀前半の住居の検出は多くなく、この時期の集落の様相を知る貴重な資料となる。また、弥生時代後期後葉に比定されるＳＢ６は20次調査地に続くもので概期の貴重な資料となるものである。そのほか中世の地鎮関連遺構やＳＫ12などの祭祀に関わる遺構を検出し、当概期集落の動態を探る有効な資料となるものである。
要約 樽味四反地遺跡 20次調査	樽味四反地遺跡６次・８次・13次調査で見つかった弥生時代後期末～古墳時代前期に位置付けられる３棟の大型建物（総柱構造）関連の遺構･遺物､更に同時期の遺構の広がりを確認する目的で調査を実施した。今回の成果の一つはSB2（竪穴建物）の帰属時期が３棟の大型建物の時期に近いことであり、当時の景観を考察する上で好資料となるものである。その他、古墳時代中期後半の竪穴建物内から検出された大型の鋳、造鉄斧はほぼ完全に残る優品で、西日本有数の大きさである。集落内から大型銑斧が見つかる例が少ないことから貴重な資料を得ることができた。

松山市文化財調査報告書　第151集

樽味四反地遺跡

－19次・20次調査－

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

平成23年3月25日　発行

編　集　財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター
〒791－8032　松山市南斎院町乙67－6
TEL（089）923－6363

発　行　松山市教育委員会
〒790－0003　松山市三番町6丁目6－1
TEL（089）948－6605

印　刷　不二印刷株式会社
〒790－0054　松山市空港通2丁目13－30
TEL（089）973－1266